

---

# 始まりの運命に舞い降りし恐怖の根源

ゼクス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

始まりの運命に舞い降りし恐怖の根源

### 【Nコード】

N5247Q

### 【作者名】

ゼクス

### 【あらすじ】

聖杯戦争と呼ばれる七人の魔術師と七体のサーヴァントが行う戦争。

その聖杯戦争が行われる地 - 冬木市に異世界の恐怖の代名詞とまで呼ばれた存在が呼び出される。

そのサーヴァントが現れた事によって変わる未来の果てに待つのは、絶望か？希望か？今戦いが始まる。

（この小説は漆黒の竜人と少女X Fate/zeroのクロス小説です）

## 設定（前書き）

皆様の応援の結果何とか完成しました。

誤字、注意、ご指摘部分がありましたらお知らせ下さい。

因みに一部独自設定があるかも知れませんが、その時は申し訳ありません。

## 設定

【クラス】バーサーカー

【マスター】間桐雁夜

【真名】ブラックウオーグレイモン

【性別】男性

【属性】混沌・悪

【ステータス】

(人間時) 【筋力】 C      【魔力】 E

【耐久】 D      【幸運】 B

【敏捷】 B      【宝具】 EX

(ブラックウオーグレイモン時)

【筋力】 A +      【魔力】 E

【耐久】 A      【幸運】 B

【敏捷】 A + +      【宝具】 EX

(ブラックウオーグレイモンX時)

【筋力】 EX      【魔力】 A + +

【耐久】 A + +      【幸運】 B

【敏捷】 EX      【宝具】 EX

【クラス別スキル】

狂化：E

本来は完全に理性が存在し無い筈だが、ブラック自身が持つ宝具の影響で限りなく理性的な動きを行う事が出来る。その為に本来ならば上がる筈のパラメーターのランクアップは無くなっている。

【保有スキル】

気配遮断：A＋

完全に気配を断てば発見しうることは不可能に近い。

しかし、人間の姿の時だけしかこのスキルは使用する事が出来ない。

心眼一（真）：EX

数え切れないほどの戦闘を繰り返した為に辿り着いた極地。

自身よりも遥かに実力が上な存在でも、最適な戦い方をすぐに行えてしまう。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場に残された活路を導き出す”勝利する理論”を作り上げる。逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

戦闘続行：A＋

死に瀕する大怪我を負っても平然と戦い続ける事が出来る。

どんな状態でもただ自身の勝利の為にだけに戦い続ける。

直感：A

戦闘時、常に自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。戦いの中で研ぎ澄まされた第6感はおもはや未来予知に近い。視覚、聴覚に干渉する妨害は全て無効にしてしまう。

## 【宝具】

『全てを従える意志力』

ランク：A＋＋

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：30人

自身の握った宝具を全て自身の凄まじい意志力で従えてしまう。  
例え相反する属性を持った宝具であろうと、その属性さえも反転させて自身の宝具にしてしまう。

ただしAランク以上の宝具で在る場合は、従えるまでに時間が掛かる。また、あくまで手で握らなければ従える事は出来ない。また、この宝具のおかげで完全に理性が持てている。

『ドラモンキラー  
竜殺しの籠手』

ランク：B（X進化時）A

種別：対人宝具

レンジ：2～3

最大補足：一人

竜の因子を持つ者に絶大な力を発揮する籠手。

自身にも左右するが、それさえも気にせずに使ってしまった。  
また、再生能力も所持していて、例え粉々に碎けようと、時間が経てば何時の間に復活してしまう謎の宝具。

『ルインフォース  
共に歩む破滅の風』

ランク：A

種別：対人（自身）宝具

レンジ：-

ブラックウオーグレイモンと融合する事によって更なる力を引き出す事が出来る宝具。

また、単独でも戦え、もう一体のサーヴァントと呼んでいい存在。  
その実力は並みのサーヴァントを超えている。

『オメガブレード  
全てを初期化する剣』

ランク：EX

種別：対人宝具

レンジ：2～3

最大補足：一人

その名の通り全てを問答無用で初期化してしまう恐ろしい宝具。

例えば他のランクEXの宝具であろうと、真の力を発揮しているオメガブレードに触れた瞬間に、問答無用で人々の幻想にまで初期化されてしまう。人々の平和を願う想いが具現化した剣だが、世界を滅ぼす存在かもしれないブラックウォーグレイモンを主と定めている。本来の所有者であるインペリアルドラモン・パラディンとブラックウォーグレイモン以外には絶対に触れる事が出来ない。

しかし、生前ブラックウォーグレイモンはオメガブレードの真の力を三度しか発揮していないので、三回以上力を使ったら、以後真名開放は出来なくなってしまう。

『自らを縛る首飾り』

ランク：D

種別：対人（自身） 宝具

レンジ：-

ブラックウォーグレイモンの世界に悪影響を与える因子を抑える首飾り。

この首飾りがブラックウォーグレイモンから離れた瞬間に、現界している全てのサーヴァントのパラメーターが1ランクアップする。

【詳細】 平行世界の英霊。

信じられないほどの激闘の後にも戦いを繰り返し、その後に死後さえも戦い続ける為に世界と契約した。

本来ならば世界に悪影響を与える存在を世界は英霊としては迎えたくはなかったが、ブラックウォーグレイモンの余りの生前の功績に特例として英霊と認められた存在。現在は本来の力の半分ぐらいしか使えないが、それでも並みのサーヴァントを一瞬で倒せてしまう実力を持っている。

その力は余りにも巨大であり、制御するマスターの寿命さえも自

身の力として扱ってしまう。また、その身から放つエネルギー系の攻撃は全て魔力を用いていないので、対魔力スキルを持つサーヴァントの天敵と呼んでいい存在。バーサーカークラスに収まった究極のイレギュラー。

【クラス】なし

【マスター】ブラックウオーグレイモン

【真名】ルインフォース

【性別】女性

【属性】混沌・悪

【ステータス】

【筋力】 C

【魔力】 A++

【耐久】 D

【幸運】 A

【敏捷】 C

【宝具】 -

【クラス別スキル】なし

【保有スキル】

忠誠心：EX

ブラックウオーグレイモン以外には絶対に従わない絶対の忠誠心  
例え洗脳関係や相手を魅了するスキル、洗脳するスキルが相手に  
存在していても全てを無効化する。

魔法知識：A

異世界の魔法の知識を信じられないほど習得している。

その魔法は魔術師には全て未知のもので、対処する事は不可  
能。対魔力スキルを持っているサーヴァントは逆に天敵である。

道具召喚：A

平行世界で使った様々な道具を呼び寄せる事が出来る。

例、サーチャー、デバイス、パソコンなど様々な某マッド製の物を呼び出せる。

無限再生：A

例え体が半分以上消失しても死ぬ事無く再生し続ける。

不死殺しや再生封じの宝具を使わない限り、倒す事は不可能。

【詳細】ブラックウォーグレイモンの唯一無二パートナー。

ブラックウォーグレイモンと共に居る為だけに世界と契約した。

ブラックウォーグレイモンだけに忠誠を誓い、他の者の命令は絶対に聞かない。数々の異世界の魔法知識を持っている。

その知識の前には魔術師は対抗する事が不可能。だが、逆に対魔力の持つサーヴァントは天敵。

ブラックウォーグレイモンと融合してブラックウォーグレイモンに更なる力を与えられるが、世界の修正力の影響か、融合していられるのは五分と言う制限がついてしまっている。

## 第一話 現れる恐怖

薄暗い地下室の中。

多数の蟲が蠢いている蟲蔵と呼ぶに相応しい場所。

しかし、今、その場所には一人の男性・間桐雁夜が苦しみ続けていた。だが、苦しんでいるのは彼だけではない。蟲蔵の中に存在している蟲と言う蟲が雁夜の前に立っている体長三メートルほどの大きさを持った漆黒の竜人に怯えていた。

そして雁夜と共に蟲蔵の中にいる老人・雁夜の祖父に当たる間桐臓硯は目の前に立っている漆黒の竜人・聖杯戦争に参加する為に雁夜が呼び出したサーヴァントの姿に歓喜に満ち溢れていた。

如何見ても目の前に立っている漆黒の竜人は一級所の騒ぎではないほどのサーヴァント。

ただ静かに立っているだけで、凄まじい威圧感が溢れ続けているのだから、聖杯戦争に勝利して不老不死を得ようとしている臓硯にとっては、偶然にも自身の悲願が叶う最高の手札が巡って来た事実に歓喜する以外になかった。

しかし、呼び出された筈の漆黒の竜人はつまらなそうに目を細め、自身の目の前で倒れ伏している雁夜に声を掛ける。

「貴様が俺を呼んだのか？」

「ヒュー……ヒュー……」

漆黒の竜人の質問に雁夜は答えようとするが、全身を襲う激痛からか呼吸音を発するのが精一杯だった。

その様子に漆黒の竜人はますます苛立ちが増し、雁夜に再度質問しようとするが、その前に臓硯が漆黒の竜人に声を掛ける。

「カカカカカッ！出来損ないでは貴君は制御し切れないでしょう」

「貴様は何だ？」

「くたばりぞこないの小童の身内じゃ。それで相談なんじゃが、其処の出来損ないではなく儂と、御身が手を組めば、此度の聖杯戦争は必ず勝てる。どんな願いでも叶うのじゃぞ。それこそ不老不死でもなんでもな」

「ほう、面白い話だ。貴様の願いは不老不死だとも言うのか？」

「カカカカカッ！その通りじゃ！儂の願いは不老不死になってこの世の悪を一掃する事じゃ！その為にも此度の聖杯戦争にお主と手を組みたいのじゃ。どうじゃ？」

「……フン、良いだろう。貴様の願い、不老不死を叶えてやる」

「カカカカカカカッ！！勝ったぞ！！此度の聖杯戦争で儂の悲願は叶う！！カカカカカカカッ！！」

目の前に立っている漆黒の竜人の了承の言葉に、臓硯は歓喜した。本来は臓硯にとって、今回の聖杯戦争は単なる余興であつた。刻印虫の魔力生成の苦痛にのたうつ雁夜を見物し、どこぞのマスターがサーヴァントに殺される雁夜を見物し、雁夜が全てを賭けて救いたいと思っている少女・間桐桜を救えぬことに絶望する雁夜を見物するだけの余興だつた。しかし、雁夜が引き当てたサーヴァントは如何見ても最強と呼ぶに相応しい力を秘めた漆黒の竜人。

しかも、その漆黒の竜人が願いを叶えると告げたのだから、臓硯

にはもはや歓喜しかなかった。

だからこそ、気がつかなかった。漆黒の竜人は確かに臓硯の願いを叶えると告げたが、“一緒に戦うなど一言たりとも言っていない事実”。

そして何故バーサーカークラスとして呼んだ英霊に理性が存在しているのかにも気がつかずに、臓硯は歓喜に満ち溢れた笑い声を上げ続けるが、漆黒の竜人は気にせず小声で呟く。

「やれ、ルイン」

「仰せのままにブラック様。石化の槍、ミストルティン・エクスキューション!!!!!!」

————ドドドドドドドドドドドドドドドド!!!!!!

「ギヤアアアアアアアアアア————!!!!!!」

漆黒の竜人が呟くと同時に、何処からともなく女性の声が響き、床に倒れ伏している雁夜の場所を除いた全てに無数の光の槍・ミストルティン・エクスキューションが突き刺さった。

当然ながらその中には臓硯も存在し、苦痛に満ちた叫びを上げながら漆黒の竜人と何時の間にかその肩の上に乗っていた銀髪に蒼い瞳をした女性を見つめるが、すぐにそれは恐れに変わった。何故ならばミストルティン・エクスキューションが突き刺さった箇所から徐々に石に変わり始めたのだ。

————ビキビキビキッ!!

「ヒィッ!!な、何じゃこれは!?!」

「貴様の願いどおり不老不死を与えてやった。永遠に石化して生き続けるんだな」

「ば、馬鹿な！？嫌だ！！嫌だアアアアアア――！！！！！」

臓硯はそう叫ぶと共に自身の核と呼ぶに相応しい蟲を、石化し始めた体から慌てて逃げさせる。

核さえ無事ならば自身は幾らでも体を作り上げる事が出来る。幸いにも蟲蔵の中は既に石に変わった蟲で溢れている。その中に紛れ込めば発見される事は無いと臆硯は確信し、漆黒の竜人から逃げていく。

しかし、その臓硯の考えを裏切るように突如としてその体は、見た事も無い光の輪に拘束されてしまう。

――ガシッ！！

「ッ！！」

「如何した？貴様が望んでいる不老不死を与えてやるんだ。逃げずに自ら望んだ不老不死になるんだな」

漆黒の竜人はそう光の輪・バインドに拘束されている臓硯の本体に声を掛けるが、臓硯は嫌だと言うように首を横に振るう。

自身が望んだのは石となつて生きる不老不死などではないと、**臓**硯は漆黒の竜人に叫ぶとするが、既に人間の姿を模していた蟲の体は完全に石と成つてしまつてゐる為に声を出す事が出来なかつた。

その様子を残忍さで満ちた顔を見ていた漆黒の竜人は、自身の肩に乗っている女性に目配せを行い、女性は頷くと、右手の先に先ほど同じ光の槍を一本出現させ、バインドから逃れようと暴れている臓硯に矛先を構える。

「私は貴方みたいな人間が嫌いなんですよ。ですけど、ブラック様の命令ですから、ゆつくりと石になる恐怖を味わって不老不死になつて下さいね。さようなら」

「ードスン!!」

「ガチガチガチ!!」

（嫌じゃ！嫌だ！！石になどなりたくない！！誰か！誰か助けてくれ！！）

自身の体が光の槍が突き刺さった箇所から徐々に石になつていく姿を感じた数百年生きていた老人は、恥も外聞も無く誰かに助けを求めた。

しかし、臓硯の声に答える者は存在せず、唯一漆黒の竜人に命令出来る雁夜は気絶し、間桐家で魔術が使える少女は今日は蟲蔵には来ないように命じてしまっている。もはや臓硯の願いを叶えられる者が居ない中、漆黒の竜人は残忍さに満ちた声で完全に石に変わる直前の臓硯に声を掛ける。

「良い事を教えてやろう。その魔法は俺達がこの世界から消えれば解ける」

「ッ!!」

漆黒の竜人の告げた事実臓硯の中に希望が生まれた。

例えこの戦争で雁夜が生き残ろうと、目の前に立っている漆黒の竜人は戦争が終わると共にこの世界から消え去る。或いは途中で敗退して漆黒の竜人は消えるかもしれない。

そうなれば自身が元に戻る事を知った臓硯は蘇れる事実、心の底から希望が生まれるが、その希望を漆黒の竜人はアッサリと踏み躪る。

「最も深海一万メートルに送ってしまったら蘇る前に、即座に水圧で潰れるだろうがな。それとも深海の魚どもに食われて死ぬかもしれないな」

（ッ！！助けて！助け・・・・・・て・・・・・・く・・・・・・）

最後の希望さえも完全に踏み潰された数百年生きた間桐の老獺は、絶望の淵に沈みながら完全に石化した。

その様子をつまらなそうに見ていた漆黒の竜人・ブラックウオー・グレイモンことブラックは、自身の肩に乗っている女性に再び目配せを行い、女性は頷くと完全に石に変わった臓硯の周りに転送用の魔法陣を発生させ、臓硯をブラックの言葉どおりに深海一万メートルに転送した。

それを確認するとブラックは自身の足元で気絶している雁夜に目を向け、歓喜に満ちた笑い声を蟲蔵の中に響かせる。

「ククククッ！聖杯戦争か。下らん世界の命令よりも楽しい戦いが出来そうだ！ハハハハハハハハハハハッ！！」

サーヴァント・クラス・バーサーカー、漆黒の竜人・ブラックウオー・グレイモンはそう歓喜に満ち溢れた咆哮を、雁夜とブラックに寄り添うように立つ女性を除いた全てが石に変わった蟲蔵の中に響かせるのだった。

此処にとある平行世界において最強の存在の一角にして、恐怖の代名詞とまで呼ばれた存在が七人の魔術師と七人のサーヴァントに

よって行われる戦争 - 聖杯戦争に降り立った。

漆黒の竜人が現れた事によって変わる未来は、果たして希望か絶望か。それはまだ誰にも分からないのだった。

## 第一話 現れる恐怖（後書き）

オリジナル魔法。

ミストルティン・エクスキューション

『石化の槍、ミストルティン』の強化版。

事前に指定されていた箇所以外に、無数にミストルティンを撃ち出す。石化効果ももちろん宿っているので、ミストルティンが刺さった箇所は瞬時に石化してしまう。

## 第二話 暴虐の恐怖

間桐雁夜は夢を見ていた。

夢の中で繰り広げられる光景は魔術師として無理やり生きて来た雁夜から見ても、異常としか言えない光景だった。

空を縦横無尽に飛び回る恐竜のような生物。

大地を揺るがすほど巨体を持った機械とも生き物とも言える生物。その生物達と歓喜に満ち溢れながら戦い続ける漆黒の竜人。漆黒の竜人は敵が巨体だろうと関係なく生物達を倒し続けていく。

その姿は夢で在るにも関わらず雁夜に恐怖を植えつける。そしてフツと雁夜は悟った。アレは触れてはいけない。アレに不用意に触れれば待つのには絶望だけだと雁夜は悟りながら自身の意識が眠りから覚めようとしている事に気がつき、雁夜は目覚める。

「漸く起きたか。俺を呼び出した人間」

「ウオオオオオオーーーー！！！！！！」

目覚めた瞬間に夢の中で見た漆黒の竜人をマジかで目にした雁夜は悲鳴を上げながら、ベットの上を後退り、そのまま壁に背中を押し付けた。

その様子を見ていた漆黒の竜人・ブラックは不機嫌そうに顔を歪め、恐怖に震えている雁夜を睨みつける。

「俺の姿を見ただけで恐怖に震えるとは、思ったりも雑魚だな。こんな奴が俺を呼び出せたとは信じられん」

「よ、呼び出した！？・・・ま、まさかお前が俺の！？」

「サーヴァント・バーサーカー、真名はブラックウオーグレイモンだ。人間」

「バーサーカー！？ちょっと待て！バーサーカークラスは狂化が付加属性の筈じゃ無いのか！？どう見てもお前には理性が在るだろう！！」

「フン、俺は存在自体がバーサーカーそのものでな。因みに理性が在るのは俺の宝具のおかげだ」

「な、なるほど・・・（しかし、理性あるバーサーカーなど聞いた事が無いぞ・・・それにブラックウオーグレイモン何て名前の英霊は聞いた事が無い・・・もしかして俺はとんでもなくマイナーな英霊を呼び出してしまったのか？）」

雁夜はブラックの説明に納得しながら、ブラックの存在について考えるが答えは出なかった。

そしてジツとブラックを見つめていると、フツと自身が居る場所に目を向けてみる。

どう見ても自身が今居る場所はサーヴァント召喚の儀式を行った薄暗い蟲蔵などではなく、きちんと整理整頓されて清潔感が溢れるホテルのような一室。

何故間桐家ではなくこのような場所にいるのかと疑問の視線をブラックに向けてみると、ブラックは雁夜の視線の意味に気がついたのか説明しだす。

「此処は都内のホテルの一室だ。何時までもあの薄暗い家に居る訳にはいかんからな。悪いが勝手に移動させて貰ったぞ」

「ッ！！バーサーカー！！臓硯は如何した！？それに桜ちゃんは何

処に居るんだ!？」

「臓硯?・・・呼び出された時にお前と一緒に居た屑蟲の事か? 奴なら今頃深海一万メートルで水圧によって押し潰されているだろう」

「・・・何だと?」

雁夜は一瞬ブラツクの言葉の意味が分からなかった。

“臓硯が居る場所は深海一万メートル”。そんな場所では幾らあの臓硯でも死んでしまっただろう。

それが現実として理解できなかったのか、雁夜は呆けた顔をしてブラツクを見つめていると、浴室と思われる扉が突如として開き、雁夜が其方の方に目を向けてみると、バスタオルを体に巻いた六歳ぐらいの女の子・雁夜が命を賭けてまで救おうと思った少女・間桐桜が浴室から出て来る。

「――ボタン！」

「・・・カリやおじさん」

「桜ちゃん!!」

桜の姿を目にした雁夜は慌てて桜に駆け寄り、その体に何か傷は無いのかと確認する。

間桐家に雁夜が帰って来てから変わらない諦観に満ちた桜の表情。幽鬼のような青白い肌。その幸せだった頃の桜と変わり果てた桜の姿に、雁夜の胸に自責の念が走るが、何とかそれを振り払い、桜の体を確認するが、怪我などは一切無く何かしらの暴行を加えられた形跡も無い。

その事実には雁夜が安堵していると、ブラックが顔を険しくしながら説明を続ける。

「あの薄暗い家を出る時に連れて来た。貴様が気絶しながらも桜、桜とうるさかったからな」

「……バーサーカー、俺がお前を召喚してから今日で何日目だ？」

「二日だ。これ以上起きなかつたら貴様を無理やりでも起こすつもりだったぞ。運が良かったな」

「……説明しろ。俺が起きるまでお前が何をしていたのかを？」

「元よりそのつもりだ。仮にもお前は俺を呼び出した人間だ。これからの戦いの為にも策は話しておくべきだからな」

そうブラックは雁夜に声を掛けると、雁夜が起きるまでに自身が行った行動と現状を説明し出す。

時は二日前。

臓硯を深海に送った後、ブラックは自身を召喚して魔力も精根も尽き果てている雁夜を肩に担ぎ、自身の隣を歩く女性・ルインフォース・以降ルインと共に石化している蟲蔵を出ながら、これからの事について考え出す。

「ルイン。聖杯から送られて来る情報では、本来のバーサーカーには理性が無いらしいな」

「はいそうですね。ブラック様は宝具のおかげで理性が在るようですけど、それが如何したんですか？」

「決まっている。そのバーサーカーの特性を利用するんだ」

「……死んでも変わりませんね、ブラック様は」

ブラックの言葉の意味に隠された真意を読み取ったルインは呆れたような顔をするが、すぐに笑みを変わる。

既に自分達の戦いは始まっているとブラックとルインは理解しているのだ。聖杯戦争はその名の通り一つの街を舞台にした戦争。戦争にルールなど無い事を理解しているブラックとルインには、自分達がこの世界に現れた瞬間から呼び出した人間以外は全て敵だと思つて判断した方がいいと経験から理解していた。

ましてや戦争の勝利者に与えられるのは、どんな願いでも叶うと言われている聖杯。

ブラックは聖杯には興味が全く無いが、聖杯を求めて参加して来る自身以外のサーヴァントには興味が湧き上がっていた。

最有と称される最強の騎士・セイバーのサーヴァント。

槍を扱う最速の槍兵・ランサーのサーヴァント。

弓などや飛び道具を扱う・アーチャーのサーヴァント。

乗り物などを縦横無尽に扱う・ライダーのサーヴァント。

過去に功績の残した魔術師・キャスターのサーヴァント。

暗殺者として闇に生きた・アサシンのサーヴァント。

どのサーヴァントもブラックの興味を引くには十分な実力を持った過去の英霊達。

それらの者達と戦える歓喜にブラックは自然と喜びに満ち溢れた笑みを口元に浮かべるが、すぐさま冷静に立ち返り考え始める。

（呼び出されるサーヴァントどもは別として、サーヴァントを呼び出した魔術師どもはどんな手を使っても聖杯を手に入れようとするだろう。負ける気は無いが、マスターが死ねば俺は其処までだ。それにサーヴァントと同士を戦わせて数を減らすよりも、マスターを狙って数を減らした方が効率が良いと考える奴が居る筈だ・・・先ずは情報を集めて、現実的な動きを行っているマスターを動けないようにして排除する。その後にくっくり俺がサーヴァントと一対一で戦うのが良いだろう）

ブラックの目的はあくまで聖杯を求めて召喚されたサーヴァント達。

そのサーヴァント達の信念と自身の信念を賭けた戦いこそが、ブラックが雁夜の呼び出しに応じた第一理由。その邪魔をする者はいかなる方法を持っても排除する。

そう考えながらブラックとルインが間桐家の中を歩いていると、ブラック達の前を歩いて来る六歳ぐらいの少女・間桐桜を目にする。その桜の顔を見た瞬間、ブラックとルインは即座に目の前を歩いて来る桜が壊れてしまっている事を理解した。

何が在ったのかはブラックとルインには分からない。だが、その諦観に満ちた表情。幽鬼のような青白い肌。普通の六歳の子供が味わう事がないほどの地獄を味わい、絶望に心を諦観させている。

その事を理解したブラックは僅かに不機嫌そうに瞳を細め、自身とルインの間を通り過ぎて、石化した蟲蔵に向かおうとしている桜の背に声を掛ける。

「そっちに行っても誰も居ないぞ小娘」

「でも、カリヤおじさんが」

「ふん、そのカリヤとか言う奴はこの男か？」

ー  
ー  
ー  
ド  
サ  
ッ  
！

ブラックは言葉と共に肩に背負っていた雁夜を桜の目の前に降ろした。

その気絶した雁夜を目撃した桜はゆつくりと雁夜に駆け寄るが、ブラックとルインは一瞬桜の顔に映った感情を理解した。

桜が雁夜を目撃した瞬間に顔に浮かんだ感情は、雁夜が生きている安堵感でも喜びでもなく、羨ましさ。気絶している雁夜にその様な感情を抱く時点で桜の心が壊れているとブラックとルインが確信するには充分だった。

そしてそれを理解した瞬間、ブラックは自身の居る家に凄まじい不快感を感じ、気絶している雁夜に寄り添っている桜に声を掛ける。

「小娘。この街の詳細な地図をルインに渡せ。ルイン、お前は其処の小娘と呼び出した人間を連れて地図に示されている余り目立たず、地理が確認しやすいホテルに転移しろ」

「了解ですブラック様、さあ、一緒に行きましょう」

ルインはブラックの言葉に頷くと共に桜をゆつくりと抱き上げ、雁夜をバインドの応用で空中に浮かばせながら移動を開始する。

ブラックはそれを横目で確認すると即座に天井に顔を向けて、自分達以外にこの家の中で気配が感じられる場所を即座に発見すると、迷わずに天井に向かって飛び出し、天井をぶち破って気配の下に辿り着く。

ドゴオオオオオオオオオオオオン！！

「ヒイツ!!」

突然の床をぶち破りながら現れたブラックの姿に、名目上は間桐家の頭首にされている間桐鶴野は恐怖に引き攣った声を上げた。

床から三メートルの大きさを持った竜人が現れたのだから、恐怖を覚えるのは当然なのだが、ブラックは全く気にせず、鶴野の背後に存在している壁に、右腕のドラモンキラーの爪先を突き刺す。

「ードスン!!」

「ヒイーーーー!! 助けて! 助けてくれ!!」

「長生きしたければ質問だ? この家に居た小娘は貴様の実の娘なのか?」

「違う!! 違います!! あの娘は他の魔術師の家から養子として貰った娘です!!」

「ほう、面白い話だ。詳しく話して貰うぞ。嘘をついてみる。その瞬間に貴様の首と胴体は一生離れ離れになると思え」

そうブラックが脅すように声を掛けると、ブラックの凄まじい殺意に心がへし折られた鶴野は涙と鼻水を流しながらブラックの質問に答えだす。

それによれば桜は元々は間桐と同じように冬木市に住んでいる遠坂家の次女で、衰退する間桐を救う為に養子として間桐に貰ったと言う事だ。しかし、その実態は桜を次世代の間桐を生み出す母体として利用する為に臓硯が考えた策略であり、あのブラックが召喚された蟲蔵に居た蟲を使い、桜の心と体を犯し、体を作り変えていた。反抗しないように暴虐も行い、今ではあのような絶望しか存在していないほどに桜は壊れてしまった。

そんな桜を救う為に間桐家を出ていた雁夜は家に戻り、今回の聖杯戦争で勝利者となれば桜を自由にすると言う約定を臓硯と交わしていたと言う事らしい。

そして全てを聞き終えたブラックはゆっくりと鶴野に背を向け、  
凄まじい殺意を体から放ち、間桐邸を睨みつける。

「クククククッ！！なるほど、俺が気に入らん訳だ……おい、あの小娘の本当の父親の名前を教えろ」

「遠坂、遠坂時臣だ！ た、多分、今回の聖杯戦争に参加している筈だ！」

「そうか・・・情報は感謝する。さて、ルイン達は転移したな。ルインの事だ。既にこの家にあつた情報は手に入れているだろう。ならば、当初の予定通りに動くか」

「な、何を言って……」

鶴野は凄まじい恐怖に震えながら質問した。

逃げなければいけない。逃げなければ自分はこの場で目の前の竜人に殺されてしまふと鶴野は本能から理解するが、既に鶴野の体はブラックの放つ恐怖から逃れる事が出来なかつた。

そんな事をブラックは全く気にせずに自身の体に力を込めながら、鶴野に怒りに満ちた声を掛ける。

「五分だ。五分以内に貴様はこの家の中から消えて、二度とこの地に戻つて来るな。さもないと、この家と共に跡形も無く消滅するぞ」

「ウツ！ ウワアアアアアア――！！！！ヒイイイ――  
――！！！！」

そして鶴野が間桐家を出てから三分後、力をこれ以上に無いほどに溜め終えたブラックは、全身から炎の竜巻を発生させて間桐家を跡形も無く吹き飛ばす。

[illegible]

その時間帯に間桐邸から凄まじい熱量の竜巻が吹き上がり、間桐邸は跡形もないほどに焼き尽くされ、後には焼け焦げた大地しか存在していなかった。

そしてその事實は翌朝には残りの御三家の遠坂、アインツベルンの二家にも知れ渡ったが、サーヴァントの制御に失敗した不慮の事故として考え、召喚されたサーヴァントはマスターを失い、はぐれサーヴァントになったと彼らは考えた。

26

ーヴァントが減った事実には喜ぶのだが、彼らは知らなかった。

彼らの考えこそが、既に間桐家を滅ぼしたサーヴァントの策略である事も知らずに、彼らは本格的に始まる聖杯戦争の準備を急ぐのだった。

### 第三話 やり直させる恐怖

早朝朝七時。

多くの会社員や学生などが起きて、仕事場や学校に向かう時間帯。その時間帯に目立たないながらも冬木市の地理を一望出来るホテルの特殊な結界が張られた一室の中で雁夜は呆然としながら、自身に横で安らかに眠っている桜の頭を撫でていた。

その胸の内には何の感情も存在していなかった。長い間自身と桜を苦しめていた間桐家と、その間桐家の真の当主であつた臓硯が滅んだ事は本来ならば雁夜にとっては喜ぶ事実だっただろう。だが、雁夜の胸の内には感動など全く存在せず、ただ虚無感だけしかなかった。

桜を救えたと言う実感が雁夜に湧かなかつたのだ。雁夜は桜を救う為に間桐に戻り、今回の第四次聖杯戦争に参加して桜を絶望の闇に叩き込んだ時臣を自身の手で倒すつもりだった。

しかし、桜を苦しめていた元凶であつた間桐は完全に自身が召喚したサーヴァントによって滅ぼされてしまった。

雁夜はその事を本来ならば喜ぶべきなのだが、直接関わった訳でもないのに、如何にも自由になつたと言う実感が湧いて来なかった。その様子を霊体化しながら見ていたブラックは僅かに溜め息を吐き、霊体化を解くと、呆然としたままの雁夜に声を掛ける。

「何時まで呆然としているつもりだ？」

「……何の感動も無いんだ。桜ちゃんを形は違つてもあの地獄から助けられたのに、俺には何の喜びも無い……俺は如何したらいいんだろうな？」

「知らんな。それよりも助けただと？馬鹿か貴様は？その小娘は誰

にも助けられていない。何よりも“壊れてしまっている小娘”自身が助けられた事にも気がついていないのだぞ」

「ッ！！それは如何言うことだ！？」

「気がついていなかったのか？その小娘は既に壊れている。貴様が眠っていた間に確信した。その小娘は俺かルインが何かを命令しない限り、貴様の傍で呆然としていただけだった。もはや自身で何かを考える事さえも放棄しているようだな」

「・・・そ、そんな・・・ば、馬鹿な」

ブラックが告げた事実には雁夜は絶望したような声を上げながら、自身に横で眠っている桜の顔を見つめた。

既に桜は手遅れだった。桜の心はもはや取り返しのつかない状態にまで追い込まれてしまっていた。

まだ間に合う。今回の聖杯戦争に勝利して桜を本当の母親の下に帰せば、桜は再び一年前の笑顔を再び浮かべてくれると雁夜は思っていた。

しかし、その考えはブラックによって否定された。雁夜はその現実に体を震わせ、安らかに眠っている桜の顔を見つめる。

まだ幼く、多くの幸せを知らずに絶望に堕ちて心まで壊れてしまった桜。その原因の一つには自身の行動さえも絡んでいる事に雁夜は辛そうに顔を歪めるが、すぐにその感情は一人の人物への憎しみに変わる。

「（時臣！！お前だけは絶対に赦さない！お前は勝手な考えで桜ちゃんや葵さん、凜ちゃんの幸せを踏みにじった！絶対に！絶対に俺はお前を赦さない！桜ちゃんが味わった絶望を衝きつけてやる！）  
・・・バーサーカー、俺はこの聖杯戦争に参加する。目的は聖杯で

はなく、ただ一人のマスターへの復讐！桜ちゃんの実の父親の遠坂時臣を倒す事だ！！」

「……クククククツ、面白い。万能の聖杯よりもその小娘から全てを奪った原因を作り上げた本当の父親への復讐か……。良いだろう。俺も聖杯などには興味が無い。俺の目的はこの聖杯戦争に参加するサーヴァントとの戦いだ。お前の理由と俺の理由は一致する……。ふん、気に入らん答えだったら殺すつもりだったが、止めだ。お前を一応はマスターと認めてやろう。それにその小娘を“やり直させるチャンス”の方法も教えてやろう」

「ッ！！それはどう言う意味だ！？桜ちゃんにやり直させるチャンスが在るといふのは！？」

「これを見る」

「ーーシュン！！」

ブラックが呟くと共にブラックの右手に長大な黒い長剣が出現した。

その鈍く黒く光りながらも、何故か安らかな雰囲気放っている長剣の姿に、雁夜は先ほどの剣幕も忘れて呆然と長剣を見つめた。門外漢の雁夜にも理解出来た。

ブラックが今握っている長剣こそ、サーヴァントの切り札と呼ばれている宝具。今の世ではもはや不可能なほどの神秘が宿った英霊の最強の切り札。

それが今日の前に存在している事実には雁夜は言葉も出さず、魅入られたようにブラックの握る長剣を見つめていると、ブラックは雁夜に長剣の説明を行い出す。

「これは俺の宝具の一つ『オメガブレード全てを初期化する剣』だ。三回しか本来の力が発動出来ないが、コイツの能力は全てを初期化する。例えばそれが何であろう問答無用で初期化してしまう剣だ。そしてコイツの能力を使えば、その小娘も初期化する事が出来る」

「そ、そうか！！それを使って一年前まで桜ちゃんを初期化するのか！？」

「そうだ。だが、これには問題がある。コイツにはどの程度まで初期化出来ると言う制限がない。つまり、不用意に初期化すればそれこそ小娘は精子と卵子まで初期化されるだろう。しかし、幸いにもその制限となれるモノを貴様は手に入れている」

「何だと？俺はそんなモノは持つて……ッ！！」

ブラックの言いたい言葉が理解出来た雁夜は慌てて自身の腕の袖を捲くり上げ、サーヴァントを使役している証である令呪をジッと見つめる。

令呪は聖杯から与えられたマスターの資格であり、自らのサーヴァントへの三回までの絶対命令権。膨大な魔力が令呪には存在し、命令が具体的なものであればあるほど強制力が大きく、また、場合によっては本来なら不可能な行為を可能にする事が出来る。正に切り札と言っているモノ。だが、その反面令呪が無くなれば自身のサーヴァントに殺されてしまう危険性が存在している。

そして雁夜はブラックの言いたい事が分かった。令呪を使用してブラックにオメガブレードを使わせて、桜を一年前までの状態に初期化させると言う事だ。

「これを行えば確実に小娘は辛い事も全て忘れて、何も行われなかった状態に戻る。だが、当然ながらお前とあの家で過ごした日々

も忘れる。それだけではない。この行為は小娘の今までの頑張りを完全に否定する行為だ。他人の想いを否定する事を俺は最悪の行動だと思っている。其処にあつた想いを否定する事は、関わった連中の人生を全て否定する行為だからな。お前はそれでも行つか？」

「……俺は……桜ちゃんの引つ込み事案ながらも朗らかな笑みが好きだった。桜ちゃんの姉の凜ちゃんの明るい笑みが好きだった。そしてそんな二人を優しく微笑みながら見ていた葵さんの笑顔が好きだったんだ……。あの三人の笑顔をもう一度俺は見たい……。これは俺の勝手な行動だ。勝手に俺が決め付ける行為だ。だけど、それでも、バーサーカー、令呪において命じる。桜ちゃんを間桐家に来る前の状態まで初期化しろ」

「フン！オメガブレード全てを初期化する剣！！」

「――シュウウン！！」

雁夜の腕に存在していた令呪の一角が消失すると同時に、ブラツクはベットの上で眠っている桜にオメガブレードの先端を触れさせ、桜の体は光に包まれた。

そして光が消えた後には僅かに体が縮んだ桜が存在し、雁夜はその様子に安堵の息を吐きながら、右目から涙を零し、桜の顔を撫でる。

「さようなら桜ちゃん……。目覚めた時には君は何も覚えていないだろう……。だけど、俺は絶対に忘れない……。君が受けた仕打ちと絶望を……。必ず君を葵さんと凜ちゃんの所に帰してみせる」

そう雁夜は桜に向かって涙を流しながら言葉を言うと、ゆっくり

と立ち上がり、背後で不機嫌そうに顔を歪めているブラックに顔を向ける。

「バーサーカー、俺は必ずこの聖杯戦争で時臣を倒す。その為にお前の力を借りたい」

「フツ、良いだろう。貴様の願いは俺が必ず叶えてやる。だが、俺の望みも果たさせて貰う。それにハッキリ言って今の貴様では戦いに勝つ事は出来ない。だが、俺の考えている事が成功すれば、お前は力が手に入る。この世界の魔術師でもでは如何する事も出来ない力がな……交換条件だ。その力とお前の望みを叶える代わりに、戦いの策や戦闘は俺に任せて貰う」

「……構わない。戦いに俺は詳しくは無いからな。だけど、絶対に時臣とそのサーヴァントを俺達が倒す事が絶対の条件だ」

「無論そのつもりだ。俺も時臣とか言う人間は気に入らんからな……さて、改めて名乗らせて貰う。俺はサーヴァント・バーサーカー、ブラックウォーグレイモンだ。ブラックと呼べ」

「雁夜だ。最後の間桐の魔術師・間桐雁夜、それが俺の名前だ。宜しく頼むぞ、ブラック」

「……ガシッ！」

雁夜とブラックは互いに名乗りを交わすと、どちらとも無く右腕を差し出し、力強く握手を交わした。

此処に聖杯戦争に参加するマスターとそのサーヴァントが生まれた。そのマスターとサーヴァントが動く事によって変わる未来は、まだ誰にも分からない。

しかし、戦いの渦はもうすぐ其処まで迫って来ているのだった。

## 第四話 動き出す恐怖

冬木市遠坂邸。

その家の主であり五代目の遠坂家の当主・遠坂時臣は、弟子であり、今回の聖杯戦争で水面下の同盟を結んでいる言峰綺礼の報告に顔を陰しくしていた。

「つまり、バーサーカーのサーヴァントとそのマスターは生きてい  
ると言う事だな綺礼？」

『はい間違いありません。此処数日キャスターの使い魔と思わし生物達と連日連夜戦っています・・・残念ですが姿までは確認出来て  
いませんが、現場の痕跡から考えて先ず間違いなくバーサーカーで  
しょう』

「ムウ、此方が使っている策に似た策を使っていたとわ。迂闊だった」

目の前に存在している通信用の魔術機から言峰の報告に、時臣は  
陰しい声を出した。

先日言峰が召喚したサーヴァントであるアサシンを、時臣が召喚  
したアーチャーに打ち取らせたとように見せた策を用いて言峰の安全  
を確保したのだが、教会の地下で匿われている言峰の報告で、当に  
敗退した思っていたバーサーカーのサーヴァントとそのマスターが  
生きている事が判明したのだ。

バーサーカーはサーヴァントの中でも扱いが途轍もなく難しいサ  
ーヴァントとして知られている。現に今まで三回聖杯戦争は行われ  
てるが、全てバーサーカーのサーヴァントは自滅と言う結果に終わ  
っていた。

その事も在った為に時臣も他のマスター達もバーサーカーを召喚したマスターは死に、サーヴァントはぐれサーヴァントになったと思っていた。

しかし、その考えは間違いだったと言うようにバーサーカーのサーヴァントは突如として暴れ始め、次々と深夜に現れるキャスターの使い魔を滅ぼして行った。

（バーサーカーの特性を利用して自分達は死んだように見せ掛けていた・・・更に聖杯戦争に置いて重要な間桐家の家を粉々にした・・・まさか！！あの老獪が動いたのか！今回の聖杯戦争で必ずや聖杯を手に入れる為に自身の家を捨てて、背水の陣で動くつもりか！クウツ！！老獪め！自分が倒されれば二度と聖杯戦争が起きない可能性をちらつかせたか！！おのれ！！）

時臣はそう憤りに満ちた叫びを内心で怒りの叫びを上げた。

遠坂・間桐・アインツベルンはこの聖杯戦争のルールを作り出し、聖杯降臨の儀式を作り出した家系。

遠坂は土地と英霊の降臨システムに関わり、間桐家は英霊を従える令呪を構築し、そしてアインツベルンは聖杯の器を作成する事にあたっている。

つまり三家の内一つでも無くなれば、それだけ聖杯を降臨させるシステムに時限爆弾が取り付けられるという事に他ならない。その事を危惧していた時臣は、間桐に桜を養子に出したのだ。間桐の魔術を絶やさずに、聖杯戦争を行い続ける為に。

その家系の一つ、間桐家の真の当主である間桐臓硯が本気で動いたと成れば、今回の聖杯戦争で間桐臓硯を死なせる訳にはいかない。間桐家の魔術を知り尽くしている臓硯が死ねば、本気で時臣が危惧している事態に陥る可能性が在るのだから。

最も時臣は知らない事だが、既に臓硯は深海一万メートルで海の藻屑となっている。

その事を知らない時臣は僅かに顔を怒りに歪めながら、言峰に命令を行う。

「綺礼、何としてもバーサーカーとそのマスターを発見するのだ」

『ですが、バーサーカーの移動スピードが異常過ぎます。何せバーサーカーが戦闘を行った地点から、数分もしない内に、その地点から数キロ以上離れた地点でもバーサーカーは戦闘を行っているのです。しかも一度や二度ではなく、連日連夜最低でも二十回以上行っています』

「何ッ！？数キロ以上を数分で移動だと！？」

『常に優雅たれ』と言う遠坂家の家訓を思わず時臣は忘れてしまいがら叫んだ。

普通に考えれば戦闘を行った地点から、数分もしないで数キロ先の場所に移動するなど不可能だ。幾ら常識外れの存在のサーヴァントでも、数キロを数分で移動するなど不可能。令呪を使えば可能だが、令呪は三回までしか使えない制約が存在している。

その事を考慮した時臣は何とか冷静さを取り戻しながら魔術師としての知能をフル回転させ、一つの可能性に行き着く。

「……宝具だな。恐らく今回のバーサーカーの宝具は移動に特化した物なのだろう……フツ、老獪め。やはり耄碌していたようだな。こんなにも宝具を連発して使用すれば、簡単に能力が読み取れる。どんな宝具なのかは分かんが、これでバーサーカーは恐れる必要が無い。とにかく、綺礼。バーサーカーとそのマスターをアサシン達を使って搜索するのだ。セイバーのサーヴァントとそのマスターの来訪も近い。出来るだけ速やかに探し出せ」

『御意』

時臣の命令に言峰は頷き、それで今回の通信を切り、時臣は自身の準備を行い出すのだった。

しかし、時臣も言峰も気がついていなかった。その会話の映像を探しているバーサーカーとそのマスターに見られているとは夢にも思っていなかったのだった。

とある民家の中。

その場所を二つ目の拠点にした人間状態のブラックと雁夜は、その拠点の一室で街中にばら撒いたサーチャーの映像の一つに映っていた時臣と言峰の会話に笑いを堪えるのが大変だった。

「クククククツ、見る雁夜。まさか此处まで此方の考えどおりに勘違いするとはな」

「ハハハハハッ！確かになブラック！時臣の真剣に考えて出した見当違いの答えには、本気で久々に笑えた……。まあ、普通は宝具だと勘違いするだろうな。まさか、異世界の機械を使っているとは時臣でも思わないだろう」

そう雁夜は話しながら、自分達がいる部屋に存在している無数の見た事も無い機械を眺めた。

互いの意思を確かめ合ってから数日、ブラックは先ずは情報を集める為にルインを呼び出し、サーチャーなどの情報収集に特化した道具を召喚させて、冬木市中にばら撒いた。そしてそれを用いて各マスターの情報を集め続けていた。

その中には教会に匿われている言峰や、遠坂邸から出て来ない時

臣も存在していた。行き過ぎた科学は魔法と変わらないを地で行っていたブラックの世界の科学技術を、この世界の人間や魔術師が発見出来る筈も無く、ブラックは簡単に敵の情報を手に入れていた。

その結果、ランサーのサーヴァントは時計塔と言う場所からやって来た魔術師が主と言う事も判明している。

更にアインツベルンの関係者と思われる男女も確認し、男女が盗聴器や隠しカメラなども設置している姿も目撃している。

その上ブラックとルインは、冬木市の各地に転送用のマーカーを百個近くばら撒き、時臣や言峰が宝具と勘違いした奇跡を簡単に引き起こしていた。

元々ブラックが自身やマスターが敗退したように見せ掛けていたのは、全て冬木市を自分達の有利なフィールドに変える為。その準備が既に終わった今、何時までも隠れている必要も無く、更にキャスターとそのマスターが行っている暴挙を知ったブラックは、キャスター達の目的を潰すと同時に自身の不可思議な動きを各マスターに晒したのだ。

これによって多くのマスターはブラックの宝具は移動する何かだと判断する。中には勘違いしないマスターも居るだろうが、それは別に構わない。あくまでブラック達の最優先目標は時臣とそのサーヴァント・アーチャーなのだから、時臣達が勘違いしてくれればいいのだ。

「フツ、さてそろそろ全てのサーヴァントが集まる。そして先ず間違はなく最初に戦闘を始めるのはランサーだ」

「何でそう思うんだ？他にもサーヴァントは居るんだぞ？」

「ランサーは忠義心が強い奴だ。こう言う奴は自分のマスターに認められたい為に戦闘を行う筈だ。それに時臣と言う男は出来るだけ自分のサーヴァントを晒したくは無いのだろう。最も時臣の思い通

りにはアーチャーは動かんだろう。アレはそう言う考えを持つ奴だ。自分のプライドが何よりも大切な奴だ」

ブラックは既に時臣のサーヴァントであるアーチャーの性格を読み取っていた。

他のサーヴァントでは気がつかないだろうが、ブラックは一目見ただけでアーチャーの性格を完全に理解していた。傲岸不遜にして唯我独尊。そんな性格をした存在とブラックは戦った事がある。

最も実力で言えば、ブラックが戦った方が遥かに上だろう。ただ多くの宝具を所持していて、相手に向かって撃ち出すだけの攻撃など、ブラックが知るあの存在には全く通じない。アレには例えブラックを除いた全てのサーヴァントが挑んでも勝てないのだから。

「出来るだけ早く時臣を表に出させて戦わなければ不味いな。あのアーチャーの性格だと、時臣は不要と判断され殺されるぞ」

「・・・分かった。出来るだけ早く扱えるようになってみせる」

そう雁夜はブラックに答えながら、モニターの一つに映っている時臣を睨みつける。

既に雁夜はブラックを信頼している。此处数日ブラックの行動を見ていたが、全てが理に適っていて、自分達が有利な状況を作り続けている。

それだけでもブラックを信用するには充分だが、決定的になったのはキャスターとそのマスターが行っている行動をブラックが知った時、ブラックは本気で怒り、キャスターが召喚した使い魔を粉微塵ではすまないほどに滅ぼした。それだけではなく夜はサーチャーを使ってキャスターの使い魔を発見すると、その場所に転移し、キャスターの使い魔を潰し続けている。

ブラックは無関係な者を理由無く殺す事を最も嫌っている。キャ

スターとそのマスターの行動は完全にブラックの逆鱗に触れたのだ。

「キャストどもは居所が見つかり次第に滅ぼす。その為に魔力を余り消費したくはない。当分はこの姿で戦って魔力消費を抑えるが、やはり何か別の魔力確保が必要だな」

「すまない」

「気にするな。今ルインがあの家から持ち出した資料を調べている。それに何か方法が記されている筈だ。或いは今回のマスター達の中から情報を聞き出せばいい。さて、俺はランサーを監視する。お前はこの場所でルインから手ほどきと、あの小娘を護れ」

「了解だ。気をつけてくれ」

「フツ、貴様に心配されるまでもない」

そうブラックは雁夜に伝えたと、ゆっくりと立ち上がり、部屋を出て行く。

それを雁夜も確認すると、自身も立ち上がり、桜とルインが居る部屋へと向かうのだった。

冬木市街中。

その場所に存在する道路を、赤い瞳を持って銀髪の長い髪をたなびかせた妙齢な美女・アイリスフィール・フォン・アインツベルンと黒スーツに身を包んだ男装の華麗な少女・セイバーが一緒に街中を歩いていた。

「それではバーサーカーとそのマスターは生きているのですね？」

「ええ、あの人はそう言っていたわ」

「バーサーカーの今までの戦歴を利用するとは……今回のバーサーカーのマスターはしたたかなのでしょうね」

「そうね。それに不可思議な移動手段を使って移動しているから姿も確認出来ていないわ。恐らくは宝具を使つての移動でしょうけど、あの人は多分違つと断言していたわ」

「何故ですか？数キロ以上も先に移動する手段など、宝具以外は考えられないのでは？」

「普通ならそう考えるけど。連日連夜二十回以上も高速移動すれば大量の魔力が無くなるわ。ただでさえバーサーカークラスのサーヴァントは維持だけでも大変ですもの。そんな事を繰り返していれば魔力切れをすぐ起こす。だから、私達が思いつかない移動手段をバーサーカーとそのマスターは持っていると考えた方がいいですよ」

「なるほど……今回のバーサーカーは今までのバーサーカーと同じように考えない方が良くと言う事ですか」

「ええ、そう思つた方が……」

「……ドクン!!」

『ッ!!』

アイリスフィールが話している途中で、突如として港場の方から

巨大な魔力が発生した。

その魔力を感じたセイバーは険しく顔を歪め、魔力が感じられた港場の方を睨む。

「サーヴァントですね。明らかに挑発ですが、此処までされれば向かわない訳には行きません。アイリスフィール！」

「ええ！行きましょう！セイバー！！！」

セイバーの言葉にアイリスフィールは即座に答え、セイバーと共に港場に走り出す。

その様子を人々の死角から伺っていた男性もソツと港場の方に移動を開始する。

そして地下の下水道を歩いていた人間状態のブラックも自身が監視していたランサーのサーヴァントの動きに僅かに喜びに満ちた笑みを浮かべる。

「ククククツ、やはり俺が考えたとおりになった……ほう、これは面白いな。他にもサーヴァントどもが集まって来ている。そしてアーチャーも……フフフツ、やはり時臣ではアーチャーは御せなかったか。チャンスだ！アーチャーのサーヴァント！貴様に屈辱を与えてやる。楽しみにしている！！ハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！」

ブラックはそう歓喜に満ち溢れた叫びを上げながら、自身も加えて六体のサーヴァントが集まろうとしている地に向かい出す。自身と雁夜の願いを叶える為に。

## 第五話 屈辱を与える恐怖

聖杯戦争開始。公式な戦いでは二回目とされる戦いの場合は、港場に存在する倉庫街の大型車両通行用に道路だった。

その場所に存在する道路上で、二騎のサーヴァント。

未だにダークスーツを着たセイバーと長槍と幾分短い短槍を呪布のようなモノで巻いた二槍を両手に握った槍使い・ランサーのサーヴァントが、互いに距離を開けながら睨み合っていた。

「良くぞ来た。今日一日、この街を練り歩いて過ごしたが、どうもこいつも穴熊を決め込む腰抜けばかり・・・俺の誘いに応じたのはお前だけだ」

ランサーのサーヴァントは嬉しそうに、堂々と宣戦布告した。

その姿は紛れもなく誇り高い騎士。騎士の姿をそのものにしたような姿にセイバーも目の前の相手が高名な騎士だと判断するが、気になるのはランサーの腕に握られている二本の槍。

二本の剣を扱うと言う話は聞いた事は在るが、二本の槍を使うと言う話はセイバーは聞いた事が無い。

槍に巻かれている呪布から見ても、宝具を晒せば、それだけで真名が分かってしまうほどの英霊だと言う事にランサーは他ならない。因みにランサーとセイバーは気がついていないが、二人とも既にブラック達が放ったサーチャーに監視されている。

ブラックがランサーの動きに気づかなかったのは、自身の策の為ではない。策が無ければブラックが一番にランサーに戦いを挑んで居ただろう。

「その清開な闘気・・・セイバーとお見受けしたが、如何に？」

「その通り、そう言うお前はランサーに相違ないな？」

「いかにも・・・フン、これより死合おうという相手と尋常に名乗りを交わすことも俟ならぬとは。興の乗らぬ縛りがあったものだ」

「是非もあるまい。もとより我等自身の栄誉を競う戦いではない。お前とて、この時代の主のためにその槍を捧げたのであろう？」

「ふむ、違いない」

セイバーの言葉にランサーは同意を示した。

二人ともこれから殺し合いを行うと言うのに、その雰囲気は弛緩した空気を放っていた。

しかし、その空気は何時までも続かず、セイバーはダークスーツに自身の蒼い静謐な魔力光を発生させ、銀と紺碧の鎧姿に変わる。その姿は正にセイバーの名に恥じない雰囲気を放ち、ランサーは嬉しそうに両手の槍を鳥のように大きく広げながら構える。

セイバーもその様子に何かを構えるように腕を構えながら、自身の背後に居るアイリスフィールに声を掛ける。

「敵のマスターが見えません。アイリスフィール、貴女に私の背中を預けます」

「セイバー、分かったわ。この私に勝利を」

「はい、必ずや」

「ーードンー！」

アイリスフィールの言葉に答えると同時にセイバーはランサーの

間合いの中に踏み込み、常人では見る事さえも不可能な戦いを開始した。

激しい剣戟が響く場所から僅かに離れた場所。

その場所に男女が乗って来ていた車から降りて、離れた場所から響いている剣戟の音に顔を険しくする。

「始まっているな」

「その様です」

男性の言葉に女性は同意を示すと、すぐさま二人は戦いが監視し安い場所を探し始める。

彼らはサーヴァント同士での戦いよりも、マスターを殺す方を効率が良いと判断している者達だった。

そしてこの男性こそ、本当のセイバーのマスターであり、アイリスフィールの夫 - 衛宮切嗣<sup>えみやきりつぐ</sup>。魔術師殺しとまで呼ばれている男である。自身のサーヴァントと妻を囚にして、マスターを銃器など撃ち殺すつもりなのだ。

そして戦いの場が一望出来る場所を見つけたのか、切嗣の弟子である女性 - 久宇舞弥<sup>ひるうまいや</sup>はデリッククレーンを指差す。

「あの場所からなら、戦場がくまなく隅々まで見渡せますが」

「確かにその通りだ。アソコは確かに監視に絶好のポイントだ。誰だってそう思うだろう」

「……なるほど、確かにその通りですね」

「舞弥は東側の岩壁から、僕は西側から行く……セイバー達の戦闘と、それとあのデリッククレーンを両方を見張れるポイントに……」

「付かれるのは困るな。特に戦いの邪魔をする貴様らは」

「……ガシイイイイーン!!」

『ッ!!』

突如として切嗣と舞弥以外の声が響いた瞬間、切嗣と舞弥の四肢は突然発生した黒く光る輪に拘束された。

その見た事が無い現象に切嗣と舞弥は慌てて拘束から逃れようとするが、その前に舞弥の背後に突然に出現した黒い影によって舞弥の意識は一瞬の内に刈り取られる。

「寝ている」

「……ビシッ!!」

「カッ!!」

「……ガクッ!!」

「舞弥!!」

四肢を空中に拘束されながら気絶した舞弥の姿に切嗣は叫ぶが、舞弥を気絶させた黒い影・ブラックは気にせずに切嗣の腕の袖を捲くり、令呪を確認する。

「やはり貴様がセイバーのマスターだったか」

「お前は！？キャスターのサーヴァントか！？」

「フッ、さあな。貴様は邪魔だ。其処の女同様に、眠っている！！」

「ーードゴン！！」

「ガハッ！！」

ブラックの拳を鳩尾に受けた切嗣は口から空気を吐き出しながら、舞弥同様に気絶した。

それをブラックは確認すると、切嗣と舞弥の装備を全て調べ上げ、車の中に仕舞ってあった銃器や爆発物、その他の機械関係を全て押収する。

「やはりこう言う奴がいたか。それにしてもこの男？・・・似ているな。あの頃のあいつ等に」

そうブラックは切嗣を見ながら呟くと、切嗣達の装備を全て背中に背負い、海の方に向かって迷う事無く投げ捨てる。

「ーードバッシャン！！」

「これでこいつ等は一から全ての道具を揃え直した・・・フッフッフッ、さて、そろそろ俺も本格的に参戦させて貰うか。おつと、その前にもう一つの邪魔者を殺さなければな」

ブラックは海の中に投げ捨てた物が沈むの確認すると、ゆっくり

とセイバーとランサーが戦っている場所に向かい出す。後に地面に倒れ伏して気絶する切嗣と舞弥だけが残るのだった。

ブラックが切嗣達戦闘不能にしている頃。

セイバーとランサーの戦いは膠着状態に追い込まれていた。

互いに武器を構えながらにらみ合っているが、その周りは無残としか言えないほどに変わり果てていた。

ランサーとセイバーのぶつかり合いによつて、コンクリートは碎け散り、武器同士がぶつかり合う衝撃波によつて辺りに存在していた物は一つ残らず破壊し尽くされていた。

短時間でこれだけの破壊を行った英霊の力にアイリスフィールは目を見開きながらセイバーの背とランサーを見つめるが、セイバーとランサーは気にせず相手への賞賛の笑みを浮かべていた。

「名乗りもないままの戦いに栄誉も糞もあるまいが……賞賛を受け取れセイバー。女だてらに見上げた奴だ」

「無用な謙遜だぞ、ランサー。貴殿の名を知らぬとはいえ、その槍捌きをもってその賛辞……私には誉だ。ありがたく頂戴しよう」

ランサーとセイバーは互いに褒めあつた。

互いに使う武器は違うが、二人とも騎士として生きていた者。それ故に二人の根幹は良く似ていた。

己の武技を頼りに戦場を駆け抜け、数々の武勇を立てた生粋の武人であり騎士。だからこそ、己の武と同等の武を持った者との出会いを互いに嬉しく思っていた。

しかし、その騎士達の静謐な語り合いを無視するように、場違い

な無粋な男性とも女性とも分らない声が響く。

『戯言はそこまでだ。ランサー』

「ランサーの・・・マスター」

辺りに反響する声の主に正体に気がついたアイリスフィールは陰しい声を出して辺りを見回すが、声の主は発見出来なかった。

そんなアイリスフィールの様子に構わずに、ランサーのマスターと思わしき者はランサーに命令を行う。

『これ以上勝負を長引かせるな、そのセイバーは難敵だ。速やかに処理せよ・・・宝具の開帳を許す』

「了解した。我が主」

「――バサッ！」

ランサーは自身の主の声に応じると共に左手の短槍を地面に放り投げると、右手に握っていた長槍に巻かれていた呪布を取り去り、真紅に輝く槍を晒した。

その真紅の槍から魔力が蜃気楼のように立ち上り、セイバーは警戒心を強めながら槍を見ていると、ランサーがセイバーに声を掛ける。

「そういうわけだ。ここからは殺りに行かせて貰う」

「・・・」

ランサーの言葉と共にセイバーは深く腰を落とし、二人は慎重に

間合いを計り始める。

そんな中セイバーが考えるのはランサーの宝具の性質だった。

宝具には大別して二種類存在している。真名を解放して爆発的な威力を発揮するものか、もしくはその武器の性質が宝具の能力であるという場合の二種類。

セイバーの剣は前者に辺り、ランサーの槍は後者に当たる。問題はどんな能力がランサーの槍には宿っているのかと言う事だが、隠れて様子を伺っていたブラックはランサーの槍の能力を大まか推測する。

（あの槍は恐らく何かしらを無効化する能力が存在しているな。クレニアムモンのアヴァロンのように攻撃を完全に無効化する能力だったら不味いが、それは在るまい・・・それにセイバーは気がついていないが投げ捨てた短槍。恐らくアレが本当の本命だ。それにセイバーが気がつかなければ、此处で終わるか）

そうブラックがランサーの狙いを考えていると、ランサーはセイバーに向かって神速の突きを放つ。

「フッ!!」

「――スッ!!」

余りにも速いランサーの突きはアイリスフィールドの目に映る事さえなく、セイバーに向かって行く。

しかし、セイバーもまた最有と呼ばれるほどのサーヴァント。ランサーの達人でさえも気がつくことが出来ない神速の突きを、握っている不可視の剣で弾く。

「――ガキイイイ――ン!!」

――ドオオ――！！！！

「なっ！？」

「フツ！」

「えっ!!」

セイバーの不可視の剣とランサーの真紅の槍が激突し合った瞬間に、突如として突風が発生し、セイバーは驚き、ランサーは笑みを浮かべた。

そして何が起きたのか分からなかったアイリスフィールは、セイバーとランサーの姿を疑問の声を上げながら見つめるが、ブラックには今ので全てが分かった。

（ほう、あの槍の能力は“魔力遮断”か。それに一瞬見えたセイバーの剣。アレが間違いなく俺のオメガブレードに劣らない最高位の剣だ。そして黄金に輝く剣となれば、セイバーの正体はアーサー王。そしてランサーは”輝く貌”のデイルムツド。ふん、やはり召喚に応じたのは正解だった！！）

ブラックはそう今の一瞬の行動でセイバーとランサーの真名を読み取った。

聖杯から送られて来る情報をブラックは一つ残らず記憶している。その膨大な知識は普通ならば悩む所だが、電子生命体と言う稀有な存在であるブラックからすれば聖杯の情報など簡単に掌握出来る。そしてブラックが歓喜に満ち溢れている間に、セイバーもランサーの槍の能力に気がついたのか、自身が纏っていた鎧を解除する。それを目撃したブラックはセイバーの失策に失笑を思わず漏らし

てしまいそうになり、何時の間にランサーの足元で砂利に隠れながら呪布が無くなっている黄色の短槍を見つめる。

（馬鹿が、二槍を使っていた事実を忘れている。確かに判断は間違っていないが、それは最初に一槍を使っていた場合だ。最初から二槍を使っていたのにそれを忘れるとは・・・その代償は高くつくぞ）

そうブラックが内心でセイバーの失策に非難を上げていると、セイバーは自身のスキルである魔力放出を使って超音速の弾丸に変わり、ランサーに向かって突進する。

その速さは並みのサーヴァントでは何も出来ないほどの速さだったが、ランサーはその行動を取る事が予想出来ていたのか、足を蹴り上げると共に砂利と共に短槍を浮き上がらせた。

セイバーはその動きに己の失策を悟るが、時既に遅く短槍はセイバーが来るのを待ち構えるように穂先をセイバーに向け、セイバーとランサーは互いに交差し、背中を見せ合う。

ーーーーピチャッ！

ーーーードオオオオオオオオオオオン！！

互いの超高速でやり合いの影響か。逆巻く風が爆裂したように辺りに飛び散った。

それと同時にランサーとセイバーは互いに向き直り、険しい視線を向けあう。

どちらも先ほどの凄まじい攻防を行ったのに関わらず、その顔からは戦意は消失していないが、やはり互いに無傷とは言えなかった。セイバーの左手には短槍を避ける為に防御に使った代償なのか、抉られたような傷が存在し、ランサーの左腕も切り傷が生まれてい

た。

どちらも同じ箇所<sup>に</sup>傷を負ってはいるが、ブラックは冷静に今の攻防での勝者はランサーだと判断する。

その証拠にアイリスフィールが回復魔術を使ってもセイバーの傷は治らず、ランサーの傷は隠れているであろうランサーのマスターの魔術によって癒えて行く。

（予想通りになった。これでセイバーはランサーを倒さなければ宝具は使えんだろう。状況判断を誤ったセイバーの負けだ）

「やれやれ、つくづく勝たせてくれんか。だが、代償は高かったぞ。我が破魔の紅薔薇<sup>ゲイ・ジャルグ</sup>を前にして、鎧が無為だと悟ったまではよかったな。が、鎧を捨てたのは早計だった。そうでなければ必滅<sup>ゲイ・ボウ</sup>の黄薔薇は防げていたものを」

「・・・なるほど、一度穿てばその傷を決して癒さぬと言われる呪いの槍、もっと早くに気づくべきだった」

（馬鹿が。貴様がアーサー王ならもっと早く気づけただろう。それを受けてから気がつくとは・・・思ったよりも鈍い女だ）

そうブラックが内心で嘲りに満ちた言葉をセイバーに飛ばすのも当然だろう。

少なくともセイバーはただ見ていたブラックよりもランサーと語り合っていた。にも関わらずセイバーがランサーの正体に気がついたのは必滅<sup>ゲイ・ボウ</sup>の黄薔薇をその身に受けてから。

ランサーの正体がデイルムッド・オディナと気がつくには他にも充分な要素が幾つもあった筈だ。

それなのに今の今までセイバーは気がつかなかったのだから、ブラックからすればセイバーは鈍いと判断するしか無かった。

（最優と言う情報は誤りだ。少なくともランサーの方が俺を楽しませてくれそうだ。アーチャーへの用事が終わった後に、少し戦って貰うぞ、デイルムツド）

ブラックはそう自身のこの場での用事が終わった後の事を考えながら、再度戦いを始めようとしているセイバーとランサーを眺めていると突如として轟音が空から鳴り響き、ブラックがゆっくりと空を見てみると、逞しい牡牛に戦車を引かせて、その上に載っている巨漢の男を発見する。

その男は自身の戦車を操り、ランサーとセイバーの中間に戦車を下ろす。

それを目撃したブラックは不機嫌に顔を歪め、筋骨隆々のライダーのサーヴァントと思われる大柄な男を隠れながら睨みつける。

ランサーとセイバーの戦いは正々堂々戦っていた神聖な戦い。それをどんな形であれ汚す行為はブラックには絶対に赦しがたい行動。

それを行ったライダーにブラックは思わず殺意を抱いてしまいそうに成るが、戦いの邪魔をしたライダーは構わずにセイバーとランサーに語りかける。

「我が名は征服王イスカンドル、此度の聖杯戦争ではライダーのクラスで現界している」

（イスカンドルか。その名前覚えたぞ！キャスターとも時臣どもを殺したら、次は貴様とそのマスターだ！）

そうブラックがイスカンドルを標的をしていると、イスカンドルのマスターと思われる若い青年がイスカンドルに掴みかかり、イスカンドルはそれを黙らせると、セイバーとランサーの勧誘を行い出

した。

その勧誘にはブラックも呆れるしか無かったが、セイバーが思わず自身の正体をイスカンダルに明かしたのには尚更呆れた。王だか騎士だとかは関係なく、自身の正体を知らなかった者にばらす奴は普通はいない。

先ず間違はなくセイバーは絡め手に弱いと判断していると、再びランサーのマスターの、今度は怨嗟に満ちた声が響き始める。

その内容は如何やらイスカンダルを召喚した青年・ウェイバー・ベルベットがランサーのマスターから聖遺物を盗んだらしい。

ブラックからすれば聖遺物と言う言葉は、この世で最も嫌いな言葉の一つに当たるのだが、そんな事はランサーのマスターの言葉で如何でもよくなった。

『致し方ないなあウェイバー君。君については、私が特別に課外授業を受け持つてあげようではないか。魔術師同士が殺し合うという本当の意味・・・その恐怖と苦痛とを、余すところなく教えてあげるよ。光栄に思いたまえ』

（・・・ほう、恐怖と苦痛を出て来ない者が教えるだと？クククククッ！！奴は何も知らないな。戦いの中に存在する恐怖と歓喜を！！クククククッ！！決めたぞ。本当の恐怖と言う恐怖を教えてやる！もうすぐな！！クククククッ！！）

この瞬間、この場に集まっている者達全てが知る事になった。

ブラックと言う人々に恐怖の代名詞とまで呼ばれた究極の存在の恐怖を。

ランサーのマスターは不用意に触れてしまったのだ。ブラックと言う恐怖の根源に最も近い存在の怒りに。

そんな風にブラックが今の状態で出せる本気を出す事を決めていると、突如としてイスカンダルが大音量の声で叫ぶ。

「おいこらッ！……他にもまだおるだろうが。闇にまぎれて覗き見をしている連中が……」

「……如何言うことだライダー？」

「セイバー、そしてランサーよ。うぬらの真っ向切つての競い合い、真に見事であった。あれほどの清澄な剣戟を響かせては、惹かれて出てきた英霊が、よもや余一人ということはあるまいて。情けない！情けないのう……冬木に集った英雄豪傑どもよ。このセイバーとランサーが見せ付けた気概に、何も感じるところがないと抜かすか？誇るべき真名をもちあわせておきながら、こそこそと覗き見に徹すると言つのなら、腰抜けだわな。英霊が聞いて呆れるわなあ。んん！？」

（腰抜けだと？……安心しろイスカンダル。もうすぐ嫌と言つても出てやる……そうだろう！アーチャー……！）

ブラックはそう内心で叫ぶと共に、一つの街灯の上の立つ黄金に輝くフルメタルプレートを装備した金色の髪の燃え上げるような瞳を持ったサーヴァント・アーチャーを睨みつける。

同時に他の者達もアーチャーの出現に慌てて顔を向けると、アーチャーは自身が最強だと言つように傲慢さに満ちた声を出す。

「我<sup>オレ</sup>を差し置いて『王』を称する不埒者が一夜のうちに二匹も湧くとはな」

「難癖つけられたところでなあ……イスカンダルたる余は世に知れ渡る征服王に他ならぬのだが」

「たわけ、真の英雄たる王は天上天下に我ただ一人。あとは有象無象の雑種に過ぎん」

アーチャーはそうイスカンドルの言葉は簡単に切り捨てた。

そしてその場にいる全員が理解する。目の前のアーチャーのプライドの高さは一級所の騒ぎではないほどに高いという事を。

そしてそれを現すようにアーチャーの左右の空間が歪み、一目見ただけで凄まじい魔力が宿っていると分かるほどの剣と槍が出現し、全員が息を呑みながらアーチャーの姿を見つめっていると、嘲りに満ちた笑い声がセイバー達の背後の街灯から響く。

「ククククククッ！！ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！笑える！！此処まで笑わせてくれるとはな！」

『ッ！！！！』

突如として響いた笑い声にその場にいる全員が笑い声が響いた街灯を見てみると、漆黒のロングコートを着た長身の男性・ブラックが立っていた。

その一目見てサーヴァントと分かるブラックの存在に、全員が目を見開いた。此処まで近づかれていたのに誰一人としてブラックの存在に気がつかなかった。

理性が在る事からバーサーカーではなくキャスターのサーヴァントである全員が考えるが、ブラックは気にせずにセイバーとアイリスフィールに顔を向ける。

「セイバーに其処の女。この近くで一人の男を見たぞ。生きていると良いな」

「なっ！？」

「そ、そんな！貴方はあの人に何をしたの！？」

ブラックの言葉の意味に気がついたセイバーとアイリスフィールは悲鳴のような声を上げた。

この近くに居た男性といえば、セイバーの本当のマスターであり、アイリスフィールの夫の切嗣しか考えられない。そして目の前のブラックは切嗣に何かが在ったような言葉を告げた。

切嗣に何かが在ったとセイバーとアイリスフィールはブラックに詰問しようとするが、ブラックは構わずにイスカンダルを今度は睨みつける、

「おい、貴様の言葉に応じて出て来てやったぞ。腰抜けとか言っていたが、戦いの邪魔をした貴様に言われたくないな」

「又ウ〜〜〜！」

不機嫌さに満ちたブラックの声に、イスカンダルは困ったように頬を掻いた。

つまり、ブラックが今まで現れなかったのは、セイバーとランサーの戦いを邪魔しなくなかったからだと言う事なる。確かにあの静謐な戦いを邪魔する方が無粋だろう。

その事実に関がったイスカンダルは困ったように顔を逸らす、ブラックは気にせずには今度はランサーに顔を向ける。

「ランサー、素晴らしい戦いだった。其処のセイバー以上にお前は俺の興味を引いたぞ」

「ほう、盗み見ていた貴様に褒められても嬉しくは無いがな」

「此方にも事情が在ってな。獲物がノコノコ出て来るのを待っていたんだ」

「・・・雑種」

ブラックの言葉の意味を理解出来たアーチャーは苛立ちに満ちた声を上げながらブラックを睨み付けた。

ブラックの言う獲物が自身だと言う事をアーチャーは理解出来たのだ。先ほどの自身を嘲るような笑い声に今のブラックの言葉。プライドの高いアーチャーには絶対に赦せる筈もなく、出現させていた槍と剣をブラックに向ける。

「我を侮辱したばかりか、分相応な言葉！この怒りは貴様の散りざままで晴らして貰う！！死ね！」

「ーードン！！」

アーチャーが叫ぶと同時に二つの武器はブラックに超高速で迫る。その速さはセイバー、ランサー、イスカンドルを持ってしても何とか捉えられる速度であり、サーヴァントではないウェイバーやアリスフィールには全く見えなかった。

その攻撃は避けるしかないセイバー達は即座に判断するが、次の瞬間、その場にいる全員が目を見開く事をブラックは一瞬の内に行う。

「ーーガシッ！！ガシッ！！」

『・・・ッ！！！！』

ブラックは何と自身に向かって高速で迫っていた槍と剣を、まる

で何でも無いと言うように両手でそれぞれ槍と剣を捕まえてしまった。

もちろん受け止めた時に凄まじい衝撃がブラックの背後を通り過ぎるが、ブラックは何も感じてはいないのか、静かに掴み取った槍と剣の柄を握り締め、肩に乗せながらアーチャーに声を掛ける。

「ただ武器を放り投げるが貴様の芸なのか？つまらんな。貴様程度の存在など、“ただの雑魚だ”」

「雑種！！」

ブラックの完全に嘲りに満ちた言葉を聞いたアーチャーは、一瞬の内では切れた。

元々プライドの高いアーチャーである。ブラックの完全に路傍の石程度にしか認識出来ない視線や言葉など、赦せる筈はない。それを現すようにアーチャーの左右に更に十六の槍や剣、斧などの宝具が出現するが、ブラックはやはりつまらんなそんな視線を向けるだけだった。

「数を増やして如何するつもりだ？」

「クウツ！！王に対する無礼の数々！！もはや赦しておけん！！消え去れ！雑種！！」

ーーーードドドドドドドドドドドドドドッ！！

再びアーチャーの言葉と共に宝具は大気を轟音で揺らしながら、ブラックに向かって疾走する。

その凄まじい威力を持った攻撃に、その場にいる誰もが今度こそブラックは蜂の巣に変わると判断するが、再びブラックは全員の考

「ハアアアアアアアアア  
- - - - -  
! ! ! ! !」

「何だと!？」

叫ぶと共に先ほどアーチャーから奪った剣と槍を使って十六の攻撃を寸々違わずに上空に弾き飛ばしたブラックの神技としか言えない連撃にアーチャーは声を上げ、ランサーはブラックの完璧な見切りに驚愕した。

その事実には全員が目を見開きながらブラックを見つめていると、ブラックは握っていた剣と槍を下に放り捨てて、次々と力を失って落下して来ている宝具の柄を握り、再び地面に捨てて行く。

「貴様！！私の財を放り捨てるとは！その不敬！もはや赦しがたい！」

62

「言われるまでもな……馬鹿な」

「ん？如何したんじゃ？アーチャーの奴？」

突然に顔色を変えたアーチャーの姿に、イスカンドルは疑問の声を上げるが、アーチャーにはもはや何も答える事が出来なかった。戻せないのだ。確かに自身が放った箭の宝具なのに、ブラックの足の下に落ちている十六の宝具と、ブラックが両手に握っている二つの剣の宝具をアーチャーは自身の所に戻す事が出来なかった、まるで自身が所有者でないと言うように、宝具達はブラックの所で輝き続ける。

「ククククツ、戻したくても戻せんだろうな。教えてやる。これが俺の宝具 - 『全てを従える意志力』だ。僅かにでも俺が相手の宝具に触れれば、その瞬間に全ての宝具は俺に従う。つまり、貴様のさっきの攻撃は、俺に宝具をくれたんだ。感謝するぞ、ギルガメッシュ“英雄王”」

「なっ！？」

ブラックの告げた事実、アーチャーも加えてその場に居る全員がブラックを驚愕の瞳で見つめた。

常識外れのブラックの宝具に驚いたが、在って間もない筈なのに、その場に居る誰もが分からなかったアーチャーの真名をブラックはまるで最初から知っていたように呟いた。

そして同時に彼らの中にブラックに対する恐怖が生まれ始める。人は誰も未知の存在には恐怖を抱いてしまう。例えそれは英雄だと言っても変わらない。

ブラックと言う恐怖に誰もが僅かに恐れを抱き始めるが、まだ恐怖は始まったに過ぎない。

金色の瞳を持つブラックの目は、アーチャーを、そして今は遠い

所で戦いを見ている時臣だけを捉えているのだった。

## 第六話 解放する恐怖

その存在を目撃した瞬間。

言峰綺礼の中に人生最大の衝撃が走った。

自身のサーヴァントであるアサシンと視覚同調させ、港場での戦いを監視していた言峰は、最後に現れたサーヴァントと思わしき、全身黒尽くめで金色の瞳を持った男性――ブラックが現れた瞬間に、今まで感じた事が無い衝撃が走った。

アレは自身と同類だ。自身と同じように世界とのズレを感じ続けている存在。

世界とのズレとの答えを齎してくれるのは、衛宮切嗣だと言峰は感じていたが、もはや切嗣に対する興味は完全に失せて、ブラックだけをくいるように見つめる。

（知りたい！！あのサーヴァントを知りたい！！何者なんだ！？何のサーヴァントだ！！知りたい！！知りたい！！）

あらゆる事に情熱を感じなかった筈の自身がブラックに惹かれていた。

その事実と言峰は自身にもこのような感情が存在していたのかと思いつながら、ブラックの動きだけを注視するようにアサシンに命じる。事前に送っていたアサシンは、ブラックに頭を踏み潰されて消滅したが、今回言峰は運が良かった。時臣の命令でバーサーカーとそのマスターを探していたアサシンが近くに居たのだ。

そのアサシンをすぐさま現場に送り、アーチャーと睨み合っているブラックを目撃したが、アーチャーのマスターである時臣には知らせていなかった。

今は知らせてはいけない。ブラックの戦いを見るまでは、ブラックがどのように場を破壊するのかを、言峰は場違いながらも楽しく

感じていた。

（私にこのような感情を抱かせてくれるとは……見せてくれ！私と同類の存在よ！！お前が何者なのかを！？）

言峰はそう内心で叫びながら、これから起きるブラックの戦いを一瞬たりとも見逃さない為にアサシンの見ている光景を真剣に見つめるのだった。

五体のサーヴァントが集っている港場。

その地に居る四体のサーヴァントが、街灯の上に立ちながら、アーチャーから所有権を奪った宝具の使い心地を確かめているブラックを見つめていた。

サーヴァント・英霊に取って宝具とは唯一無二武具。その所有権を奪える能力を持ったサーヴァントなど、正しく大量の宝具を所有しているアーチャー・ギルガメッシュに並ぶほどの脅威。

特にセイバーとランサーは自身がブラックと戦う前にブラックの宝具が分かった事を心の底から喜んでいた。もし何も知らずにブラックと相対して戦っていれば、自身の愛槍や愛剣が奪われていた可能性も存在していた。

それに悪い事ばかりではない。謎だったアーチャーの正体も知れたし、ブラックの宝具も分かった。これだけでも充分な収穫と言える。

最もブラックはだからこそ、この場で自身の宝具やギルガメッシュの真名をばらしたのだ。

時臣の計画はある程度敵対勢力が減るまで、自身の工房である遠坂邸に潜むと言う策略だった。だが、肝心のギルガメッシュの真名がこの場に居る全てのサーヴァントとマスターに知れ渡った。

これで時臣の計画は潰れる。そして時臣もプライドは高い部類に入る。

此処まで自身の計画を潰された時臣が、潰したブラックとそのマスターを放って置く訳がない。必ず自身の手で報復を行うとするだろう。

その上、ブラックの宝具はギルガメッシュと相性が悪すぎる。早急に倒さなければ、ギルガメッシュの宝具は次々と奪われて、戦力が減っていく。だからこそ、ブラックはこの場にギルガメッシュが現れるまで、自身の本能を必死に抑えていた。

そしてもはや策は成功したのだから、我慢をする必要は無い。

思う存分、今の状態で戦えるだけの戦いを行う為に、両手に握っていた剣の宝具を強く握り、ギルガメッシュに向かって構える。

――スチャッ！

「さて、ギルガメッシュ。此処までお前を虚仮にした奴が今までいたか？」

「……雑種！貴様まさか、全て！」

「ほう、思ったよりも頭が働くな。穴蔵に潜んでいるマスターと同じように腰抜けの王だと思っていたぞ」

――ブチッ！！

「もはや肉片一つ残さぬぞ！」

ブラックの最大級の嘲りに、遂にギルガメッシュの堪忍袋の緒が切れた。

元々プライドが服を着たような性格の持ち主である。一連のブラ

ツクの行動など、ギルガメツシュは生前にも受けた事がない侮辱。  
此処までされれば、もはやギルガメツシュの頭の中に浮かぶ事など一つしかない。

“ 何が在ってもブラックだけはこの手で滅ぼさねば気がすまない ”。そう心を完全に決めたギルガメツシュは、再び左右の空間から今度は五十以上の宝具を出現させ、ブラックに矛先を構える。

「消え去れ雑種！！」

「――ズガガガガガガガガッ！！」

「フッ！同じ事だ！」

「――ビュン！！」

ギルガメツシュが放った宝具の嵐を、ブラックは今度は弾き返す事無く、上空に高く飛び上がる事で避けた。

それを目撃したセイバー、ランサー、イスカンドルは、ブラックの失策だと思った。

空中では羽の無い人間は自在に動く事など出来ない。それは英霊だとしても変わらない。更にブラックが飛び上がった空中は足場も無い、完全に空気だけの空間。

それはギルガメツシュも分かっているのか、的になったブラックに向かって嘲りに満ちた笑みを向けながら、宝具の群れの矛先を向ける。

「所詮は雑種だったな！だが、天をに仰ぎ見るべきこの我よりも高く上に居ること事態が不敬！！その身で償え！！」

「――ズガガガガガガガッ！！」

「フン、なるほど、貴様は……“飛べないのか”」

「ービュン!!」

「何ッ!？」

「嘘じゃろっ?……あやっ何も使わずに空中を飛んどる」

空中で完全に横に移動して宝具の嵐を避けたブラックの姿に、アーチャーは目を見開き、イスカンドルは在りえないものを見たような顔をして空中に両手に剣を握りながら佇んでいるブラックを見つめた。

それは他の者達も同じなのか、空中を縦横無尽に飛び回りながら、アーチャーが放ち続けている宝具の嵐を避けているブラックを見つめ、イスカンドルは自身の戦車に乗りながら、呆然とブラックとアーチャーを見ているウェイバーに声を掛ける。

「おい坊主。サーヴァントとしてはどの程度のモンだ?ありゃ?」

「……ステータスだけでみたら、アーチャーにも、ランサーにも及ばない……勿論お前にもだライダー」

「フム、となればあのサーヴァントがアーチャーを圧倒出来ている理由は能力……そして経験じゃな」

「経験?」

「そうじゃ……厄介なサーヴァントが居ったもんじゃ。恐らくアレは自分よりも実力が上の奴と戦い続けていた英霊。恐らくその

関係でアーチャーにとって天敵としか言えない能力の宝具を得たの  
だろう。理性が在るからキャスタークラスなのだろうが、とんでも  
ないイレギュラーが居ったものなの。そしてこのままではアーチ  
ヤーの武器は次々とあのサーヴァントの物になっていく」

ライダーはそうウェイバーに告げながら、空中でアーチャーが射  
出し続けている宝具の嵐を掻い潜りながら、隙を見つければ、宝具  
を握っているブラックを見つめる。

ただ何も出来ずに避け続けている訳ではない。ブラックは僅か  
でもギルガメツシュの戦力を減らす為に、避ける行動を行い続けてい  
るのだ。

その事はギルガメツシュも当然気がついて可笑しくはないのだ  
が、頭に血が上っているのか、宝具を射出し続けている。もちろん  
飛び回るブラックを追いかけるよう追尾用の宝具も放っているよう  
だが、ブラックはその宝具を優先して自身の物にしている。

「――ガシッ!!」

「……さて、もう充分だな……。そろそろ俺も本気で行かせ  
て貰うぞ!! スティンガーブレイド・エクスキューションシフト!  
!!」

「――ズガガガガガガガガガガッ!!」

「貴様!! 我の真似まで行うか!!」

「――ズガガガガガガガガガガッ!!」

ギルガメツシュは叫ぶと共に自身に向かって来ていた無数の剣状  
の攻撃・スティンガーブレイド・エクスキューションシフトを宝具

の嵐で貫いた。

その攻撃はもちろん全てブラックに向かって行くが、ブラックはそれさえも避け続け、今度はギルガメッシュと同じように次々と自身の周りにステインガーブレイド・エクスキューションシフトを生み出し続け、ギルガメッシュに向かって連射し続ける。

ーーーーズガガガガガガガガガッ！！

「無駄な攻撃だ！！雑種風情が粹がる……」

ーーーーション！！

「ッ！！」

ブラックの放ったステインガーブレイド・エクスキューションシフトを、ギルガメッシュは相殺し続けていたが、その中に一つの閃光が走り、ギルガメッシュの首横を通り過ぎた。

それに気がついたギルガメッシュは恐る恐る閃光が通り過ぎた自身の首筋に手を当てて見ると、滑りを感じ、自身の黄金の籠手についたモノを見てみると、真っ赤な血が存在していた。

それと共に自身の背後の地面に突き刺さっている物を見ると、ブラックがギルガメッシュから奪い取った筈の剣が地面に深く突き刺さっていた。

「……………雑種……………貴様！！高貴なる王の血を！！それだけではなく我の財で！！」

「ふん、貴様が返せというから返してやったまでだ。気に入らなかったか？」

「ふざけるな！！もはや貴様ごときの命で償えると思うな！！」

ギルガメツシュの顔は完全に憤怒に染まっていた。

傷を負わされただけでもギルガメツシュには赦しがたい事だったが、その傷をつけたのは少し前まで自身の蔵に納まっていた宝具。自身の持つ物だった物で傷をつけられるなど、誰も赦せない事だろう。

それを現すようにギルガメツシュは次々と自身の左右の空間から宝具を出現させるが、今度はレベルが明らかに違っていた。

ゲイボルク、カラドボルグ、グラム、デュランダル、ダインスレフ、グングニル、ヴァジュラ、ブリューナクなどなど、超一級品としか言えない宝具の数々が存在していた。

その中には本来ならばランサーが持っている筈のゲイ・ボウやゲイ・ジャルグも存在し、その全ての宝具がブラックに矛先を構えていた。

更にギルガメツシュは右手に刃のあるべき場所は円柱形の部品で構成され、それぞれに複雑な文様が刻まれている異形としか言えない剣が出現していた。

「雑種ごときにこれだけの財を出してやったのだ！！光栄に思いながら散るがいい！！」

（なるほど、確かにアレほど宝具は簡単には従えられんな）

ブラックの宝具の一つ、『全てを従える意志力』は確かに強力な宝具だ。

しかし、その実は幾つかの欠点が存在していた。

先ず第一に剣などの手で握れる物しか従えられない事。

次にAランク以上の宝具を従えるのには時間が掛かる事。しかも、Aランク以上の場合には握ってから従えるまでの間、その場から動く

事が出来無いと言う弱点が存在している。

今ギルガメツシュの周りに存在している宝具の数々は、Aランク以上の物も数多く存在している。

しかも幾つかは追尾能力も持っている宝具も存在している為に、今度は避けきれる確率はかなり低い。

少なくとも、“人間状態のままでは避けきれない”のだ。

(……となれば、此方も本気を出して、アレを呼び出すしかないか……雁夜には悪いがな！)

「消え去るがいい！……ムッ！！」

「うん？」

突如としてブラックから視線を逸らしたギルガメツシュに、元の姿に戻ろうとしていたブラックも動きを止め、ギルガメツシュが視線を向けている方に視線を向け、納得したように頷いた。

ギルガメツシュが見ている場所の遠くに存在するのは遠坂邸。

恐らく時臣がギルガメツシュの暴れた事によって減った魔力に気がついたのだろう。

そして状況が良く分かっていない時臣は、ギルガメツシュに今のギルガメツシュがとても認められない言葉を告げる。

(王よ！お戻り下さい！今はまだ時ではありません！！)

「黙れ時臣！！この雑種だけはこの場で討ち取らねば我的気がすまん！！王の裁きを下さねばなんだ！！」

(致し方ありません……令呪に置いて命じます。王よ！ご帰還下さい！！)」

「おのれ時臣！！！」

流石に令呪の命令にはギルガメッシュも逆らえなかったのか、出現させていた宝具は次々と消失し、その体も薄れ始めていく。

それでも憤怒に満ちた視線だけはブラックを射殺さんばかりに睨み続け、ブラックはその様子に内心で笑みを浮かべながら消える直前のギルガメッシュに声を掛ける。

「ギルガメッシュ。俺と戦いたいのならば、マスターを連れて魔力を解放しろ。そしたらすぐにでも俺は向かってやる」

「その顔は覚えたぞ！貴様は我自らが必ず討ち取ってくれるわ！！」

そうギルガメッシュは殺意に満ちた叫びを上げると共に、遠坂邸に転移して行った。

その様子にブラックは内心で自身の策が上手くいった事を確信すると、ゆっくりと地上に降り立ち、ギルガメッシュに投げつけて地面に深く突き刺さっていた剣を抜き取る。

「ーートン！」

「さて、これで目的は果たした・・・此処からは存分に俺を満たさせて貰う」

ブラックはそう言葉を告げると共に、呆然としていたセイバー達に顔を向けるが、その肉食獣のような瞳はただ一人ランサーだけを見つめていた。

ーードン!!

「ランサー。戦って貰うぞ」

「ほう、俺をご指名とは・・・面白い」

ブラックの宣言にランサーも頷き、二人はゆっくりと相手に向かって歩き出す。

セイバーとイスカンドルはその凄まじい雰囲気だけに空気が重くなるのを感じるが、それだけではすまなかった。ランサーに向かって歩いているブラックの体から次々と凄まじい魔力が迸り始めたのだ。

その魔力に気がついたアイリスフィールとウェイバーは、ブラックに何かが起きている事を確信するが、ブラックは構わずにずっと我慢していたモノを心から解放し始め、10メートルほどの距離になった所で互いに立ち止まりランサーに歓喜に満ち溢れた笑みを向ける。

「ランサー、貴様の真名はデイルムツド・オディナだったな」

「その通りだ。貴様の真名は分からんが、先ほどの動き。キャスターのサーヴァントで相違ないな？」

「キャスターか？・・・クククククッ、残念だが外れた」

「何！？」

ブラックの告げた事実ランサーは目を見開きながら声を上げ、他の者達も目を見開きながらブラックを見つめた。

先ほどの空を自由に飛び回り、不可思議な攻撃を行い、尚且つ理

性が在るとなればキャスターのクラス以外にブラックのクラスは普通ならば考えられない。

しかし、残念ながらランサー達の考えは間違っていた。ブラックはキヤスターなどと言うクラスではない。それを現すようにブラックはもはや理性が全く感じられない歪んだ笑みを作り始める。

「ずっと我慢していた。俺が此処まで我慢したのは生前でも無いほどだ……。だが、限界だ。下らんキャスターどもの使い魔を倒す事で抑えていたが、貴様と言う最高の敵を見つけてしまった。もはや抑え切れん!!! ハイパー―ダー―クエヴォリユー―ション!!!」

――ギュ  
ルルルルル  
ルッ！！

ツ！！

ブラックが叫ぶと共にその身は突然に発生した黒いデジコードに覆われ、ブラックの体を包み込んでいく。

目の前に広がる不可思議な光景にランサー達は驚愕に目を見開きながら、黒い繭と化したデジコードを見つめていると、突然にデジコードの中から鋭い爪を三本備えた鉄鋼が出現し、デジコードは一瞬の内に切り裂かれ、中から三メートルほどの大きさを持った漆黒の竜人・本来の姿に戻ったブラックが現れる。

「ガアアアアアアアアアアア——！！！！！」

「ま、まさか！？馬鹿な！そんな事が在りえるのか！？」

「クラスを否定していると言うのですか!？」

「むうっ？こりゃ、完全に予想外だのう」

真の姿に戻って咆哮を響かせているブラックの姿に、相対しているランサーやその場にいる全員がブラックのクラスに気がついた。ブラックのクラスは行方が全く分からなかったサーヴァント。

聖杯戦争に置いて鬼門のクラスと呼ばれる、最も危険なクラス。

“狂戦士”  
バーサーカーのクラスこそが、ブラックのクラスだった。

そして遂にその真の姿を他のサーヴァント達の前に晒したブラッ  
クは、歡喜に満ち溢れた笑みをランサーに向ける。

「さあ、始めるぞ。互いの信念を賭けた殺し合いを……俺を楽しませろ……ランサー……!!!!」

ドオオオオオオオオオオン！！

「クウツ！！オオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

――ガキイイイ――ン！！

ブラックとランサーは互いに飛び掛かり、ブラックは右腕に装備しているドラモンキラーを、ランサーも右手の真紅の槍－ゲイ・ジヤルグをぶつけ合い、辺りに甲高い金属音を鳴り響かせるのだった。

## 第七話 槍兵と激闘する恐怖

とある民家に作り上げたブラック達の第二の拠点。

住民だった人々はルインが渡した大量の宝石を持って、即日の内に海外に引越させたと言う経歴を持った民家の中では、遠く離れた場所で行っている戦いとは無縁に穏やかな空間が広がっていた。

「桜ちゃん！雁夜さん！お食事が出来ましたよ！」

「そうか、桜ちゃん、夕食を一緒に食べよう」

「うん、カリヤおじさん」

リビングから聞こえて来た声に、別室で桜と遊んでいた雁夜は頷き、恐る恐る頷きながらも笑みを浮かべている桜の手を握ってリビングへと向かいだした。

ブラックによる桜の初期化が終わって桜が目覚めた時、桜は間桐家での地獄の日々を完全に忘れて、遠坂家から間桐家に行く直前にまで戻っていた。

そのおかげで桜の髪の色や目の色は、姉である凜と母親の葵と同じ色に戻って、あの諦観に満ちた表情ではなく、遠坂家に居た頃の笑顔に戻っていた。

しかし、それでも雁夜は絶対にあの間桐家に居た頃の桜を忘れる事は出来なかった。自身の命令で桜はブラックに初期化されたとは言え、雁夜はあの頃の桜を忘れてはいけないと思っている。

（自分が望んだ事とは言え、これは思ったよりもキツイ。俺は勝手な都合で桜ちゃんの人生を否定したんだからな）

雁夜は何故ブラックが他人の歩みを否定する事を嫌っているのか理解していた。

確かに桜は嘗ての笑みを取り戻せた。だが、それは間桐家での桜の頑張りを否定した結果に過ぎない。

もし間桐家に行く前の桜を救っていたならば、雁夜は此処まで悩まなかっただろう。

それでも桜が目覚めた時に自身を見て浮かべてくれた桜の微笑みは、雁夜にとってはやはり嬉しかった。

最初は桜はこれから自分が間桐家に行くと思っていたが、雁夜はそれを否定して、間桐家は事故で消滅してしまったと説明した。

それを知った時、桜は自分が遠坂家・凜と葵、そして時臣の下に戻れると心の底から喜んだ。

最も色々な手続きがあるので待っていてくれと雁夜に言われて、残念そうに顔を俯かせてしまったが、手続きが終われば必ず戻れるとも雁夜に説明され、今は姉と母親、そして父親と再会出来る日を桜は楽しみに待っている。

（必ず葵さんと凜ちゃんの所に君を帰してみせる。その為に……時臣！！俺はお前の人生を全て否定する！待っている！）

そう雁夜は自身の表情を桜に見えないようしながら、内心で時臣に対して憎しみに満ちた叫びを上げた。

本当は雁夜は今すぐにでも桜を葵と凜の所に連れて行って上げたい。だが、今は駄目なのだ。

今桜を帰しても、再び時臣は魔術師として考えを持って、桜を今度とは別の家に養子として差し出すだろう。

そうなれば桜は二度親に捨てられたと言う悲しみを持ってしまう。それだけは絶対にさせる訳にはいかない。自身の残り少ない命を全て使って雁夜は必ず桜達の本当の笑顔を見る為に戦う決意を固めているのだ。

その様子を食事を二人の前に並べながら観察していたルインは、雁夜の内心を正確に察し、僅かに關心したように目を細める。

（ブラック様が認める訳です。自分の命を使つてという所はブラック様は嫌いでしょうが、この覚悟は叶えるにたる願いです。もし下らない願いだったら、即座にブラック様は殺していましたけどね）

ルインは何故ブラックが雁夜を殺さなかったのか漸く分かった。ブラックは人に命令される事や縛られる事を嫌っている。それなのにも関わらずブラックが雁夜を殺さなかったのは、雁夜の願いが面白いと思ったからだ。

聖杯と言う万能な器よりも、雁夜は桜、凜、葵と言う他人の為にその命を使おうとしている。

其方の方がブラックやルインとしては好ましい。世界などと言うものに翻弄されたブラックやルインからすれば、雁夜の小さな願いの方が面白いのだ。

そんな風にルインが食事を取っている二人を眺めていると、突然に雁夜は自身の魔力が急激に減少し始めている事に気がつき、思わず胸を苦しそうに押さえてしまう。

「グウツ!!」

「カリヤおじさん! しっかりして!!」

突然に胸を押さえた雁夜の姿を目撃した桜は慌てて雁夜に掛けよるが、雁夜は大丈夫だというように手を伸ばし、桜の頭を撫でながら険しい瞳を窓に向けているルインに質問する。

「こ、これは・・・まさか」

「ええ、ブラック様が本気で戦っているようですね。やはり限界が訪れましたか。寧ろ今まで持っていた方が奇跡でしたが……如何します？」

「……構わない。此処はブラックの好きにさせるさ……色々とブラックにはして貰っている。それにこれは俺のマスターとしての力量不足が原因だから」

「そうですね……（やはり一刻も早く別の魔力供給手段が必要ですね。彼ではブラック様を支えきれない。令呪のブーストも後二回が限界ですからね。さて、どのマスターが裏技を見つけているんでしょうね。どんな手を使っても手に入れますよ。ブラック様が本気で戦える手段を）」

ブラックがパートナーと認めている破滅を呼ぶ風・ルインフォー

ス。  
ブラックにしか従う事の無い存在が動き出す。その透き通った蒼い瞳ながらも、邪悪さに満ちた瞳に狙われるマスターは一体誰なのか。それはまだ分からないのだった。

冬木市に存在していた港場の倉庫街。

その場所はセイバーとランサーの戦いによって無残な姿に変わり果てていたが、今その場所は先ほどのセイバーとランサーの激突さえも上回るほどの暴虐によって跡形も無いほどに変わり果てていた。

「オオオオオオオーーーー！！！！ドラモンキラーーーーー！！！」

「クッ！！！」

――ビュン！！

ーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオン!!!!

ブラックが振り抜いて来た右腕のドラモンキラーを、ランサーは自身の俊敏さを發揮して避けたが、ドラモンキラーはそのまま地面に激突し、地面に大穴を開けた。

それを目撃したランサーはブラックの一撃に冗談では無いと心の底から思った。

先ほどまで戦っていたセイバーの攻撃力を遥かにブラックは超えている。もし自身の持つ破魔の紅薔薇と必滅の黄薔薇でブラックの攻撃をまともに防御すれば、その瞬間に破魔の紅薔薇と必滅の黄薔薇は叩き折られるだろう。

その上、ブラックの速さは最速のサーヴァントと呼ばれた自身さえも上回るスピードを持っている。ランサーは目の前のブラックが本気で先ほどまで力を隠し続けていた事を理解する。

「クツ！！貴様！何故理性を持っているのだ！？バーサーカークラ  
スは狂化が付加属性の筈だぞ！！」

「フン！ そんな事を気にしている暇は貴様に在るのか！？ もっと楽しませろ！」

「クウツ！！」

——キィンッ！！ガキィッ！ガキィン！！

ブラックが連続で振り抜いてくる左右のドラモンキラーを、ラン

サーは二槍を巧みに使って致命傷になる攻撃だけを逸らし続ける。

自身が二槍を使う者でこれほど良かったと思っただ事は、ランサーは生前でもなかった。もし一槍でブラックと相対していれば、とうの昔に自身はブラックのドラモンキラーに貫かれていたとランサーは判断する。

しかし、それは逆にブラックの戦意を上昇させる逆効果にしかなくっていなかった。生前でも此処まで自身の攻撃を逸らし続けている相手は数えるぐらいしかブラックは戦っていない。

ランサーのサーヴァントは正しく自身が求めている強者である事に、ブラックの戦意は留まる事を知らずに上昇し続ける。

「ハハハハハハハハハッ！！これだ！！この為に俺は召喚に応じたんだ！！もつと俺を楽しませろ！！ランサーー！！！！！！」

「クッ！！なるほど！！そう言う意味での狂戦士か！！」

ランサーは何故ブラックがバーサーカークラスで呼ばれたのかを今のブラックの叫びで理解した。

完全にブラックは戦闘狂。戦いだけに固執し、戦いだけに愉悦を感じる事が出来る戦士。

自身やセイバーのような民や主君を護る事に意義を感じていた騎士ではなく、ブラックはただ戦うことこそが楽しい狂戦士なのだ。

最もその事を理解しても、もはや遅い。ブラックの獲物として認識された瞬間に、地の果てまで離れても追い続けられると言う宿命がランサーには生まれてしまった。

その事を知らないランサーは何とか反撃の隙を探そうとするが、ブラックは反撃の隙など与えないと言う様に攻撃を繰り返し続ける。しかし、徐々にでは在るが、ランサーはブラックの攻撃速度に慣れて来たのか、槍使わずにブラックの攻撃を避け始める。

ービュン！！

（ほう、緩急をつけての避け方するとは、流石は最速と言われるランサーのサーヴァントして召喚されただけはあるな）

ブラックはランサーが徐々には在るが自身の攻撃を避けて来ている事に気がついていた。

ランサーもブラックには及ばないまでも【心眼】のスキルを保有しているサーヴァント。鋭い洞察力を持ってブラックの攻撃を見切り始めたのだ。

（まだだ！まだ動ける！！俺はまだ戦えるぞ！！）

ランサーはブラックの攻撃を避ける時にだけ一瞬スピードを上げると言う策を見つけていた。

長時間同じスピードを維持し続けるのは幾らランサーでも辛い。だからこそ、避ける時にだけ最大の速さを発揮し、攻撃や移動時には僅かにスピードを抑えて動く。

これによって相手からすればランサーの動きは変則的になったように思い、判断能力が僅かに狂わされてしまう。その隙を逃さずに攻撃を行えば、幾ら相手のステータスが上でも隙を衝く事が出来る。それを表すようにブラックも徐々にランサーの動きに自身の動きを合わせ始めるが、ランサーは瞬時に好機が舞い降りたと判断し、即座に右手に握っている破魔の紅薔薇<sup>ゲイ・ジャルグ</sup>を渾身の力を込めて、大振りになったブラックの攻撃を避けながら突き出す。

「破魔の紅薔薇ッ！！！」  
ゲイ・ジャルグ

「フッ！！悪くないが俺にはまだ武器が在るぞ！！」

——ガアアアアア——！！

「何だと！？」

ランサーが渾身の力を込めて神速の速さで突き出して来た破魔の  
紅薔薇を、ブラックは瞬時に右足の膝蹴りを叩き込む事で迎撃した。  
その事実に関しランサーは目を見開くが、瞬時に跳ね上げられた破魔  
の紅薔薇を手を回転させる事で持ち直し、そのまま今度は左手に握  
っていた必滅の黄薔薇をブラックに足を上げたまま体勢が不十分に  
なっているブラックに向かって突き出す。

「必滅の黄薔薇ッ！！！」

「悪いが！それも受ける気は無い！！！」

ランサーが突き出して来た必滅の黄薔薇を目撃したブラックは、  
即座に自身の体を僅かに空中に浮かばせ、そのまま右手に瞬時に背  
中のブラックシールドの片方を装着させ、胴体の鎧に触れる直前の  
必滅の黄薔薇の横部分に叩きつける。

——ガアアアアア——！！

「チイツ！！それは盾だったのか！？」

ブラックシールドを叩きつけられて軌道が逸れてしまった必滅の  
黄薔薇を戻しながら、背後に飛び退いたランサーは、ブラックが右  
腕に装着しているブラックシールドを見つめながら叫んだ。

まさか、盾までも持っていたとはランサーも思っていなかった。  
しかも必勝の策として考えた策もブラックは見破っていたというよ  
うに流れるような動きで対応していた。

自身よりもかなりの戦いをブラックは越えて来たのだろうとランサーは判断しながら、二槍の矛先をブラックに向けると、ブラックも背中にブラックシールドを戻して、両腕のドラモンキラーを構える。

「やるな、ランサー」

「褒めて貰っても嬉しくないな。まさか、此处まで見事に対応されるとは思っても見なかったぞ」

「なに、もし貴様の宝具の能力を事前に知っていなければ対応せずにいただろう」

「解せんな？何故貴様は自身の宝具だと言っていた能力を使わない？それを使えば、今の攻防で俺から宝具を奪えた筈だぞ？」

「フン、アレはギルガメッシュにしか使う気は無い。俺はこの聖杯戦争を楽しみたいんでな」

「なるほど、完全な戦闘狂か・・・だが、悪くは無い。正直貴様は最初は気に入らなかったが、今は違う。セイバーと同様に討ち取りたいと思える好敵手だ」

「フツ・・・ブラックウォーグレイモンだ」

「何？」

「俺の真名はブラックウォーグレイモン。貴様はブラックと俺を呼んで良いぞ」

「……………」

ランサーはブラックの名乗りに言葉は出す事が出来なかった。  
この聖杯戦争が汚れ仕事であり、騎士の誇りなど欠片もないことをランサーは熟知している。

故に自身も正体を自由に名乗り挙げる行動も禁じられている。だが、そんなルールなどブラックからすれば関係ない。ランサーは自分が認めるほどの実力を有した騎士。

その相手の名前を一方的に知っているなど、ブラックからすれば相手への侮辱でしかないと判断したのだ。そもそも他のサーヴァントと違って、自身の名前がばれても別にブラックには関係ないのだから、名乗る事には何も感情も抱かなかった。

しかし、逆にランサーの顔には喜悦が浮かび始めていた。

これほどの実力を有しているブラックが自身を認めて名乗りを上げてくれた。ブラックが狂戦士だとかはもはやランサーには関係ない。ただセイバーと同様に更なる好敵手に出会えた喜びに打ち震えながら、自身の力を全力で発揮する為に鳥のような独特の構えを取り出す。

「…………行くぞブラック!!」

「来い！デイルムツド」

「——キインツ——！ガキイツ——！ガキイン——！」

ランサーとブラックは互いに叫びあうと、再び相手に向かって飛び掛かり、凄まじい剣戟を再開するのだった。

そしてブラックとランサーの戦いを衝撃波の影響が来ない距離から見ていたセイバーは、アイリスフィールを護りながら、ブラック

の凄まじい力に目を見開いていた。

完全な状態の自分ならば何とかブラックに対抗出来るだろうが、今の自身はランサーの必滅の黄薔薇ゲイ・ボウによって奪われた左手が使用出来ない。

ブラックが自身を相手に選ばなかった事はセイバーにとっては嬉しい事だったが、ブラックと相対しているランサーが傷ついていく姿には苦い想いを抱かざる得なかった。

先ほどの戦いでランサーは自身が尋常に戦って雌雄を決したいと思える騎士だとセイバーは思っているのだ。しかし、同時にブラックが両腕に装備している箆手にもセイバーは危険を感じていた。

アレは不味い。アレは自身の天敵だと、セイバーの優れた直感が告げている。

左腕が使用出来ない状況ではブラックと戦ってはいけないとセイバーの直感は告げているのだが、セイバーはそれでも一歩前に足を踏み出し、背後に居るアイリスフィールに声を掛ける。

「アイリスフィール。この場から逃げて下さい。近くに恐らく切嗣が居る筈です。合流してこの場から離れて下さい」

「……いいえ、私は貴女のマスターとして此处に居るのよ。離れるつもりはないわ。それにあの人はそう簡単に死ぬような人ではないから……セイバー、行って来なさい」

「アイリスフィール………すみません!!」

「ービュン!!」

セイバーはアイリスフィールに謝罪の言葉を叫ぶと共に、ブラックとランサーが激突している場所に向かって弾丸のように飛び出した。

その様子を上空で戦車に乗りながら見ていたイスカンドルは、セイバーの行動を面白そうに顔を歪め自身のマスターであるウェイバーに声を掛ける。

「見てみる坊主。セイバーの奴。あの規格外に挑むつもりみたいだぞ。面白い事になったのう」

「何が面白いだよ！！何だよあのサーヴァント！！如何してバーサーカーなのに理性が在るんだ！？」

「それは違うぞ坊主。ありや、理性さえも戦闘本能に向かった本当の規格外だわい。まさか、あのような英霊が存在しとったとわなあ」

「・・・セイバーやランサーのように勧誘しないのか？お前なら勧誘しそうだけど？」

「誘おうにもなあ、ありやあのつけから交渉の余地なさそうだなあ。アレは誰の命令も聞かん。狂戦士だ。多分ギルガメッシュと同じようにマスターの意向なんて無視して出て来たんじゃないやろ。まあ、此处で戦いを眺めているのが一番じゃろ」

そうイスカンドルはブラックを判断するが、それは完全な勘違いだった。

ブラックはしっかりとマスターである雁夜の意向を守って行動している。確かにイスカンドルの考えているようにブラックは誰かの命令など絶対に聞かない。

しかし、ブラックを召喚した雁夜は、ブラックとは主従ではなく協力者と言う関係で動いている。このおかげでブラックは雁夜の考えも理解して策を練って動いている。

その事を知らないイスカンドルは、ブラックと雁夜の関係を完全

に勘違いしながら、ブラックに飛び掛かろうとしているセイバーの動きを見始めるのだった。

「ハアアアアアアアアアア——！！！」

「ムッ!!」

「セイバー！！」

——ガキイイイ——ン！！

横合いから突然に斬り掛かって来たセイバーの一撃を、ブラックは右腕のドラモンキラーで瞬時に防御した。

それと同時にランサーはブラックから距離を取り、自身の横に立つセイバーに顔を向けると、セイバーは僅かに微笑みながらランサーに声を掛ける。

「ランサー、貴方との勝負はまだついていません。それが終わるまでは死なれては困ります。我が左腕は自身の手で取り返さないと気が済みませんので、此処は共闘しませんか？」

「ありがたい申し出だがセイバー。此処は俺一人でやらせて貰うぞ」

「何故ですか？あのサーヴァントは貴方も気に入らなかった筈です」

「ああ、確かに俺達の戦いを盗み見ていた事は正直気に入らなかつたが、今は違う。バーサーカーは、いやブラックは、一対一で戦いたい強者だ。だからこそ、此処は俺一人でやらせて……」

「何をしているランサー？あのバーサーカーのサーヴァントは規格

外の難敵だ。セイバーと共に討ち取れ』

「主！どうかブラックとの戦いは一対一でやらせて下さい！ブラックもセイバーもこのデイルムッド・オディナが誇りにかけて討ち果たします」

何処からともなく響いて来た自身のマスターの言葉に、ランサーは騎士としての誇りに満ちた顔をしながら進言した。

しかし、やはりランサーのマスターにはランサーの想いが分からないのか、否定するように無粋な言葉を告げようとする。

『ならぬ、令呪を持って命じ…』

「フン、止めだ。もはや戦う気が失せた」

「ブラック！」

ランサーのマスターが令呪を使ってランサーに命令しようとした直前に、ブラックは完全に戦意が消失した声を上げた。

その姿にランサーは驚くが、ブラックは構わずに、辺りに散乱していたギルガメッシュから奪った宝具の数々を自身の手元に呼び寄せ、魔力分解させて消失させる。

その心の内には、自身との戦いの邪魔をしたセイバーとランサーのマスターへの怒りは存在しているが、此处で戦っても、もはや自身は満たされないと理解していた。一対一の戦いに拘りを持っているのはセイバーやランサーだけではない。ブラックもまた一対一の戦いに拘る狂戦士なのだ。

一対一で戦えないのならば、この場に居る意味がブラックにはもはやなかった。

それを表すようにブラックは自身の体を霊体化させながら、セイ

バーとランサーに顔を向ける。

「セイバー、ランサー、貴様らが本当に騎士だと言うのなら、キヤスターを先ず討ち取れ。奴は貴様らの騎士道と最も反しているサーヴァントだぞ」

「何ッ！？ブラック！！それは如何言うことだ！？」

「私とランサーの騎士道に反するキヤスターのサーヴァントとは一体！？」

「さあな。自分達で考えろ」

そうブラックはセイバーとランサーに言葉を告げ終わると同時に体を完全に霊体化させて、その場から姿を消した。

後にはブラックが残した謎の言葉に困惑するセイバーとランサーだけが、破壊し尽くされた倉庫街に残されるのだった。

## 第八話 魔術師を見つける恐怖

冬木市の中でも歴史を感じさせる事が出来る遠坂邸。

しかし、今その場所は凄まじい怒りを宿したサーヴァント・ギルガメッシュによって家財類が一瞬の内に破壊され続けていた。

「ガアアアアアアッ！！あの雑種が！！」

「――ガッシャン！！」

怒声と共にギルガメッシュは歴史を感じさせるアンティークの机を一瞬の内で蹴り碎いた。

その燃え上がるような瞳に映っているのはただ一人。自身の財を奪ったばかりか、その財を使って自身に傷を負わせたブラックの姿。あの何処までも嘲りに満ちた視線など、ギルガメッシュは生前にも向けられた事は無い。更にそのブラックを討ち取れずに、逃げ出そうようにあの場を離れてしまった事にも苛立ちを持っていた。

プライドが服を着て歩いているようなギルガメッシュからすれば、今日の夜での戦いは史上最悪な戦いだった。

自身の怒りを晴らす為にはブラックの首を手に入れるしかない。何処までも追いかけて必ずブラックに王の裁きを下さねば気がすまない判断しているのだ。

「時臣！！すぐにあの黒き雑種を見つけろ！！見つけ次第に貴様も出陣だ！！」

「お待ち下さい王！！ただの有象無象の敵ではありませんか！！まだ、時は満ちてないのです！！どうか、どうかご自重下さい！！」

「うるさい！！そもそも貴様の策など、今日で完全に潰れたわ！！  
我の真名は他のマスターどもに知れ渡っているのだからな！！」

「な、何ですと！？」

時臣はギルガメツシュが告げた事実に限界まで目を開いた。

細心の注意まで払って隠していた筈のギルガメツシュの真名が他のマスター達に知れ渡ってしまった。

それは時臣が考えた策が完全に失敗したと言う事に他ならない。

何故ギルガメツシュの真名がばれたのかと時臣は考えるが、その答えをギルガメツシュは不機嫌そうに答える。

「黒き雑種だ！！奴が全てを壊したのだ！！・・・この分では我  
だけではなく、奴はお前も嘲っているだろうな。もしかしたらお前  
は奴と奴のマスターの手の平の上で踊っていた道化の可能性も存在  
しているだろう」

「なっ！？」

ギルガメツシュの言葉に時臣は絶句した。

自身の行動が全て利用されていた。それは今回の聖杯戦争に賭けている時臣からしても、絶対に赦す事は出来ない。

そして時臣はそのサーヴァントとマスターに心当たりが在った。

召喚された時から姿を隠し続けているバーサーカーとそのマスター  
！。

ギルガメツシュの話では理性が在るサーヴァントと言う話だが、  
ブラックを召喚したのが臆硯だと思っている時臣からすれば、臆硯  
が何かルール違反を起こしてイレギュラーなサーヴァントを召喚し  
た可能性が思い浮かんで来る。

「時臣・・・あの雑種は我だけではなくお前も虚仮したのだ。此処までやられて貴様は黙っているのか？」

「・・・いえ、絶対に赦せません。すぐに綺礼に命じて探させます」  
「出来るだけ早く見つける。我は気が長い方ではないからな」

そうギルガメッシュは時臣に伝えたと、少しでも怒りを晴らす為に遠坂邸に存在しているワイン倉に向かい出す。ワインで少しでも気を治めようとしているのだ。

その様子を溜め息を吐きながら見ていた時臣は、破壊し尽くされたりビングを片付けながら、言峰にブラックとそのマスターの搜索を指示するのだった。それがブラックの手の平の上での行動だと気がつかずに。

暗闇包まれた路地裏内部。

その場所に人間状態に戻ったブラックは目の前に存在している、まともな人間から見たら醜悪としかいえない生物・キャスターが使い魔として召喚した海魔の軀が感情が見えない瞳で見下ろしていた。今冬木市の至る所に目の前にいる海魔は存在し、冬木市に住んでいる“何の罪も無い無関係な子供”を浚おうとしているのだ。

その目的をブラックは偶然にも目撃した。サーチャーを街中に放った時に、キャスターの召喚の瞬間を偶然にも捉えたのだ。そして何の関係も無かった子供を苦しめて殺した瞬間をブラックと雁夜は目撃した。

ブラックは聖人君子などでは決してない。それこそ戦いを挑んで来て殺した子供も生前に存在している。だが、無関係な人間を殺す事だけはブラックは認めない。戦うべきなのは信念と覚悟を持った

者だけだと決めているブラックからすれば、キャスターとそのマスターの行動は絶対に赦せない事だった。

自身の信念の逆鱗に触れたキャスターとそのマスターは、地獄と言葉さえも足りないほどの地獄を味わわせてこの世から滅ぼす。その為に連日ブラックはキャスターの使い魔を滅ぼし続けている。

それでも救えない子供はいたが、ブラックの行動によって救われた子供も確かにいるのだ。

最もブラックは子供を助けている気は完全に無いだろう。あくまでブラックが行動しているのは、キャスターとそのマスターを滅ぼす為の行動であり、それ以外にブラックが動いている理由は存在していない。

しかも今日は何時よりも派手に動いていた。少し前まで戦っていたランサーとの戦いは確かにブラックの本能を満たしていた。途中でセイバーとランサーのマスターが横槍を入れなければ、そのまま戦っていただろう。不完全燃焼で終わった本能を晴らす為に、キャスターの海魔を八つ当たり気味に滅ぼしているのだ。

しかし、今はその感情よりも、別の感情がブラックに溢れて来ていた。

「キャスターめ。如何言うつもりだ？何故急に数を増やした？」

ブラックは今日のキャスターの海魔の数が異常である事に気がついていていた。

今までは最低でも二十前後の数しかキャスターは街中に海魔を放っていないかった筈なのだが、今日は短時間で三十近く目にしている。宝具に特化している今回のキャスターからすれば可笑しくは無いが、如何にもブラックは違和感が拭えなかった。

まるで何かを急ぐようにキャスターは子供の誘拐を行い続けている。

その理由がブラックには分からなかったが、一つの可能性が頭の

中に浮かんで来る。

（キャスターが使い魔どもの数を増やしたのは、今日の戦いの後から・・・となれば奴の知り合いの英霊でも呼び出されたのか？・・・ランサーではない。奴がこの様な行いをする奴と知り合いの筈は無いからな・・・ライダーも恐らく無いだろう。ギルガメッシュは論外・・・そうなれば自ずと相手は限られる。セイバーだ。恐らくキャスターはセイバーを発見した事で動きを活発化させたのだろう。そうなれば奴は必ずセイバーの下に現れるな）

そうブラックは漸くキャスターが現れる場所に辿り着き、歓喜に満ちた笑みを浮かべながら、ロングコートの中に手を入れ、セイバーを監視しているサーチャーの映像を映し出す。

「ふん、道路を車で走って移動か・・・良いぞ。奴とそのマスターが走っている場所の近くに設置した転送用のマーカーが存在している。それを使って後を追うとするか」

ブラックはそう呟くと、自身の気配を遮断して近くのビルの中に入っていく。

セイバーの前に現れるであろう自身の獲物を刈り取る為に。

教会地下深く。

その場所でアサシン達を使って情報を集めていた言峰は、アサシン達を全て総動員してブラックの行方を追っていた。しかし、如何やらブラックにも気配遮断のスキルが備わってるのか、捜査は難航していた。

「これは思ったよりもキツイ仕事のようだ。バーサーカーで在りながら気配遮断まで持っているとは・・・更に用心深いときている・・・師の命令とは言え、これは思ったよりも難航しそうだ。だが、それでも必ず見つけてみせるぞ。同類よ」

言峰は先のブラックの戦いで、ブラックが何を求めているのかを理解していた。

戦いこそだけをブラックは望んでいる。となれば他のサーヴァントを監視していればブラックを発見出来るだろうが、どのサーヴァントにブラックが現れるかまでは流石に言峰でも分からなかった。

一番に可能性が高いのはランサーのサーヴァントの下であろうが、どうもそれは違うと言峰は冷静に考える。

そもそもブラックが戦いだけを望んでいるのならば、何故ギルガメッシュをあそこまで執拗に嘲ったのか。戦いだけを望んでいるのならば、あそこまで侮辱する必要は無い。

「・・・今一度調べてみる必要が出たかもしれない。本当に奴のマスターが間桐臓現なのかも・・・最も知った所で師には教えんがな。アレは私の求める存在なのだから」

そう言峰は呟くと、再びアサシンから送られて来る情報に目を向け始める。

自身の行おうとしている行動が、師である時臣への裏切りだと言峰は分かっている。だが、それでもブラックだけは誰にも渡す気はなかった。ずっと世界とのズレを感じながらも出会えなかった同類。それが漸く見つかった事によって、言峰の顔には僅かに笑みに歪んでいた。

ブラックと直接会った時に自身が求めているかもしれないモノが得られるかもしれないと言う歓喜によって、歪んでいたのだった。

深夜に近い時間帯。

その時間帯を一台の黒塗りに車・メルセデス・ベンツ300SLクーペが国道を百キロ以上の速さで走っていた。

そのモンスターマシーンを運転している女性は先ほどまで港場に居たアイリスフィール。そしてその助手席に乗っているのはセイバ―だった。二人とも言葉も出す事無く、先ほどの戦闘で現れた規格外のバーサーカー、ブラックについてを考えていた。

「……セイバー、あの人から連絡が在って、やっぱりあの人を気絶させたのはバーサーカーで間違いないらしいわ。それに不可思議な術も使っみたいね」

「そうですね……ですが、本当に彼はバーサーカーなのでしょうか？バーサーカーは狂化属性が付加される筈ですけど」

「ええ、あの人もその事には驚いていたわ……。でも、問題は其処ではなく他のサーヴァントとマスターに貴女の本当のマスターがばれてしまった事よ……。これで此方の優位に立てる材料が消えたわ」

「……切嗣は何と連絡して来ましたか？」

「一応は今までどおり分かれて行動するみたいだけど、前よりも細心の注意を払って行動するから、連絡も拠点のインツベルン城だけではないそうよ」

「そうですね……」

それっきりセイバーとアイリスフィールは言葉を発する事無く、真っ直ぐ自分達の拠点を目指し始める。

しかし、その途中でセイバーがいきなり顔を険しくし、隣にいるアイリスフィールに硬い声を掛ける。

「アイリスフィール、止めて下さい」

「えっ？・・・ええ」

セイバーの言葉の意味はアイリスフィールには分からなかったが、慌てて車を止めて前を見てみると、メルセデスのライトに映る影が存在していた。

その影を見たセイバーは、アイリスフィールにも車から降りるように促しながら、すぐさま車を降りて影の方に顔を向けてみると、奇抜な黒いローブを着た肌の色は不健康に白く、両の目が飛び出すかと思うように見開かれてギョロギョロしている優男が存在していた。

その男を目にした瞬間に、セイバーは即座にサーヴァントだと気がつき戦闘態勢を取ろうとするが、目の前にいる男性はセイバーの気配など気がついていないのか、恍惚とした笑みをセイバーに向けてながら頭を恭しく下げる。

「お迎えにあがりました聖処女<sup>ラ・ビュセル</sup>よ」

「なっ!?!」

突然の男性の行動にセイバーは面食らった。

セイバーの記憶の限り目の前に居るような風体の男など見た事は無い。

その上、自身を聖処女などと呼ぶこと事態が可笑しいのだ。セイ

バーは確かに女性だが、その正体は誰にも知られずに生涯を終えた。それなのに何故自身を聖処女などと呼ぶのかと困惑した顔をしていると、横で話を聞いていたアイリスフィールが疑問に満ちた表情をしながら質問する。

「セイバー、この人と知り合いなの？」

「いえ、見覚えはありませんが」

「オオオオーツ！！御無体な！この顔をお忘れになったと仰せですか！？」

セイバーの言葉を聞いた男性は、一瞬にして恍惚の笑みから絶望したように顔色を変えて叫んだ。

それでもセイバーは目の前の男性が誰なのか全く分からずに、疑問に満ちた顔をしながら男性に質問する。

「知るも何も貴公とは初対面だ・・・何を勘違いしているのか知らぬが、人違いではないのか？」

「私です！貴女の忠実なる永遠の僕、ジル・ド・レエにてございます！あなたの復活だけを祈願し、今一度貴女とめぐり合う奇跡だけを待ち望み、こうして時の果てまでも馳せ参じてきたのですぞジャンヌ！」

「ジル・ド・レエッ！！」

突然に頭を掻きながら自身の真名を叫んだ男性・ジル・ド・レエにセイバーは叫んだ。

聖杯戦争に置いて真名を自ら名乗る者など本来ならば居ない筈。

例外として先ほど名乗ったイスカンダルと、自身が認めた相手に名乗る決めているブラックぐらいだ。

しかし、イスカンダルともブラックとも目の前のジル・ド・レエと違った。

「私は貴殿の名を知らぬし、そのジャンヌなどと言う名前にも心当たりが無い。」

「そんな！！自身の生前のお姿をお忘れなのですか！？」

話になっていないとセイバーとアイリスフィールは思った。

目の前のジル・ド・レエは完全な狂人。自身の考えている事が絶対に正しいと思っているのだろう。

それならば理解出来るが、目の前にいるジル・ド・レエは全くセイバーの言葉を信じていないのか、更にセイバーに語りかけようとする。

しかし、その前にこのまま話をしていても埒があかないと思ったセイバーが、ジル・ド・レエに止めを刺すように自身の正体を告げる。

「貴公が自ら名乗りをあげた以上は、私もまた騎士の礼に則って真名を告げよう。我が名はアルトリア。生前はアーサー・ペンドラゴンと呼ばれていたブリテンの王だ」

「オオオオツ！！オオオオオオオーーーーッ！！！！」

セイバーの断言を聞いたジル・ド・レエは、悲痛さと絶望に満ちた慟哭を響かせ、地面に自身の手の平から血が流れても構わずに拳をぶつけ続ける。

「何と痛ましい！何と嘆かわしい！記憶を失うのみならず、そこま  
で錯乱してしまうとは！！・・・おのれ・・・おのれえッ！我が麗  
しの乙女に、神は何処まで残酷な仕打ちを！！」

「貴公は一体何を言っている？そもそも私は…」

「ジャンヌ！貴女が認められないのも無理は無い。かつて誰よりも  
激しく、誰よりも敬虔に神を信じていた貴女だ！！それが神に見捨  
てられ、何の加護も救済も無いまま魔女として処刑されたのだ！！  
己を見失うのも無理は無い！！」

「――ゾクッ！！」

セイバーとアイリスフィールに寒気が走った。

目の前にいるジル・ド・レエは全く会話をしていない。ただ自身  
の望む答えを求めている狂人。

これならば目の前にいるジル・ド・レエの方がバーサーカーだと  
言われても納得してしまうだろう。

そして同時に何故セイバーはブラックがキャスターのサーヴァン  
トは、自身とランサーの騎士道に反するサーヴァントだと告げたの  
か理解出来た。

ジル・ド・レエの生前の行いは確かに自身やランサーが認められ  
ない行為。

この場で討ち取らねば、必ず最悪な事態が起きるとセイバーは未  
来予知に近い直感が告げている。

それを理解したセイバーは、不可視の剣を右手に出現させ、ジル・  
ド・レエが新たに言葉を出す前に、目の前のアスファルトを切り裂  
く。

「――ザン！！」

「ッ!!」

「立て、平伏している者を斬るのは主義に反する!! 貴様の相手はこのセイバーが今この場でしてくれる!!」

「……もはや言葉も届かないのですか? ……ジャ…」

「貴様の言葉に答える者などこの世の何処にもいないだろうな」

『ッ!!!!』

突然に響いた第三者の声にその場にいる全員が目を見開き、辺りを見回そうとした瞬間、平伏していたジル・ド・レエの腕に二本の剣が凄まじい速さで向かい、ジル・ド・レエの両腕を貫く。

「――グサッ!!!!」

「ギャアアアアアアアアアア――!!!!!!」

「こ、これは!?! まさか、ギルガメッシュ!!」

セイバーはジル・ド・レエへの攻撃手段から、今の攻撃はギルガメッシュの攻撃だと思い、慌ててアイリスフィールと共にその場から後退した。

しかし、セイバーの考えは間違っていると言うように、ゆっくりとそれはジル・ド・レエの前に姿を現し、剣で両手を地面に縫い付けられているジル・ド・レエの頭に足を躊躇いも無く載せる。

「――ガシッ!!」

「探したぞ。貴様の下らん行動も今日までだ」

「ガッ！！き、貴様は！！貴様が何故此处にいる！？」

自身の頭の上に足を載せた者に気がついたジル・ド・レエは、両手に突き刺さっている剣の痛みさえも忘れたように叫んだ。

ジル・ド・レエには目の前の相手に見覚えが在るのだ。自身とマスターと呼んでくれた者の楽しみを悉く奪ってくれた赦せない存在。そしてセイバーもアイリスフィールも、ジル・ド・レエの頭に足を載せている者の背に見覚えが在った。

先ほどまで港場で猛威を振るったイレギュラーなバーサーカー・クラスのサーヴァント・ブラックが静かに漸く出会えた自身の獲物の姿に、歓喜に満ち溢れた笑みを浮かべていたのだった。

## 第九話 真の恐怖を与える恐怖

セイバーとアイリスフィールは目の前に立っている黒いロングコートと全身を黒で染めた服で覆っているブラックの背に言葉も出ず事が出来なかった。

今の今までブラックの気配をセイバーは全く感じる事が出来なかった。

これほど近くに、しかもジル・ド・レエの両手を剣で地面に縫い付ける瞬間にまでブラックは完全にその存在を隠し続けていたのだ。それから考えられる事は、ブラックはアサシンのサーヴァントと同様に【気配遮断】のスキルを持つていると言う事になる。

その事実に行き着いた瞬間に、セイバーは目の前のブラックは異常過ぎると心の底から思った。

バーサーカーのクラスで呼ばれていながら理性が存在し、不可思議な移動手段さえも持ち、港で見せた圧倒的な力を発揮した姿。

相手の宝具の所有権を一方的に奪える能力。拳句の果てには【気配遮断】のスキルまでブラックは持っている。

セイバーとアイリスフィールは本気で得体の知れないブラックを恐ろしいと思うが、当の本人であるブラックは構わずに、右手にギルガメッシュから奪った戦斧を出現させ、躊躇いも無く動く事が出来ないジル・ド・レエの両足を斬り落とす。

——ドオオン——！

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア——！！！！！」

「喚くな。耳障りだ」

——ドオオン——！！

「グベッ!!」

「ウツ」

両足を失って叫んだジル・ド・レエに対してブラックがジル・ド・レエの頭に載せていた足を地面に向かって打ち下ろし、ジル・ド・レエは叫び声を上げる事も無く地面に顔を叩きつけられた。

その様子と斬り落とされた両足から噴出する大量の血を目にしたアイリスフィールは思わず手で口を押さえ、セイバーも心なしか顔を青くさせるが、ブラックは全く気にせず今度はジル・ド・レエの右手を肩の付け根から斬り落とす。

「次は右腕だ」

「――ブザン!!」

「――ブシュウウウウー!!!!」

「アアアアアアアアア――!!!!……おのれ!!おのれ!!神の使徒め!!幾度と無く私と龍之介の邪魔をしたばかりか!!ジャン…」

「うるさい。次は左腕だ。最もその前に下らん物を貴様から奪ってやる」

ブラックはそう呟くと、醜く歪んで、血走った瞳をしながら喚いているキャスターのローブの中に手を入れる。

その様子を目撃したジル・ド・レエはブラックが何をしようとしているのかに気がつき、気が狂ったように暴れようとするが、既に

無事な腕は左腕だけの状態の上に、その左腕も地面に縫い付けられたままだったので喚く事しか出来なかった。

そしてブラックは喚いているジル・ド・レエの顎に躊躇いも無く拳を叩き込むと同時に、ローブの中から禍々しい雰囲気を放っている書物 - ジル・ド・レエの宝具 - 『螺旋城教本』を取り出す。

セイバーはブラックが取り出した書物こそがジル・ド・レエの宝具だと瞬時に気がつき、何故ブラックがその事を知っているのかと疑問に満ち溢れた視線をブラックの背に向けるが、ブラックは構わずに手に持った『ブレーティーズ・スベルブック螺湮城教本』を掲げながらジル・ド・レエに声を掛ける。

「これでお前は完全に何も出来なくなった。これを使う為には手で持たないと無理のようだから」

「オ、ノ、レ、！！！！カエセ！！！！カエセ！！！！」

もはや完全に自身の状態も分かっていないのかジル・ド・レエは怨念さえも漂うような叫びを上げ始めるが、ブラックは全く気にせず、ジル・ド・レエの首を掴み上げる。

――ガシッ――！！

――ギシッ――！！

「ガッ！ガギヤアアアアアアアー！！！」

ブラックに首を締め上げられながら上に掲げられたジル・ド・レエは、地面に縫い付けられている唯一残った左腕から走る激痛と呼吸困難にもはや訳が分からない悲鳴を上げ始める。

しかし、ブラックはそれでは足りないと言う様に、右手に持って

ブラーティーズ・スベルブック  
いた『螺湮城教本』を地面に落とし、ジル・ド・レエの右手を地面に縫い付ける為に地面に突き刺していた剣を抜き取り、今度は『螺湮城教本』に突き刺す。

「ーードスッ!!」

「俺は貴様の行動に久々に本気で苛立っている。だから……地獄を味わって死ね!!」

「ーーグギッ!!」

「ガッ!!」

ブラックは叫びと同時にジル・ド・レエの首を握っていた左腕の力を込めて、何の躊躇いもなく氣道を潰した。それと同時にブラックは右腕に今出せる全力の力を込めて、ジル・ド・レエの胴体に拳を迷い無く叩きつける。

「ーードグオオン!!」

「ゴベッ!!」

「下らん事をしてくれたな!!」

「ーーグシャッ!!」

「ウウッ……」

ブラックは叫ぶと共にジル・ド・レエの顔面に連続で拳を叩きつけ、ジル・ド・レエの顔面を完全に潰した。

それと同時にジル・ド・レエの顔だった部分から流れ出る血など目撃したアイリスフィールは完全に気分が悪そうに口元を押さえて吐きそうになり、セイバーは未だに拳をジル・ド・レエに叩き込んでいるブラックに向かって叫ぶ。

「バーサーカー！！幾らなんでもやりすぎです！！相手はもう意識が無いのです！それ以上は戦いではなく……」

「拷問だと言いたいのだろうか？そうだ、俺はコイツに苦しみを与えたくて仕方が無いんだ……。だが、確かにお前の言うとおりだな」

「……ドサツ！！」

ブラックは言葉と共にジル・ド・レエの首を掴んでいた左手を離し、ジル・ド・レエはもはや生きているのが不思議なほどの傷を負いながら地面に倒れ伏した。

その様子にセイバーとアイリスフィールは安堵の息を吐くが、彼女達は気がついていなかった。

完全に気絶していると思われたジル・ド・レエの意識は僅かに残っていたのだ。

ブラックの暴虐によってもはや完全に虫の息同然だったが、それでも狂った思考は生きており、何とか動く左腕を動かし、少し先で剣に突き刺さって地面に縫い付けられている『螺湮城教本』に触れようとする。

触れさえすれば自身の宝具である『螺湮城教本』を発動させ、大量に地面に舞い散っている自身の血を使って海魔を呼び出す事が出来る。

それさえ行えば逃げる事も、目の前にいるブラックに報復を行う事も出来る。

自身にはまだ希望が残されているとジル・ド・レエは感じながら、

何とか『螺湮城教本』に触れそうになった直前、ジル・ド・レエの頭上に剣、槍、戦斧などの宝具が三十近く出現し、ジル・ド・レエの体を貫いて行く。

ーードスドスドスドスドスツ!!!!!!!!!!

「イギヤアアアアアアアアアッ!!!!!!」

「最初に貴様が殺した子供の時にほざいていたな。『真の意味での恐怖とは、静的な状態ではなく変化の動態。希望が絶望に切り替わる、その瞬間の事を言う』事だと。自分でも味わえただろう？真の恐怖を」

「ウア……ウア……アア……」

「フン、死ね」

ーーグシャツ!!

宝具の数々に刺し貫かれながらも生きていたジル・ド・レエの頭部をブラックは何の躊躇いもなく踏み潰し、辺りに脳漿や血、眼球などが飛び散った。

しかし、それはすぐさま何処へとも無く消え去り、同時に『螺湮城教本』も消えて行き、後にはジル・ド・レエの居た場所に存在する大量の宝具だけが残された。

それをブラックは確認すると宝具類を消失させ、ゆっくりと青ざめた顔をしているアイリスフィールと、険しい視線を向けているセイバーに顔を向ける。

「フン、これに残るサーヴァントは俺を含めて六体だな。礼を言う

ぞセイバー。貴様の存在のおかげで今まで穴蔵に潜んでいたキャスターが出て来たのだからだな」

「・・・バーサーカー・・・何故あそこまで苦しめて殺す必要が在ったのです！貴方ならば一撃殺せた筈なのに！？」

「何も知らないと言う事が・・・少しは世間の情報を目にしておけ」

「如何意味ですか！？」

「此処数日子供が何人も行方不明になる事件が多発していた。やっていたのは此処にいたキャスターとそのマスターだ」

『ッ！！！』

「それだけで済めば良かった。奴らは浚った子供達に恐怖と言う恐怖を味合わせて道具にしていた。生きながらの道具にな」

「そ、そんな！？」

「ウツ！」

ブラックが告げた事実実に実の子供が居るアイリスフィールは悲鳴を上げ、セイバーも思わず顔を背けた。

ブラックの言う生きながらの道具と言うのは完全に子供達を玩具にして遊んでいたと言う事だろう。

それが事実だとすれば、既に何人もの子供がジル・ド・レエとそのマスターの暴挙によって犠牲になったと言う事に他ならない。

そしてフツとセイバーは気がついた。此処数日目の前のブラック

がキャスターの使い魔と交戦し続けてたのは、もしや子供達を海魔から護る為に行動では無かったのか。

「バーサーカー？ 貴方はキャスターから子供達を護っていたのですか！？」

「護る？ 何を貴様は言っている？ 俺が奴らを追っていたのは気に入らんからだ。 たまたまキャスターを追う過程で海魔と交戦しただけだ」

そうブラックはセイバーの質問に素っ気無く答えると、ゆっくりと自身の体を霊体化させようとするが、その前にセイバーに真剣な瞳を向ける。

「セイバー。 貴様はもし子供がキャスターに殺われた時に如何する？」

「もちろん助けます！」

「フン、無理だな。 貴様のマスターは絶対に認めないだろう」

「なっ！？」

「忠告して置くセイバー。 貴様のマスターは貴様を利用しているだけだ。 さっさと手を切って別のマスターを探すんだな。 お前とアレは決定的にまで相容れない部分が存在しているからな」

そうブラックはセイバーに対して謎かけのような言葉を告げると、自身の体を霊体化させてその場を去って行った。

そして後には困惑した顔を見合わせるセイバーとアイリスフィー

ルだけが残されるのだった。

冬木市に存在するとある用水路の中。

その場所をジル・ド・レエとその召喚主である雨生龍之介は根城にしていた。

ジル・ド・レエの主である雨生龍之介は完全な異常者である。しかも殺人を平然と行い人を解体する事に喜びを見出し、人を苦しませることに喜びを見出すタイプの異常者。

本来龍之介は魔術師ではない。だが、ジル・ド・レエを召喚する時に魔術的な儀式を行って殺人をした為に、彼の中に眠っていた魔術回路が目覚めてしまった。

しかも召喚したサーヴァントも歴史に名を残すほどの大量快楽殺人者だったジル・ド・レエだった事も不味かった。

彼らは完全に意気投合して子供を連れ遊びの道具にしようとしていた。だが、それは突然に現れたブラックによって阻まれてしまった。

それでも何人かの子供を浚う事に成功していたが、それらの子供は全て海魔を召喚する為に使用してしまい、龍之介にとってはちょっと不満に思っていた。

「ああ、ちくしょう。何だよ？あの黒い奴。アイツさえいなければ最高の芸術が作れていたのよ・・・それに旦那も一体何処に行っただんたろう？もうかなり時間が経っているぜ？」

龍之介はそうこの場に戻ってこないジル・ド・レエの姿に疑問の声を上げた。

ブラックの予想通り、港場での戦いをジル・ド・レエは遠見の水晶と言う魔術道具を使って見ていたのだ。そしてセイバーの姿を見

たジル・ド・レエは狂喜乱舞し、ブラックに狙われている事も忘れて外に飛び出してしまった。

その結果ブラックにこれ以上に無いほどに恐怖を与えられてジル・ド・レエは死んだのだが、その事と聖杯戦争についてよく知らない龍之介はジル・ド・レエが帰って来るのを待ち続けていると、用水路の入り口の方から足音が響き始める。

ーコツ、コツ、コツ、コツツ！

「オッ！漸く旦那が帰って来たんだな！獲物を連れて帰って来られると嬉しいんだけどな！」

龍之介はそう僅かに喜びを含んだ声を上げながら、足音が響いて来る方に目を向けてみる。

しかし、龍之介の前に現れたのは待ち望んでいたジル・ド・レエではなく、頭のフードを被って死人のような容貌をして顔の左半分が引き攣り、左目も白濁している男・ブラックのマスターである間桐雁夜がゆつくりと龍之介の前に姿を現した。

「あん？アンタ誰？」

「君の相棒の青髭あおひげの知り合いだ」

「オッ！！て事は俺達と同じかよ！！なあ、だったらさ！協力してくれよ！実は黒い奴が俺達の邪魔をして来るんだよ！旦那でも梃子摺る相手でさ」

「構わないが、その前に質問だ？連れ去った子供達は如何しているんだ？」

「そいつ等は旦那の使っている生物どもに与えちまったよ。だからいないぜ」

「そうか……セツト・アップ」

「ん？何かい…」

「――ザン！！」

「へっ？」

突然に何かを呟いた雁夜に龍之介は質問しようとしたが、その声は急に真っ暗になった視界によって途絶えた。

そして徐々に目から痛みが走り始めると、龍之介は錯乱したように自身の顔の前に手を伸ばしてみると、目の在った部分から何かが流れている事に気がつく。

「――又チャツ！！」

「……何だよコレ？何が起きてんだよ！！おい！！何で俺の目が見えないんだよ！？」

「俺は別にお前に恨みは無い。だが、お前が手を出そうとした子供達の中に凜ちゃんの友達が居たんだ。あの子達に悲しみを与える全てを俺は赦さない」

「凜ちゃん？誰だよそれ！？それよりも何で目が…」

「安心しろ。俺はお前を殺す気は無い。色々とお前を使って試す予定だから……だから、先ずは最初にお前で試させて貰う。」



## 第十話 更なる策を練る恐怖

聖堂教会地下。

その場所でセイバーとアイリスフィールの監視をしていたアサシンから送られて来た情報を僅かに高揚感を持ちながら見ていた綺礼は、ブラックの策に心の底から感心していた。

（恐ろしき策だ。今回同類が投げ方セイバーに対する言葉で、何れはセイバーと本当のマスターである衛宮切嗣は本当に意味で敵対しあうであろうな）

既に綺礼はブラックとセイバー、アイリスフィールとの会話からセイバーの本当にマスターが誰なのかを分かっていた。

ブラックを見つける前までは是非でも対峙を望んでいた人物・衛宮切嗣こそが、セイバーの本当のマスターと言う事を。

既に切嗣には余り興味が綺礼は無くなっているが、それでも少し前まで求めていた切嗣の情報はかなり持っている。

それ故にブラックが今回セイバー達の心の中に蒔いた疑惑の種は、何れは必ずセイバーと切嗣の関係を完全に打ち崩す鉄の茨に成長すると綺礼は確信していた。

切嗣の戦闘方法とセイバーの騎士としての誇りは絶対に相容れない。

片や目的の為ならば犠牲さえも容認する機械のような戦闘者。もう片方は罪無き者達に犠牲を出さずに、自身の胸に宿る誇りに誓って戦う騎士。

普通に考えれば絶対に相容れない関係。それがこの地に来るまで破綻しなかったのは、ひとえに切嗣がセイバーと余り会話をせず、アイリスフィールが緩衝材になっていた事に他ならない。

しかし、今回のブラックの言葉で確実にセイバーの中に切嗣に対

する不審が小さいながらも生まれる。

この不安を消す為には切嗣自身がセイバーと共に行動する以外に無いだろうが、切嗣はセイバーとは何が在っても共に行動せずに自身の考える策で動き続けるだろう。

（それによつてセイバーの疑惑は確信に変わり、セイバーと衛宮切嗣は連携も取る事が出来ない。或いはセイバー自身が衛宮切嗣を見限るか・・・フッフッフ、恐ろし過ぎて笑う事しか出来ない。何せ不審の種を育てるのは衛宮切嗣とセイバー自身。もはや同類が何もする事無く二人は対立する。僅かながらも互いに話し合えば別だろうが、もはや二人の関係は破綻する以外に道は在るまい。やはり此度の聖杯戦争を支配しているのは師でも衛宮切嗣でもない。あの黒き同類なのだろう）

綺礼は既に切嗣も時臣もブラックの手の内にと予想していた。そしてその中には自身さえも入っている事にも気がついている。入念に準備を行い続けていて、万全の体勢で始まった聖杯戦争は、突如として現れたイレギュラーによつて支配された。

綺礼自身としては既に時臣には勝ち目は限りなく低いと思つていゝる。例えばギルガメッシュが全ての力を持つてブラックに挑んでも、僅かにしか手を見せてないブラックに勝てる可能性は低い。

更に他のマスター達もブラックとギルガメッシュには互いに衝突して貰いたい思つてゐるだろう。

片方は宝具の所有権を奪える能力を持った規格外の狂戦士。

もう一人は最古の王にして宝具の原典を所持する最強の名を冠するに相応しい英雄王。

常識的に考えればこの二体を同時に相手しようと思つ者はいないだろう。両方が戦つて、生き残つて疲弊している所を襲つた方が利口だと考えてゐるマスター達が居る筈だ。

つまり、今回ブラックがギルガメッシュの真名をばらしたのは、

最終的に自身とギルガメッシュとの戦いが邪魔されない為だった。

（プライドの高いギルガメッシュは何としても、同類を滅ぼそうとするだろう。そしてそれを他のマスター達は邪魔をせずに静観するだろう。正しくギルガメッシュを倒す為の策だ。当事者の者達は気がつけず、第三者である私でも深く考えて出した答えだから、傍観者達は気がつかない可能性が高い。この様子では私も既に監視されていると推測していいな。それを示すように港場に居たアサシンは殺されてしまった……何としても裏をかいて接触せねば）

現在の状況ではブラックと会う事は限りなく難しいと綺礼は思っていた。

例え会ったとしても、同類と気がつかずにブラックは綺礼に攻撃を加える可能性が在るだろう。それでは駄目なのだ。

それでは自身が求める答えが得られない。ブラックと相對する為にはブラックに及ばないながらも強大な力を持ったサーヴァントが必要だと綺礼は考える。

（アサシンでは駄目だ。確かに情報収集には充分な能力だが、同類には一瞬で殺されるだろう。ギルガメッシュはもはや無理だ。恐らく私がギルガメッシュを手に入れようとすれば邪魔をして来る……・忠義心が強すぎるランサーは難しい。ライダーは論外……となれば手に入れるのはセイバーしか在るまい。幸いにも同類の策でセイバーと衛宮切嗣の繋がりは破綻しかけている。それを利用すればいい。フッフッフ、これは面白い。同類が全てを支配するか、それとも私が同類の隙を衝き、セイバーをこの手にするか！勝負だ！この言峰綺礼の全身全霊を賭けて同類の策を越え、互いに一対一になった時に対峙しようぞ！）

そう綺礼は内心で叫びを上げながら、アサシン達を時臣に気づか

れないように自身の赴くままに動かし始める。

今此処に今までの人生に何の情熱も感じなかった者が本格的に動き出した。

初めて自身の胸に宿った情熱を支えにして、自身の同類で在る存在に挑み出す。

もしこの場に師である時臣や、実の父親である言峰璃正が今の言峰綺礼の顔を見れば目を見開く事になるだろう。言峰綺礼の顔はこれから始めるブラックとの戦いに、心の底から楽しそうに歪んでいたのだから。

ブラック達の拠点の民家。

既に桜は寝静まり、雁夜とルインはキャスターのマスターを捕らえに向かっている為に拠点には居らず、一足先に戻っていたブラックだけがリビングで何かの資料を読んでいた。

「……やはりか。この聖杯戦争は聖杯を降臨させる為に儀式などではなく、俺達英霊を代償にして聖杯を作り出す魔術の儀式だったか」

ブラックが読んでいるのは間桐家から出る時に持ち出した大量の資料だった。

そもそもブラックとルインは、聖杯戦争に呼び出された時から可笑しい事実が気づいていた。

“万能な器と呼ばれる聖杯を降臨させる為に、何故殺し合いを行わなければいけないのか”。

ブラックとルインは聖杯になど全く興味は無いが、それでも自分

達が何故呼び出されたのか疑問ぐらいは浮かぶ。だからこそ、間桐家を破壊する前に大量の資料を持ち出し、こうしてブラックは聖杯戦争について調べ続けていた。

その結果、冬木市で行われている聖杯戦争の正体は呼び出された英霊を生贄に捧げて聖杯を作り上げる魔術儀式で在る事実に辿り着いたのだ。

「倒された英霊は聖杯の器の中に取り込まれるか・・・この資料では聖杯の器を作り上げるのはセイバーを呼び出した男がいるアインツベルンだとされているが、監視していてそんな物を一度も見た事は無い。考えられるとすれば、やはりあの時にあの女に起きた現象に答えは在るのか？」

キャスターをブラックが倒した瞬間、ブラックは僅かにアイリスファイルの気配がぶれるの感じていた。

それは僅かに在った為にブラックは気のせいだと思っていたが、こうして資料を読んでみればアイリスファイルに起きた現象に答えが在る気がしてならなかった。

それにブラックは他にも気になっている事が資料の中に存在していた。その資料は間桐臓硯の書斎からルインが発見した資料。

事細かに何かの状況が書かれているのだが、流石にその意味までは魔術には門外漢に等しいブラックとルインには読み解く事は出来なかった。だが、在る一文だけが如何しても気になっていた。

「『大聖杯に異常が在り』・・・雁夜に聞いても全く聞き覚えが無いらしい・・・だが、何か嫌な予感がする。俺の本能がコレを見逃すなど叫んでいる」

ブラックは自身に右手に持っている資料を見ながら険しい声を出した。

ただの間違いで在ればブラックとしては良いが、ブラックの本能は異常に警戒信号を挙げ続けている。生前からこの様に本能が騒ぐ時には碌な事が起きた事は無い。

第一自身とルインと言う世界にとって最も自身を危険性に晒してしまう存在が現れたこと事態、既に聖杯に異常が起きている事を示していると言う事に他ならない。

「何としても大聖杯について情報を集めねばならんな。となれば狙うのはアイリスフィールとか言う女だな。アレが恐らく一番聖杯について詳しいだろう。俺の魔力確保の序に狙うとするか」

そうブラックは今後の方針を決めると持っていた資料をテーブルの上に置き、他のマスターやサーヴァントの様子を確認しようとする、部屋の入り口の方から足音が響き、雁夜が部屋の中に入ってくる。

「ブラック、終わったぞ。キャスターのマスターはルインフォースが最初の拠点に運んで、“使えるか如何かを調べている”」

「フツ、それは良い知らせ。となれば後は俺に魔力を送る方法を手に入れるだけだな」

「ああ、それさえ見つければ、俺達の弱点は消える。時臣との決戦も近い」

雁夜はそう言いながらブラックの前に座り、テーブルに置かれている資料を見ながらブラックに質問する。

「それで？何か分かったのか？」

「色々この戦争の裏が分かった。まあ、説明は後回しだ。それよりも中々に良い顔になって来た。覚悟と戦意が向上しているぞ」

「それは嬉しい言葉だ。俺は桜ちゃんと凜ちゃん、そして葵さんの幸せを壊す奴らを全て壊す。時臣は殺しはしないが、絶望には堕ちて貰う」

「クククククツ、ますます良いぞ。他の者など気にせず本当に大切な何かの為ならば犠牲にする覚悟は俺とルインには好ましい。しかし、お前も変わった奴だ。如何在っても葵と言う女はお前の想いには答えない。それでも本当にやれるのか？」

「やる。俺はその為に捨てた家に戻って、命を削ってまで魔術師に成ったんだ。この身は例え異世界に技術でも治療が不可能なほどに壊れている。なら、俺は最後まであの子達の笑顔の為に動く。もし聖杯があの子達の笑顔を曇らせる物でしかないのなら、躊躇いも無く俺は聖杯を壊すように命じる」

「万能な器で自分が助かる可能性を捨ててまで望むものなのか？恐らくお前はこの戦いで生き残っても長くは持たない。俺達の世界の技術を使ってもせいぜい三ヶ月の延命が限度だろうな」

「充分だ。俺は最後まであの子達の為に動く。それが桜ちゃんをあつちの地獄に送る元凶の一端になった俺の償いであり、桜ちゃんの一年を否定した俺の贖罪だ。俺が欲しているのはあの子達の心からの笑顔だけだ。それ以外に俺には必要ない」

「……フン、好きにしる。俺もルインもお前の進む道を止めも否定もしない。覚悟を既に決めたお前に何を言っても無駄だからな。さて、ルインが戻り次第色々話を進めるぞ。次の策は既に決

まっている。更なるイレギュラーの出現。“八番目のサーヴァントで全てのマスター達を混乱に貶める”。そしてその第一手の相手はこいつらだ」

――バンツ！！

ブラックは言葉と共にテーブルの上に置かれていた二枚の写真を手で叩き、雁夜の方に写真を浮かび上がらせ、雁夜は自身の前でヒラヒラと落ちて来る写真を右手で取りながら見てみると、神経質そうな容貌をして髪をオールバックに纏め、コートを纏った鼻もちならない高慢な態度している魔術師・ランサーのマスター・ケイネス・エルメロイ・アーチボルトと、赤い髪に氷の様な印象を持ち、品位と理知を感じさせる怜悧な容貌を持った美貌の白人女性・ソラウ・ヌアザレ・ソファアリが映し出されていた。

「そいつ等がこそが俺達の望む裏技を見つけた奴らだ。ランサーには悪いが、俺達の策の為に利用させて貰う。雁夜にも今回は動いて貰うぞ」

「分かった。俺も実戦経験は積みたいからな」

「それともう一つ、教会の地下に隠れている言峰綺礼と言う男には気をつける。例え接触して来ても絶対に話をするな。奴はこの聖杯戦争で最も警戒すべき対象だ。時臣やセイバーの本当のマスター以上の脅威だと考えて動け」

「ああ……」

雁夜はブラックの真剣な言葉に僅かに戸惑いながら頷いた。

雁夜には標的である時臣以上に此処までブラックが綺礼を警戒し

てるのか分からなかった。

確かに時臣の弟子であり、同盟関係に在る綺礼は警戒すべき対象なのだろうが、ブラックが此処まで警戒する相手とは思えなかったのだ。

しかし、ブラックは綺礼を一目見た瞬間に、他のマスター達以上に警戒すべき対象だと捉えていた。

ブラックも雁夜も知らない事だが衛宮切嗣も綺礼の過去の経歴から綺礼を危険視している。だが、ブラックは違う。綺礼の過去など知らずともブラックは本能的に綺礼同様に理解していた。

アレは同類だ。自身と同じように世界に否定されている存在。

ブラック、そしてルインはその事を直感的に理解し、綺礼に対してはかなりの監視を施している。

しかし、それでも安心する事は全く出来ない。何れは何かしらの方法を使って自分達の目の前に現れると、ブラックは未来予知に近く確信していた。

寧ろ最初に教会に閉じこもってくれていた事は運が良かった。もし居場所も分からずにアサシン達を操っていたら、ブラックとルインは綺礼の存在を早期には発見出来なかっただろう。時臣の策が逆にブラックとルインに綺礼を早期に発見出来る事を担っていたのだ。

「奴は恐らく俺とルインと同類。同格かまでは分からんが、奴には気をつけねばならん。もしアレが本格的に動き出し、自身の望む答えを手に入れば、その瞬間に最も強大な敵に変わる。幸いなのはアサシンのマスターと言う事実だが、既に奴は俺に会う為に別のサーヴァントを狙っているだろう」

「待て、それじゃあ一番危ないのは時臣何じゃないのか？時臣はかなり狙い安いぞ」

「それは向こうも分かっている。だからこそ、時臣を、ギルガメツ

シュを狙いはしないだろう。既に奴は俺達が監視している事に気がついている。ギルガメツシュを狙おうとする動きを見せれば、即座に俺は中立も関係無しで証拠も残さずに“ガイアフォース”を教会に放つ予定だ。恐らく俺に見張られている事を理解している奴は、ギルガメツシュは狙うまい。他の強力なサーヴァントを手に入れようと動くだろう。これは完全に知恵比べだ。奴が俺の策の裏をかき、他のサーヴァントを手に入れるか、何も出来ずに沈むのかのな。とにかくお前も奴が危険だと言う事だけは理解しておけ」

「了解だ。お前が其処まで言うなら、確かに警戒して置いた方がいいな」

「そう言う事だ。さて、そろそろルインも戻って来る。次の策の為に動くぞ」

そうブラックは雁夜に声を掛けると、次なる策の為に準備を始める。

恐怖は更なる動きを取り出す。それによって生まれる混乱がどれだけ戦場をかき回すのかは、まだ誰にも分からないのだった。

## 第十一話 動き出す恐怖に仕えし深き闇

冬木市に存在する中でも一際巨大な建造物 - 冬木ハイアット・ホテル

地上三十二階のホテルの最上階に在るスイートルームにランサーのマスターであるケイネス・エルメロイ・アーチボルトと、その婚約者のソラウ・ヌアザレ・ソファアリは泊まっていた。

既に港場の戦いから一日が経過し、新たな夜の帳が舞い降りる午後六時の時間帯。

ブラックと雁夜はハイアット・ホテルの最上階に居るケイネス達を見張る為に、程近い別のホテルに部屋を取ってサーチャーで状況を確認し続けていた。

「やはりランサーのマスターは静観に走ったか。ランサー本人として俺かセイバーと戦いたいだろうが、マスターが赦すまい」

「その様だな。だが、ブラック。本当にセイバーのマスター達は動くのか？」

「動く。一日経てば新たな装備は整えられる。それにセイバーの左腕は早く取り戻したいと思っている筈だ。これ以上の時間は与えないだろうから、必ず今夜に何かを仕掛けるだろう」

「そうか・・・しかし、本当に其処までやる必要が在るのか？もうセイバーと本当のマスターの関係が壊れるまで時間は掛からないんだろう？両方を一気に攻めずに、片方だけを攻めた方が良いと思うんだが？」

「俺としても本当はそうしたい。だが、あのセイバーのマスターは

そうそうに退場して貰わないと不味い事態が必ず起きる。俺やお前に直接ではなく関係者。小娘とその姉、そして貴様の想い人にな」

「ッ！！！」

ブラックの言葉に雁夜は目を見開いた。

しかし、ブラックはそうなる可能性が高いと確信していた。

衛宮切嗣は目的の為ならば手段を選ばれない。だからこそ聖杯戦争に勝利する為ならば、平然と子供も人質に取るだろう。

ブラックは別に切嗣がどんな手を使っても自身の信念に触れさえしなければ構わない。だが、雁夜は違う。雁夜は桜や凜、葵の為にこの聖杯戦争に参加しているのだ。もし三人が人質に取られれば、その瞬間に雁夜は冷静さを失ってしまう。

ブラックやルインとしてはそれは困る。だからこそ、ブラックは早急にセイバーと切嗣の関係を粉々に打ち砕く事にしたのだ。

しかもランサーとそのマスターから自分達に最も必要な手段を手に入れなければいけないと任務までついて来ている。本当は別々に行いたいがどちらも今回しかチャンスが無い。

ランサーのマスターであるケイネスは油断し切っている。

ブラックはケイネスは完全に箱入りの魔術師である事を知っている。

確かに魔術師としては優秀だろうが、戦術、戦略の才能は皆無に等しい。もし自分を召喚していたのがケイネスだったら、ブラックは迷わずにルインを使って即座に殺していたと断言出来る。

だからこそ、ブラックは今日で全てを手に入れるつもりだった、セイバーと切嗣の関係を破綻に追い込み、自分達が探している魔力供給方法も手に入れる。今日以外にそのチャンスはもはや無いのだ。

「雁夜。恐らく今日の策が成功すれば、時臣との決戦は明日か明後日になるだろう。ギルガメッシュも限界が近いだろうからな。だか

「らこそ、今日で他の邪魔を全て動けなくする。ライダーは如何動くのか全く分からんが、俺の言葉で少なくとも戦いの邪魔はしないだろう」

「・・・分かった。桜ちゃん達に危険が迫るなら、俺も全力で力を貸す」

「よし、作戦開始はセイバーのマスターが動き出した瞬間だ。その前の準備はルインが実行中。後は役者が揃えば俺達の策の開始だ」

「了解だ。俺も今回で自分の覚悟を決めなおすさ」

雁夜はそうブラックの言葉に答えながら、右手に持っている菱形の紫色の宝石を握り締めながら、サーチャーの映るケイネス達の動きと切嗣達の動きを注視するのだった。

とある国道斜線。

その場所の道路をセイバーとアイリスフィールはメルセデス・ベンツ300SLクーペに乗りながら、時速100キロで走っていた。昨日のブラックの言葉はセイバーの中に疑問を植えつけていたが、敵の言葉だと思い信じてはいなかった。

何よりもセイバーは切嗣とアイリスフィールの聖杯に対する願いを知っている。だからこそ、セイバーは切嗣を信用していた。しかし、それはすぐに絶望に変わる事になる事をセイバーは知らないのだった。

そして静かに助手席に背中を預けながら窓の外を眺めていると、セイバーは突然に顔を険しくし、隣に居るアイリスフィールに声を掛ける。

「アイリスフィール。妙な魔力を感じます。車を止めて下さい」

「分かったわ」

「――キツキイイ――!!」

セイバーの言葉にアイリスフィールは即座に頷き、車を急停止させた。

それと共にセイバーは自身が感じた魔力の方に車から降りて向かうと、電柱の下辺りに魔力を発しているテープレコーダーが存在していた。

セイバーは感じた事の無い魔力に警戒するが、ゆっくりと地面に落ちているテープレコーダーを拾い上げ、アイリスフィールの下に戻る。

「何かあったの？」

「ええ、恐らくはテープレコーダーと言う機械でしょうが、感じた事の無い魔力を発しています。多分何かの言付けが記録されているでしょう」

「そう……聞いてみましょう。他のマスターがサーヴァントのメッセージでしょうかね」

「分かりました」

アイリスフィールの言葉にセイバーは頷き、手に持っているテープレコーダーの再生ボタンを警戒しながら指で押す。

——カチッ！

『ザーザーザー……セイバー……ソシテソノ……マスタ  
ーニツグ……冬木ハイアット・ホテルにコイ……サモナイ  
ト……冬木ハイアット・ホテルはショウメツシ……多数の  
犠牲が出るコトニナル』

『ッ……！』

テープレコーダーから流れた機械的な合成音にセイバーとアイリスフィールは目を見開くが、構わずに再びテープレコーダーから音声が流れる。

『ザーザーザー……クリカエス……冬木ハイアット・ホテルニコイ……コナケレバオマエタチノ……セイデ……タ  
クサンノ人々が……消滅する……“我こそは聖杯に招かれ  
し八番目のサーヴァント”』

「八番目！？在りえない！聖杯に呼び出されるのは七体だけの筈！  
！」

『マツテイル……尚このテープレコーダーは特殊な機械なので、  
持っているだけで貴女の魔力は減って行きますよ。騎士王様』

「クッ……！」

——ポン……！

突然に流麗な口調に変わったテープレコーダーをセイバーは慌て  
て投げ捨てた。

それと同時にテープレコーダーは軽い爆発音をたてて爆発するが、セイバーはもはや見向きもせずに車の中に乗り込み、アイリスフィールに向かって叫ぶ。

「アイリスフィール！！急いで冬木ハイアット・ホテルと言う場所に向かって下さい！！本当に八番目のサーヴァントが居るのかはともかく、無辜の民に犠牲を出す訳には行きません！」

「分かったわ！！」

「――ギョルルルルル――！！！！」

アイリスフィールはセイバーの言葉に即座に頷き、アクセルを勢いよく踏み込み、獰猛なエンジン音を鳴り響かせながら冬木ハイアット・ホテルに向かい出した。

その様子を近くの電柱の天辺に立ちながら見ていた銀髪に蒼い瞳を持った不思議な雰囲気を持つロングコートを着た美女・ルインは自身の策が成功した事に嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「クスクス、さてこれでセイバーの方は大丈夫ですね。私の本格的な出陣なんですから、派手に最初は行かせて貰いますよ。フリートが生前面白半分につけた大量のアレも設置は終わっていますし、全ては此方の手の内。この世界の魔術師達に英霊よ。よく見るんですね。科学が進んだ先には魔法が待ってる事を。クスクス」

そうルインは楽しそうに笑いながら自身の体の周りに転送用の魔法陣を出現させ、自身が現れる舞台の場所へと向かうのだった。

地上150メートルの高さを誇る冬木ハイアット・ホテル。

その場所は今、突然にホテルの至る箇所が発生した火災に見舞われていた。

当然ながらホテルの従業員達は即座に人々の避難を行っていたが、最上階に居るケイネスとランサー、そしてソラウはこの火災が他の魔術師達の襲撃だと気がつき、臨戦態勢を取りながら敵が来るのを待ち構えていた。

「フン、どうやら痺れを切らしたマスターが攻めて来たようだ」

「はい、ケイネス様。恐らくセイバーのマスターでしょう。此方にセイバーと思われる魔力が向かって来ています」

「ほう、ではサーヴァントが来る前に仕掛けたと言う事か。愚かだな。このケイネス・エルメロイの魔術工房にサーヴァント無しで攻めて来るとは」

ランサーの報告にケイネスは嘲りに満ちた声を上げた。

魔術師の工房となった場所は様々な魔術の防壁とトラップに満ちている。魔術師は工房ならば英霊に勝てなくても充分に戦う事が出来るのだ。それこそ他のマスターが単身で挑みに来れば生き残る事は出来ないぐらいの防壁とトラップが。

まして天才と時計塔で呼ばれている自身の工房に単身で挑んで来る愚か者の姿に、ケイネスは嘲りに満ちた笑みを浮かべてしまう。その様子を僅かに不安そうに見ていたソラウは、ケイネスの慢心に思わず不安を覚えてしまうが、真剣に辺りを警戒しているランサーの姿を見てそれは安堵に変わった。

ソラウはランサーに恋しているのだ。その恋がランサーのスキル【愛の黒子】の影響なのかも知れないが、ソラウは婚約者のケイ

ネスよりもランサーに惹かれていた。

ケイネスはその様子に僅かに不快そうに顔を歪めるが、何とかそれを押さえ込み、ランサーに声を掛ける。

「ランサー、下の階に下りて迎え撃て、ただし無碍に追い払ったりはするなよ?」

「承知しました。襲撃者の退路を断ち、この階に追い込めばよろしいですね?」

「そうだ。敵には誰に戦いを仕掛けたのかを教えたいからな」

「ハッ!」

ケイネスの言葉にランサーは頷きながら首肯し、そのまま両手に顕現させた二槍を構えながら下の階に下りようとするが、その直前にソラウが待ったを掛ける。

「ち、ちよつと待って、先ずは相手が本当にセイバーなのかを確認した方が良くんじゃないの?」

「必要ないよ。たとえどのクラスのサーヴァントが来ても私達は負けない。そうだろうランサー?」

「はい、いかなる敵も我が槍において貫きましょう。例えばブラックがこの場に現れようと…」

(クスクス、それでは見せて貰いますね。貴方の槍の冴えを)

『ッ!!!!!』

突然に何処からともなく頭の中に響いた声にケイネス、ランサー、ソラウは目を見開くが、声の主は構わずに次々とケイネスの工房の中にも関わらずに転送用の魔法陣を出現させて行く。

――ブーン――！

「な、何だこの光る円陣の数は！？此処は私の工房の中だぞ！？」

「ケイネス様！ソラウ様！お下がり下さい！これは恐らく本当のキヤスターのサーヴァントの仕業です！」

慌てるケイネスと不安そうにしているソラウを護るようにランサーは立ち塞がるが、魔法陣は構わずに光り続けて、次々と魔法陣の中から槍や剣、盾、砲身などを構えた四、五メートルの大きさの機械の兵隊・傀儡兵团が在られる。

――ガッシャン――！

（ランサーのサーヴァント。私に見せて下さい。貴方の槍の冴えが勝つのか？この傀儡兵達の力の前に主を失うのか？始めましょう）

――ガッシャン――！

謎の声が響くと同時に砲身を持った数体の傀儡兵がランサー達に砲身を構え、砲身の中に凄まじいエネルギーを集中させ始め、そして。

（ディバインバスター）



『何ッ！？何故この場所にセイバーとアイリが来るんだ！？』

「分かりませんが、セイバーの顔は悔しげに歪んでいます・・・  
もしか此方の策を誰かに教えられたのでは？」

『不味いぞ！これは・・・畏だ！！』

ーーーーブン！！

『ッ！！』

切嗣が自分達が畏に嵌められたと漸く気がついた瞬間に、周囲の風景の色が変わり、人々の気配と姿も完全に消え去った。

その突然に事態に舞弥、切嗣、そして倒壊されたビルの前に立っていたセイバーとアイリスフィールは目を見開き、慌てて辺りを警戒し始めた瞬間、ビルの瓦礫の中から桜色の砲撃とソラウを抱えたケイネスにランサーが飛び出す。

ーーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

ーーーービュン！！

「ランサーーーーー！！！！」

瓦礫の中から飛び出して来たランサーの姿に、セイバーは目を見開いた。

何故この場に港場で戦ったランサーが居るのかと疑問をアイリスフィールと共にセイバーは思うが、地面に着地するケイネス、ソラウ、ランサーは険しい視線を瓦礫に向け続け、セイバーが居る事に気がついたランサーは瓦礫に向かって二槍を構えながら叫ぶ。

「セイバーか！？セイバーすぐに構えを取れ！！俺達はキャスターの罠の中に居るぞ！！」

「なっ！？」

ランサーの発言にセイバーとアイリスフィールは驚愕した。

何せ、セイバーとアイリスフィールは目の前でブラックに惨殺されるジル・ド・レエを目撃している。

ジル・ド・レエが残されたキャスターのサーヴァントで在る事は間違いない。何よりもアレだけ怒りを顕にしていたブラックの暴虐が嘘だった筈は無い。

では、ランサーが言うキャスターは何者なのかと武装化をしながらセイバーは考えるが、考える暇など与えないと言う様に次々と瓦礫の中から傀儡兵達が現れ、セイバーとランサーに向かってそれぞれ武器を構える。

「――ガシャン！！」

「これは？一体なんですか！？」

「分からん。だが、セイバー。気をつける。この敵一体一体が下級のサーヴァントクラスの實力だ」

「馬鹿な！？サーヴァントですって！？それがこれだけの数！？」

ランサーの説明にセイバーは目を見開き、瓦礫の中から現れた十体の傀儡兵を険しい視線で見つめる。

下級とは言えサーヴァントとが十体も一気に敵として現れたのだから、セイバーの反応は当然だろう。更にランサーの説明も不可解

だった。キャスターは既に敗退して消滅している筈。

あの得体の知れないブラックの使い魔だとも考えられるが、戦闘狂のブラックが直接攻めて来ないのは不可解としか言えない。

では、目の前の傀儡兵团を操っているのは何者なのかと悩んでいると、セイバーとランサーの頭上から笑い声が響く。

「アハハハハハハハハハハッ！何ですかその顔は？私を笑わせるのは止めて欲しいですね」

「何者だ！？貴様がキャスターか！？」

「……ランサー……非常に言い難いのですが……キャスターは私の目の前で……バーサーカーに敗退しています」

「何！？では、あのサーヴァントは一体何者だ！？」

セイバーの説明にランサーは驚愕に目を見開きながら、自分達の頭上に浮かんでいる女性・ルインを見つめると、ルインはまるで何処かの高貴な令嬢のようにお辞儀をしながら名乗り始める。

「始めましてセイバー、ランサー。いえ騎士王にデイルムッドと呼ばせて頂きます。私は今回の聖杯戦争に招かれた“八番目のサーヴァント”。イレギュラーとでも呼んで下さい」

「八番目だと！？在り得ん！？聖杯からの情報では七体しかサーヴァントは呼ばれない筈だ！！」

「デイルムッド。世の中には例外と言う言葉が在るんですよ……さて、色々と話したいのですが、私のマスターの命によりあなた達には……消えて貰います」

――パチン――！

――ブーン――！

『ッ――！』

ルインが指を鳴らすと同時に出現した百近くの魔法陣の数にセイバーとランサーは驚愕するが、驚愕はそれだけでは納まらず、次々と魔法陣の中からルインの足元にいる傀儡兵達と同じ傀儡兵が現れて行く。

自分達を取り囲むように出現した傀儡兵の姿に、セイバーとランサーは思わず背中を合わせて辺りを警戒するが、ルインは構わずに両手を広げ、何かを奏するように動かし始める。

「さあ、始めましょう。全てが私のマスターの手に動かされる人形劇を」

そうルインが呟くと同時に全ての傀儡兵達が武器を構え、一斉にセイバーとランサーに突進して行くのだった。

## 第十二話 絶望を奏でる深き闇

戦いの場から僅かに離れたビルの屋上。

その場所にブラックと雁夜は並び立ち、大量の傀儡兵達に囲まれているセイバーとランサーを眺めていた。

「此方の予想通りの展開だ。さて、俺は今回はラストまで動けないが大丈夫か？」

「ああ、任せてくれ。時計塔の天才と呼ばれる魔術師に傷を負わせれば俺は完全に自信を得る事が出来る。寧ろギリギリまで出て来ないでくれ」

「フツ、分かっている。しかし、思ったよりもアレは役に立つ。不快だったが手に入れておいて正解だった」

「俺としては助かる。ブラックがアレを手に入れてくれたおかげでルインフォースへの魔力供給は最小限で済んでいるからな」

「だが、気に入らんのは事実だ・・・どれぐらいでAランク以上の宝具を手に入れられるかの実験にはなったとは言え、早々にアレは所有権を破棄する・・・さて、そろそろ俺は裏で動く。お前はランサーのマスターを襲え。この戦いで俺達が欲している全てを必ず手に入れるぞ」

「分かっている。それじゃ俺は行くから」

雁夜はそうフードを深く被りながらブラックに声を掛けると、ゆっくりとビルから降り始める。

その様子を横目で見ていたブラックは、自身の体を霊体化させ始め、目的の人物であるソラウとアイリスフィールを捕らえる為に闇の中にその身を消失させるのだった。

セイバーとランサーが大量の傀儡兵団を自身の武器で打ち倒し続ける中。

戦場となっている冬木ハイアット・ホテルの瓦礫を眺める事が出来るビルの窓から見ていた切嗣は、自分達が完全に罠に嵌められた事を確信した。

どうやって自分達の動きを知る事が出来たのかは切嗣にも分からなかったが、状況は如何見ても自分達に不利以外の何者でもなかった。

大量の現れる見た事も無い機械の兵団。砲撃を放つモノは、セイバーとランサーの【対魔力】スキルの前にダメージを与える事は出来ないが、他の剣や槍、斧などの武器を構えている傀儡兵には苦戦せずには居られなかった。

相手は感情も無い上に、完全に破壊されない限り動き続ける兵士達。

自身の身さえも道具にしてランサーとセイバーの動きを封じ、仲間ごと両断しようとして来るのだから、幾らセイバーとランサーでも迂闊には攻める事が出来なかった。

しかも操作しているルインは空に浮かんでいる為に、そう簡単にはセイバーとランサーも手が出せない。更に悪い事にセイバーやランサーの相手をしていない傀儡兵達は、次々と周りのビルを破壊して、ルインに届く事が出来る足場を破壊している。

このままではセイバーが討ち取られるのは時間の問題だと切嗣は判断する。

（クッ！！セイバーの宝具が使えれば全てを一掃出来て、あのサーヴァントも倒せると言うのに！ランサーが生き残った事が予想外だ！）

『切嗣。奥方様は如何やらセイバーから離れて安全な場所に向かったようです』

「そうか、なら此方が探すのはランサーのマスターとあのサーヴァントのマスターだ。恐らく近くに居る筈だから、何としても狙撃で殺すんだ。状況を変えるにはそれしか手は無い」

『分かり・・・ッ！！！！』

――ガシャン――！

「舞弥？如何した！？舞弥！！」

インカムから突然に響いた破砕音に切嗣は慌てて叫ぶが、舞弥が答える事は無かった。

その事実切嗣は慌てて舞弥が居る筈の建築途中のビルに向かうとするが、その直前に自身の背後から重低音の足音が鳴り響く。

――ガシャッ！

「ッ！！・・・まさか」

足音を耳にした切嗣は警戒しながら振り返って見ると、外に居る傀儡兵よりは幾分小さい傀儡兵が右手に斧を持ちながら切嗣を狙っていた。

「クッ!!」

「――ガガガガガガガッ!!」

傀儡兵の姿を確認した瞬間、切嗣は横に飛びながらキャリコM9 50を傀儡兵に連射した。

しかし、相手の傀儡兵はその身に鉛玉を受けても全くダメージを受けていないのか、ゆっくりと前に進み切嗣を追い駆け始める。

「冗談じゃないぞ。これは機械じゃないか。こんな物を操る魔術師なんて聞いた事が無い」

切嗣は今の攻防で目の前に立っている傀儡兵と外の傀儡兵達の正体に気がついた。

完全な魔力で動く人形兵。しかもその身を覆っている装甲は鉄の鎧。

その様な兵団を操る魔術師など切嗣は聞いた事が無い。それだけではなく何よりも厄介なのは、傀儡兵には今まで切嗣が使ってきた戦術が全く通用しない事実だった。

銃やナイフ、そして爆発物などは傀儡兵達には全く通用しない。ロケットランチャークラスならば破壊出来る可能性も在るだろうが、生憎と今は手元には無い。

「クッ!!これは何としてもあのサーヴァントか、そのマスターを見つけて殺すしかないな。こんな不死身の化け物どもと戦っては行かない」

そう切嗣は判断すると傀儡兵に背を向け階下に降り始める。

それをゆっくりとまるで蹴るかのように傀儡兵はゆっくりと後を追いつけて行くのだった。

無人のビルの入り口付近。

その場所にランサーと離れたケイネスは、自身の婚約者であるソラウを下ろし、遠くで破碎音や爆発音が鳴り響いている場所を険しい瞳で見つめていた。

その胸の内に在るのは怒り。自身が精魂込めて作った工房を簡単に破って、侵入を果たし、拳句の果てには工房を跡形も無く消滅させたルインに対する憎悪に近い怒りだった。

ケイネスは英霊を、サーヴァントを軽んじている。だからこそ、その軽んじている存在に良い様にやられた事実は赦せる事ではなかった。ケイネスと英霊を比べる時点で間違っている事実にさえも気がつかずに。

「ソラウ。君はこのビルの中に隠れていたまえ。私はランサーと共に不届き者を打ち倒しに向かう。それにこれはセイバーを討ち取るチャンスでも在るからね。令呪を使ってセイバーを殺すようにランサーに命じればそれでセイバーは終わりさ」

「止めなさいケイネス！！今の状況でそんな事したら如何なると思っっているの！？」

ソラウはケイネスの発言に本当に焦った声で叫んだ。

相手は下級とは言え、サーヴァントの力を持った命無き機械兵達。今はセイバーとランサーが共闘して戦っているから、あの兵团と互角に戦えているのだ。

もしセイバーが居なくなれば、ランサー一人であの兵团と戦う事になるのだ。しかもまだルイン自体が残っていると言う状況でケイネスはセイバーを倒そうとしている。

ランサーへの恋心は別にしても、ソラウは何としてもケイネスの暴走を止めようとするが、もはやケイネスはソラウの言葉を耳に入れてないのか戦場へと足を向ける。

「フフフツ、安心した前ソラウ。私には敗北は無い！」

「――ビュン！！」

「ケイネス！！」

戦場に向かって走り出したケイネスの姿にソラウは悲鳴のような叫びを上げるが、もはやケイネスは止まらずに走って行く。

しかし、ケイネスは重大なミスを犯していた。敵はルインや傀儡兵達だけではないのだ。近くにセイバーもマスターがいる事実さえケイネスは完全に忘れていた。

そしてその代償はケイネスではなく、如何すれば良いのか悩んでいるソラウに降りかかり、ソラウは音も無く背後に忍び寄った影に一瞬の内に気絶させられてしまう。

「――ビシッ！！」

「アツ・・・」

「――ガシッ！」

「馬鹿だとは思っていたが、此処まで戦いの才能が無い馬鹿だとは思っても見なかったぞ」

気絶したソラウを右腕に抱えながらブラックは、呆れたように声を出しながら、セイバー達が戦っている場所に真っ直ぐ向かって行

くケイネスの後姿を眺めていた。

まさか、此処まで簡単に目的だった人物が“二人”とも手に入るとはブラックは夢にも思ってたなかった。

既にブラックはセイバーから離れて戦いの邪魔にならないようにしようとしたアイリスフィールも左肩に気絶させながら確保している。正直に言えばブラックからすれば拍子抜けするぐらいの簡単な行動だった。生前でもこれぐらい戦いに隙が在る者達だったら苦労はしなかったとブラックは思わず思ってしまうが、何とかそれを押さえ込み気絶しているソラウとアイリスフィールを担ぎながら移動を開始するのだった。

そしてソラウが連れ去られた事を知らないケイネスは真っ直ぐ戦場に走り続けていた。

その胸の内に在るのは自身に屈辱を与えたルインへの憎悪。

しかし、ハッキリ言えばケイネスが向かったとしてもルインに勝つ事は愚か触れる事さえ出来ないだろう。

如何にケイネスが時計塔で天才と呼ばれている魔術師で在ろうと、相手はケイネス以上の才能を持った魔導師さえも認めなかった深い闇戦いを仕掛ける事態が間違っているのだが、ケイネスは大真面目に戦場に向かってルインを倒すつもりだった。

成功と祝福に満たされて育って来た者であるケイネスがルインに勝てる可能性はゼロだと言う事も、ケイネスは知らずに走り続けるが、運が良い事にケイネスが戦場に辿り着く事はなかった。

ーコッ、コッ、コッ

「ん？・・・何者かね君は？」

突然に横道から姿を現したフードを深く被った人物・雁夜に、ケイネスは立ち止まりながら質問した。

その質問に雁夜はゆっくりと自身の腕に存在してある令呪をケイネスに見せて、自身がサーヴァントのマスターである事を示しながら声を出す。

「時計塔の魔術師ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。お前は此処で俺の実験台になつて貰う」

「実験台？・・・フフフツ、このケイネス・エルメロイ・アーチボルトをよりもよつて実験台呼ばわりするとは・・・如何やら私が誰だか知らないようだね。ならば、この私の恐ろしさを知らしめてやろう。ロード・エルメロイの恐ろしさをな。沸き立て、我が血潮」

「――ゴボゴボツ！！」

言葉と共にケイネスは抱えていた巨大な壺を地面に落とし、その中に入っていたと思われる10リットルぐらいの水銀が次々と球状に変わって行く。

しかし、それを見ている雁夜の目は冷め切っていた。雁夜は魔術と言うものを嫌っている。

元々魔術は嫌いだが、その魔術によつて奪われた桜の笑顔の事がある為に尚更嫌いになつていた。だからこそ、まるで誇るように詠唱を続けるケイネスの姿は雁夜にとっては魔術の深い闇を知らない子供にしか思えなかった。

そもそも辺りの警戒を怠っていたケイネスに奇襲を掛ける事は雁夜には出来た。

しかし、それを行わなかったのはひとえに自身の本当の標的である時臣との戦いの前に経験を積む為ではないのだ。

ケイネスが知ったら確実に激怒するだろうが、真面目に雁夜はケイネスを自身の目的の為の実験台にする気しかなかった。

そんな事を知らずに漸くケイネスは準備を終えたのか、誇るように自身の足元に存在している水銀の球体に手を広げる。

「これこそ我が最強の礼装、ヴォールメン・ハイドログラム月霊髓液！！フッフッフ、驚いて言葉も出ないかね？」

「時間を掛けてその程度の魔術しか使えないとは、如何やら外れを俺は引いたようだな」

「ツ！！・・・フツ、如何やら君程度の魔術師には我がヴォールメン・ハイドログラム月霊髓液の恐ろしさが分からないようだね。ならば教えて上げよう。その身を持つてな！！斬！！」

「・・・ビシッ！！」

ケイネスが叫ぶと同時に地面に落ちていた水銀の球体が鞭の形態を取り、先端が刃状に変わり水銀の刃になって雁夜に向かって飛び出した。

ケイネスが使ったのは超高压水流カッターと同様の原理であり、ダイヤモンドに至るまであらゆる物質を両断する力を持った刃だった。

当然ながら生身の人間である雁夜が触れれば先ず間違いなく一刀両断されてしまうだろうが、迫り来る水銀の刃を目にしても雁夜は慌てる事無く、自身が得た相棒の名を呼ぶ。

「デスヘル。セツトアップだ」

《Yes, my master》

「・・・ガキイン！！」

「何ッ!？」

何処からともなく機械的な合成音が鳴り響くと同時に、雁夜の前に紫色に輝く防御魔法陣が出現し、水銀の刃を弾き返した。

その事実自身に自身の魔術に絶対の自信を持っていたケイネスは目を見開くが、雁夜は構わずにその右手に機械的な長大な鎌を構え、服も何処か暗さと不穏さを相手に与えるローブに変わった。

ケイネスはその雁夜の姿に、雁夜の風貌も合わせて思わず死神を連想するが、それは間違いでは無かった。

雁夜の今の姿こそ、自身の大切な者から笑顔を奪った遠坂時臣を絶望に堕とす為に望んだ死神。

それこそがルインとの特訓で雁夜が手に入れた魔術師ではなく“魔導師”として自身の姿だった。

――ブン!!

「さて、始めようロード・エルメロイ。この鎌に気をつけた方がいいぞ。これに触れれば、“お前は知らない魔術師の闇”を知る事になるからな」

「フツ、珍妙な力を持っているようだが、私には効かない事を知りたまえ。斬!!」

――ビシッ!!

ケイネスが叫ぶと共に再び雁夜に向かって水銀の刃が今度は幾重にも迫るが、雁夜は慌てる事無く身体強化の魔法を使用しながらケイネスに向かって飛び掛かる。

雁夜に見える右目に映るのはケイネスの姿だったが、見えない左

目に映るのは標的である時臣だけだった。

「ハアアアアアアアッ！！」

「――ザン！！」

「オオオオオオオオオオ――！！」

「――ドスッ！！」

セイバーとランサーはそれぞれの武器を使って次々と傀儡兵達を倒し続けていた。

既に最初に現れた時よりも傀儡兵達の数は減っていたが、セイバーとランサーも無傷とまではいかなかった。

相手はセイバーとランサーに砲撃が効かないと見るや、即座にセイバーとランサーではなくセイバーとランサーが立っている地面や辺りの瓦礫に砲撃を放ち始めたのだ。

これによってセイバーとランサーは思わず足を止めてしまい、その隙に他の武器を持った傀儡兵達に武器を振り下ろされ、軽傷を僅かに負うようになっていた。

幾ら【対魔力】スキルで魔力によるダメージがキャンセルされるとは言え、直接にでは間接的に発生した爆発まではセイバーとランサーも対抗しようが無かった。

「ハア、ハア、ハア、ランサー。大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。しかし、この大軍は厄介だな。しかも気がついてるかセイバー？」

「ええ、この敵は魔術が効かない相手に慣れている。私達に対する動きは完全に慣れた者だけが出来る動きです」

「更に不可思議な術を使って防御もする。俺の宝具やお前の剣ならば敵ではないが、このままでは主達が危ない。何としてもあのサーヴァントを倒さねば」

ランサーはそう言いながら、上空で傀儡兵達を操っているルインを睨みつける。

余裕なのかルインは全く最初に現れた場所から動かず、ただ傀儡兵達を操りながら、ランサーとセイバーを追いつつ動きを行い続けている。

相手が意思在る兵隊だったらセイバーとランサーも此処まで追い込まれずに全ての傀儡兵達を倒せて居ただろう。

しかし、残念ながら相手は命無き機械兵達。倒す為には動力炉に使っている機関を破壊するか、完全に破壊しなければならない。

中途半端に両断した程度では動き続け、腕だけでセイバーとランサーを拘束して来ようとして来るのだ。

（フッフッフ、流石にこの傀儡兵達には苦戦していますね。最も苦戦はしても倒されはしないでしょう。私も倒すつもりは今回はありませんからね）

地上で傀儡兵達と戦いを繰り返しているセイバーとランサーを眺めながら、ルインは薄ら笑いを浮かべていた。

状況はこのままルインが本格的に動けば、セイバーとランサーを倒して自分達の勝利で終わらせる事が出来る。

しかし、それはブラックの願いではない。自身の主が求めているのは一対一の闘争であり、此処でセイバーとランサーを倒すつもり

はルインには無い。もしセイバーの左腕が無事に残っていれば、宝具を使用して危なかったが、今のセイバーは宝具が使用出来ない。この程度の事ではランサーも自身の愛用の槍を犠牲にしてまで、状況を切り抜けようとは思わないとルインは判断している。

最も自身の主に危機が迫るとなれば、ランサーは必滅の黄薔薇を犠牲にする可能性が在るだろうが、その事実をランサーは知らない。ケイネスは雁夜が相手をし、【気配遮断】で隠れて行動している。ブラックがソラウとアイリスフィールを連れ去る手筈になっている。

自分達の鉄壁の策にルインは思わず笑みを浮かべてしまうが、すぐさまその笑いは納まり、ブラックが念話で声を掛けて来る。

（ルイン。此方は終わった。雁夜の方も善戦している。そろそろ俺が動き“終わらせる”）

（了解です、ブラック様。では当初の予定通りに）

自身の主であるブラックの報告にルインは即座に頷き、ランサーとセイバーを囲むように次々と無事な傀儡兵達を移動させ始める。

——ガシャ——ガシャ——

「ムッ——動きが変わった！」

「ええ、気をつけて下さい！」

次々と自分達を囲むように動き出した傀儡兵達の姿にセイバーとランサーは警戒心を強め、再び背中合わせになりながら傀儡兵達を見回していると、ルインが残忍な笑みを浮かべながら声を掛ける。

「さあ、セイバーにランサー。そろそろ終幕にさせて貰いますね」

「舐めるな！俺とセイバーはまだ戦えるぞ！！」

「その通りです！」

「そうですね。貴方達を倒すのにはちょっと戦力が足りませんでした・・・ですけど、この傀儡兵達を全部一斉に爆発させたらどうなるんでしょうね？」

『ッ！！』

セイバーとランサーはルインの発言に目を見開いた。

英霊であり【対魔力】スキルを持つセイバーとランサーには、傀儡兵達が全て爆発してもダメージは負うだろうが、生き残る事は出来る。

しかし、自分達のマスターは魔術師とは言え人間でしかない。どれほどの威力を持つ爆発になるかまでは分からないが、此処まで自分達を追いつめた傀儡兵達の一斉爆発。

先ず間違いなくこの辺りは吹き飛んで、全てが無くなり、ケイネスや切嗣は死ぬだろう。

「貴様！！正々堂々と戦う気は無いのですか！？」

「馬鹿ですねセイバー。これが私の戦い方です・・・では、今日で二体のサーヴァントは消えます。さよう……」

「悪いがセイバーはともかくランサーは俺の獲物だ。横取りはさせんぞ！」

『ッ！！！！』

突然に響いた第三者の叫びにセイバーとランサーは目を見開き、ルインも驚いた顔をする。

しかし、セイバーとランサーの驚愕に構わずに数体の傀儡兵達の胸に宝具が五本ずつ突き刺さる。

ーードスドスドスドスッ！！！

「この攻撃は！？」

ーードン！！

突然の攻撃にランサーが叫ぶと同時に一体の傀儡兵の頭部に人間状態のブラックが上空から落下し、傀儡兵を踏み潰した。

「ランサー、貴様は俺の獲物だ。他の奴にやられるのは赦さん」

「ブラック！！何故この場に！？」

「フン、こんなに不自然な結界が張られているんだ。怪しいと思う奴が居るに決まっているだろう」

ランサーの疑問にブラックは踏み潰した傀儡兵の残骸を打ち壊しながら答え、ゆっくりと前に進み、上空に浮かんでいるルインを陰しい視線で見つめる。

「何者だ？キャスターは俺が倒した筈だぞ？」

「始めまして規格外のバーサーカー。私はこの聖杯戦争に招かれた八番目のサーヴァントです」

「ほう、面白い話だな」

ブラックはルインの言葉に答えながら右腕に剣の宝具を出現させ、背後から剣を振り下ろして来た傀儡兵の斬撃を受け止める。

「――ガキイイーン!!」

「セイバー、此処は俺とランサーに任せて貴様はあの女を攻撃しろ。この中で【対魔力】が最も高い貴様が適任だ」

「ブラック!! 協力してくれるのか!?!」

「勘違いするなランサー。俺はこいつ等を爆発させられて、戦いに関係ない連中を巻き込みたくないだけだ!」

「――ブザン!!」

ブラックは言葉と共に剣を背後に振り抜き、傀儡兵を横一文字に両断した。

それによって傀儡兵達はブラックも完全に敵だと判断したのか、即座に連携を取り直し、ブラックに向かってそれぞれ武器を構えながら歩き始める。

「――ガシャ! ガシャ!」

「こいつ等は機械で作られている。つまり操り手がいなければ自動人形でしかない。尚且つこれだけの数だ。操っているあの女は操っている場所から動く事は出来ないだろうな」

「クウツ！」

弱点を告げられたルインは悔しげな声を上げてブラックを睨み、セイバーとランサーは確かにルインは現れてから一歩も動いていない事実を思い出した。

確かに普通ならばこれだけの数の傀儡兵達を、しかもサーヴァントに迫る力を持った傀儡兵達を操るには何らかのリスクが存在しているても可笑しくは無い。

その事実気がついたセイバーとランサーは、短時間で傀儡兵達の弱点に気がついたブラックの洞察力に驚嘆するが、ブラックは構わずに両手に剣を握り締め、傀儡兵達の群れの中に飛び込む。

「ハアアアアアアア——！！！」

ザーン！！ブザーン！！ガシャン！！

「よし！セイバー！！此処はブラックと俺に任せてイレギュラーを頼む！！」

「分かりました！！」

ランサーの言葉にセイバーは即座に応じ、セイバーはそのままランサーの近くに居る傀儡兵に向かって飛び掛かる。

ルインは内心で状況が自分達の望むとおりに進んでいると笑みを浮かべるが、表では焦った表情をしながら傀儡兵達を操りセイバーが自身に近づけないように操作する。

セイバーはその姿にブラックが告げた弱点が正しいと判断し、一体の傀儡兵に飛び掛かり、頭部を足場にする【魔力放出】のスキルを発動させ、ルインが居る高さまで一気に飛び上がる。

——ドン——！

「ハアアアアアア——！！！！」

「クツ——！！」

——ビュン——！！

上空で斬りかかって来たセイバーの動きにルインは慌てて傀儡兵達の操作を打ち切り、そのまま背後へと飛び退いた。

しかし、セイバーは逃さないと言うように自身の不可視の剣の風の鞘を解き、避けた直後であるルインに向かって風の鉄槌を叩き込む。

「ストライク・エア  
風王鉄槌——！！」

——ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——！！

「キャアアアアアア——！！！！！！グフツ——！！」

セイバーの放った風王鉄槌をルインは避ける事が出来ずに地面に落下してしまう。  
ストライク・エア

それと共に動きが鈍った傀儡兵達をランサーとブラックは次々に破壊して行き、セイバーはそれを確認すると共に地面に落下して苦痛に呻いているルインに向かって鞘を失って姿を晒している黄金の剣を躊躇い無く振り抜く。

「ハアアアアアアツ——！！」

——ブザン——！！

「キヤアアアアアアアー！！腕が！私の腕が！！」

セイバーの一闪によって右腕の肘から先を斬り落とされたルインは悲鳴を上げながら左腕で右腕を押さえ、そのままセイバーに背を向けながら僅かに体を空中を浮かばせ逃げ出す。

「逃しません！」

――ビュン！！

背を向けて逃げ出していくルインをセイバーは素早く追撃し始める。

目の前にいるルインは自分を誘き寄せる為に無辜の民が暮らしていたホテルを破壊した犯人だとセイバーは思っている。此処で逃せば再び自分達の前に現れて、大量の犠牲者を出させる訳にはいかなうと考えているセイバーは、何としても此処でルインを倒すつもりだった。

最も冬木ハイアット・ホテルを爆発させた張本人は、セイバーの本当のマスターである切嗣とその相棒の舞弥なのだが、その事実を知らないセイバーはルインこそが暴拳の真犯人だと心の底から思っていた。

だからこそ、傀儡兵達をブラックとランサーに任せて、自身はルインを倒そうと駆け続けていると、ルインは突然に邪悪さに満ちた笑みを浮かべながら横を振り向き、左腕を構える。

その突然の動きにセイバーも思わず、ルインの見ている方を振り向いてみると。

「ヒクッ、ママ……何処に居るの？」

（子供！？）

目到大粒の涙を溜めながら辺りを見回している女の子が、不安そうな顔をしていた。

何故このような場所に女の子が居るのかとセイバーは思わず疑問を覚えてしまうが、“目に映る”子供の姿は紛れも無く本物。

そしてルインがその子供の上に存在している建物に向かって左腕を伸ばしている姿を目撃したセイバーは、ルインが女の子に向かって魔術を使って子供を殺そうとしている事に気がつく。

「させません！！」

ルインの狙いに気がついたセイバーは迷う事無く、不安そうにしている女の子に向かって駆け出そうとする。

騎士として誇りを持っているセイバーは自分達の戦いで無辜の民が傷つく事が赦せなかった。

既に自身が戦いの場に間に合わなかった事で冬木ハイアット・ホテルが崩壊したと思っているセイバーは、これ以上の犠牲に出す訳にはいかないとある種の強迫観念に襲われながら女の子を助けようとする。

自分の行動が間違っているとセイバーは心の底で感じる。此処でルインを逃せば再び現れて、自分達を危機に追い込むだろう。

それでも騎士としての本能が泣いている女の子を見捨てる事はセイバーには出来ない。

後悔するよりも先に女の子をルインの手から護ろうと、セイバーは足を向け、そして。

「令呪に置いて命じる。セイバー、その剣で目の前のサーヴァントを切り裂け」

——ブザン！！

——ドグオオン！！

「……えっ？」

女の子を助けようとしたセイバーの動きは突然に第三者の言葉どおりに動き、右手に持った黄金の剣でルインの体を右肩から左腰に両断した。

それと同時に事前に魔力を左腕に集めていたルインの手から砲撃が飛び出し、女の子はその砲撃の中に飲み込まれて消滅した。

セイバーは女の子が消え去った場所を呆けた様な顔をしながら眺め、両断されたルインの体が地面に落ちる音さえも現実味が無いかのように聞こえず、恐る恐る声が聞こえて来た方を見ると、腕に存在している令呪が一画欠けた切嗣が立っていた。

「……切嗣……」

切嗣の姿を目にした瞬間、セイバーは今の自身の行動が理解出来た。

自身の本当のマスターである切嗣が令呪を使用して、ルインを己に両断させたのだ。

代わりに一人の女の子が消滅したが、確かにルインは“両断”で来た。しかし、両断した張本人であるセイバーは切嗣の行動の意味が分からなかった。

確かにルインは倒せた。その代わりに何の罪の無い女の子がこの世から消え去った。

その事実が頭の中に思い浮かんだ瞬間、セイバーの頭の中に昨日のブラックとの会話が思い浮かぶ。

「セイバー。貴様はもし子供がキャスターに浚われた時に如何する？」

「もちろん助けます！」

「フン、無理だな。貴様のマスターは絶対に認めないだろう」

今起きたのは形は違えど確かにブラックの言葉どおりの光景。  
何の罪も無い女の子を切嗣は見捨てて、ルインを倒す事を固執した。

セイバーはその事実を怒りを覚え、右手に持つ黄金の剣の剣先を切嗣に向ける。

「――スチャ――！」

「切嗣ッ！――！！貴方は！貴方は！？」

「セイバー、君は馬鹿なのか？騎士道など構わずに敵を倒せば良いんだ」

「助けられたのです！！確かにサーヴァントは倒せた！ですが、何の罪の無い女の子が！私達との戦いに関係ない無辜の民が犠牲になった――！」

「やれやれ、お偉い騎士様は状況が見えていないのか？さっきのサーヴァントは早めに倒さなければ何れは僕らが危機に追い込まれる。これほどに用意周到に動いたサーヴァントは早めに脱落して貰うべきだ。寧ろ子供一人の犠牲で済んだ事態を喜ぶべきだ」

「ッ――！！」

切嗣の発言にセイバーは言葉も出さず事が出来なくなった。

切嗣の発言は完全に犠牲を容認している発言。確かに切嗣の理論は戦う者として正しい発言だ。

子供一人を犠牲にしてルインと言うセイバーとランサーを追い込んだ敵を倒せたのだ。間違っではない。

武人として生きて来たセイバーも正しいと思う。戦争に巻き込まれて死んだ子供をセイバーは何度も見た事がある。

しかし、納得できるかどうかは別だろう。子供のような戦いに関係ない者達を護る為にセイバーは剣を取って騎士として生きて来たのだ。

だからこそ、助けられた命を見捨てた切嗣の行動はセイバーには容認出来ずに射殺さんばかりに自身の主を睨み続ける。

しかし、切嗣はセイバーに睨まれても何の感情も抱かなかった。

寧ろルインと言う強敵を討ち取る代価に子供一人で済んで良かったと大真面目に思っていた。元々聖杯を手に入れる為ならホテルの爆破解体まで行う人間である。勝つために手段を選ぶつもりは切嗣には無かった。

人として最低な行動を取っても切嗣は聖杯を手に入れて世界を救済して見せると覚悟を決めている。

子供一人でルインを倒せたのは本当に行幸だと思いつながら、切嗣はどうやってセイバーを宥めたら良いのか考え始める。

“そう、本当にルインを倒せていたら、切嗣の行動は正しかった。”

「クスクスクス、アハハハハハハハハハ——」

「……！笑えますね！！本当に笑えますよ！」

ツ！！

突然に響いた倒した筈のルインの笑い声にセイバーと切嗣は目を

見開き、ルインの両断された体を見つめると、まるで切られたのが嘘だったかのようにルインの体は一瞬の内に再生し、右腕も光に包まれながら再生する。

「フフフツ！残念でしたね。私には【無限再生】と言う特殊なスキルが在るんですよ。不死殺しや再生封じの宝具以外では、私は死なないんです。例え最上級の聖剣でも真名解放しない限り私は殺せません」

「クツ！！」

「おっと！危ないですね」

再生したルインを目撃したセイバーは即座にルインを斬ろうとするが、ルインは薄ら笑いを止めずに上空に浮かび上がり、セイバーと切嗣に声を掛ける。

「ああ、可哀想な女の子でしたね。私達の行動に巻き込まれて死んでしまった。有名なアーサー王ご本人が近くに居たのに、見捨てられた女の子は本当に可哀想ですね」

「クウツ！！降りて来なさいイレギュラー！！その首を必ず切り落とす！」

「フフフツ、本当に面白いですね騎士王……。だって、此処まで私の思惑通りに動いてくれたんですもの……。貴方もそのマスターもね」

『ツ！！！！』

ルインの発言にセイバーと切嗣は思わずルインを凝視すると、ルインは右腕を振り、先ほど砲撃の中に消えた筈の女の子を出現させ、ルインと女の子は同時に言葉を呟く。

『酷い騎士王にマスターさん。私を見捨てるなんて酷いですね』

「ま、まさか、その子供は・・・」

「はい、私が生み出した幻影ですよ。騎士王様？自分の【対魔力】に自信が在り過ぎましたね。貴女の【対魔力】を破るなんて簡単なんですよ。クスクスクス」

「アッ・・・」

「ードサッ！！」

ルインの発言にセイバーは思わず地面に膝をついてしまう。

全てがルインの策略だった。ブラックが現れることさえもルインの計算の内だった事実に気がついたセイバーは目の前に浮かんでいるルインに恐怖心を抱いてしまうが、ルインはもはやセイバーにも切嗣にも興味が無いのか、その体の周りに転送用の魔法陣を出現させ始める。

「さて、怖い怖いバーサーカーと天敵のランサーが来る前に私は失礼しますね・・・そうそうセイバー、貴女といった女性はアサシンが連れて行きましたよ」

『ッ！！！！』

「クスクスクス、さっさと教会と遠坂の魔術師を糾弾すれば良かった

たのに……。それとも一つ、セイバー。冬木ハイアット・ホテルを瓦礫に変えたのは私ではないですよ。やったのは、“貴女の隣に居る殺人マシーンさん”です」

「ッ!」

「さようなら。道化さん達。クスクスクス、ハハハハハハハハハハハハッ!」

ルインは辺りに残忍さと嘲りに満ちた笑い声を上げながら、その場から転移して行き、後には呆然とした顔をしながら顔を下に俯いているセイバーと、ルインが転移した場所を射殺さんばかりに睨む切嗣だけが残された。

## 第十二話 絶望を奏でる深き闇（後書き）

オリデバイス。

名称、デスヘル。

形状、巨大な鎌

詳細、ルインが雁夜に渡した擬似リンカーコア内臓のデバイス。

基本的に在る魔法と防御魔法、身体強化魔法以外は使用出来ない。

それら以外を雁夜が覚える時間が無かった事も在るが、在る魔法に特化するように雁夜が頼み、ルインが調整した為、防御と身体強化以外は使えない。

### 第十三話 手に入れた恐怖

破壊し尽くされた冬木ハイアット・ホテルの瓦礫の上。

大量の傀儡兵達の残骸を踏みしめながらランサーは、同じような残骸を踏み締めているブラックに声を掛ける。

「ブラック、感謝するぞ。お前の参戦が無ければ危なかった」

「……………」

「ブラック？如何した？」

無言で険しい視線をセイバーの走っていた方向に向け続けているブラックの姿に疑問を覚えたランサーは声を掛けると、ブラックはランサーに背を向けたまま声を出す。

「……………やられた。まさか、俺さえも利用する策略家が召喚されていたとはな」

「何！？それは如何言うことだ！？」

「フン、俺が愚かだった。【対魔力】が高いと言っただけでセイバーを当てにしたのは完全に間違いだった。八番目のサーヴァントの狙いは最初からセイバーだけだったようだな」

「セイバーが狙いだと？」

「そうだ。俺が現れてからの奴の動きは妙だ。これほどの数の使い魔どもを操れるサーヴァントが、こうも簡単にセイバーに後を追わ

せるのは如何考えても不可解だ・・・となれば答えは一つ、“奴はセイバーに最初から何かを仕掛けるつもりだった”のだろう」

「クッ！！それが事実だとすれば、セイバーが危険だ！！」

ランサーはブラックの言葉に頷き、即座にセイバーの救援に向かうとする。

幾ら敵対している相手とは言え、少し前まで共闘で傀儡兵達と戦い、尋常に雌雄を決したいと思っている相手なのだから、セイバーの危機は騎士道を重んじるランサーからすれば見過ごす事は出来ない。

すぐさまセイバーの救援にランサーは向かうとするが、その直前にブラックとランサーの背後でケイネスの音と判別する事さえ不可能な断末魔のような叫びが響く。

「アアア l a l a l a l a アアア A - - - ! ! ! ! !  
ゲバアアアアア！！」

「ッ！！ケイネス様！！」

突然に響き渡ったケイネスの死さえも生温いと言う言葉が相応しいと感じられる断末魔の響きに、ランサーが慌てて背後を振り返ってみると、百メートル先で冷たいアスファルトに横たわりながら目の焦点が全く合わず、口から大量の泡を吐いているケイネスと、それを死神のような格好をして、右手にデスヘルを握りながら冷めた目で見下ろしている雁夜が存在していた。

時は少し戻り、セイバーがルインを追い駆けて行った頃。

ケイネスと雁夜は互いに攻撃を放ちながら、相手の決定的な隙を探し続けていた。

ケイネスが水銀を操って振るう月霊髓液の鞭を、雁夜は己の相棒であるデスヘルの出現させる防御魔法で防ぎ、雁夜が振るう刃は自動で動く月霊髓液の盾のよって防がれ、互いに膠着状態に陥っていた。  
ヴォールメン・ハイドログラム

その事実は天才の名を持つケイネスのプライドを傷つけていた。ギルガメツシュほどではない内にしてもケイネスもプライドの固まりのような人間。

ケイネスからすれば何処の馬の骨とも分からない魔術師と互角にしか戦えない現実は赦せなかった。

たいして雁夜は全く慌てずに、体中の神経を全力集中させながらケイネスの動きに対して行動を行っていた。

即製魔術師であり、即製魔導師の雁夜には油断や驕りなど無い。更に自身のサーヴァントであるブラックの救援も全く当てにしていなかった。

雁夜の目的はあくまで時臣に絶望を与える事であり、その時にはブラックはギルガメツシュと戦わなければいけない。既にブラックとルインには充分過ぎるほどモノを雁夜は貰っている。

本来ならばともに戦う事も出来ずに苦しむだけでしかかった体は、デスヘルの身体強化魔法とルインの治療で充分に動ける体に変わり、更には自身に最も適していると雁夜自身も思いう力を与えられている。

だからこそ、これ以上ブラックとルインに迷惑を掛けない為にも雁夜は決死の想いを持ってケイネスと戦っている。

「（デスヘルの情報ではあの自動の盾が発動するのは攻撃と思われるものだけ。更には鞭と使っているモノとは別で動くのが厄介だ。俺が使える魔法は限られているし、魔術に関しては使用すれば体に

激痛が走る不良品もいいモノだ……。となれば、状況を利用するしかないな！！）・・・フツ！！」

「――ガアアアアアアアーン！！」

雁夜は策を練り上げるとデスヘルの刃を地面に深く突き刺しと同時に刃を振り抜き、刃と共に舞い上がった大量の瓦礫をケイネスに向かつて投擲した。

それに対してケイネスの足元に存在していたヴォールメン・ハイドログラム月霊髓液は自動防御を行う為に、楯にへと変化し、ケイネスに向かつて来た大量の瓦礫を防ぐ。

「――ガアン！！」

「フフフツ、苦し紛れの行動のようだね。さて、そろそろ本格的に狩りをさせて貰う。君のような現実が分からない魔術師に私の、ロード・エルメロイの本当の恐ろしさを身を持って教えて上げようではないか」

「悪いが苦しみなら充分に味わった……。だから、今度はお前が味わえ！！」

「――ドオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

「ツ！！」

雁夜が叫び声を上げると同時に、ケイネスの背後の地面から長い紫色の鎖で繋がっているデスヘルの刃が出現した。

これこそがデスヘルのセカンドフォーム - 鎖鎌の形状に変わったデスヘルである。

雁夜は地面の瓦礫を大量の巻き上げてケイネスに飛ばし、その大量の瓦礫を防ぐ為に楯の形状に変わった月霊髓液によってケイネスの視界が遮られている隙に地面の中にデスヘルを仕込んだのだ。

もしケイネスが油断も奢りも無く、更に切嗣のように戦闘とこなし続けている相手ならば雁夜の動きに訝しみ、瓦礫を避けてデスヘルを地面に仕込む雁夜を目撃出来ていただろう。

しかし、ケイネスは自身の実力を過信し、雁夜の実力を全く認めていなかった。

油断と驕りに満ち溢れていたケイネスと油断も驕りも無く戦っていた雁夜との心の持ちようが勝負の明暗を分けたのだ。

そして雁夜は即座にデスヘルの柄を操って、紫色の鎖に先に繋がっているデスヘルの大鎌を操作し、ケイネスの体に刃を振り下ろす。

「ペイン・ビジョン  
痛みの幻覚！！」

――ザン！！

「  
アアア l a l a l a l a l a l a アアアア - - - ！！！！  
ゲゲバアアアアア！！」

デスヘルの刃はケイネスの肩に触れ、そのまま雁夜が叫ぶと共に真っ直ぐにケイネスの体を通り過ぎた。

しかし、不思議な事に刃がケイネスの体を通つたのにも関わらず、ケイネスの体には傷は全く付かなかったが、ケイネスは断末魔のような叫び声を辺りに響かせる。

コレこそが雁夜がルインから授けられた禁断の魔法 - “ペイン・ビジョン  
痛みの幻覚”

使用者が受けた事の在る苦痛をそのまま相手に幻覚として味あわせる幻覚魔法の極致と言っている魔法だった。しかし、この魔法はあくまで幻覚である為に相手の体には全く傷が付かず、痛みも幻覚

としか認識されない魔法。しかも相手に与えられる苦痛は使用者が受けた事の在る苦痛限定と言う使用条件が存在していた。

それ故にこの魔法は開発者以外誰にも使われる事無く、ルイン自身も存在さえ忘れていた魔法。

だが、同時に“ペイン・ビジョン痛みの幻覚”は発動さえすればどれだけ精神力が高くとも脳に直接情報として送られ、痛みを司る痛覚神経を操る魔法である為に、送られてた苦痛が想像を絶するものだった場合は、それこそ死ぬ事さえも出来ずに苦痛にのた打ち回るしか術が無いと言う危険性も兼ね備えている魔法だった。

そして雁夜にはこれ以上に無いほどに適している魔法でも在った。魔術師に成る為に雁夜は自身の寿命さえも犠牲にして死よりむごい苦しみを耐え抜いた人間。

その身に受けた苦痛ならば、確実に聖杯戦争に参加しているマスター達全てが束になっても適わないだろう。何よりも雁夜がこの魔法を徹底的に使いこなせるようになる事を望んだ理由は、自身が受けた痛みは桜も味わっていた苦痛。

その苦痛を時臣に叩き付ける為に、雁夜は他の攻撃魔法には目もくれずに“ペイン・ビジョン痛みの幻覚”とデスヘルの運用方法を修練し続けたのだ。

そして普通の魔術師でさえも発狂してしまうほどの苦痛を直接脳に送られたケイネスは、口から大量の泡を吐きながら地面に倒れ伏してしまった。

そして時は戻り、自身の主の変わり果てた姿を目撃したランサーは即座に雁夜に向かって駆け出していた。

何をされたのかはランサーには分からなかったが、ケイネスの状態は如何みても普通の状態ではない。

このままでは命にさえも関わると判断したランサーは、ケイネスを救出する為に雁夜を先ずは倒そうと槍を構えながら駆け続ける。百メートルなど最速の称号を持つ自身ならば一瞬で駆けつけられる距離。

邪魔をするモノも存在しないと思っているランサーは、迷う事無く雁夜を葬ろうと動くが、その直前に何処からとも無くしわがれた老人のような声が響く。

『バーサーカー、令呪を使って命じるぞ。其処のランサーの背に剣を投げつける』

「クッ！！ランサーー！！！」

「ービュン！！」

「ハッ！！」

「ーガキイン！！」

背後から響いたブラックの叫びと、事前に聞こえていた老人のような声の意味を理解したランサーは即座に背後を振り抜き、ブラックが普通の人間ならば目に映らないほどの速さで投げつけて来た剣を破魔の紅薔薇で弾き飛ばした。

いきなりのブラックの攻撃にランサーは驚くが、その隙に雁夜は近くの路地裏の方へと消えて行き、ブラックは険しい視線を辺りに向ける。

「如何言つつもりだ！？戦いは俺に任せると言う話だった筈だぞ！？」

『カカカカカカツ！何、まさかあやつがサーヴァントのマスターになって居るとは思っても見なかったのな・・・老婆心ながらに力を貸してやったまでじゃよ』

「蟲ジジイが！・・・まあ、いい。どうせ今日は俺もこれ以上は動く気は無かったからな・・・ランサー、不意打ちなどしてしまった謝罪だ。お前達にとって有益な情報を渡そう・・・アサシンのサーヴァントは生きている。奴のマスターと遠坂家のマスターは手を結んでいる」

「何だと！？それは真かブラック！？」

「事実だ。遠坂の魔術師と教会に匿われているアサシンのマスターの親は今回の聖杯戦争の監督役だ。連中は最初から手を結び、聖杯戦争を裏で操っていた。それにもう一つ、連中はアサシンを利用してこの場で何かをしていたようだ」

「何！？・・・ハッ！そう言えばソラウ様は何処に！？・・・まさか！？」

ブラックの言葉にランサーは考えるような顔をしたが、即座に自身に魔力を送ってくれている筈のソラウの姿が見えない事に気がつき、慌てて気絶しているケイネスを支えるように立ちながら辺りを見回した。

その様子にブラックは内心で自身の策どおりに事が進んでいると笑みを浮かべるが、表では険しい視線を辺りに放ちながらランサーに背を向け声を掛ける。

「ランサー、お前は俺の獲物だ。他の奴らにはやられるな」

そうブラックは困惑した顔をしているランサーに声を掛けると、自身の体を霊体化させてその場から去って行く。後には困惑し続けるランサーと、気絶しているケイネス、そして何時の間にか残骸と化した冬木ハイアット・ホテルを囲むように見回している人々だけが残されたのだった。

ブラック達の第三の拠点のマンションの一室。

既にその場所には雁夜とルインが存在し、ブラックが来るのをリビングに使われている部屋で待っていた。

第三の拠点は今までの普通の内装とは違い、ありとあらゆる異世界の技術が詰め込まれている場所になっていた。因みにマンションの大家には第二の拠点と同じように大量の宝石を渡して黙らせている。

「戦闘は思ったよりも神経を磨り減らす。戦い好きのブラックの気持ちが理解出来ないな」

「まあ、仕方無いですよ。ブラック様の戦闘好きが異常なだけです。から気にしない事です。ね雁夜さん」

リビングに置かれているソファーに座っている雁夜にルインは苦笑を浮かべながら言葉を告げると、目の前に存在している布団の上で眠っている、連れ去って来たソラウとアイリスフィルの体を機械で事細かに検査していく。

最終的には自分達が最も欲している魔力供給についての情報は白剤を飲ませたソラウから聞き出すつもりだが、何らかの発信機の種類が埋め込まれていないか検査しているのだ。

（・・・ムッ！このアイリスフィールと言う女性・・・普通の人間ではないですね・・・何かの部品、いえ、それとも違う何かの処置がされています。これは目覚める前にもう一度詳しく体を調べる必要が在りますね）

そうルインはアイリスフィールに対する行動を決めると、即座に幾つかの精密検査機械を召喚し、アイリスフィールの周りに次々と設置し始めていく。

雁夜はその様子を思わず啞然として見つめるが、ルインが構わずに検査の準備をして行くと、ブラックが雁夜の目の前のソファアームに座り込むように姿を現す。

「フツ、さて、これで漸く俺達が望んだモノが全て手に入った・・・次はそろそろ本格的に追い込むとするか」

「ああ、同感だ。あの傲慢な魔術師 - 遠坂時臣とそのサーヴァント - ギルガメッシュにご退場願おう」

「既に準備も種時きも終わりましたし、後は私が直接教会を襲撃すれば」

『フッフッフッ！ハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
ツ！！！！！！』

静かに眠っているアイリスフィールとソラウの横でブラック、雁  
 夜、ルインの歡喜に満ち溢れた笑い声が部屋の中に響き渡った。

遂に漆黒の竜人達の手は本命へと伸び始めた。それによって時臣とギルガメッシュの命は風前へと加速して行くのだった。

### 第十三話 手に入れた恐怖（後書き）

オリジナル魔法。

痛みの幻覚 ペイン・ビジョン

相手の脳の痛覚神経に直接痛みを送り込む危険な魔法。

使用者の味わった事が在る痛み限定だが、雁夜が使っている事で危険度は最強になっている。

デスヘルの刃に触れた瞬間に送られ、触れただけでも信じられない痛みが走るが、刃が体を通り過ぎた場合の苦痛は雁夜が受けた苦痛を全て相手の脳内に送り込む事が出来る。

## 第十四話 糾弾の前準備を始める深き闇

冬木市に存在する街中の公園。

その場所で数時間前に冬木ハイアット・ホテルでセイバーとランサーと激戦を繰り広げた傀儡兵と同タイプの砲身を備えた傀儡兵三ゴルディアス・ホイール体と神威の車輪に乗ったイスカンドルとウェイバーが戦っていた。

――ガシャン――！

――ドグオオオオオオオオオオオオ――！

「ライダー――！来たぞ――！」

「分かっとなるわ――！」

右手に砲身を持った傀儡兵が放った桜色の砲撃を目にしたウェイバーの叫びを耳にすると、イスカンドルは即座に神威ゴルディアス・ホイールの車輪を操作し、上空に浮かび上がる事で砲撃を避けた。

しかし、傀儡兵達は慌てる事無く足元に桜色の翼を作り出し、上空に飛び立った神威ゴルディアス・ホイールの車輪の後を追いつけ始める。

――ビュン――！

「そ、空まで飛べるのかよ――？」

「ほう、これはたまげたわい。特殊な魔力攻撃に、特殊な防御。ありや如何考えてもキャスターの使い魔じゃろうな――」

「感心している場合か――？アレは魔術の秘匿なんて全く考えていな



攻撃にウェイバーは顔を青ざめさせ、イスカンドルをジト目で睨みつける。

「おい！思いっきりコレは怒っているぞ！！」

「ハハハハハッ！じゃが、如何やらキャスターは近くに居ると言う事が分かったわ！そうなれば話は早い！！行くぞ！！」

イスカンドルは叫ぶと同時に手に握っている手綱を操り、ゴルディアス・ホイール神威の車輪を牽いている二頭の神牛の進路方向を変えて、背後から砲撃を連発し続けている傀儡兵に向かって突進する。

それによって砲撃は神威の車輪に直撃し始めるが、身に纏っている防御フィールドと神牛が発する凄まじい雷光を貫く事は出来ず、ゴルディアス・ホイールイスカンドルは獰猛な笑みを浮かべながら神威の車輪のスピードを一気に上げて、傀儡兵に突撃する。

「余の走破をその程度の攻撃で止められると思うでないわ！！AA  
AAALaLaLaiett！！」

ーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

ゴルディアス・ホイールイスカンドルが操る神威の車輪を牽いている神牛の四本の足によつて傀儡兵達は一瞬にして残骸に変わり、それだけでは足りないというように雷光と車輪によつて残骸は跡形も無く消滅し、残されたのは上空をゆっくりと駆ける神威の車輪だけになった。ゴルディアス・ホイール

「や、やったな！ライダーー！！」

「うむ、あの程度の木偶では余の神威の車輪を止める事など出来ん・  
・とまあこれでお前さんの使い魔は消滅した訳だが、何時まで隠

れて居るのだ？」

「流石は征服王と呼ばれる英霊ですね」

「えっ？」

イスカンドルの言葉に答えるように響いた女性の声にウェイバーが驚きながら声の聞こえた方を見ると、上空にゆっくりと優雅に浮かんでいるルインが存在していた。

その姿にウェイバーは即座に先ほどの傀儡兵達を操っていたサーヴァントだと思い、警戒心を高めるが、その空気はまたしてもイスカンドルに粉碎される。

「で、ものは相談なんだが、余の家臣にならんか？美しい娘よ」

「ーードゴッ！！」

「ライダーー！！！！何をお前は言っているんだ！？あの女はさっきまで僕らを襲っていた使い魔の主だぞ！！」

「それは分かつとる。じゃがな坊主。アレほどの力を持った使い魔を使役し、見た事も無い魔術を使うキャスターなのだぞ？余の家臣に下れば確実に世界制覇の力になるじゃろうて。で、対応は応相談だが返答は如何に？」

「寝言は寝て言いなさい。この身の髪の毛一本さえも触れていいのは私の絶対のマスターのみです。それ以外のモノが触れれば、闇に食われますよ」

イスカンドルの質問にルインは不機嫌さに満ちた声を出しながら、

イスカンドルを射殺さんばかりに睨みつけた。

ルインにとつてはブラック以外に仕えること事態が既に虫唾が走るほどに赦せない。当然ながら誰かに勧誘される事自体、ルインからすれば逆鱗に触れる事に等しい。

例え相手が名を轟かせる征服王イスカンドルであろうと、勧誘する時点でルインには赦せないのだ。

その明らかに殺気さえも撒き散らすほどに不機嫌になったルインの姿に、イスカンドルは失敗かと残念がり、ウェイバーは恐怖に体を震わせる。

しかし、ルインは何とか殺気を抑え、イスカンドルとウェイバーに用件を話し始める。

「まあ、今の言葉は不問にします。さて、今日私が現れた用件ですけど、近々教会から貴方達に招集がかけられるでしょう。理由は私の排除の為に」

「何じやと？何故お主を教会が排除しようとするのだ？理由が分からんが？」

「理由は簡単ですよ。“私が教会と遠坂家の不正を暴くからです”」

「不正だつて！？ちよつと待ってくれ！教会がどんな不正を働いているんだ！？教会は中立の筈なんだぞ！？」

「残念ですけど教会は中立ではなく遠坂の魔術師に肩入れしています。理由は分かりませんが、死んだ筈のアサシンは生きていて、そのマスターは遠坂の魔術師と結託しているんですよ」

「なっ！？」

ルインが告げた事実にはウェイバーは驚愕に満ちた叫びを上げ、イスカンドルは不快そうに目を細める。

今のルインの話が事実だとすれば、今回の聖杯戦争は出来レースと呼んで良いほどに遠坂時臣有利で事が進んでいると言う事になる。何せ本来ならば中立の筈の教会が裏から支援し、まだサーヴァントが活着しているにも関わらずにアサシンのマスターである言峰綺礼を護り、他で戦いを繰り広げているサーヴァントの情報が次々と時臣と綺礼に渡って行く。最後に残るのが時臣と綺礼だけになった瞬間に、綺礼が令呪を使ってアサシンを殺せば時臣とギルガメッシュの勝利で今回の聖杯戦争は終わるだろう。

明らかな出来レース染みた状況に、真剣に聖杯戦争に参加していたウェイバーは怒りに震えながら強く拳を握り、イスカンドルも戦略としては理に適いながらも数少ないルールを平然と破っている時臣に憤りを僅かに覚える。

「私が行おうとしている事が成功すれば教会は不正を行ったとして中立は無くなります。ですが、上手く行けばギルガメッシュかあの規格外のバーサーカーのどちらかが必ず消えますよ」

「ふむ、察するにお主は既にバーサーカーか、バーサーカーのマスターと結託しようだな？」

「正解です。私のマスター（を召喚した）がバーサーカーのマスターとは知り合いでしてね。聖杯戦争を正しく進める為に卑劣な行いをしている遠坂の魔術師と教会を排除しようとしているんですよ。もちろん見返りは渡しますよ。私の消滅や家臣になれと言う以外では、其方の要求を一度だけ受けて上げます。他のマスターの情報やサーヴァントの情報、宝具の種類などの情報も渡せますね。ああ、でもあの規格外のバーサーカーに関しては何の情報も無いので渡せませんが・・・それで返答は如何に？」

『・・・・・・・・』

イスカandal、ウェイバーは悩むような顔をそれぞれしてルインが伝えた情報を吟味する。

もしルインの言葉どおりの状況になれば、ギルガメッシュと言う古今東西のあらゆる宝具を所持している強敵か、敵の宝具の所有権を問答無用で奪い取り、あの圧倒的な力を発揮した竜人の姿になれる規格外のバーサーカーのどちらかが消滅する。

更には不正を行っていた時臣と教会を糾弾して、何らかのペナルティを相手に与える事も可能になるだろう。この状況でこの提案を蹴るのは如何考えてもデメリットしかないとウェイバーは判断する。その上自分達が知らないサーヴァントの情報までも手に入れるチャンスもルインは示して来ている。

如何考えてもメリットしか自分達には来ないと判断したウェイバーは思わず笑みを浮かべ、ルインに対して肯定の返答をしようとするが、その前にニンマリと口元を歪めているイスカandalがルインに声を掛ける。

「のう、キャスターよ。家臣や消滅以外では何でも言ったが、ギルガメッシュとバーサーカー、どちらかが残った後に全てのサーヴァントを一度戦い無しで集結させるのは可能かのう？」

「はい？・・・・・・・・出来なくは無いです。ですが、アサシンだけは難しいですよ。アサシンが生き残るかどうかは分かりませんから」

「よし！では要求を伝えるぞ！ギルガメッシュとバーサーカーの決闘が終わった後に、残っている全てのサーヴァント達を集結させて酒宴を上げるのが要求じゃー！」

「・・・・・・・・ハッ？」

「ードサツ！！」

ライダーが告げた要求の内容にルインは思わず口をポカンと開け、ウェイバーはライダーの言った全く聖杯戦争と関係ない内容に白目を剥きながら気絶してしまった。

歴代の聖杯戦争を鑑みても、サーヴァント同士が集まって酒宴を開いた事など無いだろう。しかも殺し合いを行う者同士で。

思わずルインは何かの冗談で自身の要求を突っ撥ねるつもりなのかとイスカンドルを見つめるが、すぐさまイスカンドルは本気だと確信した。

何故ならばイスカンドルの瞳は開かれる予定の酒宴に対する期待で満ち溢れているのだから。

「もちろん費用は全部其方持ちだからのう。余は一銭も出さんぞ。後美味しい酒と料理も要求する」

「・・・・・・・・分かりました。確かに其方の要求は受けます。ですが、邪魔はしないで下さいね」

「征服王イスカンドルの名に於いて誓おう。酒宴に集まるサーヴァント達を楽しみに待つとるぞ。特に“お前さんの本当の主”が来るのをのう」

「（この男！？私とブラック様の関係に気が付いている！！・・・・・・なるほどただの馬鹿では無いようですね・・・・思ったよりもブラック様を楽しませられる敵のようです）・・・・フフッ、征服王。貴方は思ったよりもあの方を楽しませてくれそうです。酒宴で会うのを楽しみにして下さい」

「おう、楽しみにさせて貰うわい！そしてお主とお主の主を必ずや余の臣下に加えて見せると伝えておけ」

「良いでしょう。あの方も貴方に興味が出るでしょうからね。クスクス」

そうルインは不敵さに満ちた笑い声を上げながらその場から転移して行き、残されたイスカンドルは消えていく結界の様子にルインと同様に不敵さに満ちた笑みを浮かべる。

「よもや余と同じ死して尚も仕える忠臣が居るとは。必ずや余の軍門に二人とも下してくれようぞ。八番目のイレギュラーにバーサーカーよ」

イスカンドルはそうルインが消えた場所を見ながら呟くと、ゴルディ神威アス・ホイの車輪の手綱を操り、自分達の隠れ家に向かうのだった。因みにウエイバーが目覚めたのは翌日の昼頃だった事を記しておく。

冬木市新都郊外に存在する小高い丘の上に位置する冬木教会。

聖堂教会の聖杯戦争を監視する為の拠点であり、本来ならば聖杯戦争に於いて中立を維持し、戦いに敗れたマスターの保護や聖杯戦争で発生した被害を隠匿する為の指示を出す場所。

その場所は完全に聖杯戦争中は中立地帯とされ、不干渉の条約が結ばれてのだが、今その場所の礼拝堂は傀儡兵の残骸によって混乱の極致に立たされていた。

突然に現れた傀儡兵は教会内部に侵入して、監督役として任命さ

れている言峰璃正を殺そうとしたのだ。

幾ら聖堂教会に所属している人間とは言え、八十に届く年齢である璃正では下級のサーヴァントに匹敵する實力を持った傀儡兵に勝てる筈も無く、もう少しで殺されてしまう直前にアサシンを従えた綺礼が飛び出し、璃正を傀儡兵から救い出す事に成功した。

当然ながらその行動は中立を破ったとして、璃正は傀儡兵を操っているサーヴァントとマスターに諫言<sup>かんげん</sup>を行おうとしたのだが、そこどころの騒ぎでは無くなってしまった。

何故ならば傀儡兵の残骸の内部から『アサシンを利用して時臣に情報を伝えている事は中立破りだ』と書かれたメッセージが出て来たのだ。

当然ながらそのメッセージを目にした璃正は慌てに慌て、時臣に即座に状況を連絡した。

自分達が行っている行動は明らかに聖杯戦争に於ける聖堂教会の中立を自ら破っている行為。

それが明らかにされれば、手を貸していた璃正と綺礼だけではなく、時臣にも罰が下される。最悪の場合は他のサーヴァントやマスター達が怒り狂い、時臣と教会を潰す為に動き出すだろう。

一騎当千の實力を秘めたサーヴァントが全部敵に回るなど、悪夢としか言えない。即座に時臣は綺礼に命じてアサシンを総動員して傀儡兵を操っているサーヴァントを発見しようとしたのだが、更に悪い悲劇が彼らには起こった。犯人と思われるサーヴァント・第八のサーヴァントを名乗っているルインがアサシンが生きている事と教会と時臣が結託している事実を他のサーヴァントとマスターに触れ回っている事実が明らかになったのだ。

「時臣君！このままでは他のサーヴァント達が全て教会を潰しに来る！……そうなれば私達は終わりだ！恐らく第八のサーヴァントを名乗っている謎のサーヴァントは既に我々が結託している証拠も得ているのだろう！それを出されれば狂言だとも叫ぶ事が出来な

い！！」

『分かっています！・・・クウツ！！何故ばれたのだ！？この情報は絶対にばれないように動いていたと言っのに！？』

（確実に同類が動いたな。同類がギルガメッシュを目の敵にしていたのは事実。第八のサーヴァントを名乗る者も同類が何か手を打ったのだろう。本格的に私も師と父を切り捨てるべき時が来たようだ）

突然に状況が自分達に悪くなった事に慌てている璃正と時臣とは違い、綺礼は既に二人を完全に見限っていた。

望む者・ブラック・と直接会話をする為には綺礼にとっては今の自身の状態・教会に拘束されているの・は望ましくはない。冬木ハイアット・ホテルでの出来事を途中からとは言えアサシンを通して見ていた、いや見せられていた事を綺礼は分かっていた。

最初はいきなり張られた結界内部にアサシンは入り込めなかったのに、ブラックが現れた時にアサシンも入れるようになった。そのおかげでルインが色々と時臣と教会の事をばらしている事実は判明出来たが、それこそがブラックの策略だと綺礼は理解していた。

（同類は本格的に師を潰しに掛かって来た。ギルガメッシュを抑える事に力を注いでいた師は状況が一気に悪くなったと思っっているだろう。しかし、このままでは私も危ないのも事実だ。セイバーを手に入れる為の状況が舞い込んで来ているこのチャンスでアサシンを失うのは不味い。何とかしてアサシンを保ちながら、かつセイバーに好印象を与える動きをせねば・・・それにしてもあの時のセイバーの姿は）

フツと綺礼が思い出すのはセイバーがルインを両断する直前の姿。あの時にセイバーは紛れもなく子供を助けられると確信して動い

ていた。

しかし、それを僅かなりとも信用していた切嗣に裏切られて絶望に堕ちた瞬間のセイバーの顔。

それをアサシンの視界越しとは言え目撃した瞬間に、綺礼の中に何とも言えぬ感情が湧き上がった。

その突然に湧き上がった感情の正体と理由までは綺礼には分からなかったが、ブラックと言う同類を見つけられた事で自分の求めているものが近くなって来ている事だけはハッキリと理解していた。

（セイバーを手に入れば私が求めているものが、もっとハッキリと分かる筈だ。同類の発見はやはり私に影響を与えている！答えは近いのだ！！）

綺礼は心の底から歓喜していた。

今までの人生で何も感じる事が出来なかった自分が、これほどまでに情熱を持って進んでいる。

やはりブラックこそが自身に答えを与えてくれる存在だとハッキリと確信し、そのブラックに負けない策を練らねばと言う思いさえも湧いてくる。

言峰綺礼は人生の中で今自分は絶好調に入ったと確信しながら、時臣と璃正に怪しまれないように無表情になりながら声を掛ける。

「父上、師よ。提案なのですが第八のサーヴァントが全てのサーヴァントに教会に対する不審を植え付ける前に一度全てのマスター達に招集を掛けては如何でしょうか？」

「如何言うことだ綺礼？」

「つまり、不審が植え付けられる前に第八のサーヴァントを名乗る者を聖杯戦争を混乱に追い込むイレギュラーだと断じるのです。そ

して第八のサーヴァントを倒した者には褒賞を与え、私達に対する不審を払拭させるのです。無論、見返りとして用意する褒賞はそれ相応の物ではないと無理でしょうが」

『フム、確かに良い策だ』

「ええ、確かに綺礼の策ならば我々への不審は少しは払拭出来るでしょう。褒賞には私に心当たりが在ります。そして他のサーヴァント達によって消耗している隙を衝き、アーチャーが第八のサーヴァントを仕留め、相手が握っていた証拠をアサシン達を使って抹消すれば全て終わりです」

『その案が良いですな。これで私達への疑いも消えると言うものです』

そう時臣と璃正は自分達の起死回生の策が浮かんだ事に喜び、二人で事細かに策を練り始める。

その背後に居る綺礼の口元が薄く笑みに歪んでいる事にも彼らは気がつかずに、自分達の糾弾の場を何も知らずに準備し始めるのだった。

## 第十五話 糾弾と邂逅する恐怖

自身の父親と師が自分の授けた策を細かく検討している中、部屋から出た言峰綺礼は深く考えるような顔をしながら自身に宛がわれている私室に向かって歩いていった。

（さて、これで同類が考えている策どおりに状況は進んだ。後は私が糾弾の場でアサシンを自害させたように見せ掛けて、私は自由を得る。既に拠点も得ているから問題はない。そしてアサシンが死んだと思っている衛宮切嗣の隙を衝き、セイバーを手に入れる。この策は絶対に破る事は無理だ。同類ならば気がつく可能性は在るが、アインツベルンで聖杯戦争のルールを知り尽くしている衛宮切嗣では先ず惑わされる。そしてアサシンが死んだか如何かを確認している間に私がセイバーに接触し、更に衛宮切嗣に対する疑惑を植え付ける……ん？）

今後の事を綺礼が黙考しながら自身の私室に向かって歩いていると、自身の私室の扉が僅かに開いている事に気がついた。

確かに閉めて外に出た筈なのに、何故扉が僅かに開いているのかと疑問を持ちながら部屋の中に入ってみると、一瞬の綺礼は自分の部屋と間違ってしまったのかと違和感を感じた。

部屋を出た時と内部の内装が変わった訳でもないのに何故か部屋の中には、華やかで雅な空気が満ち溢れていたのだ。

その原因は何なのかと疑問を覚えて綺礼が内部を見回してみると、長椅子に寝そべりながらエナメルのジャケットにレザーパンツと言う現代風の服を着たをギルガメッシュが大量のワインボトルを飲んでいた。

その姿には最初に綺礼が出会った時の余裕さなどは全く感じられずに、逆に凄まじい怒りをワインで紛らわせている印象が感じられ

た。

「アーチャー？何の真似だ？何故私のワインを飲んでいる？」

「フン？これが飲まずにいられると思っっているのか？時臣は未だにあの黒き雑種に対して何もしようとしないのだぞ？」

そのギルガメッシュの言葉に綺礼は一瞬の内に全てを理解した。確かに時臣は未だにブラックに対して何もしようとはしていない。何故ならば時臣はブラックについての情報を先ずは得る事を最優先にして動いていた。だが、その情報が手に入る確率は既に無いに等しい。

港場でのブラックの真の姿についての情報を綺礼は時臣には教えてはいない。綺礼にとつてはもはやブラックが不利益になる情報は誰にも渡す気は無いのだ。

そして港場での戦いの時以外、ブラックはギルガメッシュから奪い取った宝具でしか戦闘を行っていない。

もはやブラックはギルガメッシュとの決戦への準備を既に終え掛けている。だからこそ、綺礼は次にブラックとギルガメッシュが戦う時こそブラックが真の力を全て発揮する時だと確信していた。

「あのサーヴァントはお前が師を連れて魔力を解放すれば、すぐさま現れると言っていた筈だが？」

「何故、我が<sup>オレ</sup>雑種ごときの為に動かねばならん。雑種は雑種らしく、我が何もせずとも現れるのが当然だろうが」

（完全に自分のプライドを優先して動いていると言う訳か。なるほど、同類はそれが分かっていたからギルガメッシュ以外にも別の相手を優先出来たと言う事か）

綺礼は今のギルガメッシュの言葉で何故ブラックが平然とギルガメッシュを放置していたのか理解した。

ブラックはギルガメッシュの傲慢さを理解していた。だからこそ、業とギルガメッシュが絶対に受け入れられない提案を伝えたのだ。当然ながらギルガメッシュも港場での出来事でブラックが自身を目の敵にしている事を理解していた。

その為に何時までも自分がブラックの要求を満たさずにいれば、ブラックから現れるとギルガメッシュは確信していたが、それこそがブラックのギルガメッシュの動きを押さえる策だった。

自身の状態が完全に戦える状態にならなければ、幾らブラックでもギルガメッシュには勝てない。何よりもブラックが本気で戦えば雁夜は死んでしまうだろう。だからこそ、ブラックはギルガメッシュの動きを自身が完全な状態になるまで封じる策を使用していたのだ。

その事までは流石に綺礼も分からなかったが、ブラックが更なる策を誰にも気づかれずに行っていた事実だけは理解し、思わず口元を歪めてしまう。

ギルガメッシュはそれを目敏く見つけ、面白いものを見つけたと言うように笑みを浮かべる。

「ほう、貴様にもそのような顔が出来たのか？」

「何？そんな顔とは如何言う事だ？」

「気づいておらんかったのか？貴様は薄く笑っていたのだぞ？まるで愛しい者の事を思うかのように笑みにな？」

「笑みだと？……フツ、確かにその通りかもしれない」

ギルガメッシュの言葉に綺礼は一瞬考えるような顔をしたが、すぐにギルガメッシュの言葉に同意した。

確かに今の自分は少し前の空虚な自身ではないと綺礼も思っていた。今はブラックに対して如何動くべきなのか、そして自身は如何動いてブラックに対峙すれば良いのかと考えるほどに聖杯戦争を楽しんでいる。聖職者である自身が聖杯戦争などと言う血生臭い戦いを楽しむなど間違っていると言われるかもしれない。しかし、これが墮落だと言うのならば綺礼は神を即座に捨てると断言しても良いと心から思っていた。

「今私は人生で最高にこの状況を楽しんでいる。アーチャー、お前が嫌っているサーヴァントのおかげでな」

「フン！一瞬で酒が不味くなったわ！！・・・しかし、その様子では貴様？時臣にさえも伝えていないあの黒き雑種の情報を持っているな？」

「だとすれば如何したのだ？私はあるサーヴァントが消える事を望んではない。この場で例えお前に殺されようと情報は渡さんさ」

「フム？随分とあの黒き雑種に惹かれているようだな・・・まあ、良い。お前が持っていた酒で特別に赦してやろう。だが、一つ教える？あの雑種の次の標的は誰だ？」

「それこそ答える必要も在るまい。次の標的は“お前と師”だ」

「――バリン！！」

「そうか」

綺礼が告げたブラックの次の標的を聞いたギルガメッシュは右手に持っていたグラスを握り割り、獰猛な獣のような笑みを口元に浮かべ、左手でブラックに傷をつけられた首の箇所を撫でる。

既に傷は塞がっているが、それでもブラックに付けられた傷の屈辱は忘れてはいない。何よりも自身の財を使われて傷をつけられたのだから、ギルガメッシュには何に於いてもブラックをこの手で殺すと言う誓いを持っていた。

そして近々ブラックが再び自身の前に現れる事を理解したギルガメッシュは、ゆっくりと長椅子から立ち上がり、扉の方に向かって歩き出す。

「次に来る時までには貴様が隠している秘蔵の酒を全て用意しておけ。貴様が対峙を望んでいる黒き雑種の弔いを祝う酒としてな」

――ボタン！

ギルガメッシュはそう言葉を告げると共に部屋を出て行った。

それを横目で見ていた綺礼はゆっくりとギルガメッシュが去るのを確認すると、ワインが並んでいる棚から一本ワインボトルを取り出し、新たに用意したグラスに注ぎ始める。

「ああ、準備して置く。最もお前が飲む事は無いだろう。その酒はお前と師の敗北を祝う酒にさせて貰う。フッフッフ」

綺礼は楽しそうにワインを飲みながら言葉を呟き、明日に行われる時臣と璃正の糾弾を楽しみに思うのだった。

ブラック達の第一の拠点であるホテル一室。

その場所には椅子に縄でグルグル巻きに縛られている一人の男性  
- ジル・ド・レエのマスターだった雨生龍之介 - が目隠しを行われ、  
口を呆然と開けながら座っていた。

その龍之介を囲むようにブラック、ルイン、雁夜が険しい顔をしながら立っていた。

ペイン・ビジョン

最も雨生龍之介は既に雁夜の痛みの幻覚をその身に受けて精神が壊れるほど激痛を食らい、精神は完全に崩壊してしまっているが、まだ命だけは無事だった。しかし、それこそがブラック達の狙いだった。精神は生きていても体は無事。ブラックに魔力を与えるには充分な存在だった。最も流石にブラックが全力で戦えば龍之介の魔力はそんなには持たずに枯渇してしまうだろうが、それでも龍之介には寿命と言うモノが存在している。それさえもブラックは使用してギルガメッシュと時臣との決戦に挑むつもりだった。つまり龍之介は生きたブラックの魔力炉として使われると言う事だった。

在る意味では精神が壊れたのは、龍之介には救いだっただろう。ブラックが本気で暴れれば、龍之介がその身に受ける激痛はそれこそ雁夜が受けて来た痛み匹敵する。その激痛を連続で受けずに済むのだから、龍之介は精神が壊れた事こそが救いだった。

「さて、ソラウとか言う女が渡した情報で俺達の最大の問題だった魔力不足は解消された。最もこの男ではギルガメッシュとの戦いで持てば良い方だろうがな」

「一応此処を出る前に強力な治癒魔法陣を使用して於きますので、運が良ければ次回も使用出来ますね」

「とにかく時臣との戦いの途中で使用出来なくなるのは不味いからな・・・しかし、ブラック？やはりこの男よりも、もう一人のアリスフィールとか言う女性の方が良いんじゃないのか？そっちの方が魔力の供給先としては良かったと思うんだが？」

「確かにこの男よりもあの女の方が魔力供給先として良いのは事実だ。だが、あの女には何かが在る。それが分かるまでは供給先として使用すべきではない」

そうブラックは雁夜の質問に険しい声を出しながら答えた。

確かに雁夜の言うとおり魔力の供給先としてはアイリスフィールの方が遥かに上だろう。だが、ルインの調べたところによれば、アイリスフィールは普通の人間とは違うと言う事が判明した。

ブラックとルインは生前に普通の人間とは生まれが違う者とも沢山出会っているが、そのどれもアイリスフィールの体の状態は一致しなかった。ブラックとしてはそのような得体の知れない存在から魔力を貰う気にはなれなかった。

少なくともアイリスフィールの正体分かるまでは、ブラックは龍之介から魔力を受ける事にしたのだ。

「今ルインが色々とあの女の事を調べている。それが明らかになり次第に、あの女に掛けている幻覚魔法を解いて目覚めさせる。その後は例の資料を読み解かせて、情報を引き出せるだけ引き出させる。その後でイスカンドルが言っていた酒宴の時にでもセイバー達に返してやればいい」

「それが一番だな。もし聖杯に何か異常が起きているなら、破壊も視野に入れて於いた方が良い・・・そう言えばルインフォース？もう一人の女性は何処しているんだ？」

「其方は全く気にしなくても大丈夫ですよ。あのソラウとか言う女性はある交換条件を差し出して積極的に協力して貰っていますので」

「随分と簡単に言っただけ。一体何をした？」

「何もしていませんよ……ただちょっと恋をしている彼女にチャンスを与えただけです。女性は救いに現れる王子様に憧れますからね。クスクス」

「よく分からんが？」

「俺もだ？」

ルインの言葉にブラックと雁夜はそれぞれ疑問の声を上げて顔を見合わせた。

その様子にルインは思わず溜め息を漏らしてしまう。分かっていた事だが生前から戦いにしか興味が無いブラックは女性の恋愛感情についてはかなり疎い。

雁夜は葵、凜、桜に関しては別なのだが、その他の女性の気持ちには疎いのだ。その為にルインがソラウを見て気がついたソラウのランサーに対する恋愛感情に二人は全く気がついていなかった。

逆にソラウの恋愛感情に気がついていたらルインは、判断能力を鈍らせる薬を飲ませただけで簡単にソラウから情報を引き出す事に成功していた。

（フッフッフ、彼女は完全に恋愛に関しては素人ですからね。ちょっと雰囲気が出る状況を作って上げると言っただけで簡単に堕ちましたよ。まさか、ランサーが飛び込んで来る場所が酒宴会場なんて夢にも思っていないでしょうけどね）

「……まあ、良い。魔力供給の方法が分かったのだからな。それよりもルイン？アレはちゃんと持っているのか？」

「はい、此処にありますよ」

ブラックの質問にルインは答えながらロングコートのポケットの中に手を入れ、一冊の本・ジル・ド・レエの宝具だった『螺湮城教本』<sup>ブレラティ・スベルブック</sup>を取り出した。

本来ならばジル・ド・レエの消滅と共に消滅する筈だった『螺湮城教本』<sup>ブレラティ・スベルブック</sup>だが、事前にブラックが手で握っていた為に『全てを従える意志力』の影響でブラックにその所有権を奪われていた。

当初はブラックはジル・ド・レエを苦しめる為に奪ったのだが、所有権がブラックに移った瞬間に『ブラックは『螺湮城教本』<sup>ブレラティ・スベルブック</sup>には魔力炉としての機能が存在している事を知ったのだ。当然ながら魔力不足で悩んでいたブラックは氣に入らなかったが『螺湮城教本』<sup>ブレラティ・スベルブック</sup>をそのまま保持していた。

最も『螺湮城教本』の召喚能力に関しては新たにルインが契約すれば使用する事は可能なのだが、生贄が必要になる事も同時にブラックは理解していたので、ルインの現界と能力使用の魔力炉として使用していた。

「当分の間はその所有権を破棄するのは止めだ。万が一今回のギルガメッシュとの戦いでこの男が死んだ場合は、再び雁夜に負担が掛かるからな」

「了解ですブラック様」

「よし、俺達は明日でこの聖杯戦争で最も行うべき最重要事項を行う。雁夜、お前は確りと休んでおけ。明日の戦いはお前が最も望んでいた戦いだからな」

「ああ、俺はその為に命を削ったんだ。絶対に桜ちゃんを凜ちゃんと葵さんの下に帰してみせる」

そう雁夜は決意に満ちた声を出し、明日の時臣との決戦に思いを馳せ、ブラックとルインも必ず目的を遂げる誓うのだった。

そして翌日の昼の半ば頃。

ブラックとルインの策どおりに教会は招集の狼煙を上げ、各マスター達に緊急の招集を行った。

教会の内部には妖気が満ち溢れ、本来ならば神の愛に満ち溢れているべき場所には思えないほどの重い空気が充満していた。

そしてその教会の主である言峰璃正は、その妖気の原因となっている三体の使い魔と信者席の一番後ろで足を前の席に載せながら座っているブラックと、そのブラックから僅かに離れた場所に規則正しく座っているセイバーの姿に笑みを浮かべていた。

少なくとも三体の使い魔と二体のサーヴァントがこの場にいると言う事は、脱落したキャスターを除いた全てのマスター達が集まって来たという事に他ならない。昨日の夜に敗れたと思っていたケインスも存命して、今回の緊急に招集に応じたのだ璃正は思っていた。これならばあのイレギュラーのルインも追い込めると内心で璃正は笑みを浮かべるが、璃正とは違い、ブラックはセイバーに対して険しい目を僅かに向けていた。

（少し予想外だな。思っていた以上にセイバーとあの男の関係は薄かったらしい）

ブラックはそう自身の予想に反した状況に僅かに困惑していた。

璃正とは違い、ブラックはこの場にいる三体の使い魔の内の一体の主がセイバーの本来のマスターである切嗣で在る事を他のマスターを監視している雁夜とルインから報告を受けて知っている。

にも関わらずにセイバーが此処に居ると言う事は、ブラックとルインの予想以上にセイバーと切嗣の二人の関係は悪かったと言う事に他ならない。

そのブラックの考えが正解だと言うように、僅かにセイバーは手を強く握り、油断無く辺りに視線を向けていた。

（アイリスフィール！絶対に助け出してみせます！！）

昨日のルインとの戦いの後、結局セイバーと切嗣は話し合いを行わなかった。

二人とも無言で別れ、セイバーはルインが告げた情報が真実なのかを調べる為に教会を見張り、切嗣は舞弥と共にアイリスフィールの目撃情報を聞き回っていた。切嗣はルインからの情報など全く信じていない。恐らくアイリスフィールを攫ったのはルイン本人だと確信して、目立つ容姿をしているアイリスフィールを探し続けた。

その為に元々信頼関係を築けていなかったセイバーと切嗣の関係は、アイリスフィールと言う緩衝材も失ってしまった為に瓦解寸前にまで追い込まれていた。二人が心から本心を話し合えば、関係は修復出来ていただろうが、残念ながら二人ともそんな想いさえも既に抱く事が出来ず、単独行動でそれぞれ動いていたのだ。

それはブラックとルインからすれば嬉しい事だったが、今日のこの場にセイバーが現れる事だけは完全にブラックからしても予想外だった。

そんな風にブラックがセイバーの予想外の行動に僅かに考え込んでいると、璃正が厳かに信者席にいる全員に聞こえるように語り出す。

「諸君らに伝えねばならん事がある。今諸君らが悲願を叶える為に行われている聖杯戦争の中に重大な裏切り者が現れたのだ。そのサ

ーヴァントは本来ならば中立である教会に対して攻撃を行った。そのサーヴァントは自らを八番目と名乗るサーヴァントだ！」

「ッー！」

ーーガタッ！

「ほう」

璃正の言葉を耳にしたセイバーは思わず信者席から立ち上がり、ブラックは僅かに関心したような声を上げて璃正を見つめる。

その姿に璃正は内心で笑みを浮かべながら、更に用件を伝え始める。

「このサーヴァントは数少ない聖杯戦争のルールを破ったのだ。これは赦されざる事だ」

「質問だが、何故そのサーヴァントは教会を襲ったんだ？ソイツのマスターも教会が中立だと言う事ぐらいは理解していた筈だ？」

「それについては此方にも分からない。だが、そのサーヴァントとマスターは死んだアサシンが生きていると勘違いして襲って来たようだ。残念ながらその様な事実は無い。確かにアサシンは討たれているのだからね。しかし、それを信じず教会を襲った事は赦されない事だ。故に私は聖杯戦争の監督役としての権限を発動し、聖杯戦争の一時停止と暫定ルールの設定を宣言する」

そう璃正は告げると共に右袖の僧衣を捲くり上げ、肉は落ちていくようだが、鍛え抜かれた右手の肘から手首にかけてをビッシリと覆っている文様を良く見えるように掲げる。

「これは過去の聖杯戦争のマスターに宿り、決着を待たずしてサーヴァントを喪ったマスター達の遺産、そして今回の監督役である私に託された未使用の令呪である。私はこれら予備令呪の一つ一つを、私個人の意思で任意の相手に委譲する権限を持っている。今現在サーヴァントを統べるところの諸君らにとつて、この刻印は貴重極まりない価値を持つ筈だ。これを八番目のサーヴァントを討ち取った者に進呈する事を約束しよう」

「バーサーカー？ 如何したのですか？」

ドガアアアアーン！！！！

「……そ、その通りだ。聖杯戦争に於いて数少ないルールを破ったのだ。赦しておける事ではない」

205

師も裁かれるべきだろう。こんなルール違反を行っていたんだからな」

ブラックはそう呟くと共にロングコートの中からテープレコーダーを取り出し、セイバーと璃正、そしてその場にいる他のマスターの目と耳の役を担っている使い魔達の前でスイッチを入れる。

「――カチッ!!」

「父上、師よ。提案なのですが第八のサーヴァントが全てのサーヴァントに教会に対する不審を植え付ける前に一度全てのマスター達に招集を掛けては如何でしょうか？」

「如何言うことだ綺礼？」

「つまり、不審が植え付けられる前に第八のサーヴァントを名乗る者を聖杯戦争を混乱に追い込むイレギュラーだと断じるのです。そして第八のサーヴァントを倒した者には褒賞を与え、私達に対する不審を払拭させるのです。無論、見返りとして用意する褒賞はそれ相応の物ではないと無理でしょうが」

「フム、確かに良い策だ」

「ええ、確かに綺礼の策ならば我々への不審は少しは払拭出来るでしょう。褒賞には私に心当たりが在ります。そして他のサーヴァント達によって消耗している隙を衝き、アーチャーが第八のサーヴァントを仕留め、相手が握っていた証拠をアサシン達を使って抹消すれば全て終わりです」

「その案が良いですな。これで私達への疑いも消えると言うもので

す」

「なっ!?!」

テープレコーダーから流れた自身の息子である綺礼と時臣、そして自身の昨日の夜の会話に璃正は目を見開きながら驚愕の声を上げた。

何故あの会話の内容が記録されたテープレコーダーなどに記録されているのかと璃正は、驚愕と困惑に満ち溢れながらブラックを見つめるが、ブラックは構う事無く璃正に近づき、その首を掴み上げる。

「――ガシッ!!」

「ガッ!!」

「一番のルール違反者は貴様とその息子、そして遠坂の魔術師だった。だから八番目はお前達を襲ったのだろう……さて、貴様の言葉どおりならばルール違反者には罰則が必要らしいな」

「事実無根だ!! そのような声などの証拠など幾らでも作り上げられる!!」

「なるほど、確かにその通りだ。では、これは如何だ?」

璃正の言葉にブラックは納得したように頷きながら左手をロングコートの中に入れて、今度は小型のビデオカメラを取り出し、液晶部分を開いて璃正と綺礼が魔術機を使って時臣と秘密裏に会話を繰り返している映像を流しだす。

「なっ！？ば、馬鹿な！？」

「警備が甘過ぎるぞ。たかだがアサシン一体で防衛などするのは間違いだっとな。俺にも【気配遮断】のスキルが在る事を知らなかったのか？」

「アッ・・・・・・・・」

もはや璃正は言葉も出す事が出来なくなってしまった。

全てが八番目と自身の首を掴んでいるブラックの策略だと気がついたのだ。でなければ此処まで用意周到に準備をしている筈は無い。更にブラックは持っていたビデオカメラをセイバーに放り投げ、セイバーも確かに教会の中立などではない一方的な時臣への支援に納得したように頷き、険しい視線を璃正に向ける。

「これは完全にルール違反ではないですか！！教会の中立とはこのような一人のマスターに支援を行い、サーヴァントが生きていながらもマスターを保護する事を言うのか！？」

そうセイバーが叫びと、時臣の使い魔を囲むように二体の使い魔が動き、ブラックは内心で細く微笑みながら声を出す。

「貴様は自分でルール違反者は罰則すべきだと言ったな。ではその罰則は他のマスター達も納得出来るモノが良いだろう。第一に教会のルール違反に対して貴様の持っている令呪を一つずつ他のマスターに差し出すと言うのは如何だ？そして今後は完全に俺達の戦闘で発生した被害の事後処理だけを行う」

『その話には納得だ。令呪が貰えるのは僕としては嬉しい』

ブラックの言葉に頷くようにウェイバーも頷いた。

何せ今後教会から余計な横槍が無くなる上に、戦いの切り札と言える令呪も貰えるのだ。

イスカandalのともない提案で他のサーヴァントの情報は手に入らなくなったが、切り札の令呪が更に一つ増えるのなら寧ろブラックの提案に乗るべきだと戦略的観点からウェイバーは判断した。

もう一体の使い魔の主である切嗣も自身とセイバーとの関係を考えるならば、新たに令呪は得ておきたい。ただでさえ無駄に令呪を使用してしまい、セイバーとの関係はもはや修繕が不可能な状態なのだ。セイバーに裏切られない為に首輪は多い方が良く切嗣は判断していた。

自身の姿とセイバーの本来のマスターが自分で在る事はばれてしまうが、既にブラックとルインと言う二人の規格外がある現状で令呪が二つと言うのは頼りないと判断して、ブラックの提案に頷くように使い魔を頷かせる。

その様子を確認したブラックは璃正に対して殺気を僅かに送りながら、二つ目の要求を告げる。

「第二の要求はルール違反者の遠坂の魔術師に対してだ。俺と俺のマスターと遠坂の魔術師、そしてそのサーヴァントであるギルガメッシュと今夜戦う事が罰則だ。俺と俺のマスターを倒せば遠坂の魔術師とギルガメッシュは今後も聖杯戦争に参加していいぞ」

「待つて下さいバーサーカー！！それでは罰則が緩すぎます！！更には貴方の個人的な要求ではないですか！！」

「フツ、その戦いを他のマスターやサーヴァント達は見学しても良い。もちろん下らん横槍はなしだがな。少なくとも英雄王と俺の全力の戦いだ。互いに宝具の出し惜しみなどせずに戦う事になるだろ

う」

「ッ!」

ブラックの告げた言葉にセイバーは目を見開き、使い魔の主達も考え込む。

つまりギルガメッシュとブラックを戦わせれば互いに潰しあいを行ってくれるだけではなく宝具さえも晒すという事になる。それを見学出来るとなればブラックのマスターの正体も分かるだけではなく、正体が不明だったブラックの事も知る事が出来る。

例えギルガメッシュが生き残ってもギルガメッシュの宝具も知る事が出来るのだから、セイバー達からすればメリットが在り過ぎる。その様に全員がブラックの提案について考え込んでいる間、時臣は如何すれば状況が自分に良くなるのか考え込んでいた。

ブラックの提案は確かに自身が今後も聖杯戦争に参加する事が出来るメリットが存在しているが、ギルガメッシュの宝具の全てが明らかになってしまふデメリットも在る。だが、この場でブラックの提案に乗らなければルール違反者として残されている全てのマスターとサーヴァントを敵に回してしまう。

幾ら人類最高の英雄王とは言え、残された全てのサーヴァントに勝てる確率は限りなく低い。如何あってもデメリットしかない提案を受けざる得ない状況に時臣が悔しげに顔を歪めていると、ブラックが最後の要求を璃正につきつける。

「最後の要求だ。教会で保護などと言う言葉を使って守っているアサシンのサーヴァントのマスターをすぐに聖杯戦争に復帰…」

「その必要はないぞ、バーサーカーよ」

「ん?」

突然に響いた第三者の声にブラックとセイバーは声の聞こえて来た方に顔を向けてみると、骸骨の仮面を被って漆黒のローブを羽織った女・アサシンのサーヴァントを横に従えた綺礼がゆっくりと部屋の中に入って来た。

その姿を確認したセイバーは瞬時に武装化を行い、不可視の剣を綺礼とアサシンに向かって構えるが、綺礼もアサシンも構わずに前に進み、ブラックに声を掛ける。

「私はこの聖杯戦争を降りよう。その代わり父を赦して貰いたい」

「戯言を言うな！！お前は既に私達を謀っていた！！今更お前の言葉などこの場にいる誰もが聞く耳もたん！！」

「セイバー、君の怒りは当然だろう。私は師と父の為とは言え重大なルール違反を行ったのだから・・・父上、如何かお赦し下さい。私が余計な考えを告げた為にこのような事態を引き起こしてしまいました・・・この罪は赦されないでしょう。ですが、私は父上を助けたいのです」

「綺礼ッ！！」

顔を下に俯かせながら上げた綺礼の僅かに悲しみに満ちた声に、璃正は思わず嬉しさと悲しみが混じった涙を流してしまう。

自身の自慢の息子が自分を助ける為に身を差し出そうとしている。その事実が璃正にとっては途轍もなく嬉しく感じ、心の底から今の瞬間に立ち会えた事が嬉しかった。

しかし、そのような思いを父が持っているの知りながらも、今の場を作り上げた綺礼は顔を下に俯けながら薄く笑っていた。

（フフフツ、我ながら空々しい演技だ。父はともかくとして同類や他の者達は完全に私を疑っているだろう……。それも今消える！アサシン！やるぞ！！）

（御意！！）

綺礼のレイラインを通しての言葉にアサシンは即座に頷いた。

それを確認する共に綺礼は素早く手を顔にやり、ゆっくりと涙に濡れた目をして立ち上がり、令呪が存在している手の平を逆の手で押さえながらブラックとセイバーに顔を向ける。

「私はこの場で聖杯戦争から本当に離脱した証拠を見せよう……。アサシン……。赦してくれ」

「いえ、私は貴方にお仕え出来た事を誇りに思います。如何か生き残って下さい主殿」

「アツ……」

セイバーは思わず綺礼とアサシンの間のやり取りに声を上げてしまった。

今の二人のやり取りの間には、自身と切嗣には無い信頼関係がセイバーには見えたのだ。

そして思わずセイバーが羨望の眼差しを綺礼とアサシンに向けていると、綺礼は悲しみに満ち溢れた顔をしながら令呪を使用する。

「令呪に於いて命じる……。アサシンよ……。自害しろ」

「御意！！」

「ードスッ！！」

「ッ！！」

「・・・・・・・・」

絶対命令権の令呪を使用されたのに関わらず、アサシンは嬉々として自身の持っていた短刀を深く心臓に突き刺した。

その何の躊躇いも無い自害の姿にセイバーは目を見開き、ブラックは訝しげな視線を床に倒れ伏しているアサシンと綺礼に向ける。

しかし、綺礼はブラックにもセイバーにも構わずに消えようとしているアサシンの手を握り、悲しみに満ちた声でアサシンに語り掛ける。

「アサシン・・・大儀であった」

「・・・・・・・・主殿・・・・如何か生き残って・・・・・・・・下さい・・・・・・・・ませ」

「ーシューン！！」

アサシンは最後の言葉を告げると共に消滅し、綺礼は目を伏せながらゆっくりと立ち上がり、部屋の扉の方に足を向ける。

「・・・・・・・・これで私はサーヴァントの前では無力な存在になった・・・・後ろから斬りたければ斬るがいい。殺しに来なければ来るのだな・・・・だが！アサシンの最後の願いを全力で私は護らせて貰う！！」

「・・・・・・・・貴様の名は？」

「言峰綺礼だ。バーサーカーよ」

「フン、面白い。貴様の名は覚えておく」

「……それは嬉しい事だ」

そう綺礼はブラックの言葉に答えると共に足を前に進め、部屋から出て行った。

その背にセイバーは斬る事も質問する事も出来ずに悩んだ顔をし  
ながら横に顔を向けていると、璃正は顔を俯かせながら自身の首を  
掴んでいるブラックに声を掛ける。

「……バーサーカーのサーヴァントよ……君の要求を全て  
聞きいれよう。本日の夜十二時に君とギルガメッシュの戦いを監督  
役の最後の権限を使用して行う。場所は君が要求する場所で構わな  
い。令呪も各マスターに一つずつ配布する……その代わりに今日  
一日だけは息子の綺礼には手を出さないでくれたまえ」

「……フン、良いだろう」

「ードサツ！」

ブラックは璃正の言葉に頷くと共に手を離し、険しい瞳を綺礼が  
出て行った扉に向けるのだった。

信者室から出た綺礼は迷わずに自身の私室の中に移動し、用意し  
ていた道具類を手早く纏め上げると、誰も部屋を監視していない事  
を確認し、思わず口元に笑みを浮かべて大笑いしてしまう。

「クククククッ！！ハハハハハハハハハハハッ！！！！やったぞ！私の策は成功したのだ！！」

綺礼はそう歡喜に満ちた笑い声を上げながら、自身の手の平に存在している“二画”欠けた令呪を見つめた。

それと共に綺礼の横に霊体化して隠れていたアサシンのサーヴァントの本体・ハサン・ザッバーハが現れる。先ほどブラック達の前で死んだアサシンはアサシンの宝具を使って現していた別のアサシンだった。

綺礼は先ず一番最初の令呪で、『二度目の令呪の命令に従うのは、本体ではなく別のアサシン一体だけ』だと命じて於いたのだ。全ては完全に今度こそアサシンを死んだように思わせる為に。

令呪と言う絶対命令権を使用してまで自害させたのだから、今度こそアサシンは完全に死んだと誰もが思うだろう。

何よりも今回の策にはアサシンも協力的だった。今までは時臣の命令だけに従っていた綺礼が遂に自分の意思で動く事を決意して、聖杯を求めたのだと彼らは思っていた。今度こそ自身と綺礼の本格的な聖杯戦争が始まると喜びながら準備を終えた綺礼に付き従う。

「恐らく今日の同類とギルガメッシュとの戦いでは衛宮切嗣も動くだろう。奴の事だ。戦いを終えて疲弊している同類のマスターか師を狙って来る。お前達は奴を監視して隙在らば殺すのだ。或いはセイバーと奴の繋がりである令呪が存在している腕を切り捨てろ。それだけで奴は終わる」

「ハッ！すぐさま他の者達にも命じます！！」

綺礼の言葉にアサシンは頷き、即座に自身の体を霊体化させてそ

の場を去って行った。

それを確認すると綺礼はゆっくりと荷物を手に持ち、外に出ようとするが、フツとその足は止まり、自身の机の上に置かれている聖書に顔を向ける。

「……………フツ、神よ感謝するぞ。私に同類と出会わせてくれた事を……………だが、やはり私には貴方は必要ない!!」

——ードスッ!!

言葉と共に綺礼はカソックの中から代行者が最も好んで使う武器

- 【黒鍵】を抜き取り、殆ど抜き打ちで聖書を貫いた。

「私が求めるのは同類との対峙だ……………さあ、始めよう。私の聖杯戦争を……………フフツ、ハハハハハハッ!!」

綺礼は僅かに狂気が混じった笑い声を上げながら今度こそ部屋を出て行き、後には【黒鍵】に貫かれている聖書だけが机の上に残されたのだった。

## 第十六話 英雄王と死闘を開始する恐怖

夜八時。ブラックの視界を通して教会での出来事を全てを見ていた雁夜は第二の拠点で闘志を燃やしていた。

漸く待ち望んだ時が来た。あの自身が求めていた全てを手に入れながら、それを何も考えずに貶めた魔術師・遠坂時臣と戦う時が訪れたのだ。

その上余計な横槍は少なくとも戦いが終わるまでは無い。ブラックにギルガメッシュを任せて、自身は時臣と戦い、必ず桜が味わった絶望と苦痛を叩き込むと雁夜は誓っていた。そして桜を必ず葵と凜の下に帰す。

（もうすぐだ！！もうすぐ俺は望みを叶えられる！！桜ちゃんを必ず葵さんと凜ちゃんの所に帰すんだ！！）

――ギユウ！！

待ち望んだ時が遂に来た事に雁夜は歓喜し、手に持っていた待機状態のデスヘルを強く握った。

本来ならば戦いの前ならば冷静になるべきなのだろうが、今の雁夜は冷静になる事が出来なかった。冷静になれる筈もないだろう。雁夜はただこの時の為だけに自身の命を削って魔術師になったのだから。

もしかしたら他に桜を救い出す方法も在ったのかもしれない。だが、雁夜には魔術師になって聖杯戦争に勝利する以外に桜を救い出す方法は思い浮かばなかった。

そしてフツと雁夜はもし自身がブラックではなく別のバーサーカーを召喚していたらどうなっていたのだろうか考える。

（……恐らくはバーサーカークラスの特徴でマトモに戦う事も出来なかっただろうな……もし運命の神などが本当にいるのなら、俺は感謝する。ブラックと言う最強のサーヴァントを俺の所に送り届けてくれたんだから）

そう雁夜は改めてブラックとルインを召喚出来た事に感謝しながら立ち上がり、部屋の扉に向かおうとすると、僅かに扉が開いて自身の事を心配そうに見ている桜を発見する。

「ん？如何したんだい桜ちゃん？」

そう雁夜が自身を見つめている桜に質問すると、桜はたどたどしく部屋の中に入って来て雁夜を心配そうに見つめる。

「……カリヤおじさん。今日もお出かけするの？」

「ああ……ゴメンね、桜ちゃん。だけど今日で多分終わるよ。今日で全部終わるんだ。明日からは桜ちゃんは遠坂家に戻れるんだ」

「……でも、病気なんでしょう？カリヤおじさんに無茶はして欲しくないよ」

「……優しいね桜ちゃん。大丈夫だよ。おじさんはルインフォースお姉さんの治療を受けているからね。病気も、もうすぐ治るよ」

雁夜はそう言いながら、心配そうに自身を見ている桜の頭を優しく撫でた。

出来るだけ雁夜は桜には心配を掛けたくはなかった。桜は幼いながらも聡い子だ。

自身やブラック、ルインが夜に何かをしている事を理由は分から

ないながらも気がついていいるのだろう。流石に一緒に暮らしているのだから隠しきれぬ事ではない。

しかし、それでも雁夜は今起きている事を桜には知られたくは無かった。偽善だとは思っている。

遠坂家に戻れば桜は自身の記憶から一年経っている事を知るだろう。その一年の間を知るのは雁夜とブラック、ルイン、そして今は何処に居るかも分からない雁夜の実の兄である間桐鶴野だけである。そして雁夜はその一年の間の桜をブラックに命じて殺した。

（俺は桜ちゃんを殺したんだ。この罪は絶対に赦されない。残された命の全て俺は桜ちゃん、凜ちゃん、葵さんの笑顔の為に使う）

雁夜はそう内心で誓いながら、不安そうに自身を見つめている桜を安心させようと声を掛けようとするが、その直前にデスヘルが念話で雁夜に声を掛ける。

《マスター、市内を探索しているサーチャーの中にとんでもない映像が映し出されました》

（何だって？まさか、例のアサシンのマスターに動きがあったのか？）

デスヘルの報告に雁夜は僅かに困惑した声を出しながら、一番可能性が高い件が思い浮かんだ。

確かに昼間に言峰綺礼は自身のサーヴァントを令呪によって自害させた。だが、ブラックは全く信じていない。そもそも今回のアサシンは一体で在りながらも複数の存在と言う特殊な存在。

それを利用すれば再びアサシンを死んだように見せ掛ける事など簡単に出来る。令呪に関しても綺礼は自身の手の平の上に手を載せていたのだから、無くなったかどうかの確認も出来ていない。

だからこそ、ブラックは全く綺礼の今回の件は全く信じていなかった。恐らく他のマスター達も同じだろうが、今日一日は綺礼に対して行動を起こす事は出来ない。行えばその瞬間に新たな令呪の配布も時臣との決戦の話もなくなってしまう。

ブラックはその事も在る為に今日一日は綺礼に対してはサーチャーの監視を行っても、直接手を出す訳にはいかなかった。

雁夜もその事は事前に知らされていた為にデスヘルの緊急報告はその件だと思ったが、デスヘルの報告はそれ以上に雁夜を驚愕させた。

《違います……ですが、マスターにとっては由々しき事態でしょう。マスターが持っている写真に写っていた少女 - 遠坂凜が市内の中に現れました》

「ッ！……凜ちゃんが現れただって？」

「カリヤおじさん？如何したの？お姉ちゃんがどうかしたの？」

顔を急に驚愕に染めた雁夜の姿に桜は首を傾げながら質問するが、雁夜は答える余裕も無くすぐさま部屋の中に置かれているサーチャーを操作する機械をデスヘルの指示通りに弄り、サーチャーの映像を投影すると、確かに夜の冬木市の街中を徘徊している七歳の少女 - 遠坂凜が映し出されていた。

冬木市街中駅近く。

遠坂凜は母親の実家である禅城の家を抜け出し、聖杯戦争が行われている地へと一人でやって来ていた。

理由はただ一つ。自身の友達であるコトネを襲った謎の怪異と黒

き男を見つける為だった。

遠坂凜は魔術師の家の子供である。その為に今冬木市で起きている事を全貌までは分からないまでもおぼろげには理解出来ている。数が少ないながらも子供が行方不明になり、ホテルの火災とそれに伴う倒壊。

その原因が自身の父親が挑んでいる聖杯戦争に関係している事を理解している凜は、幼いながらも優秀さを表していた。しかし、それ故に凜は責任感に苛まれてしまった。

自身の友達であるコトネは眠っている時に激しい激突音や何かが潰れるような音を聞いて窓の外を窺ってみると、全身を黒い服で覆った男と変な化け物が何かをしているのを目撃したと凜は聞いていた。

それだけではなくその目撃情報は凜の通っている小学校内でも知れ渡っていた。もしかしたらその黒い男と化け物こそが子供達を行方不明にしている元凶なのではないかと凜は考えた。

そしてその中にはもしかしたら間桐家に養子として差し出された自身の実の妹で在る桜が居るかもしれないと、凜は考えてしまった。幾ら尊敬している父親の考えで養子に出されたとは言え、凜自身は心の底では桜とずっと一緒に居たかった。だが、その想いは隠し通さなければいけない。魔術師と生きると決めている凜は、父親の考えには逆らう事は出来ない。

しかし、その隠していた想いが吹き上がる事件が起きてしまった。“間桐家そのものが突然に大爆発を起こして消滅してしまった”。そして家の者が全員行方不明と言う放送がテレビで報道された。当然ながらその放送は禅城に居た凜と葵も目にして、二人とも桜が行方不明になってしまった事に悲しんでいた。

そんな中凜が自身の学校で聞いた情報から、もしかしたら桜は死んではないかもしれない。ただ黒い男と化け物に攫われただけかもしれないと考えてしまった。

そして凜はそんな一縷の望みに賭けて禅城の家から抜け出し、夜

の冬木市の街中から黒い男を捜していた。

（コトネの話だと黒い男は背が高く目目は金色だったと言うから、目を見ればすぐに分かるわよね。それに多分その男はサーヴァント。絶対に見つけて桜の居所を聞き出すんだから！！）

凜はその男こそが桜の居所を知っている思い込んでいた。

最も凜自身の心の奥底ではその可能性は無いに等しい事を理解していた。本当は桜は死んでしまったかもしれない事に凜は気がついていて。それでも信じたかった。

桜は死んではない。きっと何処かで生きていると。

今更自身が桜の姉だと凜は胸を張って言う事は出来ない。その資格は一年前に失ってしまっている。

もし本当に桜を大切に思っているのなら一年前に父の考えを何が何でも否定しなければいけなかった。

もしかしたら桜は自身を捨てた父や母、そして自分を怨んでいるかもしれない。二度と会いたくないと思われるかもしれない。

しかし、それでも凜は桜の無事を確認だけはしたかった。生きている桜の姿だけは何が何でも確認したかった。だからこそ、凜は父母の言い付けを破って夜の冬木市に手持ちの小銭を持って戻って来た。

凜の武器はたったの三つ。時臣から誕生日プレゼントとして貰った方位磁石の形をして、魔力が大きな方向を針で示す魔力針。宝石魔術の修行で生成した開放すれば小規模な爆発を引き起こす事が出来る水晶片が二つ。

如何考えても凜が捜し求めている男には何の役にも立たないとしか考えられない物だが、それでも凜は大真面目に目的の人物・ブラツクを捜し歩いていた。

（え〜と・・・魔力針が示しているのはあっちね。絶対に見

つけるんだから！！）

凜は意気込みながら魔力針が指し示す方に向かって歩き出す。

連日の事件の影響なのか、パトカーの数も多く、回転灯の光が其処かしこで見えるが、凜はそれから隠れるように路地裏をゆつくりと警戒しながら歩いて行く。

こんな時間に子供が一人で歩いているのは普通に考えれば可笑しい。警察などに見つけられれば、即座に凜は保護されるだろう。

目的を遂げた後ならばともかく、まだ目的にも到達していないのに見つかる訳にはいかない思っている凜は人目を避けるように路地裏を進んでいく。

その背後の闇から凜の後をつけて様子を窺っている人影の存在が居る事にも気がつかずに。

（間違いなく彼女は遠坂時臣の実の娘。こんな夜中に一人で歩いている理由は分かりませんが、これはチャンス。彼女を人質に取れば万が一、遠坂時臣が勝利した時に切り札になる）

凜を見つめている影の正体は、切嗣の補助機械で在る久宇舞弥だった。

今日のブラックとギルガメッシュとの決戦には教会に集まった全てもメンバーが見学しに来ると考えた切嗣は、事前にブラックが指定した決戦の場所の狙撃が行い易い陣地取り行っていた。ブラックが告げた要求は戦いが終わるまでの横槍の無し。

戦いが終わった瞬間に切嗣と舞弥は狙撃を行い、生き残った方のマスターを射殺するつもりなのだ。そして八番目を名乗ったルインを発見する事も目的だった。

昼間の教会の件を考えれば、ルインがアイリスフィールを攫ったのはアサシンと言う情報は嘘なのは間違いない。そしてアイリスフィールを攫ったのはブラックかルインのどちらかだと切嗣と舞弥は

考えていた。

教会の件は如何考えてもブラックとルインの手の平で踊っていたように切嗣は感じていた。もしブラックとルインが本当に手を結んでいれば、この聖杯戦争の勝利者候補に名を連ねる事になる。

絶大な力を持った究極の狂戦士に、キャスターのサーヴァントの最強に名を連ねても可笑しくないほどに卓越したイレギュラー。この二人が本当に手を組んでいるとすれば、聖杯戦争の最大の障害になると切嗣も舞弥も考えていた。

そしてもし本当にアイリスフィールを攫った犯人がルインだとすれば、アイリスフィールに隠されている秘密が明らかにされてしまう可能性が高い。それを他のマスターやサーヴァントに知られる訳には絶対にはいかなかった。知られれば他のマスターもサーヴァントも躍起になってアイリスフィールを狙って来る。だからこそ今日の決闘で切嗣と舞弥はブラックとギルガメッシュの両方とも消えて貰うつもりだった。

その為に切嗣と舞弥は事前に決闘場所ですべてと準備を行っていたのだ。そしてそんな時に舞弥は路地裏を移動している凜を発見した。遠坂家に対する事前の調べで凜の顔は知っていたし、凜が時臣の娘である事も舞弥はもちろん知っている。

此処で凜を捕まえれば、決闘の勝利者が時臣とギルガメッシュだった場合の切り札を得る事が出来ると舞弥は考え、凜に気がつかれない様にソツと背後に忍び寄り、凜を気絶させようと動く。

しかし、その直前に凜が進んでいた方向の暗がりの中から一振りの剣が高速で放たれ、舞弥の右頬を浅く切り裂きながら壁に突き刺さる。

――シュン！！ドスン！！

「ッー！！」

「えっ!？」

突然飛来した剣に舞弥は目を見開き、事態が分からなかった凜は慌てて背後を振り返り、自身に手を伸ばしながら固まっている舞弥を目撃する。

その姿に凜は自身に危機が迫っていた事を漸く気がつき、慌てて舞弥から離れようと前に向かって駆け出そうとするが、その前に前方の暗がりの中から黒いロングコートを着て全身を黒で染めた服で覆っている背の高い金色の目の男・ブラックが現れる。

「氣に入らん奴がキャスターの他にも居たようだ……今日はギルガメッシュとの戦いが在るから見逃してやる。さっさと失せる人形」

「クッ!！」

ブラックの殺氣が混じった声に、即座に舞弥は踵を返して路地裏の闇の中に消えて行った。

それをブラックは確認すると、目の前で恐怖に震えながらも毅然と自身を見つめている凜に顔を向ける。

「こんな夜に子供が一人で居るのは自殺行為以外の何ものでもないぞ。それとも死にたくてこの場に現れたのか？」

「……ち、違うわ……あ、貴方を探しによ」

「ほう、面白い話だ。力も無いお前が俺に何の用だ？」

「……さ、さくらを……私の妹を……あ、貴方が連れ去ったんでしょう!？返して!？」

「・・・・ククククッ、ハハハハハハハハハハッ！！返してか？笑わせる。貴様ごときが俺に命令出来ると思っているのか？」

―――シュン！

ブラックは言葉と共にその右手に戦斧を出現させて凜を脅すように声を掛けた。

その言葉と凄まじい魔力を宿している戦斧に、凜はガチガチを歯を鳴らしながら恐怖に震える。

目の前にいるブラックは、自身が何をしても勝てない存在だと本能的に理解していた。持っている水晶片など発動させる間もなく殺される。

見習いとは言え魔術師として生きる事を決めている凜には、その未来図が頭の中に思い浮かぶ。

このままブラックに殺される。何も出来ずに一瞬で殺されてしまう。

そんな考えが凜の頭の中に思い浮かんだ瞬間、凜は迷い無く足の前に一歩踏み出し、ブラックを睨みつける。

「桜の居所を教えなさいよ！！」

「ほう、如何やら本気で殺されたいようだな」

「ウッ、それでも桜の所に私は行くわ！！殺されたって、アンタから桜の居所を聞き出す！！私は桜のお姉ちゃんなんだから！！」

「・・・・フッ、面白い小娘だ」

ブラックは凜の言葉に僅かに口元を面白げに歪め、右手に持っていた戦斧を消し去ると、凜が反応する事が出来ない速さで服の襟を掴み上げる。

――ガシッ！！

「キャッ！！下ろしなさいよ！！」

「黙っている。貴様が会いたがっている小娘の所に案内してやる」

「えっ！？そ、それってもしかして！？」

「喋っていると舌を噛むぞ」

――ビュン！！

「キッ！！キャアアアアアアアアアア——！！！！！」

服の襟を掴まれながら、ブラックと共に突然に空へと舞い上がった凜は絶叫を上げるが、ブラックは構う事無く一直線に雁夜と桜が居る場所へと向かうのだった。

冬木市に存在する噴水が存在している公園。

雁夜と桜はその場所に在るベンチに腰掛け、ブラックが凜を連れて来るのをジッと待っていた。

サーチャーで凜の姿を発見してからすぐに雁夜はブラックに、凜を今自分達がいる公園まで連れて来てくれと頼んだのだ。

今の冬木市は凜にとつては最大に危険な場所。万が一切嗣に発見

でもされれば、凜は時臣に対する切り札として即座に人質に取られてしまう。

それはもちろん雁夜にも言えた。雁夜は桜はもちろんだが凜と葵も人質に取られたら手が出せなくなる。そう言う時の為に桜には保険を掛けては在るが、凜と葵には何もしていない。

早く凜の無事を自身の目で確認したいと雁夜は焦りながら、桜の手を握っていると、上空からブラックが急降下し雁夜と桜の前に着地する。

「ードオン!!」

「連れて来たぞ」

「フェ〜〜」

「凜ちゃん!!」

「お姉ちゃん!!」

ブラックが差し出して来た目を回している凜の姿に、雁夜は急いで駆け寄り、桜も心配そうに凜に駆け寄る。

その声に凜は回っていた目の焦点が徐々に合っていき、自身の目の前で心配そうに自身を見つめているただ一人の妹・桜・を発見する。

「桜?本当に?」

「うん!お姉ちゃん大丈夫!」

「桜・・・桜!!桜!!」

――ガシッ！！

桜の無事な姿を目撃した凜は慌ててブラックの手から逃れ、嬉し涙を流しながら桜に抱きついた。

突然の自身の姉の行動に桜は目を見開くが、すぐに凜との再会に桜も嬉し涙を流しながら凜の体を抱き締め、二人は涙を流しながら互いの再会を喜び合う。

その様子を僅かに右目に涙を溜めながら見ていた雁夜も、思わず嬉しげな笑みを口元に浮かべてしまう。目の前の光景こそ雁夜が待ち望んでいた光景。

それを不完全では在るが見る事が出来た事に雁夜は今日此处に自分が居る事を心から喜び、再会を喜び在っている二人から僅かに離れ、ブラックに声を掛ける。

「ブラック・・・本当にありがとう」

「フン、礼はまだいらん。今の光景をずっと続かせる為にお前は戦っているのだから」

「ああ・・・そうだな」

雁夜はブラックの言葉に深く頷き、目の前の光景を続かせる決意を新たに固める。

互いに再会を喜んでいる凜と桜。片方は少し前に別れたと思っているが、真実は違う。だが、それでも雁夜は目の前の光景を二度を失わせる訳にはいかない。

そしてそれを失わせる可能性が高い男とこれから決戦に赴かなければいけないのだ。

それを悟られないように雁夜はゆっくりと凜と桜に近寄り、凜に

優しく声を掛ける。

「久しぶりだね凜ちゃん」

「ッ！！・・・カリヤおじさんなの？」

「ハハハッ、ああ、そうだよ・・・ちょっと病気にかってね・・・」

自身の姿を見て僅かに怯えた顔をした凜の姿に雁夜は苦笑いを浮かべるしかなかった。

凜の反応は無理もないと雁夜は思っていた。初期化された桜にも最初は誰なのかも分からずに怯えられたのだから、凜の反応は当然だと雁夜は考えている。

しかし、それでも変わり果てた姿になっても自身だと凜に気がついて貰った事を雁夜は内心で嬉しく思いながら、凜に用件を伝える。

「凜ちゃん。実はね。君も知っていると思うけど、間桐家が無くなってしまったんだ。だから桜ちゃんは遠坂家に戻れるんだよ」

「・・・本当？」

「そうだよ。おじさんは間桐だけど、絶縁しているからね。間桐の魔術も詳しく無いから教える事も出来ないんだ。だから桜ちゃんは遠坂に戻るんだ」

雁夜はそう優しく諭すように凜に声を掛けた。

そして雁夜の言葉の意味を理解した凜は嬉しそうに桜を強く抱き締めた。

子供であり、見習い魔術師の凜には雁夜の言葉の深い意味までは

分らない。それでも桜が帰って来る事実は理解し、心の底から嬉しそうな笑みを浮かべる。

桜も改めて自分が遠坂家に戻れる事実を理解し、二人は本当に嬉しそうに顔を綻ばせていると、突然に公園の入り口の方から焦りに満ちた女性の声が響く。

「凜ッ!!」

「あ、お母様!!」

「ッ!!.....」

聞こえて来た声に凜は喜びの声を上げ、雁夜は僅かに辛そうに顔を歪めた。

それと共に雁夜がゆっくりと声の聞こえて来た方に目を向けてみると、凜や桜に似た顔立ちをしている女性。二人の実の母親である遠坂葵が荒い息を吐きながら公園の中に入って来ていた。

葵は凜が居ない事に気がついてからすぐに車を走らせ、冬木市にやって来たのだ。

そして自分達がよく来ていた公園に最初にやって来て、凜を発見した。

愛娘が無事だった姿に葵は安堵の息を吐き、ゆっくりと凜を抱き締めようと近づくと、凜の横に立つ桜を目にし、信じられないと言う顔をしながら桜に質問する。

「.....桜なの?」

「.....うん、お母様」

「——ガシッ!!」

「ワッ!!」

「お、お母様？」

いきなり自分達を抱き締めた葵に凜と桜は驚くが、すぐに葵が目から涙を流している事実がにつき、声を出す事が出来なくなった。一方の葵は凜と桜の無事な姿が本当に嬉しかった。特に桜に関しては葵も諦め掛けていた。

自身の夫である時臣にも桜の無事を確認する事が出来ず、半ば葵は桜がもうこの世にはいないと思っていた。葵も確かに桜を養子に出す事は了承した。

魔術師の家に生まれたのだから仕方がないのだと自身を納得させていた。しかし、桜の生死が不明に成った時に葵は心の底から後悔した。もし自分だけでも桜の養子に反対していれば、桜は死なずに済んだかもしれない。

そう思っても、もはや遅いのだと自身の胸の内に後悔を募らせていたが、今自身の腕の中には自身が生んだ子供達が二人とも無事な姿で居る。その事が堪らなく嬉しいと思いつながら、葵は声を押し殺して泣き続ける。

そしてしばらく続いた三人の親子の抱擁が終わると、漸く冷静になった葵が立ち上がり、凜と桜を救ってくれたと思う二人の男性に声を掛ける。

「……娘達を助けて貰って本当にありがとうございます」

「……気にしないでくれ葵さん」

「ッ!!……ま、まさか?……か、雁夜君なの？」

聞こえて来た雁夜の声に葵は限界まで目を見開き、最後に会った時から変わり果てた雁夜を見つめる。

雁夜はそれも仕方ないと心の底から思うが、その感情を押さえ込み、葵に背を向ける。

「桜ちゃんと凜ちゃんを連れて帰るんだ。俺はこれから……最後の間桐の魔術師として時臣に話をツケに行く」

「ッ！……か、雁夜君……まさか間桐に？」

「……戻った。そしてその結果がこの体だ……そして桜ちゃんも同じ目に在っていたんだ」

「ッ！！」

雁夜の言葉に葵は再び驚愕し、自身と雁夜のやり取り心配そうに見つめている桜に顔を向けた。

目の前の変わり果てた雁夜が受けた何かを桜も受けていた。それが事実だとすれば、桜の体にも何かが在るのではないのかと心配そうな顔を見ると、雁夜はそれを否定するように声を掛ける。

「安心してくれ。桜ちゃんの体にはもう何の異常も無い……. . . . . けど、桜ちゃんは遠坂家を出てからの一年を覚えていない」

「……何が在ったの？貴方と桜に一体何が？」

「……知らない方がいい……. . . . . だけど、覚えておいてくれ葵さん……. . . . . 他の魔術師の家は遠坂のような家とは限らない……. . . . . “養子にした子供を虐待して道具にするぐらい平然とやるのが魔術師なんだ”」

ーードサッ！！

「お母様！？」

「だ、大丈夫！？」

地面に膝をついた葵に凜と桜は心配そうに声を掛けるが、葵は答える事が出来ずに、凜と桜を大切そうに抱き締め、桜を悲しげに見つめる。

雁夜の言葉が真実だとすれば、桜はこの一年間ずっと虐待を受け続けていたと言うことになる。もしそれが事実だとすれば、桜をそんな目のあわせた一端を担ったのは紛れもなく養子に出す事を了承した自分自身にも在る。

その事実には葵は顔を青ざめさせ、雁夜はその様子に辛そうに顔を歪める。

本当は葵にも桜に何が在ったのかを知られたくはなかった。もし知れば葵は心の底から後悔する。

そんな顔を雁夜は葵には本当はさせたくは無かった。だが、それでも自分やブラックが敗北した時の保険は残しておきたかった。自分達が敗北すれば時臣は確実に桜を再び何処かの魔術師の家に養子に差し出すだろう。

それだけは何としても防がなければいけない。だからこそ、雁夜は僅かながらも真実を話し、桜を養子には出させない理由を葵に与えたのだ。

「（すまない葵さん・・・赦してくれ）・・・俺は時臣と話し合いに行く・・・葵さんは凜ちゃんと桜ちゃんを連れて行くんだ・・・そして聖杯戦争が終わるまでは何が在ってもこの街には来ないでくれ・・・今のこの街は途轍もなく危険な場所だから・・・桜

ちゃんを頼む・・・俺には時間が無い」

「雁夜君！まさか！？」

雁夜の言葉の意味が分かった葵は悲鳴のような声を上げるが、雁夜は構わずに前に向かって歩き出し、黙って様子を見ていたブラックに声を掛ける。

「行くぞ、ブラック」

「確かに時間が迫っているからな。決着をつけに行くか」

雁夜の声にブラックは頷き、二人は同時に頷き合つと公園から出て街の方に向かって歩き出す。

その先に居る時臣とギルガメッシュとの決着をつける為に。葵、凜、桜が再び家族として暮らす為に雁夜はブラックと共に戦いの場へと向かうのだった。

深夜零時数分前。

ブラックはただ一人冬木市に存在する冬木市民会館と言う建物の前に立っていた。

冬木市民会館は巨大な建造物。市民会館と言うより、美術館といった方がしっくり来る見事に計算された神殿のようなデザインが成されている。

その場所をブラックが戦いの場にした理由は場所が他の地よりも広いからだ。他のビル群など場所では自身の視界が塞がってしまう。それは戦いに於いてはマイナスにしかない要素だ。だからこそ、ブラックは自身が全力を発揮出来る場所を選んだ。

一応既にルインが特殊な結界を数キロ張っているので、現実世界に影響は無い。

そして何よりもブラックは歓喜していた。相手が誰であろうと今まで出せなかった全力を全て発揮出来る。人間の体ではなく、自身の真の姿で思いのままに戦える。

その事に歓喜しながらブラックが闘志を燃やし続ける。

その様子を離れた所のビルの屋上から双眼鏡でイスカンダルと共に見ていたウェイバーは、現れないブラックのマスターと時臣、ギルガメツシュに疑問を思う。

「そろそろ約束の時間だぞ？何でバーサーカーのマスターや遠坂の魔術師は現れないんだ？」

「・・・フム、バーサーカーのマスターについては分からんが、ギルガメツシュのマスターが考えている事など容易に想像がつくわい。ギルガメツシュの本当の宝具を知られない為にアーチャー本来の戦い方をさせるつもりなのだろう」

「って事は遠距離からの宝具の乱射か・・・だとしたらあそこに立っているバーサーカーは良い的じゃないか？勝負が一瞬でつくな・・・ハァ、ギルガメツシュの宝具が分かると思ったけど、これじゃ望み薄か」

「そら分からんぞ坊主？あのバーサーカーがその程度思い浮かばん筈が在るまい。それに・・・あのプライドの高いギルガメツシュがコソコソとした戦い方を容認する筈がなかるう」

そうライダーが呟くと同時に、ライダーの考えは正解だと言うように突如として結界内部に黄金とエメラルドで二十メートルの大きさを持った巨大な船・インドの叙事詩ラーマヤナ、マハーバーラ

タに記載されている飛行宝具・『ヴィマーナ』が現れ、真っ直ぐブラックの下へと向かい出す。

そして『ヴィマーナ』はブラックから少し離れた場所で止まり、時臣を横に従えたギルガメッシュが船首の先に姿を見せる。

「フン！探したぞ！黒き雑種！！」

「……………」

「この至高の財の姿に言葉も出ず事が出来ないようだな…………しかし、これ以上貴様の顔を見るのは虫唾が走る。とく失せるが良い！！」

ギルガメッシュが叫ぶと同時にギルガメッシュの周りの空間が歪ませ、一斉に一級品の宝具を出現させる。

その宝具の矛先を全て地上に立っているブラックに向け、強力無比な魔弾を撃ち出す。

「消え去れ！！」

「……………ズガガガガガガガガガガガガガッ！！」

「……………ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！」

ギルガメッシュが放った魔弾は全てブラックに直撃し、そのまま背後に存在していた冬木市民会館さえも崩壊させた。

その様子を目にした時臣は嬉しそうに顔を歪め、ギルガメッシュに声を掛ける。

「やりましたな王！これで私達も安泰ですな！！」

「フン、当然だ！この我にあのような侮辱を行ったのだから、それ相応の罰を与えねば気がすまん！寧ろこの程度で終わったのは興醒めも良い…」

「ならば、これを食らってみろ」

『ッ！！！！』

突然空の上から響いた声にギルガメッシュと時臣が慌てて自分達の頭上に顔を向けてみると、漆黒の体に鈍く光る鎧、金色の髪と目を持った竜人 - 真の姿に戻ったブラックが自身の両手の間に巨大な赤く輝くエネルギー球を作り上げていた。

「喜べ！！これが俺の必殺技だ！！ガイアフォース！！！！！！」

「クッ！！」

ブラックがガイアフォースを投げつけて来るのを目撃したギルガメッシュは慌ててヴィマーナを操作し、旋回運動させる事でガイアフォースから逃れようとする。

その行動によって確かに『ヴィマーナ』への直撃を避ける事は成功した。だが、ガイアフォースを完全に避けきる事は出来ず、ガイアフォースは『ヴィマーナ』の側面へと直撃しそうになる。

しかし、ギルガメッシュと時臣は慌てない。確かに強力なガイアフォースは攻撃とは思われるが、魔力が一切感じられないのだ。

如何なる攻撃であろうと魔力が感じられない攻撃に脅威を覚える必要は無い。魔術師と生きている時臣も英霊であるギルガメッシュもガイアフォースは敵にはならないと思っていた。

しかし、彼らの考えは完全な間違いだった。確かにガイアフォー



「ッ!! 貴様!？」

「邪魔はさせんぞ。ドラモンキラーー!!!」

ーーードグウオン!!

「ガハッ!! 雑種ううううー!!!」

ブラックの渾身の一撃を胸に受けたギルガメッシュは苦痛と怒りが混じった叫びを上げ、『ヴィマーナ』から地上に向かって落下して行った。

それをブラックは確認すると、円陣の中で僅かに恐怖に顔を強張らせている時臣に残忍さに満ちた笑みを向ける。

「貴様の相手が待っている。せいぜい地獄を見て味わって来い・・・  
・貴様が実の娘に与えた地獄をな」

「なっ!?! そ、それはどう言う意味・・・」

ーーーシュン!!

全ての言葉を言い終える前に時臣は地上へと落下して行く『ヴィマーナ』から転移した。

ブラックはそれを確認すると共に即座に『ヴィマーナ』から離れ、地面に落下して僅かに口から血を流しているギルガメッシュの前に着地する。

ーーードン!!

「……やはり気分が良い。今まではあの嫌いな人間の状態で動いていたからな。やはりこの体が一番落ち着く」

「……グツ……雑種？ 貴様何者だ？ そのような姿をしている貴様が英霊などで在る筈は在るまい」

「フン、確かに普通ならば俺は英霊などには本来はならんだろうな。だが、生前に暴れすぎてな。無理やり世界に英霊された。死後も戦えるから認めてやっているが、気に入らなくなったらすぐに世界を殺してでも自由になつてやる」

「・・・ほう、面白い。貴様はつまり世界さえも道具だと思っているのか？」

「当然だ。俺にとって世界など滅びようが砕けようが知らん。戦いの場を提供してくれる良い道具程度の認識だ。さて、下らんの話は終わりだ。少しは俺を楽しませろ！！英雄王！！」

「思い上がるな雑種！！その首斬りおとしてくれるわ！！」

ーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオン!!!

ブラックとギルガメッシュは叫び合うと同時に攻撃を開始し、ギルガメッシュは無数の宝具を撃ち出すことで、ブラックは両手に装備しているドラモンキラーで迫り来る宝具の群れを撃ち落としながら死闘を始めるのだった。

暗く淀んだ空気が溢れかえっている下水道内部。

暗く淀んだその空間に突然に円陣が出現し、円陣の中から時臣が姿を現す。

―――シュン！！

「此処は一体何処だ？」

「お前を地獄に送る場所だ時臣」

「ッ！！」

背後から聞こえて来た声に時臣が慌てて振り返ってみると、バリアジャケットを身に纏い、右手に大鎌状態のデスヘルを握った雁夜が立っていた。

「お前は？・・・間桐雁夜？魔術を捨てたお前が何故此処にいる？」

「決まっている。俺がバーサーカーのマスターだからだ」

「何だと！？では、間桐臓硯は如何したのだ！？奴がバーサーカーに命令したと綺礼は報告していたぞ！？」

「ああ、それは簡単だ。普通の一般人が誰でも思いつくトリックだ」

雁夜はそう面白そうに顔を歪めながらバリアジャケットの中に手を居れ、テープレコーダーを取り出し、時臣によく見えるようにスITCHを入れる。

――カチッ！

『バーサーカー、令呪を使って命じるぞ。其処のランサーの背に剣を投げつける』

『カカカカカカッ！何、まさかあやつがサーヴァントのマスターになって居るとは思っても見なかったのな・・・老婆心ながらに力を貸してやったまでじゃよ』

「と言う事だ。爺の声を合成して作った合成音をタイミング良く流したのさ。如何だ？魔術師？お前が卑下している機械に騙された気分は？」

「グウツ！・・・では、間桐臓硯は何処に居るのだ！？」

「爺なら今頃は深海の底で潰れているだろうな。もうこの世の何処にも爺はいないぞ」

「ば、馬鹿な！？き、貴様自分が何をしたのか分かっているのか！？間桐臓硯が居なくなったら間桐の魔術は！？いや、それよりも聖杯戦争がどうなると思っているのだ！？」

時臣は自身の家の家訓である『優雅たれ』と言う家訓を忘れて叫んだ。

雁夜の言葉が真実だとすれば時臣が最も恐れていた事態になっていると言う事に他ならない。冬木市の管理者としても見過ごせる事態ではない。

何せ聖杯戦争そのものを存続させる重要な要素の一つが無くなったのだから。

しかし、雁夜は慌てふためく時臣の姿を冷めた目で見ていた。雁

夜にとつては桜を救えた事こそが重要。聖杯戦争の存続など雁夜には全く関係ない。逆に聖杯戦争などと言う血生臭い戦いが桜達が住む場所で行われなくなった方が良く、心の底から思っていた。

「フン、こんな時にも魔術か・・・ふざけるな！そんな下らんモノなどに何時まで夢を見ているんだお前は！？他に目を向ける事が在る筈だ！！何で桜ちゃんを葵さんと凜ちゃんから離して、間桐家なんか養子に出した！？」

「所詮は血の責任から逃げ出した半端者か・・・決まっている桜の幸せの為だ」

「・・・今なんて言つた？桜ちゃんの幸せの為だと？」

「そうだ。桜も凜も素晴らしい素質を持つて生まれて来てくれた。葵には感謝しているよ。だが、凜も桜も生まれ持った魔術の才能は破格過ぎたのだ。二人の子供が二人とも魔道の家門の加護を必要としていた。いずれか一人の未来のために、もう一人の秘め持つ可能性を摘み取ることは、親として選ぶ事は出来ない。そんな時に出された間桐家からの養子の話はまさに天啓だったよ。これで桜も幸せになれる筈だった・・・間桐臓硯が死にさえしなければ！！」

「・・・黙れ」

雁夜は時臣に対して無表情になりながら低い声を掛けた。

アレが桜の幸せ。あの地獄のような日々が、人形のように無機質な、暗い眼差しをしていた姿が桜の幸せなのだと時臣は告げた。雁夜はもはや冷静になる事は出来なかった。

確かに時臣の考えは魔術師としては幸せなのかもしれない。『根源』と言う魔術師が辿り着きたくてしょうがない場所に向かう者な

らば、時臣の考えに賛同するかもしれない。

しかし、雁夜はそんな未来を桜が望む筈は無いと断言出来た。初期化され目覚めた時の桜に遠坂家に戻れると告げた時、桜は心の底から喜んだ。

間桐家になど桜は養子には行きたくなかったのだ。望んでいたのは本当の家族との日常。

それこそが桜が本当に望んでいた事だと雁夜は思っている。

「お前の考えは理解したくは無いが、充分に分かった……. けど、もう一つだけ質問だ？ 今回の聖杯戦争で聖杯が手に入らなかった場合は、もしかしたら桜ちゃんと凜ちゃんが戦う事態になっていたかも知れないんだぞ？ お前はそれでも良かったのか？」

「仮にそんな局面に至るとしたら、我が末裔達は幸せだ。栄光は、勝てばその手に、負けても先祖の家名にもたらされる。かくも憂い無き対決はあるまい」

「……. フフフフツ、ハハハハハハハハツ、もう良い。お前が死んだら凜ちゃんや桜ちゃん、葵さんが悲しむと思っていたから殺す気はなかった……. だけど、今のお前の考えを聞いて気が変わった！！ 遠坂時臣！！ お前は絶望を味あわせて殺す！！」

「私を殺すだと？ フン、君が家督を拒んでくれたお陰で間桐の魔術は桜の手に渡った。それは感謝して然るべき事だったが、その間桐を滅ぼした事だけではなく、やはり私は魔道に背を向けた君という男が許せない。血の責任に背いた脆弱さ、その事に何の負い目も持たぬ卑劣さ、間桐雁夜、君という男は魔道の恥だ。この私が我が手で誅を下して上げよう」

「“魔道” か？ なら、俺はお前に魅せてやる。貴様ら魔術師が言う

神秘など完全に廃した“魔導”をな！」

雁夜は叫ぶと同時に時臣に向かって飛び掛かり、時臣も瞬時に自身の魔術礼装である巨大なルビーが備わった杖を握り、手の中に火炎を生み出す。

今此処に大切な者達の悲しみを止める為に地獄を越えて舞い戻って来た男と、幸せを与える為に地獄に実の娘を送った魔術師との戦いが始まった。

## 第十七話 英雄王との死闘を終える恐怖 前編

冬木市市民会館。

本来ならば多くの人々が集まり、市民会館内部を賑わせる場所は、今結界が張り巡らされ、二体の英霊によって跡形も無く完全に崩壊してしまっていた。

真の姿を完全に取り戻し、絶大な力をその身に宿している究極の狂戦士・ブラックウオーグレイモンことブラック。

その相手をしているのは世界の全てを手に入れ、英霊の中でも最強の称号を持つに相応しい最古の英雄王・ギルガメッシュ。

その二体の戦いは熾烈を極め、辺りに存在する建物や木々、そして戦いによって砕け散った瓦礫を消滅させる勢いを持って戦いを繰り広げ続けていた。

サーヴァント・英霊には人間の常識など通用しない。英霊がその身から放つ攻撃だけでも、辺りに存在する全てが崩壊し、世界の物理法則を悉く無視する戦いが行われてしまう。

その事を既に聖杯戦争に参加している全ての魔術師が理解し、呼び出されたサーヴァント達も己の実力を理解していた。

しかし、今日の前で繰り広げられる戦いは、その常識さえも完全に粉碎する戦いだった。

ギルガメッシュが速射する宝具の数々は杜撰ながらも凄まじい破壊力を宿し、一発一発が大気に悲鳴を轟かせ、一撃だけでも並みのサーヴァントならば死んでしまうだろう。それが無数に放たれているのだから、相手をしているサーヴァントは何も出来ずに消滅すると誰もが思ってしまう。

だが、その常識さえも撃ち破る究極の規格外が彼らの目の前に存在していた。

無数に放たれる宝具を全て迎撃し、或いは僅かに体を動かす事で避け続け、地面に落ちた宝具を従えながら真っ直ぐギルガメッシュ

にだけ進み続ける漆黒の竜人・ブラック。

ブラックが進んだ道のりには数多くの宝具が地面に突き刺さったまま、その身に宿る絶大な魔力を発し続けている。まるでそれは宝具の持ち主が消滅したのだと思わせる宝具の屍達。

ギルガメツシュは真っ直ぐ自身に向かって前進し続けているブラックに恐怖を僅かに覚えてしまっていた。

生前から数えても此処まで自身を追いつめた存在はたったの一人・ギルガメツシュが朋友と認めているエルキドゥだけ。

ブラックはそれと同等にギルガメツシュの心を追いつめ始めていた。

その事実ギルガメツシュは怒りを覚えていた。

「（認めん！！認めんぞ！！貴様のような存在が我が朋友の領域に来るなど！！）・・・断じて認めんぞ！！」

ーーーーシュン！

ギルガメツシュは叫ぶと同時に自身の背後の空間を歪ませ、“魔剣グラム”などの『竜殺し』を関する宝具類を出現させた。

ブラックの姿は正しく竜人。故に『竜殺し』の名を関する宝具は天敵と呼んで良い類の物。

それを理解しているギルガメツシュは右手に一番強力なグラムを握り締め、他の宝具を一斉にブラックに向かって射出する。

「この類は貴様の天敵であろう！！その身を全て貫かれるが良い！！」

ーーーーズガガガガガガガガガガガガガガッ！！

「確かにそれは俺には天敵だ・・・だからこそ、挑むに足るのだ

ろうが！！！」

「――ガガガガガガガガキイイーン！！」

「なっ！？」

自身の天敵である宝具を怯む事も無く、両腕に装備しているドラモンキラーで迎撃したブラックの姿に、ギルガメッシュは信じられないと言う様に声を上げた。

本来ならば自身の天敵の類で在れば、僅かに怯むか、臆する筈なのだ。だが、ブラックは例え自身の天敵である能力を秘めていても怯む事も臆する事も無い。

何故ならばブラックが両腕に装備しているドラモンキラーもまた、『竜殺し』の能力を秘めた宝具。他の『竜殺し』の能力を秘めた武器に怯えると言う事は己の武器に怯えると言う事に他ならない。

そんな事をブラックは絶対にしない。ドラモンキラー“竜殺しの箒手”は自身が今の体になってからルイン以上に連れ添ってきた己の一部。故に本来ならば竜の因子を持つ者に絶大な効果を発揮する『竜殺し』であろうと、ブラックは絶対に怯まない。

寧ろ逆に自身が挑むべき対象としかブラックには思えない代物なのだ。

そしてギルガメッシュが持つグラムを除いた、放たれた全ての『竜殺し』に関する宝具を迎撃し終えたブラックは立ち止まり、ギルガメッシュを睨みつける。

「如何した！？世界を手に入れた王！！この程度が貴様の力か！？」

「グッ！！」

「興が冷めた。世界を手に入れた男だと聞いて楽しめると僅かに思



「ガッ！！・・・グッ」

「つまらん。貴様はつまらんど。油断や慢心に満ちた貴様は本気でつまらん」

「フッ！！笑わせる！貴様のような下々の者にとって油断は確かに致命的なものになるかも知れんな、だが！我は王だ。慢心せずして何が王か！？」

「その油断と慢心によって地に伏している貴様は何だ？」

「グッ！！」

ブラックの嘲りに満ちた質問にギルガメッシュは声をつまらせた。確かにギルガメッシュの言葉は傲慢な事だが、絶対に自信の表れだった。だが、今その慢心と油断によって無様に地に倒れ伏してしまっただけか自身の友の名を関する“天の鎖”<sup>エルキドゥ</sup>さえも吹き飛ばされてしまった。

その事實はギルガメッシュには絶対に赦せない事柄。だが、体中を走り続ける激痛ゆえか、立ち上がる事も思うように行かずに地面に倒れ伏し続けている。

プライドの高いギルガメッシュは自身の現状が赦せず苦虫を噛み潰したような顔をするが、ブラックは構わずにギルガメッシュに声を掛ける。

「貴様が幾ら油断しようが俺は別に構わん。その程度の存在だったとしか認識するからな。だが、貴様は理解しているのか？このまま何も出来ず、俺に傷さえもつけられずに消えると言う事は貴様が歩んで来た人生は俺ごときに踏み潰される人生だったと言う事になる

のだぞ？貴様の友との歩みもな」

「ッ！！・・・グウウウウッ！！」

――ダン！！

ブラックの宣告にギルガメッシュは完全に怒りの沸点が吹き飛び、全身を襲う激痛を越えて立ち上がった。

その目に宿るのは絶対にブラックを抹殺すると言う意思。このまま敗北すれば自身だけではなく唯一無二の朋友であるエルキドウの名さえも貶められる。

認められない。絶対に認める訳にはいかない。故にギルガメッシュは立ち上がり、自身の蔵の中から回復用の薬が入った小瓶を取り出し、迷う事無く飲み干す。

――ゴクッ！！

――ガシャン！！

飲み干すと同時にギルガメッシュは小瓶を一瞬の内に握り潰した。そしてそのまま背後の空間の中から強力な盾を取り出し、己の左手に装備すると、右手に握っていたグラムをブラックに向かって構え、更に背後の空間の歪みに無数の数え切れないほどのAランク以上の宝具を取り揃える。

「雑種。我を侮辱したばかりか、朋友の名さえも貴様は貶めようとした。その大罪！！貴様ごときの命で賄えると思うな！！」

ギルガメッシュは苛烈な叫びを上げると同時に自身の背後に存在している意思無き宝具達を引き連れて、ブラックに向かって駆け出

す。

もはやギルガメツシュの頭の中に在るのはブラックを完膚なきまで倒すと言う意思のみ。

それ以外はもはや要らぬとばかりに、ギルガメツシュは聖杯戦争に訪れてから初めて覚悟を決めた顔をしてブラックに向かって走り、ブラックは歓喜に満ち溢れた顔をする。

「良い目だ。その目をした貴様と戦いたかった!!」

「ほざけ雑種!!その首を討ち取ってくれるわ!!」

「――ガキイイーン!!」

ブラックとギルガメツシュは互いに叫びあうと同時に武器を同時に振るい、辺りに甲高い音を鳴り響かせた。

それと同時にギルガメツシュは背後に存在している宝具の数々をブラックに向かって至近距離から撃ち出す。

「――ズガガガガガッ!!」

「ムン!!」

「――ガキイイーン!!」

撃ち出された宝具に対してブラックは即座にグラムを防いでいる右腕のドラモンキラーとは別に、左腕のドラモンキラーを振るう事で弾き飛ばす。

しかし、ギルガメツシュは構わずにグラムを連続で振り抜き、ブラックに両腕で防御させるように動きを封じ始める。幾ら怯まないと言えグラムはブラックの天敵になりえる宝具。

その身に受ければ確実にブラックは大ダメージを負う事は間違いない。ギルガメッシュはその事を理解し、ブラックにグラムを防御させるように剣を振るい続ける。

そして本命である背後のAランクの宝具達でブラックを倒すつもりなのだ。ギルガメッシュとてただ無駄に宝具を撃ち続けていたのではない。

ブラックが従える事の出来ない宝具のランクを見極める為に宝具を連発し続けていたのだ。

その結果、最初に放っていた宝具の群れの中でブラックがAランク以上の宝具には一切手を伸ばしていない事実に気がついた。つまりブラックはAランクの宝具を従える事は出来無いと言う事だ。

最も正確に言えばブラックはAランク以上の宝具でさえも従える事は出来る。だが、その為には数分間その場に留まらなければいけないと言う弱点が存在している。

幾らブラックでもAランクの宝具を一つ従えている間に数分も同じ場所に居れば、ギルガメッシュの攻撃の的になってしまう。故にブラックはAランクの宝具には一切手を伸ばさない、いや出せないのだ。

だからこそ、ブラックはギルガメッシュの猛攻を右腕だけで防ぎ、左腕で自身に向かって来る宝具達を弾き飛ばし続けるが、流石に何時までもそんな事を出来る筈が無い。

“ドラモンキラー 竜殺しの箆手”のランクはB。

ギルガメッシュから放たれる宝具のランクはA。

そしてギルガメッシュが振るい続けるグラムもAランクを超える宝具。

どれだけ頑丈であろうと凄まじい威力を持った宝具の数々と時間を於かずにはぶつかり合いを続け、ドラモンキラーは徐々に限界を迎え始める。

――ビキビキッ!!

「ほう」

「フツッ！！貴様は無事であろうと武器が限界のようだな！！このまま討ち取ってくれるわ！！」

「バキィィーッ！！」

裂帛の気合と共にギルガメッシュが振り下ろしたグラムはブラックの右腕のドラモンキラーを粉碎した。

それと共にギルガメッシュは僅かにブラックから距離を取り、グラムを背後の空間の歪みの中に戻し、そのまま近くに存在している紅い槍を掴み取る。

その紅き槍に付与された概念は『因果逆転』。既に命中していると言う結果を作り上げる宝具。

放たれば何処まで相手を追い駆け、その身に命中する。担い手ではないギルガメッシュでは最大の威力は出し切れないだろうが、放てば確実にブラックに命中する。

故にギルガメッシュは迷う事無く紅き槍を投擲しようとするが、その直前にブラックは両腕を前に突き出し、連続でエネルギー弾をギルガメッシュに向かって撃ち出す。

「ウォーブラスターー！！！！」

「ドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！」

「その程度が我にか効くと思うな！熾天覆つ七つの円環！！」  
ロー・アイアス

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

ギルガメツシュは叫ぶと同時に左腕に装備していた盾を戻し、今度は桃色に輝く七つの花弁・投擲に対する攻撃には無類の強さを誇り、一枚一枚が城壁と同じ強度を持つているアイアスの盾の原型・を取り出しウォーブラスターを全て防いだ。

幾らウォーブラスターの一撃一撃が強力とは言え、流石にアイアスの盾を貫くには到らなかった。

ブラックの攻撃を完全に防いだ事実にはギルガメツシュは僅かに笑みに口元を歪め、ウォーブラスターとアイアスの盾のぶつかり合いによって発生した煙の先に居るブラックに今度こそ紅き槍を投擲しようとする。

例え攻撃に気がついてブラックが避ける行動を行っても避ける事は絶対に出来ない。何故ならば既に命中していると言う結果が生まれているのだから。

幾らブラックでも逃れきれない。その事を理解しているギルガメツシュは残忍さに満ちた笑みを浮かべながら、煙の先に居る筈のブラックに向かって紅き槍を投擲しようとする。

しかし、投擲する直前に煙を切り裂きながらギルガメツシュでさえも見た事も無い文字が刀身に描かれている黒き長大な剣が出現し、ギルガメツシュに向かって勢いよく振り下ろされる。

――ブーン！！

「何だと！？クツッ！！」

――ガキイイイーン！！

煙の中から現れた長大な剣の姿にギルガメツシュは目を見開きながら、左腕に装備したままのアイアスを使って防いだ。

しかし、投擲攻撃でない事が原因なのか、アイアスの盾の幾つかの花弁が碎け散り、長大な剣・ブラックの宝具の一つオメガブレイ

ド-を右手に握ったブラックが煙の中から現れ、ギルガメッシュが握っている紅き槍を左腕で握り締める。

「――ガシッ!!」

「雑種!? 貴様!?!」

自身が使おうとした宝具の所有権を奪われた事に気がついたギルガメッシュは目の前にいるブラックに向かって叫ぶが、ブラックは構う事無く右手に握っているオメガブレードを巧みに使いこなし、ギルガメッシュに振り下ろす。

「ムン!!」

「クッ!!」

「――バキイイーン!!」

ブラックの凄まじい斬撃をギルガメッシュはアイアスの盾を犠牲にする事で防ぎ、そのまま背後に存在している空間から先ほど戻したグラムとデュランダルを引き抜き、ブラックと剣戟を繰り広げる。

「――ガキン!! キン!! ガアン!! キイイーン!!」

「ハアッ!!」

「舐めるな!!」

「――ガキイイーン!!」

ブラックとギルガメッシュはそれぞれ自身が握っている剣で剣戟を繰り広げる。

その戦いは凄まじく裂帛の気合を持って相手を斬り殺さんと剣戟は続けられる。

ブラックの凄まじい力を込めた斬撃にギルガメッシュの手は痺れ、身に纏う黄金の鎧に傷をつけられながらもブラックの攻撃をいなし続け、ギルガメッシュは剣を振り抜くと共に背後の空間から宝具を射出し、ブラックの鎧や体に傷を負わせつづける。

しかし、互いの命が何時奪われても可笑しくない戦いが繰り広げられる最中でもブラックは歓喜に満ち溢れていた。

コレこそが自身の望んでいた戦い。互いの信念や全てを賭けて繰り広げられる戦いこそブラックは望んでいた。

慢心や油断に満ち溢れていたギルガメッシュを倒してもブラックには意味が無い。それではブラックの本能が満たされないのだ。

「良いぞ！！もっと俺を楽しませろ！！英雄王！！」

「笑わせるな雑種！！貴様ごとき存在が楽しむ余裕など我が与えると思うな！！」

「――ガキイイーン！！」

「ムッ！！」

ギルガメッシュは叫ぶと同時に握っていたグラムとデュランダルを勢いよく振り下ろし、オメガブレードを下に追いやった。

ギルガメッシュはそれを確認すると二本の剣を地面に深く交差させながら突き刺し、オメガブレードの動きを封じる。

ギルガメッシュはセイバーのサーヴァントではない。その証拠に既にブラックの猛攻によって両腕はまともに動かないほどに痺れて

いる。幾ら強力な宝具を持っていたとしてもギルガメッシュは担い手ではなく所有者でしかないのだ。

故にギルガメッシュは自身が使っていたグラムとデュランダルを犠牲にする事も迷わずに決断し、ブラックの動きを僅かに押さえた。それと同時に即座にギルガメッシュは背後に飛び去り、ブラックから距離を取ると、背後に存在している空間の歪みから蔵の中に残されている全てのAランクの宝具・その数五十以上の数を出現させ、グラムとデュランダルからオメガブレードを引き抜こうとしているブラックに向かって一斉に射出する。

「消え去るが良い!!」

「ズガガガガガガガガガガッ!!」

「悪いがまだ楽しんでいない戦いが在るからな。俺は消える気などない!!」

自身に向かって来る絶大な力を宿した魔弾を見てもブラックは諦める事無くギルガメッシュに向かって叫び返し、そのままオメガブレードを消し去ると、一瞬の内に左腕の先に作り出していたエネルギー球をブラックは迷わずに自身の胸当てに押し当て爆発させる。

「ドゴオオオオン!!」

「グウッ!!」

自身の胸での至近距離からの爆発にブラックは苦痛に呻くが、爆発の衝撃によってブラックは後方に飛ばされ、魔弾の群れから逃れる。

その迷いの無い自身を傷つけてもギルガメッシュの攻撃から逃れ

たブラックの行動にギルガメッシュだけではなく、戦いを見ていた全ての者達が目を見開くが、ブラックは構う事無く両足を地面につけて着地する。

「――ザー――!!」

「チッ!! 左腕が使えなくなったか」

自身の焼け爛れた左腕を見つめながらブラックは舌打ちを行った。最も左腕と胸当ての損壊だけでギルガメッシュの必勝の一撃から逃れたのだから、ブラックとしては別に構わない。

しかし、これで今の状態ではガイアフォースは使えなくなったと思いつながら再びオメガブレードを右腕に出現させ、ギルガメッシュに向かって構える。

「さてそろそろ決着をつけるか？」

「奇遇だな。我もそう思っていたところだ。これ以上貴様の顔を見ているのは不愉快以外の何ものでもないからな」

ブラックの宣言にギルガメッシュは同意を示し、背後の空間の歪みの中から港場で握っていた刃のあるべき場所は三本の円筒形の部品で構成され、それぞれに複雑な文様が刻まれている奇妙な剣を取り出す。

その剣こそギルガメッシュの最大の宝具。世界を切り裂いたとされるランクEXに分類される規格外の宝具。“乖離剣・エア”

今その宝具は唸りを上げながら回転し、凄まじい魔力を辺りに撒き散らしていた。

しかし、それを食らう事になる筈のブラックは歓喜に満ち溢れていた。挑むのは世界を切り裂いたとされる剣。



うに構えながら、オメガブレードの真の力を解放する。

「オメガブレード全てを初期化する剣ッ！！」

ーーーーバシューーン！！

「ば、馬鹿な！？」

ギルガメツシュは自身の目の前の光景に悲鳴のような叫びを上げた。

空間切断の光の中をオメガブレードを盾にするように持ちながら真っ直ぐ進み続けるブラック。

オメガブレードに触れている箇所から空間切断の光は発動される時の溜めておいた魔力へと初期化されていく。

“エア乖離剣”が攻撃にだけ特化した宝具ならば、ブラックの持つ“オメガブレード全てを初期化する剣”は攻撃にも防御にも使えるオールマイティな宝具。触れたモノを問答無用で初期化出来る“オメガブレード全てを初期化する剣”は放出系の攻撃ならば初期化する事が可能なのだ。

その事を知らないギルガメツシュは“エア乖離剣”の光を魔力に初期化させながら進んで来るブラックの姿に恐怖を覚えるが、ブラックは構わずに進み続け、遂にギルガメツシュの目の前に現れる。

「これで！！終わりだ！！！！」

ーーーーブザン！！

「ガアッ！！」

ーーーーブシューウウウーーーー！！！！

ブラックはギルガメッシュの前に現れると同時にオメガブレードを振り下ろし、ギルガメッシュの体を鎧ごとを右肩から左腰まで切断した。

それと同時にギルガメッシュの体から大量の血が噴き出し、目の前に立っているブラックを血で濡らして行く。

「……フツ、つくづく気に入らぬ雑種だ……。ここまで我に刃向かう者など今までどれだけいた事か」

ギルガメッシュは自身の体が消えて行く事を感じながら目の前でオメガブレードを右手に握りながら、覆っていた鎧がボロボロになっているブラックに声を掛けた。

「その剣……。如何なる宝具なのだ？……。我の“乖離<sup>エア</sup>剣”を撃ち破る宝具など本来はありえん……。それに全てを手に入れた我でさえも見た事がない」

「コイツの名前は“オメガブレード全てを初期化する剣”。人間どもの平和を願う意思が具現化した剣。俺は本来の持ち主ではないが、主とは認められているから使える剣だ」

「そうか……。雑種ども想いが……。下らんと思っていた雑種どもに敗れるとは……。いや雑種を舐めていた事こそが私の過ちか」

ブラックの説明にギルガメッシュは何処か納得したように声を出した。

その身は既に半分以上が消失し、徐々に体は薄れ、目から光も失われていく。

しかし、それでも最後に伝えねばならん事が在ると言うようにギ

ルガメツシュはブラックに視線を向ける。

「黒き雑種……いや竜人よ。貴様に奪われた我が財は預ける……何れ必ずや我自らが取り戻し、今回の汚名を雪いでくれる」

「フン、良いだろう。だが、次は最初から油断や慢心などせずに来るんだな」

「言われなくてもそのつもりよ……その時にこそ貴様の真名を聞かせて貰う。ではな……中々に愉しめたぞ」

ギルガメツシュは最後に皮肉げに笑いながら、その身を完全に消失させた。

ブラックはその様子を最後まで眺め続けると、ゆっくりとギルガメツシュが最後まで立っていた場所に背を向け歩き出す。

後には結界内部で破壊し尽くされた街並みと、歩き続けるブラックをそれぞれ戦いを観戦していた建物からジッと見つめるマスター達とサーヴァントだけが残されたのだった。

## 第十七話 英雄王との死闘を終える恐怖 後編

「……アレが……バーサーカーの真の力なのですか？」

結界内部に存在しているビルの屋上からブラックとギルガメッシュの戦いを観戦していたセイバーは、自身の常識さえも超えた戦いに掠れた声を出す事しか出来なかった。

無数の宝具を使い、更には空間さえも切断する宝具を所持していたギルガメッシュ。

そのギルガメッシュを撃ち破り、相手の宝具の発動を魔力にまで初期化させる事が剣を持っていたブラック。

特にセイバーにとってはブラックが使ったオメガブレードには衝撃を感じざるえなかった。

自身が握る最高峰の聖剣であるエクスカリバーに勝るところか、オメガブレードからはそれ以上の静謐な空気がセイバーには感じられたのだ。

何故それほどの剣がブラックに従っているのかまでは流石にセイバーにも分からなかったが、少なくともブラックと今戦うのだけは絶対にしてはならない事だけは確信した。

もし戦えば確実にブラックの圧倒的な力に敗北をきしてしまう。

勝つ為には少なくとも宝具の真名開放が可能であり、更には体力と魔力も万全にして戦わなければ確実に敗北する。

最もそれでも勝てる確率は限りなく低い。

セイバーの未来予知に近い直感がそう告げていた。

何としてもまともに動かない左腕を取り戻すために、ランサーを倒させねばならないと思いながら戦いの場を去って行くブラックの背をセイバーは静かに見つめる。

そのセイバーに突如として背後から声が掛けられる。

「フム、バーサーカーを気にするのは間違いではないだろうが、背後には気をつけた方が良くぞ、セイバーのサーヴァントよ」

「ッ!!」

背後から聞こえて来た声に慌ててセイバーは武装化を行い、背後を振り向いてみると、教会から出て行方が分からなかった筈の言峰綺礼が微笑を浮かべながら立っていた。

「アサシンのマスター……何故この場に貴方が居るのですか？」

「その答えは簡単だ、セイバーのサーヴァントよ。私もこの戦いには興味が在ったのだよ。私のミスで始まってしまった戦いだからね」

「なるほど……貴方に質問が在ります」

「何だね？私に答えられる事ならば全て答えよう。君ほどの相手に人間である私は手は出せないからね」

「……私と共に居た女性を攫ったのはアサシンか、貴方なのですか？」

「残念だがそれは違う。神に誓って偽りは無い。彼女を攫ったのは恐らくイレギュラーだろう。最もアサシンがあの場合に居た事は事実だ。今思えば最初から仕組まれていたのであろう」

「……そうですか」

綺礼の言葉にセイバーは僅かに残念そうにしながらも、綺礼の言葉に納得していた。

セイバーも教会での件から、アイリスフィールを攫ったのは本当はルインではないのかと考えていた。

自身と本当のマスターである切嗣さえも罠に嵌めた相手だ。アサシンが犯人だと告げたのも、教会での出来事を自分達に目撃させる為の策だったのだらうとセイバーは思っている。

その様子を眺めていた綺礼は内心で笑みを浮かべながらも、それを覆い隠し、セイバーに質問する。

「セイバーよ。君の質問には答えた。今度は私から質問だ」

「残念ですが、私と貴方は少し前まで敵対関係でした。何も答える必要性はありません」

「確かにその通りだな・・・ならば等価交換では如何かね？私の質問は君の本当のマスターである衛宮切嗣の聖杯に対する願いを教えて欲しい」

「ッ!!」

「驚く事は在るまい。私はアサシンを使って情報収集を主に行っていたのだ。君達の関係も見えていたのだよ」

「・・・切嗣の願いを教えたとして私は何が貰えるのですか？」

そうセイバーが綺礼に質問を仕返すと、綺礼はゆっくりと自身の着ているカソックの中から何らかの資料を取り出し、自身の足元にゆっくりと置き、セイバーに答える。

「この資料は私が師から借り受けた衛宮切嗣の調査報告書だ。この

資料には君が知らない衛宮切嗣の真実が記されている」

「ッ！！」

綺礼の言葉にセイバーは目を見開きながら、綺礼の足元に存在している資料を見つめた。

その様子に綺礼は内心で獲物が食いついたと確信した。

先日の冬木ハイアット・ホテルでの件からセイバーの切嗣に対する不信心はかなりモノになっている。だからこそ、綺礼は更に不信心を増大させる餌をセイバーに与えに来たのだ。

切嗣の過去の経歴をセイバーは知らない。故に今のセイバーは切嗣の事を知りたがっていると確信して切嗣の過去の資料を綺礼はセイバーに仄めかしたのだ。

「如何かね？君も君のマスターの正体を知りたいだろう。そして私も衛宮切嗣を知りたい」

「如何言う意味ですか？」

「……セイバー……私は知りたいのだよ？私が何故この世に居るのかを」

「えっ！？」

「私はあらゆる事に情熱が感じられないのだ。聖杯に対しても私は興味が抱けなかった。だが、君の本当のマスターである衛宮切嗣の行動は何処か私に似ていると思った。そんな男が私には興味を抱けなかった聖杯に手を伸ばそうとしている。思ったのだよ。衛宮切嗣はもしかしたら私が求めている答えに最も近い所に居るのではないのかと……頼む。教えてくれ！衛宮切嗣は何を求めて聖杯に

手を伸ばそうとしているのだ!？」

綺礼は土下座せんばかりの勢いでセイバーに向かって頭を下げた。その様子にセイバーは少なくとも嘘はないと直感する。本当に綺礼は切嗣の事を知りたいと思っっているのだと確信する。

そう嘘ではないのだ綺礼の想いは。何故ならば少し前までは本当に切嗣の事を追い求めていたのだから。

（まさか、このような形で衛宮切嗣に対する想いが役に立つとはなだが、今日の戦いで確信出来た。やはり同類は私の最も近いのだと）

綺礼がこの場に現れた理由は二つ。

セイバーに対する切嗣への不信任を上げる事。

そしてもう一つはブラックの真の力を知る為だった。

時臣が最強だと断言したギルガメッシュをブラックは撃ち破った。更には周りへの被害などブラックは全く気にしていない。もし結果が張られていなければ、この地にいた全ての人間は確実に死していたと綺礼は確信出来る。

やはりブラックは最も自分に近い存在だと思いながらセイバーの返答を頭を下げながら待っていると、セイバーは僅かに悩むような顔をしながら告げる。

「アイリスフィールの話では切嗣の願いは…… “聖杯による世界の救済だそうです”」

「ッ!……（やはり違ったか。衛宮切嗣は私と同類と同じ側の人間ではない）」

そう綺礼は内心で呟きながら、セイバーに背を向けた。

少なくとも綺礼は世界の救済など聖杯には願わない。もちろんブラックも願わないだろう。

元々ブラックもルインも世界に翻弄されてしまった存在。世界など二人にとっては一部を除いては本当に如何でも良いのだ。

綺礼はセイバーの答えで完全に衛宮切嗣に対する興味を失った。

もしブラックが居なければ絶望していたかもしれないが、今の綺礼にはブラックと言う最高の答えを必ず齎してくれる存在がいる。

より綺礼はブラックとの互角の対峙を求めながら、屋上の入り口に向かって歩き出す。

「セイバーよ。その資料は好きにしたまえ。だが、私には衛宮切嗣が世界の救済など願っているとは思えないがな。何故ならば衛宮切嗣は“助けられた子供を見捨て、多くの人々に不幸を齎した殺人マシーン”なのだからね」

「ッー!!」

セイバーは綺礼の言葉に目を見開くが、もはや綺礼は言葉も出さず事無く屋上の扉の中に姿を消した。

後には何かを悩む顔をしたセイバーと綺礼が遺した衛宮切嗣の資料だけが屋上に残されたのだった。

暗がりの下水道内部。

本来ならば明かりなど存在せず、ただ静かに静寂に満ち溢れている筈の空間。

しかし、今その空間は凄まじいほどの炎が発生し、辺りを煌々と照らしながら、その炎の中心で戦っている二人の男性。

魔術礼装を施したステッキを炎と共に振るう遠坂時臣と死神のよ

うな姿をして機械的な大鎌を振るう間桐雁夜。

互いに持つ武器を相手に向かって振るい続けるが、焦った顔を浮かべているのは時臣の方だった。

雁夜の持つ武器は自身が長年を込めて礼装した筈のステッキでも一切の傷が付けられず、炎も雁夜が纏っているバリアジャケットを焼く事が出来ない。

事前に時臣が炎を操る魔術師だと情報を知ったルインが、バリアジャケットに色々と強化を施しているのだ。

「――ガキイーン――！」

「如何した時臣？魔術の真髄を教えてくれるんじゃないのか？」

「クツ――！」

雁夜の一撃を防ぎながら時臣は悔しげな声を上げた。

しかし、雁夜は構わずに大鎌――デスヘルを操り、次々と時臣に対して振り抜く。

その攻撃を時臣はステッキで防御するか、或いは避ける事で攻撃をかわしていく。決してデスヘルの刃には触れないように動かなければならない。

既に時臣は最初の時に調子にのって、自身の力を見せ付ける為に強化した拳でデスヘルの刃に触れてしまったのだ。

最初に時臣は自身の磨いた魔術を巧みに使いこなし、雁夜を翻弄するようにいたぶっていた。

しかし、それは雁夜が事前にブラックと練っていた策の一つだった。雁夜は最初に来るだけ自分の体力を保つように戦い続けていたのだ。

真の狙いは、時臣のサーヴァントであるギルガメッシュが暴れ、時臣の魔力が減るのを待つ為だった。

確かに時臣は優秀な魔術師だが全力戦闘を行うサーヴァントを、しかもギルガメッシュを自身の戦闘と同時に支えられるだけの魔力の維持には苦勞する。

その反面雁夜には自身以外の魔力供給手段を既に手に入れている。その大きな差が在る為に雁夜は時間を掛ける戦いを行っていた。そして一瞬の不意を衝き、時臣にデスヘルの刃を振り抜いたのだ。もちろん雁夜と違って格闘技の心得も持っている時臣はその一撃を簡単に避け、そのまま雁夜の唯一の武器を破壊する為に強化した拳を振り抜いてしまった。

もしこの時に時臣がもつと雁夜を敵として認識していれば、戦いは時臣の勝利だったかもしれない。

しかし、時臣は雁夜を侮って戦ってしまった。その為に雁夜の真の力も余り考えずに不用意にデスヘルの刃に触れてしまったのだ。

その時に感じた激痛は魔術師として生きて来た時臣でさえも味わった事が無いほどの激痛だった。

雁夜の持つデスヘルが発動する“ベイン・ビジョン痛みの幻覚”は刃が敵の体を通り過ぎてこそ真の威力を発揮するが、刃に触れてもかなりの痛みを相手に与える事が出来るのだ。

その事を知らない時臣は不用意にデスヘルの刃に触れてしまい、激痛をその身に受けてしまった。

何とかその痛みからは脱する事は出来たが、デスヘルの刃に触れるのは、もはや本能の領域で恐れるようになっていた。

更に雁夜は事前にルインに頼んでいた策を更に発動させ、時臣に追い込みを掛ける。

「時臣！！お前に見せてやる！！よく見るんだな！これが閻桐の魔術を覚えるやり方だ！！」

「……ドスン！！」

――シーン――！

「なっ！？」

雁夜がデスヘルの刃を下水道の床に突き刺すと同時に、周囲の風景が何処かの蟲が蠢く空間に映り変わった。

周りの存在するのは蟲。蟲。膨大な数の蟲達。

まともな形をした蟲も居れば、見るだけで嫌悪感を覚える蟲も大量に存在している。

その蟲が間桐に魔術によって生まれる蟲なのだと時臣は魔術師的な判断で即座に看破するが、その蟲達を生み出している幻覚を時臣はさっぱり理解出来なかった。

周りに存在している蟲が幻覚で在る事は時臣は理解出来ている。だが、その魔術を発動させている術式が時臣には完全に理解出来なかった。

理解出来る筈もない。何故ならば今時臣の目の前に広がる光景を作り上げているのは神秘を追い求める魔術ではなく、神秘など完全に廃した理論だけで構成された異世界の魔法と呼ばれる術。

故に時臣には何故急に辺りの風景が変わったのかと疑問を覚えながら、自身の周りに炎の魔法陣を防御を固めるように覆って行くが、その時臣の耳に誰よりも聞き間違える筈の無い声が響く。

『助けて！！助けて！！お父様！！お母様！！お姉ちゃん！！』

「ッ！！桜！？」

聞こえて来た桜の声に時臣が慌てて声の聞こえた方を振り向いて見ると、沢山の蟲にその幼い肢体を包まれている桜の姿が存在していた。

（幻覚だ！？これはあの男が私を惑わす為に生み出した幻覚なのだ！？）

そう時臣は目の前に繰り広げられる桜の姿を幻覚だと断じるが、幻覚は構わずに次々と変わっていく桜を映し出していく。

葵や凜と共に居た頃とは打って変わって桜の表情は絶望と諦観に満ち溢れ、目から光も失っていかせた。それだけではなく桜は幼いながらも蟲に“犯された”。

その瞬間の映像を目撃した時臣は思わず息を呑むが、構わず映像は更に移り変わり、何処かの家の中で対面し合う雁夜と桜が映し出された。

『なあ桜ちゃん。おじさんのお仕事が終わったら、また皆で一緒に遊びにいかないか？お母さんやお姉ちゃんも連れて』

『お母さんや、お姉ちゃんは・・・そんな風に呼べる人は、いないの。いなかったんだって思いなさいって、そう、おじいさまに言われたの』

「桜・・・」

目の前の幻覚の桜の言葉に、もはや時臣は思うように言葉を出す事は出来なかった。

あんな事や目の前で桜が告げたような言葉を言わせる為に養子に出したのではない。魔道の誇りを解さず、ただ身に刻みつける為だけの道具とさせる為に、自身の子を手放したわけでは断じてない。

しかし、周りの幻覚は変わらずに桜の地獄の日々を映し出し続け、そんな空間の中に雁夜の声が響く。

「これがお前のやった事の結果だ。分かるだろう？俺がこの聖杯戦

争に参加した理由は、桜ちゃんをこの地獄の日々から救う為だ。それは形は違ったが、バーサーカーが果たしてくれた・・・そう桜ちゃんも救えた筈だった。だが!!」

再び周りの映像は移り変わり、今度は今までとは違う何処かの小綺麗なホテルの一室で向かい合っている本来の姿である漆黒の竜人・ブラックと、ベットの上に座っている雁夜にその雁夜の膝で眠っている桜が映し出されていた。

その映像に時臣は目の前の映像が間桐家が崩壊したと後の映像だと確信する。

不謹慎ながらも時臣は安堵してしまった。あの地獄のような日々から自身の娘が救われたのだから当然だろうが、次の瞬間のその考えは目の前の映像によって絶望に変わる。

『知らんな。それよりも助けただと？馬鹿か貴様は？その小娘は誰にも助けられていない。何よりも“壊れてしまっている小娘”自身が助けられた事にも気がついていないのだぞ』

『ッ!!それは如何言うことだ!?!』

『気がついていなかったのか？その小娘は既に壊れている。貴様が眠っていた間に確信した。その小娘は俺かルインが何かを命令しない限り、貴様の傍で呆然としていただけだった。もはや自身で何かを考える事さえも放棄しているようだな』

「ば、馬鹿な・・・」

「ードサッ！」

幻覚が告げた桜の状態に時臣は絶望したような声を出しながら膝

をついてしまった。

幸せを望んで送り出した場所の先が地獄。桜はこの一年の間地獄と言つ地獄を味わい続けていたのだと漸く理解出来た時臣は言葉も出す事が出来ずに、呆然とし続ける。

それと共に僅かに炎の威力が衰えた瞬間、炎を切り裂きながら鎖鎌の形態に変わったデスヘルの紫色の鎖が時臣の体に巻きつく。

――ガシイイーン！！

「ッ！！」

「これがお前が桜ちゃんに与えた地獄だ」

「クッ！！」

幻覚の蟲の大群の中から姿を現した雁夜に時臣は即座に自身に巻きついている鎖を解こうとするが、その鎖はビクともしなかった。

時臣はその事実に怒りを覚えて魔術で焼き尽くそうとするが、その直前に時臣の腕に描かれている令呪から鼓動が鳴り響く。

――ドクン！！

「ッ！！まさか！？そんな筈が！？」

感じた令呪の鼓動に時臣は悲鳴のような声を上げて令呪が在る腕を見てみると、令呪からは色が失われていた。

それが意味するのは自身が最強と思って召喚したギルガメッシュが目の前にいる雁夜が召喚したブラックに敗れたと言つ事実。時臣が聖杯戦争に敗退したと言つ揺るがない真実だった。

「馬鹿な！？王が敗れただと！？ありえん！在る筈が無い！全てを  
手に入れた最強の王が！？」

「お前が召喚したのは確かに最強だった。だが、俺が召喚したのは“究極”だ……バーサーカーを召喚出来ていなければ、俺はこの場に辿り着く事は出来なかっただろうな。無様にお前に敗北していたかもしれない……しかし、此処では俺の勝ちだ！！<sup>ペイン・</sup>痛みの幻覚！！」

――ブザン！！！！

「ガギヤアアアアアアアアアア——！！！！！」

デスヘルの刃をその身に受けた時臣は薄暗い地下下水道内部に断末魔の悲鳴を轟かせた。

雁夜はその様子を冷めた目で見つめながら、死んでも可笑しくない筈の激痛でも死ねない苦しみのにた打ち回っている時臣に声を掛ける。

「これがお前が桜ちゃんに味合わせた苦痛だ……地獄を味わえ」

「アアあおいりんさく」

―――  
ボタン！！！！

「……チイツ!!……本当に葵さんや凜ちゃん、桜ちゃんを思っているのなら最初から養子に何て出すな!」

そう雁夜は地獄を味わって氣絶した時臣に向かって叫んだ。

もし時臣が桜を養子に出さなければ。いや或いは雁夜が間桐家を出なければ、桜は地獄に行く事は無かったかも知れない。

自身にもやはり桜が地獄に来る事になった元凶なのだと雁夜は改めて確信しながら、気絶している時臣を肩に担ぐ。

「・・・お前が死んだら葵さん達が悲しむ・・・だから代わりにお前からはお前の人生の全てを貰って行くぞ」

雁夜はそう呟きながら、下水道内部を歩いて合流場所に向かうとする。

しかし、その直前に暗がりの中から何かが凄まじいスピードで走って来て、雁夜が担いでいる時臣の令呪が刻まれている方の腕を斬りおとす。

「ブザン!!」

「何!?!」

自身が担いでいる時臣の腕が急に斬り落された事に雁夜は驚き、慌てて腕から大量の血を流している時臣を担ぎながら背後を振り返ってみると、黒いローブを身に纏い、骸骨の仮面を被ったサーヴァント・アサシンが令呪が刻まれたままの時臣の腕を拾い上げていた。

「アサシン!?! やっぱり生きていたのか!」

アサシンの姿を目撃した雁夜は慌ててアサシンから離れる。

雁夜の力は確かに魔術師や人間には強力だが、その反面完全に神秘を廃してしまっている為にサーヴァントなどの神秘の固まりのような存在には全く効果が無いのだ。

元々熟練した魔術師で不意打ちを衝いて漸くダメージを与える事

が出来るのがサーヴァントである。

幾ら雁夜が力を手に入れたとはいっても、勝てる相手ではない。最悪の場合は令呪を使用してブラックを呼ばなければいけないと雁夜は考えながらアサシンから距離を取る。

しかし、雁夜の予想に反してアサシンは時臣の腕を拾い上げると、脇目も振らずに下水道の暗がりの中へと姿を消して行く。

（俺と時臣が狙いじゃなかったのか？）

アサシンの理解不能な動きに雁夜は首を傾げた。

サーヴァントがいない今、この場でこそ自身と時臣を倒せる絶好の機会でありながらアサシンは時臣の腕を斬りおとしただけで去って行った。

その理由が分からずに雁夜が疑問の首を傾げていると、背後から突然に声が響く。

「恐らくは私が居る事に気がついていたんでしょうね」

「ッ！……ルインフォースか……驚かさなくてくれ」

「そんな事よりもですね。さっさとその背中の男の治療をしますよ。このままだと確実に出血死ですからね」

そうルインは雁夜に声を掛けると応急処置代わりに時臣の腕の止血を行い、雁夜と自身の周りに転移用の魔法陣を出現させる。

「ブラック様は既に隠れ家に戻っていますから、私達も戻りましょう……貴方も治療が必要でしょうから」

「……ああ、頼む」

「では戻りましょう」

―――シン！！

ルインが言葉を呟くと同時に魔法陣は光り輝き、雁夜達は隠れ家へと転移した。

後には薄暗い空間と時臣と雁夜の戦いで傷ついた下水道内部だけがその場に残されたのだった。

とある場所のビル内部。

その場所にセイバーとの邂逅を終えた綺礼が静かに立っていた。その顔に浮かぶのは喜悦の笑み。自身の求めているモノが手に入ったという嬉しさに満ち溢れた。

綺礼はこれから自身の下に届くものを静かに笑みを浮かべながら待ち続けると、突如として綺礼の前の空間からアサシンが音も立てる事無く現れ、綺礼に時臣の腕を差し出す。

「お望みのモノを持って参りました」

「よくやったアサシン」

綺礼はアサシンに労いの言葉を掛けながらゆっくりと令呪が刻まれたままの時臣の腕を受け取る。

御三家のマスターの人間は他のマスターとは違ってサーヴァントを失っても令呪を失う事は無い。

故に御三家のマスターは他のサーヴァントと再契約を令呪を持つたまま行いう事が出来ると言う特権が存在している。

その事はもちろん時臣の弟子である綺礼も知っている。だからこそ、綺礼はアサシンに命じて人が来ない場所を重点的に搜索させていたのだ。

ブラックならば切嗣の事前の策を読み取り、必ずや自身のマスターと時臣を別の場所で戦わせると綺礼は確信していた。

切嗣も恐らくはその考えを持っていただろうが、直前に転移と言う方法で移動されては見つける事は不可能。その反面綺礼にはアサシンと言う術が存在していた。

時臣が転移した直後に綺礼はターゲットを切嗣から時臣に変更し、即座にアサシン達に時臣の搜索を命じ、令呪が宿っている腕を斬りおとすように命じたのだ。

それはブラックが敗北されないようにする為の考えだったが、その必要性はなかったと綺礼は苦笑する。

ブラックの力は綺礼の予想を遥かに超えていた。アレほどの力ならば他のサーヴァント達に敗北する事もないと今日の戦いで綺礼は確信していた。

そして同時にセイバーの強化も必要なのだと綺礼は考えていた。

「（アレほどの力では如何に騎士王とは言え敗北するだろう。衛宮切嗣は同類ではなくマスターを殺す方に執着するだろうが、そうはさせんぞ）・・・アサシンよ。お前達は衛宮切嗣か、その傍に居る女の監視を続行。私の命が在るまでは監視だけに留めておけ」

「御意」

アサシンは深く綺礼の命令に頷くと、自身の体を霊体化させてその場を去って行った。

綺礼はそれを確認すると即座に時臣の腕から令呪を剥ぎ取り、自身の腕へと移植する。

「これで令呪の合計は再び三つに戻った……だが足りない。同類と相対する為にはこの程度の令呪の数では足りんな……他のマスターから奪うのも難しい……ならば奪うまでだな。父から……だがそう簡単には父は渡してはくれまい……ッ!」

在る事実気がついた綺礼は思わず、新たに令呪が増えた自身の腕を見つめた。

今自身は平然と実の父親から令呪を奪う算段を練っていた。それだけではない。

綺礼は父親を殺す自身の姿に思わず陶醉してしまうような喜びを感じていた。

「馬鹿な……まさか……ハハハハハハッ……いや、そんな筈が無いだろう……違う方法を考えねばならん……父を殺すなど……そんな感情を抱く筈が在るまい」

綺礼そう自身の内から溢れた感情を否定し、ゆっくりと虚ろな顔しながらビルを出ようと足を進める。

しかし、綺礼は気がついていなかった。自身が既に実の父親である璃正に対する行動を綺礼自身でさえも知る事が出来ない心の奥底で、如何するのかを決めている事実。

## 第十八話 酒宴の前準備を始める恐怖と深き闇

アイリスフィールは夢を見ていた。

夢の中の自身は幸せそうに笑い、娘であるイリヤと夫である切嗣と共に暮らしていた。

この夢がずっと続いてくれれば良いとアイリスフィールは心の底から思う。この夢を胸に抱きながら になるのも本当に悪くないとアイリスフィールは思っていた。

しかし、徐々に夢の中に光が満ち溢れ始める。それに気がついたアイリスフィールは夢が終わる時が来たのだと理解した。

出来ればこの夢のような風景が現実広がる事を望みながらアイリスフィールが目を開ける。

「フン、如何やらまだ意識は在るようだな」

「ッ！……バーサーカー……」

目を開けると同時に視界の中に映った男性・ブラックの姿にアイリスフィールは目を見開き、恐る恐るブラックのクラス名を呟いた。しかし、ブラックはアイリスフィールの様子になど構わずに、ジツとアイリスフィールの体に繋がれている機械類を見つめ続ける。

「貴様の体を調べさせて貰った……貴様が聖杯だな？」

「……」

ブラックの質問にアイリスフィールは沈黙した。

その質問にだけは答える訳にはいかない。答えれば確実にブラックはどんな手を使っても自分をセイバーや切嗣の下には帰さないと

理解しているからだ。

何とか脱出する手段は無いのかとアイリスフィールは部屋の中を見回すが、部屋の中にはアイリスフィールが理解する事が出来ない機械類で満たされていた。魔術殺しである切嗣の妻で在る為にアイリスフィールはある程度は機械に詳しいが、そのアイリスフィールから見ても部屋の中に存在している機械は全て用途が理解出来なかった。

その様子を無言で見ていたブラックは近くに置いてあった何らかの資料を手に持ち、アイリスフィールに再度質問する。

「喋る気は無いようだ、無駄な事だ。貴様の体は調べに調べさせて貰った・・・随分と下らん一族のようだなアインツベルンと言うのは？」

「・・・・・・・・」

「貴様の体の構造から考えて後一体でもサーヴァントが消えれば、貴様はもはや会話も出来なくなるだろう。既に二体のサーヴァントが消えただけで貴様の体はまともに動かんようだからな」

「二体？」

ブラックの告げた事実アイリスフィールは疑問の声を上げた。アイリスフィールが知る限り倒されたサーヴァントはキャスターだったジル・ド・レエだけ。

では、新たに倒されたサーヴァントは誰なのかと疑問の視線をブラックに向けると、ブラックは何でもないように答える。

「貴様が眠っている間にギルガメッシュを倒した。人類最古の英雄王は、さぞ聖杯の容量を満たしたようだな」

「……貴方……まさか、聖杯戦争のシステムを」

「理解している。他のサーヴァントどもはともかく、俺は聖杯など信じていないからな。何かしらの思惑があつて聖杯戦争などと言う戦いが考えられたと考えていた。そして俺が召喚された家は偶然にもその手の情報が大量に在った。この地の戦いは完全に理解させて貰ったぞ」

「……」

アイリスフィールはブラックの言葉に沈黙するしかなかった。

よりにもよつて最悪のサーヴァントに聖杯戦争のシステムを完全に理解されてしまったのだ。それが事実だとすれば、自身の正体に気がついてても可笑しくは無い。

寧ろ聖杯戦争のシステムを理解されれば、自身の正体に行き着かない事の方が可笑しいとアイリスフィールは思つてしまう。

もはやブラックが自身をセイバーや切嗣の下に帰す可能性は無いと確信する。いや帰る事さえも既にアイリスフィールには不可能だった。

アイリスフィールの体の中には既に二体のサーヴァントの魔力が存在している。

その為にアイリスフィールの体が本当の役目を行い始めた。その証拠にアイリスフィールの体は動かない。無理をすれば動くだろうが、そんな事をブラックが許す筈はない。

「別に俺は聖杯なんぞ興味は無い。だが、貴様には見て貰いたい資料が在るんでな。この聖杯戦争の根幹を揺るがすかもしれない資料だ」

「そ、それは如何言う意味なの！？聖杯戦争の根幹を揺るがすかもしれない資料というのは！？」

「知らん。だが、その資料の一文にはこう書かれていた。“大聖杯に異常あり”とな」

「大聖杯に異常！？そんな、そんな筈が無いわ！？」

アイリスフィールは悲鳴のような声を上げて、ブラックの告げた事実を否定した。

無理も無いだろう。アイリスフィールは聖杯戦争を構築した御三家・アインツベルンの人間。何よりも聖杯そのものである。

異常が在るのならば真つ先に自身が気がつくはずだとアイリスフィールは思っている。

しかし、ブラックからすればアイリスフィールが知らないのは当然だと考えていた。

何せブラックは形は違うが聖杯戦争のシステムに良く似たモノを知っている。だからこそ、ブラックは異常が起きていても誰も分からないと確信できた。

“異常が正常な状態だと判断されていれば、それは異常では無い”のだ。ブラックの知るモノもその状態だったのだから、聖杯も同じ状態ならば異常が起きてると誰も分からないだろう。

「良く聞け。俺はこの聖杯戦争のシステムに良く似たモノを知っている。それもまた聖杯と同じように魔力を大量に集めて完成されるモノだ。完成すれば世界さえも手中に収める事が出来る力だと知らされ、誰もがその力を望んだ」

「それはまさか・・・」

ブラックの告げた事実アイリスフィールは呆然としながら声を出した。

もし本当にブラックの告げてたモノが存在しているとなれば、それはこう呼べるだろう。

“聖杯”と。

世界を手中に納められる力など、聖杯以外にアイリスフィールは考えられなかった。

最もアイリスフィールの考えは間違っている。ブラックの言うモノは、ブラックの唯一無二のパートナーのルインである。

ルインもまた魔力を大量に集めて真の意味で完成出来る存在。冬木に存在している聖杯とルインの完成の仕方は良く似ていた。だからこそ、ブラックとルインはますますこの地に存在している聖杯に不信感を抱いた。

「だが、コイツは言い方は凄まじく気に入らんが、欠陥品だった。何せ完成してもソイツを扱える者が居なかったのだからな（俺を除いてはだが）・・・さて、話は戻すが、それは最初は完全に無害な存在だった。だが、人間どもの欲望によって徐々に破壊にしか力が扱えない存在になった。此処で質問だ？魔術師とは果たして自分達が決めたルールを護る連中なのか？」

「・・・・・・・・」

ブラックの質問にアイリスフィールは答えられなかった。

だが、心の中では確かにブラックの考えを肯定していた。自身を聖杯として生み出したアインツベルンは聖杯を手に入れるという妄執に囚われている。他の御三家も同じように聖杯に魅了されているだろう。

それだけではない。他の魔術師達も聖杯を手に入れるという欲望に囚われている。

万能の聖杯を手に入れるためならばどんな手を使っても可笑しくは無い。ならば中にはルール違反を犯す者が居ない方が可笑しい。そしてその者が聖杯戦争に最も詳しい御三家の者だったならば、何かしらの変更を秘密裏に聖杯戦争の根幹と呼べる大聖杯に手を加えても可笑しくは無いのだ。

その事実に行き着いたアイリスフィールは全身を蒼白に染め、恐る恐るブラックが手に握っている資料に目を向ける。目の前に在る資料は間違いなく、聖杯戦争に関わる御三家の一つ間桐が残した資料。その信憑性は限りなく高い。

アイリスフィールは自分が如何行動すれば良いのかと深く苦悩するが、何とか決意を固めて、ブラックに毅然と顔を向ける。

「拝見させて……その内容が本当に聖杯戦争の根幹に関わるのならば、私は見なければいけないわ」

「それは貴様の為か？」

「……夫とそして娘の為……私は切嗣に聖杯を手に入れて、願いをかなえてほしいと思っている。だからこそ、知りたいのよ」

（やはりこの女……中身が無い。氣に入らん。この女を見ていると苛立つ）

ブラックはアイリスフィールの存在が無性に苛立つてしようがなかった。

アイリスフィールとブラックの生まれは非常に似ている。

聖杯として望まれて生まれたアイリスフィール。

意思無きダークタワーデジモンとして生み出され、自身の存在を利用されて生まれたブラック。

それ故にブラックはアイリスフィールが非常に気に入らなかった。まるで意思無き自身を見せられているようで如何にも気に入らない。そしてブラックは一つの事を決めてゆつくりと立ち上がり、アイリスフィールに持っていた資料を投げ渡す。

――ポン！

「別の家だから解読には時間が掛かるだろう。それまでは他のサーヴァントどもは誰も倒させん。さつさと資料を読み解くんだな」

「・・・私がこの資料の内容を貴方に教えるとは限らないわよ」

「その時はその時だ。俺は別に聖杯になんぞ興味は全く無い。完成した聖杯が気に入らなければ破壊すれば良いだけの事だからな」

そうブラックはアイリスフィールに自身が聖杯に行う事を簡潔に述べると、脇目も振らずに部屋を出て行った。

アイリスフィールはそれを確認すると、ゆつくりと体を何とか起こし、ブラックが置いて行った資料を読み始める。その内容が自身に絶望を与える事になる内容だとも知らずに、アイリスフィールは自身の夫である切嗣と娘であるイリヤの為に資料を読み続けるのだった。

そしてアイリスフィールが居る部屋から出たブラックは、静かにリビングで自分達のこれからの行動について考えていた。

（遠坂の魔術師は、魔術刻印とか言うモノを剥ぎ取って何処か遠くの都市の病院でも放逐するが正解だな。その場所を雁夜の思っている女に伝えれば、小娘達を連れて会いに行くだろう。これであのセイバーの本当のマスターは雁夜の弱点に手が完全に出せなくなる。

そして次に行うのはライダーの要求だった酒宴か・・・在る意味ではこれは良い機会だ。他のサーヴァントどもの願いを知るチャンス。ランサーはともかく、ライダーとセイバーの願いを知りたいからな・・・だが、問題は言峰綺礼とアサシンだ。連中がこれから如何言う動きを行うのだけは読みきれん。奴の行動から考えてセイバーを狙っているようだが、今の状況ではセイバーを倒す訳にもアサシンも倒す訳にも絶対にいかん)

ブラックとしてはとつと綺礼自身を狙うか、セイバーかアサシンを倒したいと思っている。

しかし、今他のサーヴァントを倒せばアイリスフィールに更にサーヴァントの魔力が入り込み、その身は更に聖杯として完成しようと動くだろう。

そうなればアイリスフィールに読み解かせている資料の内容が完全に不明となってしまう。時臣の意識が戻る気配が無い今、あの資料を読み解ける可能性が高いのはアイリスフィールだけ。

故にブラックは少なくともアイリスフィールが資料を読み解くまでは、他のサーヴァントが倒れる訳には絶対にいかないのだ。

(チツ!! 本能が警告を発しなければ気にせずに戦うというのに! ?..... 在る意味ではライダーの提案は助かった。とにかく酒宴の準備を急がねばならんな)

そうブラックが今後の方針を固めていると、隠れ家の入り口の扉が開き、ルインを伴った雁夜が入ってくる。

「ブラック。言われたとおり俺はルインのマスターを装って令呪を貰って来たぞ。それと指示通りに転移を使って来た」

「良し。これで教会を見張っていた連中はお前と俺の関係は協力者

と言う関係だと考える筈だ」

「でしょうね。少なくとも雁夜さんが遠坂の魔術師と戦っているところを目撃したアサシンとそのマスター以外は考えるでしょうから」

「……それで何か聖杯の状況については分かったか？」

「今あの女が例の資料を読み解いている……だが、恐らく此処の聖杯は碌でもないモノの可能性が高いな。俺の本能がそう告げている」

「そうか……なら破壊する方針で俺達は動くべきだ。そんな危険な物をこの地には置いてはおけない」

雁夜はそうブラックの言葉に深く頷きながら、聖杯の破壊を決意した。

もしその聖杯が本当にブラックの言う通りの物だとすれば、それは葵や凜、桜に確実に被害を及ぼす。そんな事を雁夜は認められない。時臣を倒した今、雁夜が行うべきなのは葵達の身に危険を及ぼすモノの排除。

残された命を全てそれに使う事を決意している雁夜は、迷い無く聖杯の破壊を決めた。

その様子を見ていたブラックは静かに雁夜の決意に頷き、ルインに顔を向ける。

「ルイン。お前は今から他のサーヴァントともに酒宴場所を通達して来い。セイバーとランサーには人質の事を話せば確実に来るだろうからな」

「了解しましたブラック様……それで酒宴の会場はあの場所で

宜しいのですか？」

「当然だ。あの場所は如何言う訳か結界が張られている。その結界は如何言う訳か俺達サーヴァントに対して有効な結界だからな。あの場所ならばアサシンが乱入して来ても簡単に対策が取れる。あの場所こそが酒宴の会場に最も相応しい場所だ」

「では、私は他のサーヴァントにその場所を伝えて準備して参ります」

ルインはそうブラックと雁夜に伝えたと、ゆつくりと自身の周りに転移用の魔法陣を出現させ、ブラック達の前から転移した。

ブラックはそれを確認すると、僅かに体をソファーに深く腰掛けて僅かに辛そうに顔を歪めている雁夜に顔を向ける。

「大丈夫か？」

「……ああ、まだ大丈夫だ……すまないな……思ったよりも俺の中に居る刻印虫どもの限界が近いらしい……爺が居なくなつた事がこんなところで悪い方向で進むとは思っていなかった」

雁夜はそうブラックに質問に僅かに辛そうに答えた。

元々雁夜の体の中に寄生した刻印虫の主は臓硯だった。その臓硯が死んだ事で雁夜の中に存在している刻印虫達にも影響が遂に出始めたのだ。

雁夜の体は本来ならば既に死んでいても可笑しくない状態にある。それがまがりなりにも生きていられるのは体に中に存在している刻印虫のおかげだった。だが、その刻印虫達に異変が起き始めたのだ。原因は先ず間違いなく刻印虫の主だった臓硯の死だと雁夜は考え

ている。あの悪辣な老人の事だ。

自身が反逆した時の備えも事前に刻印虫の中に仕込んでいたのだろつと雁夜は考えていた。

「すまないブラック・・・お前やルインフォースが色々としてくれたが・・・如何やら本当に俺の命はこの聖杯戦争で終わりそうだ」

「・・・・・・・・」

「だが、俺は少なくともこの聖杯戦争が終わるまでは何が何でも生きてみせる・・・葵さん達の為だけじゃなく、お前やルインフォースに恩返しをしたいからな」

「フン、言われずともお前には絶対に生きて貰う。それが最初の契約だったんだからな」

「ああ、そうだな・・・少し眠らせて貰う」

雁夜はそうブラックに声を掛けると、ゆっくりと目を瞑り、深い眠りの内につく。

その様子を静かに見ていたブラックは、何とかして雁夜の体を治療する方法を見つけなければいけないと考えるのだった。

イスカandalとウェイバーがアジトとして暮らしているマツケンジー家。

その家の家族としてなりすましていたウェイバーは、自身が寝泊りしている部屋の中で四画に増えた令呪を眺めながら、深く考え込

んでいた。

考えているのは先日ので戦いで発揮されたブラックの底知れない力。魔力が全く感じられなくても一級品以上の宝具に匹敵する技を使い、更にはあのギルガメッシュが使った規格外の宝具の神秘を魔力にまで還元する同様の規格外の宝剣。

どれをとってもこの聖杯戦争で最強の称号が相応しいのはブラックしか考えられないとウェイバーは思っていた。

自身のサーヴァントであるイスカンドルもまた最強の称号を関する相応しいとは一応はウェイバーは思っているが、それでも単体でブラックに勝てる確率は限りなく低いとウェイバーは思っていた。

「やっぱり誰かと同盟を組むべきなんだろうな……. . . . . だけど、残っているサーヴァントで信用出来そうなのって……. . . . . 居ないじゃないか」

現状で残っているサーヴァント達のマスターを思い浮かべて、ウェイバーは顔を下に俯けた。

ブラックとルイン、そしてイスカンドルを除けば、残っているサーヴァントは三体。

その三体の内のランサーは絶対に同盟を結んでくれないとウェイバーは考えていた。何せウェイバーはランサーのマスターであるケイネスから聖遺物を盗んでイスカンドルを召喚した経緯が存在している。

その為にケイネスからは恨みに怨まれていると、港場の出来事で充分にウェイバーも理解している。

残っている二体の内、セイバーも実力的には確かに信用は出来るが、今はランサーによって左腕が使用出来ない状態で在る為に、イスカンドルと共に戦っても足手纏いになる可能性が高い。両腕が無事ならばウェイバーはセイバーと何としても同盟を結びたいと考えただろうが、現状ではデメリットの方が高いと思っている。

アサシンはもはや論外としかウェイバーには思えなかった。実力的にもそうだが、何よりもそのマスターが信用なら無い。

「如何考えても他のサーヴァントと同盟を結ぶのは無理か……ハア、となるとライダーだけで何とかバーサーカーとイレギュラーの対策を練らないとな……ちよつと待てよ……よくよく考えてみたら僕はライダーの本当の宝具を知らないじゃないか！？」

ウェイバーは今更ながらに自身がイスカンドルの本当の宝具を知らない事実を思い出した。

最初に召喚した夜にイスカンドルがライダーのクラスとして召喚された理由である“ゴルディアス・ホイール神威の車輪”は見せて貰ったが、その時にイスカンドルは真の宝具は他に在るとも告げていた。

それを使うほどの強敵が現れれば使うとイスカンドルは言っていたが、もしかしたらその宝具の内容が分かればブラックとルインに對抗出来る可能性が在るウェイバーは思い至り、すぐさま立ち上がりイスカンドルが居る部屋へと向かい出す。

――ボタン――！！

「ライダー――！！お前のもう一つの宝具の内容を教え……ろ」

イスカンドルが居る部屋に入り込んだウェイバーは、入って来た時の勢いも忘れて呆然となった。

何故ならばウェイバーの目の前には、胸板に部分に世界地図をかためてタイトルロゴが描かれている半そでのプリントシャツを着ているイスカンドルと、青と白のロングコートを羽織り、スカートを履いた美貌の女性・ルインが互いにゲーム機のコントローラーを握って真剣な顔をしながら何かの格闘ゲームをやっていたのから。

「ムウゝ！お主！やはり中々にやるではないか！」

「フフフツ！生前でヴィヴィオをちゃんと戦って鍛えた腕です！あの子との戦いの日々の為にも負けられません！」

「フッ！余とて負けられんぞ！征服王の意地を見せてくれ……」

「何をやっているだ！？お前らは！？」

真剣にゲームをやっているイスカンドルとルインに向かって叫び、

その隙を逃さずにルインはコントローラーを操り、画面の向こうに映っているルインが操っている槍と盾を構えて背中に赤いマントを羽織っている白き騎士が、イスカンドルが操っている弓と盾を備えている獣騎士に技を叩き込む。

「ロイヤルセイバー……!!!」

「グアアアアアアア——！！！」

「又オオオオオー！！・・・余が負けた」

「フッ、他の事に注意が向いたのが敗北に繋がったんですよ」

テレビ画面に敗北が示し、KOの文字が映っていたの目撃して頂垂れているイスカンドルに、ルインは勝者の笑みを口元に浮かべながら声を出した。

その様子を見ていたウェイバーは本当に頭が痛そうに額に手を置いた。

現在は聖杯戦争の真つ最中。にも関わらずに自身のサーヴァントと先日交渉を持ち掛けてきたサーヴァントが自身の隠れ家の中でゲームをやっていたのだから、普通の感性を持っている者ならば頭が痛くなるのは当然だろう。

最もイスカandalもルインもウェイバーの様子になど一切構わずに、互いに真剣な顔をして話を始める。

「さて、ゲームも終わった事ですし、改めて私が此处に来た理由を説明しましょう。例の貴方の要求だった酒宴の話です」

「うむ、待っておったぞ。余は本当に楽しみで在ったからな」

（あの要求は本気だったのか……ああ、何だか凄く眩暈がして来た）

ウェイバーは目の前で酒宴についてを話し合っているイスカandalとルインの姿を見て思わずふらついた。

しかし、ウェイバーの様子になど構わずに話は進み、酒宴については大詰めに入っていた。

「よし、では明日の夜にその場所で酒宴を開くのだな？」

「はい、既に料理やお酒などは最高の物を準備しましたので楽しみにして下さいね」

「……ちよつと待て？お前サーヴァント何だろう？何でそんな簡単に酒や料理が用意出来るんだよ？」

ウェイバーがそう疑問に思ふの当然だろう。

酒や料理などを用意するのにはとにかくお金がいる。生前にお金

を持っていたとしても、現代では使えない代物である。それな  
ルインはいとも簡単に全てを用意した。

何故それだけの物が用意出来たのかとウェイバーは思わず疑問の  
視線をルインに向けると、ルインは何でもないように悪夢のような  
事実を伝える。

「簡単ですよ。世の中には悪党が多いですからね。そう言う連中が  
持っている隠し口座をハッキングして手に入れたんですよ。序にそ  
う言う連中は全員悪事をばらして警察に捕まっています」

（アレはこの女が犯人だったのか！！）

ルインが告げた事実にはウェイバーは内心で叫び、此処数日で何度  
もテレビなどで報道されていた政治家の脱税や企業の汚職などを思  
い出した。

ブラックとルインは魔法と呼べるほどの科学が存在している。そ  
れを利用してハッキングなどを使用してお金を手に入れたのだ。電  
子から生まれたブラックからすれば簡単な事だったので銀行のデー  
タなども書き換えて簡単に金を手に入れていた。

因みに外国であろうとそれは可能なので、ブラックはアインツベ  
ルの口座などにもハッキングして財産を全て搾り取る事を既に決  
意している。

「今の世の中は機械を使いますからね。私からすれば簡単な事です  
よ」

「ま、まさか？僕の口座とかも？」

「簡単にハッキング出来ますよ。まあ、そんな方法を使ってこの戦  
争に勝つ気は全く無いので安心して下さいね。では、私は他のサ―

ヴァントへの呼びかけもありますので失礼しますね」

「――シン！」

言葉を言い終えると共にルインはその場から転移して行った。

その様子を愉快そうに見ていたイスカンドルは直前にまでルインが居た場所から目をそらし、再びゲーム画面へと目を向け、コントローラを握る。

「ウム、経済力にも問題は無いようだ。これはますます余の配下に加える事を考えねばな」

「そんな事を言っている場合か！？何なんだよ！？あのサーヴァントは！？現代機械に何で過去の英霊が詳しいんだよ！？」

「坊主。それは違うぞ。あやつとバーサーカーは恐らく過去の英霊ではない」

「……何だって？」

突然のライダーの真剣な言葉にウェイバーは思わず先ほどの剣幕も忘れて、ゲームを真剣にやっているイスカンドルの背を見つめる。

「良く考えてみよ？アレほどの力を発揮して、更には宝具もバーサーカーは使用したのじゃぞ？なのにあのバーサーカーの正体に余は全く辿り着けん。ならば、残された可能性は一つ。あのサーヴァントと先ほどの女は未来の英霊なのじゃろう」

「未来ってそんな事をありうるのか？」

「余達英霊の居る本来の座は時間軸や世界の理から隔絶した場所に在る。故に其処には未来も過去も無い。だからこそ、未来の英霊なんでも居る。最も触媒が分からんから誰も召喚出来んがな。それに知名度なんぞない分例外を除いては弱いだろうが」

「って事はバーサーカーのマスターは、その未来の英霊の中でも例外中の例外を引き当てたって事か？」

「恐らくそうじゃろう・・・だが、もしこの推測が当たった場合、あのバーサーカーは生前とんでもない事を行った可能性が高いと言う事だ。なんせ知名度も無くてあのステータスに宝具じゃからのう。一体何を行って英霊になったのか本当に気になるわい」

「・・・もしかしてお前が酒宴を開くなんてとんでもない要求を出したのは」

「まあ、それも確かに理由の一つでは在る。一番の理由はのう、坊主。これだけの英傑豪傑が集まっとるのだ。ならば英雄としての“格”を見比べて見たいのだ余は・・・それに旨く行けば聖杯戦争の大方に片がつくかもしれん。坊主にしてみても手を組む相手を見定められるであらう？」

（コイツ！？僕の考えを！？）

「まあ、余は余自身の力でバーサーカーとあの女子には戦いを挑みたいわ。アレほどの荒猛者に卓越した知略。余は本気であやつらを配下に加えたくなった。酒宴が本当に楽しみだわい」

イスカンドルはそう獰猛な笑みを口元に浮かべながらウェイバーに声を掛けると、再びゲームに集中し、ウェイバーは呆然としなが

ら自身のサーヴァントの背を静かに見つめるのだった。

とある廃工場内部。

その場所に簡易に用意にされたと思われるベットのうえでランサーのマスターであるケイネス・アーチボルトは眠り続け、ランサーはその様子を辛そうに見つめていた。

冬木ハイアット・ホテルでの一件後、ランサーは意識が戻らないケイネスを連れてこの廃工場に隠れ潜んだ。本来ならば今の状態にケイネスは病院に連れて行くべきなのだろうが、ホテルの爆破まで行った相手が病院を爆破しない可能性は限りなく低い。

寧ろそれを行う可能性は高いとランサーは経験から判断して、人目がつかず、余りに人が来ない廃工場の中に隠れたのだ。

しかし、冬木ハイアット・ホテルでの一件から数日経ってもケイネスの意識が戻る気配は全く無い。外傷が無い事から精神的に何かされたのだとはランサーも分かったが、ランサーは残念ながら医者でも魔術師でもない。故にケイネスを復帰させる方法が分からずに途方にくれながらも、ケイネスの体を労わっていた。

「クッ！！俺がもつとしつかりしていればこのような事態には！・・・ケイネス様・・・お許し下さい」

「いえいえ、貴方には責任は全く無いと私は思いますけどね」

「ッ！！その声は！？」

背後から突然響いた声にランサーは瞬時に自身の愛槍を二本とも出現させ、鬼の形相を浮かべながら背後を振り返ると、ルインが笑顔を浮かべながら部屋の入り口に立っていた。

「やはりイレギュラー!!」

「怖いですね。美貌が台無しですよ」

「黙れ！貴様良く俺の前に顔が見せられたな！ケイネス様をこのようなお姿にした事を償って貰うぞ!!」

ランサーはそう叫ぶと同時に素早くルインに向かって駆け出す。

最速のサーヴァントと呼ばれ、魔術師に取って天敵の宝具を持つ自身ならばルインが魔法行使する間もなくを倒せるとランサーは確信するが、ルインの体を破魔の紅薔薇<sup>ゲイ・ジャルグ</sup>が貫く直前で在る事実<sup>ゲイ・ジャルグ</sup>に気がつき、破魔の紅薔薇を止める。

「――ピタッ!!」

「……幻影か……」

「正解ですよ。本当の私は別の場所に居ますので、それで貰ってもただこの幻影が消えるだけなので無意味ですね」

ランサーの質問にルインは簡単に笑顔のまま答えた。

流石にイスカandalやセイバーと違って天敵の能力を持つランサーの前にルイン自身が現れるのは不味い。だからこそ、幻影を使ってルインはこの場に現れたのだ。

幻影ならば倒しても意味が無いとランサーは苦々しげに顔を歪め、ルインを射殺さんばかりに睨むが、当の本人であるルインは気にせずランサーに用件を伝える。

「さて、貴方も何時までも私とは一緒に居たくはないでしょうから

用件を伝えますね。イスカンダル主催の酒宴が明日の夜に開かれますので、出来れば参加を願いたいのですか？」

「酒宴だと？・・・悪いが断らせて貰う。そのようなものに出席する義務など無い」

「義務ならありますよ。貴方のマスターの婚約者は今何処にいますでしょうか？」

「ッ！・・・貴様がソラウ様を！」

「はい、攫わせて貰いました。ですが、参加してくれたら無傷でお返ししますし、其処で倒れているマスターの意識を回復させる方法も教えて上げますよ」

「・・・貴様は信用ならん。この状況を利用してケイネス様を亡き者にしようとするつもりであろう」

「信用ないですね。まあ、当然でしょうが、なら其方のマスターも一緒にくれば良いでしょう。意識の回復方法は既にソラウと言う女性に教えてありますからね・・・貴方もそろそろ自分の意思をハッキリと彼女に伝えないと、生前の二の舞になるでしょうから」

「クッ！！」

ルインの指摘にランサーは苦々しい声を出した。

今の言葉でランサーは確信出来た。目の前にいる、ルインは自分達の状態を知り尽くしている。

確かにこのままでは生前の二の舞になる可能性が高いとランサーも考えていた。それを考えればルインの提案は悪くないとランサー

は判断する。

どの道今の状態のケイネスを復帰させる方法をランサーは知らない。それだけではなく自身に魔力供給を行っていてくれるソラウの身柄はルインの下にある。

ならば此処はルインの言う酒宴に参加するしかないと言ランサーは腹立たしく思いながらも考え、ゆつくりとルインに顔を向ける。

「良からう。その酒宴に参加する。だが、もしソラウ様に傷をつけ、ケイネス様の意識が戻らない時は貴様を我が槍で貫かせて貰う」

「怖いですね。本当に貴方の忠誠心は怖いと思うと同時に素晴らしいですよ……。ですが、一つだけ忠告です。そのマスターは意識が戻れば確実に貴方を潰しますよ。貴方の忠誠心がどれだけ強くとも、忠誠を理解出来ない愚か者には届かないのですから」

「黙れ!!」

「――ザン!!」

ランサーはルインの言葉を聞き終えると同時に凄まじい怒気を放ちながら破魔の紅薔薇を振り抜き、ルインが作っていた幻影を一瞬の内に切り裂いた。

魔力を打ち消す能力を持つ破魔の紅薔薇の効力によって幻影は一瞬の内に消滅するが、ランサーは苦々しげな視線をルインの幻影が居た場所に落ちている手紙らしき物に向け続けるのだった。

冬木市街中。

昼頃と言う事で人通りが多数存在し、多くの人々が街中を行き渡

っていた。

そんな人々の中をダークスーツに身を包んだセイバーは思い悩むような顔をしながら歩いていた。

彼女の頭の中に在るのは行方不明のアイリスフィールの事と、綺礼から渡された切嗣に関する資料の事だった。

確かにセイバーも生前は無辜の民を犠牲にする策を実行した事がある。だが、切嗣のやり方はそれ以上に非道としかセイバーには思ふ事が出来なかった。今のセイバーには綺礼の言うとおり切嗣の願いが本当に世界の救済なのかも信じる事が出来なかった。

こうして当ても無く街中を歩いているのも、歩くの止めれば切嗣に対する疑念だけが募ってしまうからだった。

そんな風にセイバーが思い悩みながら街中を歩いていると、前方からセイバーにとってとは絶対に忘れる事が出来ないと断言出来るルインが笑みを浮かべながら歩いて来る。

「あらあら、騎士王様？お一人なんですか？」

「イレギュラー・・・」

ルインの姿を発見したセイバーはランサーと同じように射殺さんばかりに睨むが、昼間で多くの人々が周りに居る事からいきなり切りかかる事は無かった。

その様子をルインは楽しげに見つめながらポケットの中に手を入れ、一枚の紙らしき物をセイバーの顔の前に翳す。

「怖い顔は止めて欲しいですね。此処には沢山の関係ない人達が大量にいるんですよ。アッ！！もしかして私を倒す為に犠牲にしますか？貴方のマスターのように？」

「クッ！！」

「まあ、今日は貴女を虐めるのはこれぐらいにしておきますよ。要件を伝えますね。明日の夜にイスカンドル主催の酒宴がこの紙に書かれた場所で開かれます。貴女にも参加して欲しいんですけどね？」

「断る。例えばスカンドル主催であると、貴様も絡んでいるのだから。そのような場に私が行く理由は…」

「聖杯戦争の真実。そしてアイリスフィールと言う女性が貴女に隠していた真実が知れてもですか？」

「……アイリスフィールが私に隠していた真実？」

セイバーはショックを受けたような顔をしてルインの顔を見つめた。

切嗣はともかく、セイバーはアイリスフィールを信頼していた。そしてアイリスフィールまた自身を信頼していてくれるとセイバーは思っていた。

だが、今のルインの言葉が事実だとすれば、信頼していたアイリスフィールさえも自身に隠していた事実が在ると言う事になる。

それは何なのかとセイバーは思い悩むが、ルインは答えずにセイバーの横を通り過ぎながら胸ポケットに紙を入れる。

「そうですね。あの女性も貴女に重大な事実を隠していたんですよ。とても大事な真実を……。もし貴女がそれに思い至る事が出来なければ、私は貴女に少し同情しますね。貴女は誰からも信用されていないのですかね」

「ッー!!」

ルインの哀れに満ちた言葉にセイバーは慌てて背後を振り返るが、既にルインの姿は何処にも存在していなかった。残されたのはセイバーの着ているダークスーツのポケットに入っている酒宴会場の場所が記された紙だけだった。

## 第十九話 酒宴を開始する恐怖と征服王

ブラックとルインが第一の拠点に選んだ寂れながらも地理を把握する事が出来るホテル。

そのホテルから数百メートル離れた場所の駐車場に一台のワンボックスカーが駐車していた。

ワンボックスカーの中は取り立て変わったモノは存在せず、ヨレヨレのコートを着て、ぼさぼさの髪的中年と思われる男性がアイマスクを付けて寝そべっているぐらい。

一般の誰もがその人物を怪しまないだろう。しかし、その人物こそ裏社会では“魔術師殺し”と呼ばれて恐れられている人物、衛宮切嗣だった。

そして切嗣が静かに寝そべり続けていると、耳に付けていたイヤホンに連絡が届く。

『切嗣。やはりこのホテルにイレギュラーと同じ容姿した女性が泊まっている事は間違いないようです』

「・・・そうか」

自身の補助機械である舞弥の報告に切嗣は怒りを抑えるような声で答えた。

二人は先日のブラックとギルガメッシュの戦いを終えてからずっと、ブラックとルインのマスターを探索し続けていた。

戦いの時の準備は結局転移と言う予想外の形の移動で無意味になっってしまったが、少なくともブラックとルインが手を結んでいる事だけは切嗣と舞弥は確信出来た。

しかし、それは朗報ではなく最悪に近い事実だった。

あの人類最古の英雄王であり、空間切断さえも行える宝具を所持

していたギルガメッシュを撃ち破った凄まじい力を宿し、宝具の効果さえも初期化してしまう宝剣を所持していたブラック。

歴代のキャスタークラスを見ても先ず間違いなく最強の称号が相応しく、信じられないほどの魔道の知識を保有し、切嗣さえも上回る知略を駆使したルイン。

この二体が手を組んでいるとなれば先ず間違いなく自分達の最大の脅威になると切嗣と舞弥は考えている。

しかも自分達の最大の戦力であるセイバーは左腕を奪われてしまっている為に宝具の使用が出来ず、切嗣との関係もかなり悪い状況。追加の令呪を一つ手に入れたとはいえ、自分達の戦況はかなり悪いと切嗣は判断していた。

更に不味い事に妻であるアイリスフィールもルイン達の手の内に居る。このままでは確実に自分達の敗退は濃厚だと切嗣は戦況から考えていた。

「……舞弥。一先ず戻って来てくれ。相手は僕を嵌めた敵だ。そのホテルも罠の可能性が高い」

『分かりました』

切嗣の命令に舞弥は即座に頷き、通信機のスイッチを切った。

それを切嗣は確認すると、アイマスクで顔を隠しながら今後についてを考え始める。

（バーサーカーとイレギュラーの二体を相手にするのは得策ではない。片方だけでも厄介な相手だ。両方を同時に相手にすればセイバーでは絶対に勝てないだろう……。やはり両方のマスターを殺すのが得策だが、姿を全く見せようとしな。直接相手をした遠坂時臣ならば情報は持っているだろうが、其方の安否についても不明……。完全に連中の思い描いた状況か……。とにかくアイリの居所

を見つけないといけない。アイリルの秘密が他のサーヴァントやマスターに、そしてセイバーにだけは絶対に知られる訳にはいけない。これ以上の関係悪化は本気で不味い。令呪でもセイバーを縛り切れるか分らない)

切嗣は何としてもアイリスフィールを取り返すつもりだった。

アイリスフィールに隠されている秘密が暴露されれば、残された全てのサーヴァントとマスターは躍起になってアイリスフィールを手に入れようとするだろう。

自分達だけが知るべき秘密を絶対に暴かれる訳にはいかない。改めて自身が召喚したサーヴァントの相性に悪さを思いながら、切嗣は助手席から体を起き上がらせ、懐に入れているタバコを取り出し、アイマスクを外して、タバコに火を点けようとする。

しかし、タバコに火が点ける直前に切嗣は自身が乗っている車を、歩道から見つめているカソックを着た男の姿を発見する。

「ッ！……言峰綺礼」

行き交う人々の中からジッと自身を見つめている綺礼に、切嗣は険しい声を出した。

聖杯戦争が始まる前の事前の情報で切嗣は、綺礼をかなりの警戒対象として見ていた。

綺礼の在り方は空虚。ありとあらゆる部署に所属しながらも、全て一流になる一歩手前で何の未練も感じさせずに全て捨てる。

それ故に切嗣は綺礼が聖杯を求める理由が見つからず、危険視していた。

しかし、今切嗣の目の前に現れた綺礼から空虚さなど感じられなかった。何かを見つけ、何かを激しく求めている印象を綺礼は感じさせている。

この瞬間、切嗣の中の綺礼に対する危険度は一気にブラックとル

インと同等レベルにまで跳ね上がった。

アレは不味い。アレは完全に自分の敵。倒さなければ沢山の犠牲が生まれる事を切嗣は本能的に理解した。

即座に自身の武装を切嗣は取り出そうとするが、綺礼は構わずに切嗣に向かって唇だけを動かし、声無き言葉を告げる。

――挨拶代わりだ、世界の救済を求める者よ。

「ッ！！」

ーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオン!!!!

キヤ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ー  
ー  
ー  
ー  
！  
！  
！

[illegible]

自身の願いを知られている事に驚愕に目を見開いている切嗣の目の前で綺礼が背を翻した瞬間に、綺礼の立つていた背後のビルが爆破解体されたように一直線に大地に吸い込まれるように崩落した。

その光景は先日切嗣が冬木ハイアット・ホテルに行った行動そのもの。唯一の違いが在るとすれば、人々が逃げる前に崩落した事だけ。

その結果広がった地獄のような光景に切嗣は慌てて車から降りると、苦しんでいる人々を気にする事無く歩道を歩いている綺礼の背を憎しみに満ちた視線で睨む。

綺礼はその視線に気がつく、ゆっくりと切嗣の方に顔を向けて再び唇だけを動かす。

――お前がした行動の本当に結果を見せた。世界の救済を望む者

よ。貴様に世界の救済を望む資格は無い。

「言峰綺礼ッ！！お前は僕が殺す！！」

絶対に認められない敵に向かって切嗣は叫び、綺礼は僅かに喜悅に染まった笑みを浮かべながら今度こそ事故現場に向かって集まって来る人々の雑踏のなかに姿を消して行った。

そして切嗣から自身の姿が確認出来なくなる場所まで辿り着いた綺礼は、路地裏の影の中に浮かび上がっている髑髏の仮面の主・アサシンから他のサーヴァント達を監視していて得られた情報を吟味していた。

「ふむ、ライダーが酒宴を開くとは……何処までも動きが読めないサーヴァントだ」

「いかがいたしましたよう？」

「……酒宴には関わる必要は無い。お前達は今後も衛宮切嗣を監視し、“衛宮切嗣が行く先々で奴が行って来た暗殺の方法を見せるのだ”。そして奴の精神が追いつめられた時に、奴の隣に居る女を殺せ。衛宮切嗣の情報は頭の中に入っているのだろう？」

「ハッ！主殿から与えられし貴奴の情報は全て我ら全員の頭の中に入っています」

アサシンは綺礼の問いに迷い無く答えた。

先ほどのホテル解体爆破の準備を行ったのはアサシンだった。

時臣を見限る事を決めた綺礼は何体かのアサシンに現代知識を吸収するように命じたのだ。その現代知識は爆弾、重火器、危険物の

取り扱いなど物騒なものばかり。

全て綺礼が時臣から渡された切嗣の資料に書かれていたものを重点的に覚えさせていた。

セイバーを監視していたアサシンからの報告で、ブラックの言葉どおりに現代の情報をセイバーが調べている事を綺礼は知っている。その行動が冬木ハイアット・ホテル以降からますます強くなっている事も綺礼は知っていた。

だからこそ、切嗣の行動に関する資料をセイバーに渡せば、確実に新聞などに報道される内容と一致する事にセイバーは気がつき、切嗣に完全な不審を植えつけられる。

更に綺礼は自身の姿を切嗣の前で晒す事で全ての元凶が自身である事も示した。これによって切嗣が優先的に狙うのは綺礼となる。

自身には常にアサシンを十体以上護衛につけているので、狙撃などされても問題は無い。毒殺などは流石に危険だが、アサシン達が常に全て警戒しているので自身の護りも問題ない。

万全を配して綺礼は自身が考え抜いた策を実行したのだ。

「衛宮切嗣の戦闘能力は軽視出来ない。お前達も師の命令とは言え僅かながらも戦力が葬られてしまっている。今の私達に必要なのは強力な戦力だ。その為にもセイバーを手に入れ、使い潰さなければいかん。お前達が本格的に動くのは此方の戦力が整った時だと思え」

「ハッ！！」

綺礼の命令にアサシンは頷き、再び自身の姿を闇の中に消して行った。

それを確認すると綺礼は再び前に向かって歩き出し、今後についてを頭の中で考え出す。

（さてアサシンにはセイバーについては説明しているとは言え、疑

う者も居るだろう。諜報能力としては優秀だが、扱い難さでは厄介  
としか言えんな)

綺礼が召喚したサーヴァントであるアサシンは『百の貌のハサン』  
現代の知識で言えば多重人格と言う特殊な能力を持っていたおかげで、単一でありながらも複数の固体と言う稀有な存在。

最も英霊とは言え霊力の総量は変わりないので、分裂すれば戦闘能力値は低くなる。それ故に諜報能力では無敵だが、戦闘においては他のどのサーヴァントにも劣る。

サーヴァントを強化する術の一つである『魂喰らい』を行って戦闘能力が強化されてもブラックに勝てる可能性など万に一つも無い。何せブラックにはアサシンの最終手段さえも打ち破れる技が存在しているのだ。

先日のギルガメッシュとの戦いでそれを目撃したアサシン達は、全て綺礼のセイバーを手に入れて戦力強化を計るという策に同意したが、見てないアサシン達は綺礼に対して不信感を持ってしまっている。

集団は強力な武器だが、意思が統一出来なければ自分の首を絞める諸刃の剣でしかない。

その事を理解している綺礼はアサシンを如何すべきなのか悩んでいた。

(セイバーを手に入れるまでは保持すべきだが、それ以降は本当に切るしか在るまい。獅子身中の虫など不必要だからな)

そう綺礼は方針を決めると、人々の雑踏の中を歩き、自分の隠れ家へと戻って行くのだった。

冬木市に存在する柳洞寺と言う名の寺。

本来ならば住職などが暮らし、仏道を学ぶ場所。辺りがもう夕暮れを越えて夜に差し掛かる時間帯になっても本来は仏道を学ぶ者が居る筈。

しかし、今のその場所は無人へと変わり果て、仏道とは全く関係ないモノが多数並べられていた。

一目見て超高級品だと分かるワインや酒の数々に、一流のシェフが作ったと思われる古今東西の料理が所狭しと用意されたテーブルの上に乗せられていたのだ。

その様子をルインは満足そうに見つめ、ブラックはつまらなそうな顔をしながら用意されていた椅子に深く腰掛けていた。

雁夜は体の調子の問題が在る為に隠れ家でアイリスフィールの見張りを行いながら、ブラックの視覚から様子を見ている。

そして今その場にはブラックとルイン以外に、ランサーのマスターであるケイネスの婚約者・ソラウが山道に続く入り口を眺めていた。

ソラウが待ち望むのは自身の想い人であるランサー。

多少は自身が描いていた妄想とは形は違うが、それでも自身の為にランサーはこの場に来てくれる事はソラウにとっては何よりも嬉しい事だった。

更にソラウにはランサーとの繋がりを確かにするモノを得る方法を知っている。

それを必ず手に入れる為にもランサーの下へ戻らなければならぬ。

（ケイネスはこのまま脱落していて貰うべきよね。全くあの時に伏兵が居る事ぐらい考えるべきだったのよ。だけどそのおかげで私はランサーとの繋がりを確かに出来るモノを手に入れられるわ。そうランサーとの繋がりをね。フッフッフ）

ソラウはブラックに見えないように妖艶な笑みを口元に浮かべた。手に入れたくても手に入れられなかったモノがもうすぐ自身のモノになる。その事実にはソラウは歓喜に満ち溢れていた。

その様子を静かに横目で眺めていたルインは完全に呆れていた。ソラウの想いは完全にランサーに生前の出来事を思い出させる状況を呼んでいる。

このまま行けば確実にランサーは生前の悲運を確実に繰り返す事になるだろう。

（本当にランサーは運が無いですね。もし他のマスターだったら大きく結果は違っていたでしょうに・・・まあ、今日の酒宴の内容で運命が変わる事を祈るしかないですね。ブラック様の為にも）

そうルインが何処か陶醉しているソラウを見つめていると、山道の方から足音が響いて来る。

その音にソラウはランサーかと目を輝かせるが、山道を最初に登って来たのはジーンズにシャツを着てウェイバーを横に伴ったイスカンドルだった。

「・・・うむ！！余の予想以上の宴だ！！」

山道から入って来たイスカンドルは、寺の前の広場に用意されている数々の料理や酒に満ちげな声を上げて、一番近くに存在している日本酒などを手に取り始める。

ウェイバーはその様子に呆れながらもイスカンドルと同様に用意されていた酒の種類や料理の数々に目を引かれ、静かにブラックの隣の椅子に腰掛けているルインに声を掛ける。

「ちょっとした質問だが、この料理は誰が用意したんだ？」

「用意したのは昼間の内に私が雇ったシェフとかですよ。遂先日  
働いていたホテルが無くなったそうなので、日雇いで頼んだん  
ですよ。皆さん喜んでくれていました。ですから食べても大丈夫ですよ」

「そ、そうか」

「おいおい、坊主。疑う必要などなかるう。そのような方法でこや  
つ等が勝利したいと思つとるわけがないのだからな」

イスカンドルはそうウェイバーに告げると共にブラックに意味あ  
りげな視線を向け、ブラックも僅かに歓喜に満ちている笑みをイス  
カンドルに向けた。

ブラックは最初はイスカンドルには興味が無かったが、今は違う。  
ルインの正体に気がついている事もそうだが、イスカンドルはただ  
の馬鹿ではなく、頭が切れる大馬鹿だと知ったからだ。

そう言う手合いが一番厄介な事をブラックは経験上知っている。  
幾ら策略を練つても馬鹿には通じない。だからこそ、イスカンドル  
も強敵に値するとブラックは考えていた。

「貴様の要求に応じて来てやったぞ。何の話をする気だ？」

「なあに、まだ全てのサーヴァントが集まつてはおらん。そう焦る  
事も在るまい・・・お主も飲んだら如何だ？」

「フン・・・まあ、構わん。俺も貴様らに伝えたい事が在るから  
な」

そうブラックはイスカンドルに答えると、近くのテーブルの上に  
置かれていた高級そうなワインとグラス二つ取り、ワインのコルク  
を抜き取り、二つのグラスにそれぞれ注ぐ。

「イレギュラー。お前も飲め。今日は久々に酒を飲むのも悪くない日だ」

「仕方ないですね」

ブラックが差し出して来たグラスをルインは受け取り、イスカンダルも自身が持っていた日本酒を開けてグラスに注ぎ出す。

その余りにも聖杯戦争らしくない風景にウェイバーとソラウが呆然としていると、山道を素早く駆け上がって来る足音が鳴り響きだす。

「――ダダダダダッ!!」

「二番手はランサーのようだ」

「うむ、そのようだのう」

「エッ!?!」

ブラックとイスカンダルの言葉にソラウが山道に顔を向けた瞬間、背中にケイネスを背負ったランサーが山道から飛び出し、ソラウの近くに音を立てる事無く着地する。

「ソラウ様! ご無事ですか!?!」

「ええ、大丈夫よランサー」

自身の事を心配してにくれていたランサーにソラウは内心で言葉では表す事が出来ない喜びを感じていたが、それを表には出す事

はなく冷静に答えた。

その様子にランサーは安堵の息を吐きながら、背負っていた虚ろな目をしているケイネスをソツと近くに置かれている椅子の上に下ろす。

その様子を見ていたウェイバーは、ケイネスの状態に目を見開く。幾ら袂を別ち、殺し合いを行うべき相手とは言えケイネスは自身の力を認めさせなければいけない人物。

何故その人物が虚ろな目をして喋る事もしていないのだろうとウェイバーが考えていると、ランサーがソラウに近寄り質問する。

「ソラウ様。イレギュラーからケイネス様の意識を回復させる方法をお聞きになっておられるのでしょうか？」

「そ、それは・・・」

ランサーの質問にソラウは顔を横に逸らした。

確かにルインから既にケイネスの意識を回復させる方法をソラウは聞いている。しかし、それはソラウが望むところではない。ソラウとしてはこのままケイネスには脱落して貰っていたかった。

そうすれば自身がランサーのマスターになる事が出来る。ソラウはそう考えていたが、ランサーは何としてもケイネスに復帰して貰いたく再度質問しようとするが、その前にブラックが横から声を出す。

「止めるランサー。その男が意識を取り戻したら碌な事にならんぞ」

「ブラック。しかし・・・」

「港場で令呪を使用してまでお前にセイバーと共闘させようとした男だ。この場で意識が戻れば酒宴を確実に壊すぞ」

「そりゃいかな。余はこの酒宴を楽しみしておったのだ。ランサーよ。余の顔に免じて、其処で壊れとるマスターの意識の回復は待ってくれんか？」

「征服王……良からう。確かに俺もこの酒宴に無理やりとは言え同意した者……この酒宴では一切槍を振るわぬ事を此処に誓おう」

「フツ、ならばこの場で武器を持つのは無粋か」

「――シュン!!」

『ッ!!』

突然にオメガブレードを右手に出現させたブラックにウェイバーとソラウは目を見開いたが、ランサーとイスカンドル、そしてルインはブラックの行動の意味を理解し、ランサーも自身の二槍を出現させる。

イスカンドルはますますその様子に面白そうな笑みを浮かべながら、腰に差していた鞘に納まった豪壮な拵えの宝剣を抜き取り、抜き身の剣を頭上に振り上げる。

「征服王イスカンドルが、この一斬にて覇権を問うッ!!」

「――ズガガアアアアアアン!!」

イスカンドルは叫ぶと同時に何も無い空間に荒々しく剣を振り下ろした。

それと同時に落雷のような激音と衝撃が辺りに走り、切り裂かれ

た空間の中から二頭の神牛に引かれている壮麗な戦車 - ゴルディアス・ホイール “神威の車輪” が出現した。

同時に“ゴルディアス・ホイール神威の車輪”はゆっくりと並び立てられているテーブルの中心に移動し、ブラックとランサーはその箇所に自身の持っている武器を地面に突き立てる。

ーードスッ!!

「これで俺達の主力の武器は使用出来なくなった」

「うむ、酒宴の場に武器は不要だからのう」

「この酒宴を崩壊させたら、参加した全てのサーヴァントが酒宴を崩壊させた敵に挑むと言う誓いと言う事だ」

ブラック、イスカンドル、ランサーはそれぞれ自身の主力の武器の前で誓いを交し合い、それぞれ用意されている椅子に戻って行く。本来ならばこのような状況を作るのは下策としか言えないが、三人とも自身の扱う武器を前にして誓い合った。言うなれば自分達の誇りにそれぞれ誓いを捧げたのだ。

それを破ったモノは自らの誇りと信念を汚すと言う事に他ならない。

ブラックもイスカンドルもランサーも自身の誇りが自ら汚されるぐらいならば死を望む。

三人ともそれを理解しているからこそ、自分達の切り札を酒宴会場の中心に置いたのだ。

ルインも自身の魔力に枷を嵌めて自分がこの酒宴では暴れない事を示し、全員がそれぞれの椅子に座りながら最後のサーヴァントが来るのを待つ。

そして二十分後。漸く山道を登って来る足音が鳴り響き始め、ブ

ラックは飲んでいたワインをテーブルに置き、イスカンドルとランサーも山道に顔を向けると、スーツ姿のセイバーが現れる。

「――ザッ！」

「待っておったぞ、騎士王」

「……ライダー、酒宴に参加する前に質問します。この酒宴を開いた理由は何ですか？」

「なあにお主も王ならば分かるであろう？これは剣を交わさずに行う戦いよ。剣を交えるのが憚られるなら、杯を交えるまでの事、騎士王、そしてランサーにイレギュラー、バーサーカーよ。今宵はこの場に居る貴様らの『英雄の器』をとことん問いただしてやるから覚悟しろ」

「面白い」

「面白くなりそうですね」

「その言葉返させて貰うぞ、征服王」

「受けて立つ」

イスカンドルの宣告に酒宴に集まっている全てのサーヴァント達が好戦的な笑みを浮かべながら同意を示した。

そしてセイバーも用意されている椅子に向かって歩き出すが、フツと酒宴の中心部に置かれているオメガブレイド、ゴルドエイアス・ホイール神威の車輪、イ・ジャルグ破魔の紅薔薇、ゲイ・ボウ必滅の黄薔薇に気がつき、その意味を即座に読み取る。セイバーはブラック達が誇りと信念を出しあっている事を理解す

ると、自身も不可視の剣を出現させ、酒宴の中心に自身の武器を突き立てる。

ーードスッ！

「私も騎士の誇りに賭けて、この酒宴では剣を振るわない事を誓わせて貰います」

「うむ、ではこの場に集まった全てのサーヴァントとの誇りと信念が出揃った。始めよう。聖杯を手に入れるに相応しき者を見定める『聖杯問答』を」

イスカンドルはそう言いながら手に持ったグラスを掲げ、ブラック、ルイン、ランサー、セイバーもイスカンドルと同様にグラスを掲げて同時に飲む。

此処に聖杯戦争でも異例中の異例である『聖杯問答』が開始されたのだった。

## 第二十話 酒宴にて騎士王の願いを否定する深き闇と恐怖、そして英雄達

前編

聖杯戦争とは、その名の通り戦争である。

一つしかない万能の器である聖杯を求めて召喚された七体のサーヴァントと魔術師達が血で血を争う戦争。

過去の聖杯戦争でもその戦いは熾烈を極めていた。故に召喚されたサーヴァントと召喚した魔術師達も、聖杯戦争は誰もが命と信念を賭けた戦いだと思っている。

しかし、今、その前提を完全に覆す出来事が柳洞寺と言う名の寺で起きていた。

現界している六体のサーヴァントとの内、五体が集まり、酒宴を開いているのだ。

それぞれ参加した理由は在るが、聖杯戦争においては異例中の異例と呼んでいい事象。

そしてその酒宴が開催される発端となった人物。歴史にその名を残している大英雄『征服王イスカンダル』は相手を推し量るような目付きをしながら、マスターであるウェイバーと共に日本酒を飲み、それぞれサーヴァント達の顔を見回す。

上座に座っているイスカンダルから見て右側の席に座っているのは、ランサーのサーヴァントとして限界し、ケルト神話に名を残している英雄、『フィオナ騎士団随一騎士“輝く貌”のデイルムッド・オディナ』と、その召喚者で在る意識が無いケイネスに毅然としているソラウ。

左側の席にはイスカンダルと同様に王の称号を持ち、セイバーのサーヴァントとして現界している高潔な騎士 - 『騎士王アーサー・ペンドラゴン』。

そして最後にイスカンダルの眼力を持ってしても推し量る事が出来ない二体のサーヴァント、ブラックとルインが正面の席に座っていた。

（やはりこれだけの英傑豪傑が集まる光景は素晴らしい。出来れば全員余の配下に加えたいが、難しいわな．．．まあ、今宵は酒宴を存分に楽しもう．．．それにしてもバーサーカーの剣．．．ありや、ちと不味い。余に凄まじい威圧感を顕現した時から放つとるなあ）

先ほどからイスカンダルは、この場にいるサーヴァント達以上の威圧感を感じ続けていた。

その威圧感が現れたのはブラックがオメガブレードを出現させた時から。まるで大勢の民達を率いていた時のような圧迫感と威圧感が常にイスカンダルを襲っている。

“この場で偽証を行う事は赦されないと、まるで脅迫されているような力をオメガブレードは放っている”。

それを感じているのは何もイスカンダルだけではない。ディルムツドもセイバーもその威圧感を感じ続けていた。特にセイバーがオメガブレードを受けている圧迫感と威圧感はイスカンダル以上だった。

（あの剣は本当に如何なる伝承を持つ剣なのでしょうか？．．．まるで大勢の民達に見つめられている印象を受ける）

（アレほどの力を魅せたブラックが使う剣ならば、伝承に名を残さぬ筈は無い。しかし、全く心当たりが思い浮かばん。セイバーの剣はすぐに思い至ったが、ブラックの剣は思い浮かばん）

（．．．もしやあの剣は．．．だとしたらこの場では本気で気が抜けんのう．．．王である余とセイバーは特に）

セイバー、ディルムツド、イスカンダルは、宴の中心に突き刺さ

っているオメガブレードを見つめながら、内心でそれぞれ呟いた。

その様子をルインと共にワインを飲みながら見ていたブラックは、それぞれがオメガブレードに対する印象を読み取り、何でもないようにオメガブレードの正体を語る。

「どうやら俺の剣が気になっているようだな」

「そりや気にならん方が可笑しいわい。セイバーの剣やランサーの槍は分かるが、お前さんの剣だけは分からんからのう。余達に無言の圧力を与えている剣となれば尚更」

「ほう、如何やらオメガブレードも貴様らを推し量っているようだ」

「如何言う意味ですか、バーサーカー？ 貴方の言葉が正しければ、貴方の剣には意思が宿っていると言うように読み取れますが？」

「その通りだ。オメガブレードの本質は俺達サーヴァントの持つ宝具そのものに近い。宝具が人間どもの幻想の象徴だとすれば、オメガブレードを生み出したのは、“人間どもの平和を願う意思”だからな」

『ッ！！』

（やはり）

ブラックが告げたオメガブレードの正体にイスカンドルを除いた全員が目を見開いてオメガブレードを凝視し、イスカンドルは納得したように頷いた。

イスカンドルはオメガブレードの正体に薄々ながらも気がついていた。イスカンドルの真の宝具もまた、多くの想いが募った故に生

まれた宝具故に、この場にいる誰よりも早くオメガブレードに宿っている意思に気がついたのだ。

そしてますますこの場では嘘偽り赦されないとイスカンドルは思う。

王たる者、民草の憧憬の対象で在るべきだとイスカンドルは考えている。この場で英雄や王に相応しくない行動を取れば、オメガブレードに宿る人々の想いは例外残らず想いを汚した者を滅ぼす為に動く。

イスカンドルはそう直感的に判断し、デイルムツドもセイバーもこの場で争いはすべきではない尚更理解した。

オメガブレードの前で誓いを破ると言う事は、人々の幻想の象徴で在る自分達が人々の想いを否定する事に他ならない。反英霊ならばともかく、この場に集まったのは人々の平和を願う意思を侮辱するような英霊達ではない。

マスターであるウェイバーとランサーの魔力供給者であるソラウも、この場で暴れるのは自分達のサーヴァントとの関係に亀裂を入れてしまうと理解し、この場では自分達のサーヴァントに全てを委ねようと考えた。

しかし、そんなサーヴァントとマスター達の考えを理解しない人間達がこの場にやって来ていた。

セイバーのマスターである切嗣と補助機械の舞弥である。

「・・・舞弥・・・配置には着いたか？」

『はい、何時でも狙撃は出来ます』

寺を囲んでいる壁の外にある木の上でライフルを構えながら座っていた切嗣の耳元に、インカムから舞弥の報告が響いた。

その報告に頷きながら切嗣はライフルに備わっている暗視スコー

プを覗き、酒宴に参加しているマスター達とサーヴァント達の顔を見回す。

「・・・やはりバーサーカーとイレギュラーのマスターは居ないか」

求めている敵の存在が居ない事に、切嗣は僅かに苛立ちを含んだ声を出した。

切嗣が酒宴の情報を知ったのは、セイバーを監視していた舞弥の使い魔から報告のおかげだった。

幾ら信用もおけず、関係もかなり悪いとは言え、セイバーは切嗣のサーヴァントである。それ故に切嗣は万が一の時の為の監視をセイバーに付けていたのだ。

そのおかげで今回の酒宴の情報は切嗣と舞弥に伝わった。そして同時にこれは最大の好機だと切嗣は思っている。本当に殺したい獲物であるブラックとルインのマスターは居ないが、二番目に優先して倒したいと思っていたケイネスが現れてくれた。

ケイネスを倒せばランサーは消滅し、セイバーの左腕が戻る。そうなれば一気にこの場に集まった全てのサーヴァントに対してセイバーの宝具を使い、一掃する事が出来る。

更に全てのサーヴァント達は主力の武器を酒宴の中心に置かれている。ケイネスが狙撃されて、動揺している隙に令呪を使用してセイバーに命じれば全てが終わると切嗣は考えていた。

（“おめでたい”連中だ。だが、そのおかげでチャンスが出来た。セイバーは怒り狂うだろうが、まだ一つの令呪が残る。言峰綺礼を一刻も早く倒す為にも、今日この場で他のサーヴァント達には消えて貰う）

切嗣はそう考えながら狙撃の最高のタイミングを見計らい始める。しかし、切嗣も舞弥も知らなかった。切嗣達の行動は全て彼らの

背後で隠れ続けていた機械が見ていた事を。

そしてそれが既にブラックとルインに伝わっているとは思っていないかった。

（ブラック、やっぱりお前が言っていたとおりにセイバーのマスターと協力者が狙撃しようとしているぞ）

（分かっている。上手く隠れているが、視線を感じるからな）

自分達の隠れ家にいる雁夜からの報告に、ブラックは不機嫌さに満ちた声を出しながらワインを飲む。

ブラックもルインも切嗣と舞弥が隠れている事に気がついていて、そしてその切嗣の狙いも今の雁夜の報告で完全に理解する。この場の酒宴を切嗣は崩壊させて、勝利を得ようとしているのだ。

ブラックとルインからすれば中々に面白い策謀だとは思うが、完全に切嗣は相手が悪かった。ブラックとルインは切嗣以上に非道で残虐さに満ちた策を実行する敵と戦った事が在る。

その相手ならば狙撃で混乱した隙に、セイバーを使って宝具の使用などと言う周りくどい手は打たない。もっと非道で残虐な手を使って完全にサーヴァント達とマスター達の動きを封じた上で、逃げられない攻撃を放つ。

故にブラックとルインからすれば切嗣の策を撃ち破る手も簡単だと思いついていた。

（ブラック様、既に見えない障壁を多重に展開してあります。狙撃程度の攻撃では撃ち破れません）

（よし、奴らは今のまま泳がせて酒宴を続けるぞ。奴らが狙撃した時が、俺達の本当の狙いを告げる時だ）

ブラックはそうルインに告げながら、内心で酒宴の終わりを予想して笑みを浮かべる。

既にブラックはこの酒宴が誰かの手によって壊される事を直感していた。それが切嗣なのか、この場に集まっているサーヴァント達かマスターなのかまでは分からないが、セイバーと同様に未来予知に近い直感が、酒宴は誰かの手によって破壊される事を告げている。そしてそれはブラックにとっては嬉しい事だった。ブラックがこの酒宴に参加したのは、他のサーヴァント達との願いを知る為や争いを止めるだけではなく、他にも目的が存在していた。

そしてその目的が果たされれば、ブラックの願いである、“全てのサーヴァント達との戦い”が、現実性を増すのだ。

（此処に集まった連中は実力者だ。こいつ等との戦いは楽しめると良いな・・ククククッ）

そうブラックが内心で自身の目的に歓喜の笑いを上げていると、主催者であるイスカandalが日本酒が入っているグラスを持ちながら集まっている全ての者達に厳かな口調で語り出す。

「さて、本題に入るとしよう・・・聖杯は、相応しき者の手に渡る定めがあるという」

イスカandalが厳かな口調でそう告げると、場の空気が重くなった。

ブラック、ルイン、ディルムッド、セイバーもイスカandalに陰しい瞳を向け、雰囲気が変わったイスカandalを見つめる。

何時もの騒がしい雰囲気が消えたイスカandalの空気に、この場にいる全員が本題に入ったと理解したのだ。そしてそれが正しいと言つようにイスカandalは燃え立つような瞳が細まり、この場にサーヴァントを集めた理由を語り出す。

「それを見定めるための儀式が、この冬木における闘争だというのが……何も見極めをつけるだけならば、剣を交える必要はあるまい？英霊同士、お互いの”格”に納得がいったのなら、それでおのずと答えは出る」

「それでこの場にサーヴァントを集めたと言う訳か？征服王」

「然り、特に余がこの場で気になっておるのは、騎士王」

イスカンドルはデイルムツドの質問に答えながら、左側の席に座っているセイバーに瞳を向け、セイバーもイスカンドルの瞳を見つめ返す。

「余らはお互いに”王”を名乗って譲らぬとあつては捨て置けまい。故にこの『聖杯問答』で誰が“聖杯の主”に相応しいか器か？見極めると言う事だ」

「……なるほど……良いでしょう。私も逆に貴方の“格”を見極めさせて貰います」

「フフフツ……さて、では先ずはそれぞれの聖杯に賭ける願いから聞くとするかろう」

「それならば主催者の貴様から答えろ、イスカンドル」

「ふむ、まあ、それが当然だろうなあ」

ブラックの言葉にイスカンドルは頷きながら答え、何処か照れくさそうにしながら自身の願いを告げる。

「余の願いは……“受肉”だ」

「はあっ!？」

イスカンドルが告げた聖杯に対する願いにブラックとルインを除いた誰もが啞然とした顔をし、マスターであるウェイバーは素っ頓狂な声を上げ、イスカンドルに詰め寄る。

「おおお、オマエ!! 望みは世界征服だったんじゃ……」

「……ピン!!」

「ぎゃわぶ!!」

イスカンドルは無言でウェイバーの額にデコピンを放ち、ウェイバーを黙らせた。

それと共にイスカンドルは肩を竦め、日本酒を飲みながら自身の願いについて説明する。

「馬鹿者。たかが杯なんぞに世界を獲らせてどうする? 征服は己自身に託する夢。聖杯に託すのは、あくまでその為の第一歩だ」

「……クククッ、面白いな。つまり貴様は己の為に聖杯に受肉を願うのか?」

「当然であろう。余の王道は『征服』……即ち『奪い』『侵す』に終始する。幾ら魔力で現界しているとは言え、この身はサーヴァント。言ってみりや何かの冗談で招かれた賓の扱いだ。それでは『征服』なんぞ無理だ。余は転生したこの世界に、一個の生命として

根を下ろしたい」

酒宴に参加した誰もが言葉も出ず事が出来ずにイスカンダルを見つめる。

世界を征服しかけたイスカンダルが聖杯に対して願うのは、自らの“受肉”と言う小さな願い。

その願いを叶える為にイスカンダルは聖杯戦争に参加しているのだ。

そしてイスカンダルの願いを聞いたデイルムツドやセイバーは困惑した顔をするが、ブラックとルインだけは面白そうな視線をイスカンダルに向けていた。

（ルーチェモンや倉田。七大魔王どもとは違うな・・・この男は連中以上に厄介だ）

（あの二人は裏で色々と謀略を練って非道を行っていましたが、この男は違いますね。この男は非道な手を使わずに世界を自らの意思で手に入れようとしている）

「（生前でも世界征服しようとした相手と戦い、死後でも戦うか・・・悪くない！）・・・決めたぞ、征服王イスカンダル。次の俺の相手は貴様だ」

静寂していた場を破壊するように告げられたブラックの言葉に、その場に居る全員がブラックに目を向けた、特にウェイバーは最悪のサーヴァントに目を付けられてしまったと顔を一気に青ざめさせていた。

まだブラックに対して有効な策を考えてもいないと言うのに、ブラックが目をつけて来た。

如何したら良いのかとウェイバーは頭を抱えるが、目を付けられ

た当人であるイスカンドルは余裕そうな笑みを浮かべながらブラックに視線を向ける。

「フフン、今更念を押すまでもなからうて。余も貴様を配下にしたくてしょうがない……余が貴様に勝った暁には配下になって貰うぞ」

「ほう、良いだろう。最も貴様の願いが叶う事は無い。俺が貴様を八つ裂きにするからな。クククククツ」

ブラックはイスカンドルの言葉に殺意を歡喜が籠っている笑いを上げる。

今、ブラックの中にあるのはどうやってイスカンドルを倒すかと言う考えだけだった。相手は世界を征服しかけたほどの相手。

未だに見せていない真の切り札は何のかと考えながら、ブラックはグラスをテーブルに置き、イスカンドルに続くように己の聖杯戦争に対する願いを告げる。

「イスカンドル。貴様の願いは中々に面白かったぞ。次は俺の願いを教えてやる……俺の聖杯に対する願いは……そんなモノは無い」

『ッー!!』

ブラックの聖杯に対する願いに、その場に集まっていた誰もが目を見開くしかなかった。

聖杯に対して願いが無いサーヴァント。それでは何故ブラックは召喚に応じたのかと誰もが考え込むが、ブラックと直接戦い、同時にブラックと同様に聖杯に願いが無いデイルムッドは何かを理解したように頷く。

「そうか・・・ブラック、お前の願いが分かったぞ・・・お前の願いは“聖杯戦争に参加しているサーヴァント達と戦う”ことだな？」

「正解だランサー。俺は聖杯になんぞ興味は無い。過程に興味があるだけだ。つまらん連中ばかりだったら、現界を止める気だったが、中々に面白い連中が揃っている。楽しめそうだ」

「・・・やはりお前は戦闘狂だな、ブラック・・・ならば俺も俺の願いをこの場にいた全員に告げよう！」

デイルムツドは言葉と共に座っていた椅子から立ち上がり、横に座っていたソラウに僅かに視線を向けながら自身の願いを迷う事無く宣言する。

「俺もブラック同様に聖杯に対する願いは無い。俺は今度こそ“主に対して曇りなき信義と共に忠節の道を歩み、主に勝利の名誉を捧げる”。それこそが俺の願いだ。故に俺はケイネス様が聖杯戦争に復帰しなければ、ケイネス様とソラウ様を安全な場所までお連れして自害する覚悟を持っている」

デイルムツドはそう自身の願いを迷う事無く、この場に集まった全員に宣言した。

その瞳には迷いは無い。デイルムツドは宣言通りにケイネスが聖杯戦争に復帰しなければ自害する気だった。

生前ではデイルムツドは妻であるグラニア姫との愛の道を選び、その果てに主であり本来ならばグラニア姫と結婚する主だったフィン・マツクールに裏切られ死した。

その事をデイルムツドは怨んでもいないし、後悔もしていない。自分自身が選んだ道程なのだから、その歩みに全く後悔はなかった。

何よりもデイルムツドにとっては自身の過去は、何ものにも変えられないかけがいのない宝なのだ。

それでもこうして再び現世に現れる事が出来たのなら、生前では叶わなかった騎士としての本懐を遂げたいとデイルムツドは思っている。

「俺は主と定めた人物の為に戦う。例えその結末が如何なるモノになろうと、俺は最後までケイネス様に従う気だ。俺にとっての今世の主はケイネス・エルメロイ・アートボルト様以外にありえん」

デイルムツドはそう告げると再び椅子に座る。

その真摯なデイルムツドの想いに対する反応はさまざまだった。

ブラックとルインはデイルムツドの小さいながらも己に対する決意と信念に面白そうに目を細め、イスカンダルはデイルムツドが自身の配下に加わらない事を心の底から悔しがり、セイバーは流石は自分が認めた騎士だと感心するように何度も頷いていた。

その場にいるサーヴァントの誰もがデイルムツドの願いを侮辱する気はない。

正しくデイルムツドは多くの騎士達の中でも忠義の騎士と呼ぶに相応しい称号を得るに相応しいだろう。

そんな風に多くのサーヴァントがデイルムツドの願いを感心する中、一番にデイルムツドの願いに動揺していたのはデイルムツドの横に座っているソラウだった。

ソラウとしてケイネスを脱落させたまま、自身がデイルムツドのマスターになるつもりだった。

しかし、今のデイルムツドの願いを聞いたならば、その行為を行えばデイルムツドは宣言通りに自害するかもしれない。それほどの覚悟が今のデイルムツドの宣言からソラウは感じた。

自分の想いに従うべきか、それともデイルムツドの願いの為に行動すべきなのかとソラウは内心で懊悩する。

「ウム！素晴らしき忠義だ、ランサーよ！余は出来ればお主も配下に加えたいが、無理であろう？」

「その通りだ征服王。俺は如何なる事が在ろうと、ケイネス様を裏切らない」

「本当に残念じゃのう」

イスカンドルは心の底からデイルムツドが配下に加えられない事に残念がりながら、この場でまだ自身の願いを告げていない残る二体の内、毅然とした顔をしているセイバーに視線を向ける。

「・・・さて、セイバーよ。次はお主の心の内を聞かせてくれんかのう？」

「良いでしょう」

セイバーはそうイスカンドルの言葉に答えながら椅子から立ち上がり、この場にいる全員の顔を見渡す。

それぞれの願いを聞きながらも、セイバーの願いには何の迷いも生まれなかった。

特にブラックとイスカンドルの願いは、セイバーには受け入れられないモノだった。結局のところ、ブラックとイスカンドルの願いは個人的な願い。デイルムツドは同じ騎士としてセイバーも認めるが、ブラックの戦うだけが目的とイスカンドルの受肉に対する願いは絶対に認められない。

故にセイバーは不屈の闘志を宿しながら自身の願いを、この場に居る全員に聞こえるように宣言する。

「私は、我が故郷の救済を願う。万能の願望器を持ってして、ブリテンの滅びの運命を変える」

セイバーが自身の願いを毅然として告げた瞬間、酒宴場の空気が凍った。

そして同時に誰にも気づく事無くオメガブレードはゆっくりと震え始める。まるで怒りを堪えているかのうに静けさが満ちた酒宴場の中心で、オメガブレードは震える。

## 第二十話 酒宴にて騎士王の願いを否定する深き闇と恐怖、そして英雄達

後編

酒宴の場の空気はセイバーが自身の願いを告げた瞬間、完全に空気が凍り果てた。

先ほどまで各々の願いを認めていたデイルムツド、イスカンドルも呆然とした表情でセイバーを見つめている。ウェイバーとソラウは何故空気が凍りついたのかと、訳が分からずに困惑した瞳を自分達のサーヴァントに向けていた。

そしてブラックとルインは、これ以上に無いほどに呆れた目で、路傍に落ちている石を眺めるような視線をセイバーに対して放っていた。

（これが人間どもに信仰されている騎士王か・・・つまらん・・・つまらなすぎる）

（ハア、道理で気に入らない筈ですね。よりにもよって“過去のやり直し”ですか。完全にブラック様は興味を失いましたね）

隣でワインを飲んでいるブラックの横顔を、ルインは確認した。ブラックの瞳からは、完全にセイバーに対する興味が無くなっていた。イスカンドルやデイルムツドには凄まじいまでの興味が溢れていたのに、セイバーに対する視線は路傍の石を見るような感情しか宿っていない。

実力が在りながらもセイバーは、完全にブラックから興味対象外の認識を持たれたのだ。

そうなればブラックは、もはやセイバーとは直接戦わずに勝利する策を使う。ブラックの願いは、“何が在っても揺るがない信念を持った英霊との戦い”。

己の進んだ道程を悔やみ、過去のやり直しを求めているセイバー

は、完全にブラックの願いから外れている敵。直接一対一で戦っても楽しめない相手に労力をブラックは使う気は無い。

（ルイン。予定変更だ。セイバーにはもはや何もする必要はない。今後は監視程度にしておけ）

（了解です・・・ですが、この場で倒さないんですか？）

（あの女の件が存在している。今は他の連中に倒れて貰う訳にはいかんからな）

（そう言えばそうでしたね）

ブラックの言葉にルインは納得したように頷いた。

確かに壊される酒宴に紛れてセイバーを倒す事など、ブラックとルインからすれば簡単な事だ。

だが、その場合更にサーヴァントが倒れてしまい、アイリスフィールの体に取り込まれて聖杯は完成へと進んでしまう。

ブラックとルイン、そして雁夜にとってそれは困る。大聖杯なる物に起きている異変を知る為には聖杯そのモノのアイリスフィールの力が必要不可欠。故に大聖杯に関する情報が手に入るまでは他のサーヴァントに倒れて貰う訳にはいかないのだ。

その様にブラックとルインが、酒宴後の方針を念話で決めながらセイバーに目を向けてみると、セイバーは静まりかえった場に困惑していた。

イスカンドルやデイルムッド、そしてブラックが願い宣言した時には、それぞれ何かしらの反応が在った。

今のように場が凍るような静けさなど無かった筈。なのに今、酒宴の場は完全に凍り付いていた。

そして漸くセイバーの願いを吟味出来たのか、イスカンドルは明

らかに困惑した顔でセイバーに質問する。

「・・・なあ騎士王、もしかして余の聞き間違いかも知れんが、貴様はいま”運命を変える”と言ったか？それは過去の歴史を覆すと言う事か？」

「そうだ。たとえ奇跡を持っても叶わぬ願いであろうと、聖杯が真に万能であるのならば、必ずや・・・」

「セイバー！！お前は本気で言っているのか！？」

セイバーの迷いの無い言葉を耳にしたデイルムツドは、椅子を後ろに倒しながら立ち上がり、セイバーに向かって叫んだ。

そのデイルムツドの剣幕に逆にセイバーの方が困惑した。

何故形は違えど、同じ無辜の民の為に戦った騎士であるデイルムツドが慌てた様子を見せているのかが、セイバーには全く分からなかったのだ。

しかし、逆にデイルムツドもセイバーの願いを全く理解出来なかった。多くの騎士達に羨望の眼差しを向けられていた騎士王の願いが、“過去のやり直し”。

例えばどんな結末であると、それは己が信じて歩んだ道程。現にデイルムツドは多くの人々が悲恋と語る自身の過去に、一度も後悔した事は無い。だからこそ、セイバーの願いには困惑せずにはいられなかった。

「セイバー！お前は自分の歩んだ道程を否定すると言うのか！？」

「そうです、ランサー・・・私はあの結末が赦せない！」

「おいおい、セイバーよ？確かめておくが・・・そのブリテンとか

「言う国が滅んだのは、貴様の時代の話であらう？ 貴様の治世であつたのだらう？」

ディルムッドとセイバーのやり取りに、イスカンダルが声をかけて来た。

イスカンダルの纏う空気は、先ほどまでのブラックやデイルムツドを認めていた雰囲気が存在していない。寧ろセイバーの願いに完全に白けきっていた。

何故そのような過去のやり直しなど願うのかと、イスカンドルは疑問と困惑に満ちた視線をセイバーに向ける。

そのイスカンダル視線に、セイバーは苛立ちが溢れ、語気を荒げる。

「その通りだ！だからこそ悔やむのだ！あの結末を変えたいのだ！  
！他でもない、私の責であるが故にに！」

「……クツ！……クククウツ！！」

「プッ！……ププッ！」

**ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！！**

不意に二つの哄笑が、酒宴場に全体に轟いた。

その笑いには何の尊厳も遠慮も無い。ありとあらゆる礼節を踏み躪る完全に遠慮も無い笑い声。

セイバーはその二つの笑い声に表情を怒気に染めて、笑い続けているブラックとルインに顔を向ける。セイバー自身の最も尊き魂の領域を、ブラックとルインは完全に踏み躪ったのだ。

「……バーサーカー、イレギュラー……何が可笑しいのですか！」

「？」

「クククツ！・・・何が可笑しいだと？・・・クククツ、これが笑わずにいられるか、イレギュラー？」

「プププツ！・・・無理ですね・・・クスクス・・・アッ！笑えます！笑えて笑えてしょうがないです！？だって・・・其処の小娘は、“自分の願いの結末”を分かっているんですから」

「それは如何言う意味だ！？」

ルインの言葉にセイバーは凄まじい剣幕で叫んだ。

もしこの酒宴で剣を握ってはいけないと言う誓いを建てていなければ、即座に剣を持ってルインに叩きつけていただろう。

しかし、ルインは殺気と剣幕を振り撒くセイバーを全く気にせずに、自身の考えを告げようとするが、その直前に眉間に皺を寄せていつになく不機嫌な風情になっているイスカンドルが声を掛けて来る。

「少し待ってイレギュラー・・・此処は同じ王である余から話させて欲しい・・・（恐らくバーサーカーとイレギュラーは、セイバーの願いの結末に気づいておる・・・それを今の騎士王が知るには早い）」

（ほう、奴も気がついたか）

イスカンドルの瞳の中に存在している決意に気がついた、ブラツクは感心した声を内心で上げた。

ブラツクとルインは、セイバーの願いが叶った結末を在る程度予測出来ていた。その結末は、正に王である者にとって地獄の結末。

イスカンドルはそれに気がついたからこそ、ルインとセイバーの

間に割って入ったのだ。

ルインもイスカンドルの言葉で真意を読み取り、手で話しても良いと示すと、イスカンドルはセイバーに推し量るような視線を向ける。

「騎士の王・・・貴様よりもよって、自らが歴史に刻んだ行いを否定すると言うのか？」

「そうとも、何故訝しがる？何故笑う？王として身命を捧げた故国が滅んだのだ。それを悼むのがどうして可笑しい？」

イスカンドルの質問にセイバーは迷い無く答え、イスカンドルの瞳にはもはや憐憫さえも宿るほどになった。

同時にブラックとルインは笑うの止めて、既に目の前の“イスカンドルの言葉”だけに集中し、デイルムッドは何かを悩むかのような視線をセイバーに向け始める。

「騎士の王・・・貴様にとって王とは何なのだ？」

「王とは身命を捧げて故国を護るものです！」

「いいや違う」

セイバーの王に対する考えを、イスカンドルは反論を赦さぬというような、巖のような声で否定した。

「王が捧げるのではない。国が、民草がその身命を王に捧げるのだ。断じてその逆ではない」

「それは暴君の治世ではないか！？ライダー！！貴様こそ、王の風

上にもおけない外道だ!!」

「――ビキッ!!」

セイバーがイスカンダルに向かって叫んだ瞬間、ブラックが握っていたワイングラスに罅が入った。

既にブラックはデイルムツド同様、イスカンダルも強敵として認めている。

その相手を侮辱される事は、ブラックにとっては我慢のならない事。セイバーは知らず知らずの内に、ブラックの逆鱗に触れてしまったのだ。アイリスフィールとイスカンダルの言葉が無ければ、問答無用でセイバーをこの場で消滅させていただろう。

その様な事になっている事に気がつかずに、セイバーは更にイスカンダルに叫ぼうとするが、イスカンダルは逆に冷静に諭すようにセイバーに話しかける。

「然り、我は暴君である故に英雄だ……だがなセイバー、自らの治世を、その結末を悔やむ王がいるとしたら、それはただの暗君だ。暴君よりもなお始末が悪い」

イスカンダルは、あくまで問答の筋道からセイバーを否定する。

形は違えど、同じ王で在るが故に多少はセイバーの苦悩をイスカンダルは理解出来る。だからこそ、諭すようにイスカンダルはセイバーに語り掛けているのだ。

それを理解したセイバーは、ひとまず語気を鎮め、舌鋒によってイスカンダルに応じる。

「イスカンダル、貴様とて……世継ぎを葬られ、築き上げた帝国は4つに引き裂かれて終わったはずだ。その結末に、貴様は何の悔いもないというのか？今一度やり直せたら、故国を救う道もあった

と・・・そうは思わないのか？」

「ない」

迷い無くイスカンドルはセイバーの言葉に即答した。

その顔には何の迷いも存在せず、寧ろ堂々と胸を張り続け、セイバーに対して真っ向から厳しい視線を向ける。

「余の決断、余に付き従った臣下達の生き様の果てに辿り着いた結末であるならば、その滅びは必定だ。悼みもしよう。涙も流そう。だが決して悔やみはしない」

「そんな・・・」

「ましてやそれを覆すなど！そんな愚行は、余と共に時代を築いた全ての人間に対する侮辱である！」

イスカンドルは傲然と言い放った。

宣言したとおり、イスカンドルには何の悔いも無い。寧ろ悔いを持つこと自体が、嘗ての自身と共に歩んだ全てに対する侮辱だとイスカンドルは心の底から思っている。

確かに自身の得た全てはこの世から消えてしまっている。それでもイスカンドルの胸には掛け替えの無いモノだけは、確りと残り続けている。

それを失う事だけは、絶対にしてはならないとイスカンドルは思っているのだ。

しかし、それを理解出来ないセイバーは、イスカンドルの言葉に頭をかぶり振るう。

「滅びを誉れとするのは武人だけだ。民はそんな事を望んではいな

い。救済こそが彼らの祈りだ！」

「王による救済だと？・・・解せんなあ？そんなものに意味が在ると言うのか？」

「それこそが王たる者の本懐だ！」

呆れたように失笑しているイスカンドルに向かって、セイバーは力を込めて言い放った。

その顔には何の迷いも無い。宣言どおり、セイバーは自身の考えに何の迷いも持っていないのだ。

「正しき統制。正しき治世こそ、全ての臣民が待ち望むものである  
う」

「で、王たる貴様は正しさの奴隷か？」

「それでいい。理想に殉じてこそ王だ。人は王の姿を通して、法と秩序の在り方を知る。王が体現するものは、王と共に滅ぶような儚いものであつてはならない。より尊く不滅なるものだ」

そうセイバーは毅然と宣言し、イスカンドルは憐れみさえ漂うような溜め息を深々と吐きながら、セイバーに目を向ける。

「そのような生き方はヒトではない」

「そうとも。王たらんとするならば、ヒトの生き方など望めない」

イスカンドルの言葉に対して、再びセイバーは迷い無く答えた。  
完璧な君主で在る為に。理想の体現者である為に。

セイバーは自身の全てを捨てて王たる道を歩んだ。その結果、確かにセイバーの人生は不敗と言う名の伝説を持つ人生となった。その歩みには確かに痛みも苦悩も存在していた。

しかし、同時にそれに勝るとも劣らない誇りもある。決して譲れぬ信念があるからこそ、セイバーは今でも剣を執って戦えるのだ。

だが、同時に彼女は気がついていなかった。『過去のやり直しを望むと言う事は、その誇りを自ら捨てようとしている』事だと言う事実には、セイバーは全く気がついていない。

もし、セイバーの願いが全く別の願いだったのならば、ブラックも興味を抱いただろう。しかし、セイバーの望みは『過去のやり直し』。

自らが築いた結末を否定する相手に、ブラックが興味を抱く筈は無い。その証拠に既にブラックは、セイバーには何の興味を抱いていなかった。

（下らん。正しき統制に治世だと？誰がそれを決める？あの小娘は決定的なモノに目を向けていないな）

再び論争を繰り広げ始めたセイバーとイスカンドルを見つめながら、ブラックは内心でそう呟いた。

セイバーの理想は確かに多くの者から尊いものとはしては見られるだろう。だが、誰もがその理想を理解出来る筈は無い。

理解する事が出来ずに苦悩する者は必ず出て来る。それこそが意思を持つ者達の逃れる事の出来ない定めなのだ。

その定めから少しでも逃れようとする為に、ヒトは己の意思を相手に伝えようとする。

だが、もし伝えずに進めば、何れは反発が起きて関係は破局へと向かう。

ブラックには、セイバーの時代の者達がどのような苦悩を抱えて進んだのかは分からない。だが、彼らは悩んだ末にセイバーと袂を

別ち戦いあった。それは誰かの一人の意思で成された事ではない。

“多くの者達の想いが集まって成された結果”なのだ。それを否定する事は絶対に赦されない。

例え何があったとしても、それは多くの者達の意味が成した結果なのだ。ただ一人の考えで勝手に変えては絶対にしてはならない。

ブラックとルインにも過去を変えたいと思った出来事は確かに存在している。

思い出すのは、嘗て遠い昔に自身を父親として慕って来た一人の娘の笑顔。

多くの悪意に近い意思に当てられ、友の命と償え切れないほど罪を無理やり背負わされた娘の悲痛の叫び。セイバー同様に過去をやり直す機会がもし来たのなら、必ず悩むだろう。だが。

（アイツはやり直しなんぞ望まんだろうな・・・アイツを最終的に助けたのは、アイツの友だった奴らの想い。それを否定する結果なんぞ、アイツは絶対に認めないだろう。最後の時まで、デジモンと共に生きた俺達の娘なのだからな）

ブラックはそう、在りし日の自分達と娘との別れを思い出しながら、懐かしそうに新しいグラスに注いだワインを飲み干す。

そして次の瞬間、新しいワイングラスは一瞬の内に粉々に砕け散り、ブラックは先ほどまで変わって、怒りを滲ませながらゆっくりと立ち上がる。

——バキィィィーン！！

『ッ！！』

突然のグラスが割れる音に、その場に全員が音の出所であるブラックに目を向けてみると、ブラックは殺意さえ滲ませた声音でイス

カンドルに声を掛ける。

「イスカンドル。もう充分過ぎるほどに、其処の小娘の考えは分かった筈だ？」

「……よかるう。次はお主が話すが良い」

ブラックの真意を理解したイスカンドルは頷き、ゆっくりと自身の席に座る。

同時にセイバーも次はブラックと論争になる事を理解し、ブラックに厳しい視線を向ける。

イスカンドル同様に、自分勝手な願いを持つブラックにもセイバーは負ける気が無い。そしてブラックもまた、セイバーを絶対に認める気はなかった。

互いに認められない者同士、厳しい視線が交差するが、ブラックは構わずにセイバーに声を掛ける。

「小娘。貴様が過去のやり直しなんぞ求めて誰が喜ぶ？」

「無論民だ！先ほども言ったように民達は、正しき統制と正しき治世を求めている」

「下らん。誰かがそんな押し付けを望んだ？」

「なっ！？」

ブラックの余りの物言いにセイバーは声を荒げるが、ブラックは構わずに言葉を重ねる。

「もう一度言ってやる。貴様の願いは誰の為でもない。『自分が歩

んだ結末が赦せないから、勝手に変えようとしている』だけだ。これが押し付け以外の何だと言うのだ？」

「聞き捨てなりません！！私の願いは押し付けなどではない！！」

「フン！では、質問だ？今の時代、貴様の過去なんぞ関係ない今の時代の誰が、“貴様の助けなど求めている”」

「――バキイイン！！」

ブラックの言葉を耳にした瞬間、セイバーの心の奥底で何かが碎けた。

そう確かにセイバーの国だったブリテンは内乱によって滅んだ。多くの人々も死に絶えた。

しかし、全ての人間が死んだ訳ではない。生き残った人々も存在し、その人々は新たな国を、歴史を築き上げた。セイバーが過去をやり直すと言う事は、その人々の歩みさえも否定すると言う事に他ならない。

良くも悪くも人間はしぶとい生き物である。どんな環境でも最終的には生き残る術を見つけて歩んで行く。

その事を生前の経験から知っているブラックは、セイバーの過去のやり直しに意味が全く分からなかった。

「貴様が何もしなくても、人間は生きて行く。それにだ・・・貴様？一体どうやって過去をやり直して、国を救う気だ？」

「そ、それは聖杯に願って？」

「馬鹿か？俺は如何言う風に願うのかと聞いたんだ？イスカンダルとの会話を聞いていて思ったが、貴様の願いには“形が無い”」

「形？・・・一体何を？」

「イスカンドルの願い、『受肉』は簡単だ。聖杯に自分だけの受肉を望めば良い」

ブラックはそう呟くと共にイスカンドルに瞳を向け、次に何かを懊悩するように顔を俯かせているディルムッドに顔を向ける。

「ランサーの願いは、『忠義に生きる事』これも簡単だ。己の忠誠心を信じて進めばいい・・・（最もそれを相手が理解出来るか、如何かは別だがな）」

ブラックはディルムッドを見ながらそう呟くと、再びセイバーに顔を向けて、残酷な事実をセイバーに話す。

「だが、貴様の願いだけには決定的な形が無い。ただ過去のやり直し、或いは国の安泰を願った場合、聖杯は勝手な解釈を始めて・・・貴様の国以外の全てを滅ぼすかも知れんな」

「なっ！？・・・わ、私はそんな・・・」

ブラックの告げた可能性にセイバーは否定の言葉を出そうとするが、胸を内から湧き上がって来る想いに何の言葉も出す事が出来なくなつた。

しかし、ブラックの告げた可能性は充分に在りえる事だつた。ブラックとルインが調べた情報では、聖杯は願いが明確でなかった場合、“広義的”に解釈する。

その“広義的”が願った本人の考えと一致しない可能性は充分に在りえる。

例えば『世界を平和にしたいと誰かが願った』場合、その『平和』と言う願いが明確でなければ、人々から争うと言う意思を無くして争いが起きなくなる可能性が高いのだ。

その結果は最終的には凄惨なモノになるだろうが、聖杯にとっては関係ない。何故ならばそう言う解釈も出来る願いなのだから。

そしてセイバーの願いもまた明確ではない。ブラックが告げた可能性以外にも別の可能性は存在しているだろうが、一つの可能性としては充分に在りえるのだ。

しかし、ブラックはそれ以上にセイバーにとっては残酷な結果の願いの形が、脳裏に思い浮かんでいた。

「最も今の可能性は或いは領域だ・・・貴様が本当に貴様の見た結末を変えたいと願った場合、貴様には地獄が待っているだろうな」

「そ、それは一体？」

「本当に気がついていないようだな。貴様の願いの結果は・・・」

「――ズキューーン！！」

『ッー！！』

ブラックの言葉を遮るように一発の銃声が鳴り響いた。

その音にブラックとルインを除いた全員が驚愕した。

そしてディルムッドはその瞳で、自身の主であるケイネスに向かって高速で迫る一発の銃弾を目撃する。

サーヴァントであるディルムッドにとって、発射された銃弾を目にする事など造作も無く、簡単に弾き飛ばす事も出来る。しかし、それはあくまで自身の手の中に愛槍が在る場合でしかない。

今、ディルムッドの愛槍は二振りとも酒宴場の中心の大地に突き

刺さっている為に手元には無く、更にセイバーの願いに懊悩していた為に反応も完全に遅れてしまった。

デイルムツドの瞳には、ケイネスの頭部に突き刺さろうとしている銃弾がハッキリと映っていた。

「ケイネス様!!」

間に合わないと分かりながらもデイルムツドは、ケイネスを護ろうと体を動かす。

しかし、銃弾はデイルムツドの願いに反するように真っ直ぐ進み、ケイネスの頭部に - 突き刺さる直前で見えない何かに銃弾は弾き飛ばされる。

「――ガキイイーン!!」

「ツ!!」

甲高い音と共に弾き飛ばされた銃弾に、ケイネスを狙撃した狙撃者は木の上で驚愕した。

それはケイネスを護る為に動いていたデイルムツドも同じだったが、すぐにケイネスを護った犯人を理解し、椅子に座ったまま涼しい顔をしている、ルインに瞳を向ける。

「行けませんね。この酒宴は英雄達の誇りを賭けた酒宴なのに、それを潰そうとするなんて・・・潰しますよ」

「クツ!!」

ルインの殺意に満ちた声を耳にした狙撃者は慌てて乗っていた木の上から飛び降りて、直前まで居た場所を離れる。

しかし、既にその行動をルインは予測していたのか、右手をゆつくりと動かし、狙撃者が逃げた方向に事前に木々や草などの中に設置していた魔法陣から無数の鎖を一斉に撃ち出す。

「錬鉄召喚、アルケミックチェーン」

「――ガシィィィィーン!!」

「ッ!!」

突如として辺りの木々から撃ち出されて来た鋼鉄の鎖に、四肢を拘束された狙撃者は目を見開く。

何とか逃げ出そうと暴れるが、既に鎖は狙撃者の四肢に深く食い込み、絶対に外れる事は無かった。

サーチャーでそれを確認したルインは、狙撃者を鋼鉄の鎖で拘束したまま、事の成り行きを見守っていた酒宴の場に居る全員に目を向ける。

「皆さん、酒宴を壊そうとした犯人は捕まえましたよ」

「ほう。それは嬉しい知らせ・・・此処に連れて参れ。余が主催した酒宴を壊そうとした不届き者の顔が拝みたい」

「構いませんよ」

そうルインは答えながらイスカンドルの机の前に魔法陣を出現させ、狙撃者をこの場に転移させようとする。

全員が現れるであろう狙撃者の顔を見ようと、転移陣に目を向け、ブラックと論争を繰り広げていたセイバーも目を向ける。セイバーには犯人が予測出来ていた。

このような誇りが集った酒宴を壊そうとする者など、自身のマスターである切嗣以外に考えられない。確実に転移陣の中から現れるのは切嗣だと思い、セイバーは暗鬱した想いに囚われるが、転移陣に入らしき影が映った瞬間、セイバーの頭の中に声が響く。

（衛宮切嗣の名の下に、令呪に於いて命じる。バーサーカー、ランサー、ライダーの宝具を己の剣で叩き斬って使用不能にしろ）

「ービュン！！」

「ッー！！」

脳裏に響いた声をセイバーが理解した瞬間には、既にセイバーは本人の意思とは関係なく、酒宴場の中心に置かれている宝具の下に走っていた。

走る傍ら、セイバーの瞳には転移陣の中から現れる久宇舞弥の姿が映る。

その瞬間にセイバーは全て理解した。

切嗣は二重の手を打っていたのだ。最初の狙撃は完全に罠。本命は令呪を用いたセイバーの手によるこの場に集まったサーヴァント達の宝具の破壊こそに在った。

ブラックとルインが居る場で狙撃は難しいと切嗣は判断していた。だからこそ、舞弥を罠にしてセイバーの手で、他のサーヴァント達の宝具を破壊する事にしたのだ。例えば破壊出来なくても傷をつければ、それだけで戦いは有利になる。特にランサーの宝具は何としてもこの場で破壊したかった。

故に新たに手に入った令呪を使用してセイバーに命じ、セイバーの体は令呪の命令によって動き、不可視の剣を引き抜き、他の宝具に向かって構える。

その動きに漸く他の者達も気がつき、セイバーに顔を向けるが、



――ガシッ！！

「フン、随分と怒っているようだなオメガブレード？」

――カタカタカタッ！！！！

ブラックの言葉を肯定するようにオメガブレードは、ブラックの手の中で震えた。

握っているブラックには分かっていた。今、オメガブレードは凄まじいまでの怒りを持っている。

此処までオメガブレードから怒りのオーラが感じられる事など、ブラックは生前から数えても一度も無かった。滅多にはオメガブレードの意思は動かない。

それは使い手の意思を尊重するからこそだったのだが、今始めてオメガブレードは使い手の意思など関係なく動いた。それほどまでにオメガブレードは、セイバーの対して怒りを持っていた。

ブラックはその事実を目を細めて、無言でオメガブレードを下に構えると、その身から黒いデジコードを発生させ、真の姿である漆黒の竜人の姿に戻る。

「さて、この酒宴を壊した連中に、相応の報いをくれてやるか」

真の姿に戻ったブラックはそう呟き、外壁に背中を打ち付けて苦しんでいるセイバーと外壁の外の木の上に隠れている切嗣に向かって殺気を放つのだった。

## 第二十一話 己の正体を語る恐怖 前編

酒宴場に集まった誰もが言葉を出す事が出来なかった。

オメガブレードが発生させた衝撃波を受けて背中を打ち付けたセイバーも、ソラウとケイネスを護るように立っているデイルムツドも、ルインの召喚した鎖で四肢を拘束されて身動きが取れない舞弥も、そして酒宴の主催者であるイスカンダルとそのマスターであるウェイバーも、真の姿である竜人に戻ったブラックが握るオメガブレードが放つ凄まじいまでの怒気に言葉を出す事が出来なかった。その中でも王であるイスカンダルは、何故オメガブレードが怒りのオーラを放っているのかをこの場に居る誰よりも理解していた。

（やはり民もセイバーの願いに怒りを覚えたか・・・当然の帰結よな・・・しかし、この酒宴を壊してくれた者には余が自ら裁きを下してくれる！！）

「――バキーン！！」

「ウワッ！！」

突然にイスカンダルが握っていたグラスが砕けるのを真横で目撃したウェイバーは驚き、自身のサーヴァントの横顔を見つめるが、すぐさま視線を逸らした。

イスカンダルの顔には何時もの捉えどころない笑みが存在せず、ただ目を限界まで見開いた、正に鬼としか言えない形相に変わり果てていた。

それはイスカンダルだけではない。ソラウとケイネスを護っているデイルムツドも、凄まじい怒気が籠った形相をして、自身の愛槍である二槍を地面から引き抜く。

その胸の内に宿るのは凄まじいまでの怒り。自身の主を卑劣な手段で狙い、あまつさえ強敵として認めているセイバーの誇りを汚した相手に対して、必ずや槍を突き立てるという誓いをディルムッドは抱いた。

セイバーを令呪で操った張本人である切嗣は、完全にこの場に集まった全てのサーヴァントを敵に回したのだ。

「バーサーカーよ。貴様ならば居所が分かるであろう?」

「俺が見ている先の木に乗っている。問題は此処に在る結界のせいで、森に入るのが多少面倒な事だな」

イスカンドルの質問にブラックは、森の木々の中に隠れている切嗣を睨みながら答えた。

切嗣は逃げる事が出来なかった。何せ切嗣が昇っている木の下や木の周りには、何時の間にか無数の黒い魔法陣が幾重にも出現していたのだ。

切り札である固有時制御を使っても逃げられない事を切嗣は理解し、銃のスコープの先に映っているブラック、ルイン、ディルムツド、イスカンドルを睨みつける。

しかし、睨まれた本人であるブラック達は気にせず、どうやって切嗣を酒宴会場に引き込むかと考え込んでいると、イスカンドルが何かを思いついたように、漸くオメガブレードの放った衝撃波から回復して来たセイバーに顔を向ける。

「フム……セイバーよ!この酒宴に於いて最後の問いだ……  
そも、王とは孤高なるや否や?」

「……ヒョウウウーッ!!」

（ん？・・・何だ？この風は？）

イスカンドルがセイバーに対して質問を投げ掛けた瞬間、ブラツクはイスカンドルの周りから熱く乾いた、焼けつくような風を感じた。

その風を感じたのはブラックだけではない。舞弥を拘束しているルインも、ソラウとケイネスを護っているデイルムッドも、そしてイスカンドルのマスターであるウェイバーもイスカンドルの周りから感じられる、この場では絶対に在りえない風に違和感を覚えてイスカンドルを見つめる。

同時に渦巻く熱風の中心に立っているイスカンドルの肩にマントが羽織られ、イスカンドルは戦装束にその身を包む。

そしてイスカンドルに質問されたセイバーは、誇りを汚されて悲しげな顔をしながらも躊躇う事無く、自身が歩んだ王としての日々を思いながら偽りない答えを返す。

「・・・王ならば・・・孤高でしかあるしかない」

「ダメだな！まったく持つて何も解かっておらん！そんな貴様には、やはり余が今ここで、真の王たる者の姿を見せ付けてやらねばなるまいて！そして我らの誇りを穢した不屈き者を見るがいい！！貴様が一体に何を敵に回したのか！！」

「――ゴオオオオオオ――！！」

イスカンドルが宣言を迷いない宣言を放つ同時に、イスカンドルを中心に逆巻いていた風は勢いを強め、酒宴場に居る全員と切嗣を身の内に入れるように風は動き、遂に現実を侵食し、覆す。

そして世界は変わった。先ほどまで寺の内部に居たブラック達と、木の上に昇っていた筈の切嗣は、照りつける太陽と晴れ渡る蒼穹の

下の地平線が見えるまでに広がった荒野に立っていた。

その現象を誰よりも理解したのは、魔術師であるソラウとウェイバー、そして切嗣と舞弥だった。イスカンドルが行った事こそ、奇跡と並び称される極致。“固有結界”。

「う、嘘・・・」

「固有結界だって！？お前の本当に切り札ってコレだったのか！？」

作り上げられた荒野の世界の中、ソラウは目の前に広がった異常な現象に呆然と声を上げ、ウェイバーは自身のサーヴァントの切り札に喜びと困惑の声を上げてイスカンドルに詰め寄った。

そしてセイバーとデイルムッドも呆然と広がる世界を眺めていた。

流石は大英雄と称されるイスカンドルの真の宝具。

ゲイト・オブ・バビロン

ブラックが倒したギルガメッシュの『王の財宝』に勝る力を持った宝具だと、その場に居る誰もが認めざる得なかった。

しかし、誰もが驚く中、ブラックとルインだけは冷静に結界を張った主であるイスカンドルを見ていた。

二人は気がついていた。今俄然に広がる世界はイスカンドルが一人で成したモノではない。もっと別の、より多くの何かが集まって生み出された世界なのだと思いながら、イスカンドルを見つめると、イスカンドルは誇らしげに叫ぶ。

「これは余一人で出来る事ではない・・・これは嘗て、我が軍勢が駆け抜けた大地。余と共に苦楽を共にした勇者達が等しく心に焼き付けた景色だ」

世界の変転に伴って立ち位置が変わっている全員に聞こえるようにイスカンドルは、誇らしげに呟く。

イスカンドルが見つめる先の荒野には切嗣と舞弥、そしてセイバ

ーが立ち、イスカンドルを挟むように右側にはブラックとルインが。左側にはケイネス、ソラウ、ウェイバー、そしてデイルムツドが立っていた。

その構図に何かに気がついたデイルムツドは、イスカンドルに向かって叫ぼうとするが、イスカンドルは意味有りげな視線を向けて動きを止めさせる。

（この場合は余に任せよ）

「・・・・・・・・」

イスカンドルの視線に気がついたデイルムツドは、この場合はイスカンドルを信じてソラウ達の護りに入る。

それを確認すると、イスカンドルは蜃気楼のように揺らめく無数の影を背負いながら一步一步前に向かって歩き出す。

「この世界、この景観をカタチに出来るのは、これが“我ら全員”の心象であるからこそ！」

イスカンドルが歩きながら呟くと一緒に、イスカンドルの周りに居た蜃気楼は、次々と色と厚みを持ち、次々とイスカンドルを護るように騎兵達が現れていく。

その異常な現象に目を見開いたのは、正当なマスターであるウェイバーと切嗣だった。

二人にはイスカンドルを護るように立っている騎兵達の正体が分かったのだ。マスターだけに与えられるサーヴァントの能力を見極める能力を持つ者が故に、英霊イスカンドルの真の切り札にして、恐るべき宝具の正体が。

「・・・・・・・・こいつら・・・・一騎一騎がサーヴァントだ・・・・」

「見よ、我が無双の軍勢を！！」

限りなくイスカンドルは誇らしげに宣言を放つと共に、居並ぶ騎兵の隊列を両腕で振り示す。

その中には軍神が居た。マハラジャが居た。歴代に連ねる王朝の開祖が居た。伝説を持つ数多くの英霊達が、軍勢の中に立っていた。

「肉体は滅び、その魂は英霊にとして『世界』に召し上げられて、それでも尚余に忠義する伝説の勇者たち！時空を超えて我が召喚に応じる永遠の友達達！彼らとの絆こそ我が至宝！我が王道！イスカンドルたる余が誇る最強の宝具！『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』なり！！」

その場に居る誰もがその輝くように広がる光景に、言葉を出す事が出来なかった。

魔術師とは言え、人間であるウェイバーとソラウは言葉も出す事が出来ずに、圧倒的な威容を誇る軍勢を言葉も無く見つめる。

セイバーは、自身が得られなかった絶対的な宝具の領域に達する臣下の絆に総身が震え、デイルムッドはイスカンドルに死して尚、付き従う者達に羨望の眼差しを向けていた。

そしてブラックとルインは、圧倒的な歡喜に満ち溢れていた。ルインは自身の主が最大の喜べる戦いの到来に歡喜が溢れ、ブラックは何れ訪れるイスカンドルと、その無双の軍勢との戦いを想い、歡喜と言う言葉では足りないぐらいに喜んでいた。

（ククククッ！！良いぞ！！イスカンドル！！やはり貴様も最高の獲物だ！！お前は誰にも倒させん！！必ず俺の手で倒す！！）

（やりましたね！！コレならば、ブラック様と私はユニゾンするだけの理由が出来ます！！やはり、イスカンドルも私達の敵でしたよ

！！)

ブラックとルインはイスカンドルの軍勢に全く圧倒されていないかった。

寧ろ倒すべき相手の力が、想像以上だったと言う事実には歓喜と言う言葉すら霞むほどの喜びを覚えている。先ほどまでブラックの手の中で暴れていたオメガブレイドも、イスカンドルの行いを見守るように動きを止めていた。

この場での決着は、全てイスカンドルに委ねられた。セイバーを如何するのも。

そしてそれを感じ取ったイスカンドルは軍勢を引き連れながら、前へと進み切嗣達の居る場所から五十メートルほどの距離で立ち止まる。

「さて、セイバーのマスターよ。余が主催した酒宴を壊してくれた礼をしてくれる！例え再び令呪を使用して、セイバーを操ってもこの軍勢を相手に何処まで持つかのう？」

「クツ！！」

獰猛な笑みを浮かべているイスカンドルに、切嗣は思わず舌打ちをした。

確かにイスカンドルの言う通り、セイバーを令呪で操ったところで、目の前の軍勢を退ける可能性はゼロ。例え奇跡の領域で軍勢から脱したところで、その背後には三体のサーヴァントが控えている。更には固有結界と言う、結界を張った主が解くか、何かしない限り出る事が出来ない空間。完全に切嗣は逃げ道を封じられてしまったのだ。

しかし、圧倒的に絶望な状況に在りながらも、切嗣の胸の内に湧き上がって来るのは絶望感ではなく、“誰もが見惚れる軍勢を従え

ているイスカンドル”への憎しみだった。

「裁きをくれてやる前に、遺言が在るのならば聞いてやろうぞ。余達の誇りを侮辱した貴様らには、相応の罰を…」

「下らない」

「ムツ？」

切嗣の憎しみに染まった発言に、イスカンドルは眉を顰め、セイバーも自身のマスターである筈の切嗣を見つめる。

その様子に切嗣は死が近いながらも、今まで溜まりに溜まっていた『誇りを重んじる英霊』に対する憤怒を叫ぶ。

「誇り？ 栄誉？ … そんな下らないモノをひけらかして自分の罪を隠しているだけの殺人者が何を言うんだ？」

「余の前でその物言い … もはや貴様には死でさえも済まさんぞ！！」

イスカンドルは鬼のような形相をしながら、切嗣の向かって怒りに満ちた吼えるような声で叫んだ。

同時にイスカンドルの背後に居る軍勢からも、憤怒のオーラが舞い上がる。今の切嗣の発言は完全に英霊と言う存在を侮辱している。それはイスカンドルにとっては赦し難いこと。そしてセイバーもまた切嗣の発言に激怒していた。

「余達の前で誇りを侮辱するとは！！」

「貴方は騎士道を穢すのか！？」

「馬鹿馬鹿しい。君達は世界を救えない。過去の歴史がそうだったように、今もこれから同じだ！お前達は、戦いの手段に正邪があると説き、さも戦場が尊いものがあるかのように演出してみせる。歴代の英雄どもがそう言う幻想で売り込んできたせいで、一体どれだけの若者達が武勇だの名誉だのに誘惑されて、血を流して行っただと思う？」

「幻想などではない！！たとえ命のやり取りだろうと、それが人の営みである以上決して侵してはならない法と理念がある！！なくてはならない！！さもなくば、戦火の度に、この世の地獄が具現する羽目になる」

切嗣の発言に凜然とセイバーは反論するように叫び返した。

しかし、切嗣は鼻で笑うかのように鳴らして、自身の考えを更にセイバーとイスカンドルに告げる。

「下らないね。戦場が地獄よりマシ？冗談じゃない。何時の時代も戦場は地獄さ。戦場には希望なんて無い。在るのは掛け値なしの絶望だけ。敗者の痛みの上にしか成り立たない。勝利という名の罪科だけだ」

（つまらんな。それが如何したと言っただ？）

（戦場が地獄になるのは当然でしょうに。それに戦場の地獄なんて・・・まだマシ何ですけどね？）

切嗣の発言に、それぞれが思い悩む中、ブラックとルインだけは呆れたように切嗣を眺めていた。

確かに戦場とは地獄である。沢山の人々が命を散らす場所。

しかし、ブラックとルインはそれ以上の地獄を知っている。誰にも助けられず、意思さえも認められず、道具として扱われる。そんな地獄をブラックとルインは知っている。

故にブラックとルインからすれば、切嗣はただ場を荒らしに来た不屈き者以外に思えなかった。

そんな風にブラックとルインが切嗣に対して評価していると、イスカンダルとセイバー、そして切嗣の論争は終わりに近づいていた。「貴様の考えは充分過ぎるほどに理解したわ・・・だがのう？お主がしている事は、外道の称号を得る悪以外に在るまい。外道の悪が生み出せるのは怒りと憎しみ以外に在るまい。それによって生まれた憎しみを如何振り払うのだ？」

「その考えに同感です。理不尽に奪われた者は、怒りと憎しみを持ち、新たな戦いを呼びます」

「終わらぬ連鎖を終わらせる。それを果たし得るのが聖杯だ」

(・・・何？)

(・・・はい？)

一瞬、ブラックとルインは呆けたような顔をして切嗣を凝視してしまった。

別にブラックとルインは、誰がどんな願いを聖杯に持とうと気にしない。しかし、今の切嗣の発言は完全に別だった。

“聖杯に世界の平和を願う”。それは在る意味では先ほどのセイバーの願いに良く似ている。

そしてセイバーの願いのように形が切嗣の願いにも無かった。ただ漠然とした願いを聖杯に告げれば、その結果待っているのは、悲

惨な現実の可能性が高い。

酒宴を覗き見ていたのなら、切嗣は気がついていても可笑しくは無い筈だとブラックとルインは思いながら切嗣を凝視し、そして気がついた。

切嗣の目は、完全にセイバーと同様に聖杯に妄信している目だと言う事実。

(・・・フン、なるほど。道理でセイバーを召喚出来た訳だ)

(ですね。あの二人は良く似ていますよ。“他人は愚か、自分さえも信じていないところ”が)

ブラックとルインはそう念話で会話しながら、切嗣の想いに動揺しているセイバーと、怒りを僅かに忘れて哀れんだ瞳をし始めたイスカンドルを見つめる。

イスカンドルも切嗣がセイバーと同じ種類の人間だと気がついた。  
『理想ユメと言う名の呪いに取りつかれてしまった種の人間』だと言う事実。その種の人間を説き伏せるのは難しい。

その『理想ユメ』が自らに牙を剥かない限り、セイバーも切嗣も歩み続ける。

イスカンドルはそれに気がつき、首を憂いを帯びながら横に振るい、終わらせるつもりで背後の軍勢に手を掲げようとする。

しかし、その直前に切嗣はイスカンドルを睨みながら独り言のように自身の決意を告げる。

「世界の改変、ヒトの魂の変革を、夢物語と呼ばれるそれを、奇跡を以て僕は成し遂げる。その為に、例え『この世の全ての悪』を担う事になろうとも、それで世界を救えるのなら僕は構わない!!」

(・・・哀れよのう・・・楽にしてやるほかある...)

ーードクンッ！

『ッ！！』

イスカンドルが憂いに満ちた顔をしながら軍勢に号令を掛けようとした瞬間、比喻でも何でもなく固有結界で作り上げられた世界が震えた。

その事実固有結界内部に居る全員が驚愕に目を見開きながら、世界が震えた元凶・凄まじい怒気と殺意を全身から振り撒いているブラックとルインに目を向ける。

しかし、向けられた本人達は気にせず殺意と怒りを振り撒きながら歩き始め、その前に居たイスカンドルの兵達は思わず、ブラックとルインが通る道を作るように横に避ける。

「……『この世の全ての悪』だと？……人間ごときが、良くもほざいたな」

「気に入らない。人間だとは思っていましたが、よりにもよってアレを背負うなど言うとは思っても見ませんでしたよ。簡単に死ねるとは思わない事ですね」

「又ウツ！！」

全身から悪寒しか感じる事が出来ない殺気を振り撒くブラックと静かながらも凄まじい殺意を振り撒くルインの姿に、イスカンドルは唸るように声を上げ、急いで軍勢をブラックとルインから離れるように指示を飛ばす。

切嗣の言葉の何がブラックとルインを此処まで変えたのかは、イスカンドルを持ってしまっても分からないが、急いで離れなければ

部下達に被害が出てしまう事だけは確信し、イスカンドルは軍勢と共に僅かに切嗣と舞弥、セイバーの傍から離れる。

その間にもブラックとルインは真っ直ぐに切嗣達の下に進み、在る程度の距離に近づくと立ち止まり、ブラックは無言で自身の首元に掛かっているネックレスに左手を伸ばす。

「・・・随分と気に入らん言葉を言ってくれたな。『この世の全ての悪』を担うだと？・・・本気で気に入らん」

「だとしたら、如何だと言った？バーサーカー」

「見せてやるぞ。貴様が担うなどと言う言葉をほざいた“悪”の一端をな！！」

「ーブチッ！！」

「ーードクン！！」

『グッ！！』

ブラックが宣言と共にネックレスを引き千切った瞬間、セイバー、イスカンドル、デイルムツド、そしてイスカンドルの背後に存在していた全ての英霊の軍勢達が胸を強く押さえた。

その突然の英霊達の変化にウェイバー、切嗣、ソラウ、舞弥は困惑したように自分達のサーヴァントを見つめ、ウェイバーは在る事実に気がつき呆然としてしまう。

「・・・何だよコレ・・・バーサーカーとイレギュラー以外のサーヴァント達のステータスが・・・上がっている」

「ランサー！！ランサー！！確りして！？」

「グウツ！！・・・有り得ん・・・このような事が起こる筈は」

デイルムツドは心配して声を掛けて来るソラウに答える事も出来ずに、自身の变化に戸惑っていた。

ブラックがネックレスを引き千切った瞬間、急激にデイルムツドを含めたサーヴァント達全員のステータスが上がっただけでなく、同時にブラックを“消滅”させると言う意思が胸の内から湧き上がって来たのだ。

何故そのような思いが湧き上がって来るのかとデイルムツドはブラックに顔を向け、ウェイバーとソラウも顔を向けると、彼らはその光景を目撃した。

「・・・何だよアレ？・・・」

「・・・そんな・・・アレは・・・本当に英霊なの？・・・一体アレは？」

「・・・ブラック・・・オマエは一体？」

ウェイバー、ソラウ、デイルムツドは身の内から湧き上がって来る本能的な恐怖に震えながら声を出した。

同様にイスカンドルも、その背後に居る軍勢達も、切嗣と舞弥の横に居たセイバーも本能的な恐怖を覚えながらブラックを見つめる。そして最後の切嗣は、何時もの機械的な様子など全く無く、全身をガクガクと震わせながらブラックを指差す。

「・・・オ、オマエ・・・一体何だ？」

「世界の敵だ。存在するだけの悪だ。喜べ。今、オマエは漸く出会えたんだ。世界を救いたいならば、俺を殺して見せろ！！このブラックウォー 그레이モンをな！！」

そう自身の周りの空間の位相をずらしながらブラックは、切嗣に殺気を撒き散らしながら宣言を放つのだった。

## 第二十一話 己の正体を語る恐怖 後編

ブラックが自身の因子を解放して、空間を歪ませている光景に誰もが言葉を出す事が出来なかった。

彼らの視界の先に映っているブラックが何かをしている様子は無い。ただ静かに佇んでいるだけ。

しかし、それでもブラックとルインを除いたこの場に集まった英霊達・セイバー、デイルムッド、イスカンドル、そしてイスカンドルの宝具である『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』によって召喚された数多の英霊達は、身の内から湧き上がって来る衝動に苦しんでいた。

“倒せ！消せ！消滅させろ！！”

その様なもはや自分達の意味とは別の英霊としての本能が、ブラックに対して叫び続けている。

一瞬でも気を抜けば、確実にその意志に自分の意思が飲み込まれてしまうとセイバー達は思い、何とか本能に抗うように意思を強く保つ。

しかし、その英霊の本能の暴走が分かっている筈のブラックは、まるで気にしてないと言うように右手に持っていたオメガブレードの切っ先を、ブラックの本质を目の当たりにして震えている切嗣に向ける。

「……スチャ！！」

「如何した？貴様が言う“悪”が現れたんだぞ？貴様が呆然としている間にも、俺の本質が世界に悪影響を与える。世界の救済を望んでいると言っるのは嘘だったのか？」

「クッ！！セイバー！！令呪に於いて命じる！！バーサーカーを全ての力を持って排除しろ！！」

「――ビュン！！」

切嗣が令呪を使ってセイバーに命じた瞬間、本能と令呪の力にセイバーは抗う事が出来ず、ブラックに向かって飛び掛かった。

その速さはブラックが自身の因子を解放する前にデイルムッドに匹敵していた。

ブラックが因子を解放した事で、ブラック自身とルインを除いた全てのサーヴァントのステータスが1ランク上がっているのだ。

その影響によって上がった筋力も最大にセイバーは使いながら、右腕に握った不可視の剣をブラックに向かって振り下ろす。

ブラックはその攻撃に対してオメガブレードを構えて、セイバー同様に右腕だけを使ってセイバーの斬撃を防ぐ。

「フン！！」

「――ガキイイ――ン！！」

「――ギリギリッ！！」

「グウッ！！何故です？」

「ん？」

「何故貴方のような存在が英霊に成れたのです！？世界に悪影響を与える者が英霊になど成れる筈は！？」

「下らん」

——ガキイイーン！！

「なっ！？」

セイバーの疑問に満ちた叫びを、ブラックは感情の籠ってない声で切り捨てると同時にオメガブレードを振り抜き、セイバーを弾き飛ばした。

その衝撃にセイバーは体勢を崩すが、ブラックは追撃する事無くつまらなそうな顔をしながら会話を再開する。

「ギルガメッシュの時に言ったが、生前に暴れすぎたから勝手に世界が英霊にただけだ。でなければ、俺が英霊なんぞに成る筈無いだろう。何せ俺は……」 “世界に悪影響を与える物で体を構成された物” だからな」

「ッ！！」

——ガキン！ガキン！！キイイン！！！！

ブラックの告げた事実に驚愕しながらも、令呪の命令によってセイバーは不可視の剣を振るい、ブラックはオメガブレードの防いで行く。

「『この世の全ての悪』を担うと貴様の下らんマスターは叫んだ。笑わせるな！！」

——ガキイイーン！！

——ドゴオン！

「グウツ!!」

「――ボキン!!」

「『この世の全ての悪』と言う事は、誰もがソイツを悪だと認めなければいけない。行いなど関係なく、居るだけで悪だと――!」

セイバーの斬撃を弾く同時に、ブラックは素早くセイバーの胴体に向かって蹴りを叩き込み、セイバーは肋骨を数本折られながら遠くへと吹き飛んだ。

同時に苛烈な視線を自身に向かってコンデンサーを構えている切嗣に向かって放つ。

「なのに貴様は一体何だ?己の行いを裏だけで行い、表ではその行いを隠す。そんな奴がこの世の全ての悪を担うなど、笑える以外に何ものでもない!」

「黙れ!!」

「――ズガァン!!」

ブラックの言葉を否定するように切嗣はコンデンサーの引き金を引いて弾丸を発射した。

この攻撃はサーヴァントであるブラックには無意味に等しい。それでも一瞬でもブラックの注意が逸れば、セイバーの斬撃を食らわせる事が出来る筈。

『魔術師殺し』としての自身の本当の戦いが出来ない今、切嗣はセイバーに援護を行ってブラックを倒す以外に方法は無い。

だが、その方法はブラックに対しては通じなかった。何故ならば

この場にはブラックの唯一無二のパートナーが居るのだから。

「……ガキイイーン!!」

「ッ!!」

「イレギュラー!! 如何言つつもりですか!？」

突如として出現した魔法陣によって、弾丸が防がれるのを目撃したセイバーは、折られた肋骨を修復しながらそれを行った犯人・ルインへと声を上げた。

確かに切嗣の発言にルインも怒っていたが、英霊ならばブラックを護るような行動をする筈は無い。

何せ英霊とは、世界の守護者である。世界を滅ぼす存在に対しては容赦する事がない。特にブラックは今も世界に悪影響を与えているのだ。

強靱な意志力を持っているイスカンドルやデイルムッド、そしてイスカンドルの軍勢はそれを無理やり抑えている。

セイバーのように令呪と本能の双方によって動いているならば話は変わるが、ルインは自身の意思でブラックを護ったようにセイバーには見える。

それを表すようにルインは自身の体を僅かに浮かばせて、ブラックの左肩に寄り添うように乗る。

「……もう良いですよね？」

「フン、計画ではまだ先だったが、気に入らん奴とつまらん奴をこの場で消すも悪くは無い。聖杯の真偽は直接見て決めるぞ」

「仰せのままに……」 “我が唯一無二マイロード”

『ッ!!』

ルインの発言に、ルインの正体を分かっていたイスカンドルとイスカンドルからルインの正体を聞いていたウェイバーを除いた全員が目を見開いた。

そしてすぐさまセイバーはイスカンドルの軍勢とブラックの肩に乗っているルインを見比べる。

セイバーにも分かったのだ。イスカンドルの軍勢のように、ルインもまた宝具として分類される存在なのだと。

そして同時にアイリスフィールを攫った犯人に辿り着き、鬼の形相をしながらブラックに剣を構える。

「貴様か！バーサーカー！！アイリスフィールを攫ったのは！？」

「正解だ。だが、当然だろう？この聖杯戦争のシステムを理解しているならば、先ず狙うのは“聖杯の器”だ。それを確保した方がより確実に聖杯は手に入るからな」

「クッ!!」

セイバーはブラックの発言に苦渋に満ちた声を思わず出してしまった。

そう、ブラックの言うとおり聖杯を確実に手に入れるならば、“聖杯の器”を確保しない方が可笑しい。何せ例え最終的に勝者になっても、手元に聖杯が無ければ全てが無意味になる。

ブラックの行動は確かに聖杯を求める者からすれば正しい行動なのだ。

逆に言えば、セイバーはアイリスフィールが聖杯の器を保管している事を知っていたのにも関わらずに一人にしてしまった事の方が

間違いだつたと言えない。

だが、ブラックの発言に誰よりも慌てている者達が居た。セイバーの背後に居る切嗣とバインドで体を拘束されている舞弥である。

二人ともブラックの言葉の裏に隠された真意が分かっていた。“

既にブラックとルインは、この聖杯戦争の本質を知っている”のだ。その切嗣と舞弥の様子が可笑しいのか、ルインは口元に右手をやりながら笑い始める。

「クスクスクスクスッ」

「何が可笑しいイレギュラーー!!」

「いえ、貴方を笑ったんじゃないんですよ、理想者さん……私が笑ったのは……“この世の全ての悪を担うなどと叫んで、自分の目的を正当化している道化”の行動ですよ」

「な、何だと!？」

「理想者さんは何も知らないんですよ。誰よりも聖杯に近かったのに、誰よりも踊らされている……だって……“自分が助けようとしている相手にも騙されていたんですからね”」

『ッ!』

その言葉にセイバーだけではなく、話を聞いていた誰もが目を見開き、セイバーとルインの顔を交互に見回す。

特にセイバーを強敵として認め、同じ騎士であるデイルムッドはルインの発言を聞き逃す事が出来なかった。

如何にセイバーの願いがデイルムッド自身も受け入れられないとは言え、それでも同じ騎士道を重んじる者としては、護っている相

手にさえも騙されるなど絶望以外の何ものでもない。状況から察するに、セイバーが護ろうとしていたのは港場で見た女性である事は間違いないだろうが、ルインの言葉の真意までは分からずに考え始める。

そしてイスカンドルも状況を素早く頭の中で考察していた。

（又ウー、察するにバーサーカーは港場でセイバーと共に居った女子を攫ったようだが、如何にも先ほどのイレギュラーの発言には別の意味が在る様な気がしてならんなあ・・・しかし、余程の存在だとは思っておったが、こりや完全に予想を超えとったわ）

ブラックの正体には流石にイスカンドルでも驚愕せざるえなかった。

途方も無い英霊だとは分かっていたが、まさか“世界の敵”ながらも英霊の座に入り込んでいた英霊だとは思っても見なかった。それがどれだけ奇跡に近い領域なのかは、イスカンドルには分かっている。

何せ世界は自身を滅ぼす者に対しては容赦など無い。現に滅びの要因が現れば、世界はその場に守護者を送り込み対処する。

そしてブラックは存在自体が世界に悪影響を及ぼしてしまう。それがどれだけ辛いのかは、多くの勇者達を束ねているイスカンドルを以てしても知る事が出来なかった。

其処に居るだけ悪と称され、例え多くの人々を救っても最終的には己は悪とされて排斥される。

ブラックと言う存在はそう言う宿命を背負わされた存在なのだ。だが、それでもブラックは英霊の座に辿り着いた。最も世界が英霊に招かない筈の存在が英霊の座に辿り着く。

その偉業がどれほどのモノかはイスカンドルには分からないが、本能とは別に自身の心が熱く滾るのを隠す事は出来なかった。

ブラックは世界でさえも負けを認めざるえなかった偉業を成し遂

げたのだ。そのブラックを打ち倒し、配下に加える。世界の征服を望んでいるイスカンドルにとってこれ以上無いほどの熱く滾る相手だ。

（待っておれバーサーカー！！今はこの衝動を御せぬが、御した暁にはお主との決着の時よ！必ずや配下にしてくれるぞ！！）

そうイスカンドルは内心で叫びながら自身の身の内から湧き上がって来る衝動を抑えながら、ルインの言葉に耳を傾ける。

「面白い事を教えて上げますね。此処の聖杯は在るモノを食べて完成に向かうんですよ。そしてそれに必要なのは、膨大な魔力を持った存在」

「ッ！！・・・それは・・・まさか？」

「はい、聖杯が食べるモノは倒された英霊ですよ」

「なっ！？」

ルインの告げた聖杯の真実にセイバーは驚愕に満ちた声を上げ、ソラウやウェイバーなど魔術師達は目を見開きながら自分達のサーヴァントを見つめた。

同時に彼らの頭の中でルインが断片的に伝えている聖杯戦争のシステムを考え始める。

ルインの言葉が全て真実だとしたら、聖杯の完成の為に最も必要なのは英霊の存在である。

英霊が居なければ聖杯の完成はありえない。そしてよくよく考えてみれば、聖杯戦争を構築した御三家でさえも争っているのに他の魔術師を呼ぶシステムも可笑しい。秘匿を信条とする魔術師には似

つかわしくない。特にアインツベルン、遠坂、間桐などの名門と言える家系が自分達の秘奥と言える聖杯降臨の儀式を隠さない筈はない。

だが、逆に必要だからこそと考えれば、その矛盾は完全に消える。他の魔術師・正確に言えば英霊を召喚させる者が何よりも必要なのだ。

つまり、この冬木で行われている聖杯戦争は。

「・・・聖杯を作り出す為に儀式か・・・召喚された英霊を代償として」

「大正解ですよ、イスカンドルのマスター。クスクスクス、つまりですね。完全に聖杯を完成させる為には、七体全てのサーヴァントが生贄にならないといけないんですよ。その中には当然」

「・・・私も入っている」

意味在りげな視線で見つめられたセイバーは、思わずブラックに剣を構えるのも忘れて茫然自失しながら声を出した。

聖杯の完全な完成の為には七体のサーヴァントが聖杯に取り込まれる事が何よりも必要。

最終的に六体サーヴァントが聖杯に取り込まれても、それは不完全な聖杯でしかない。当然ながら不完全な聖杯でも願いにも限定が出来てしまうし、不完全ゆえに中途半端な結果に終わってしまう可能性も充分に在りえるのだ。

イスカンドルのような『受肉』ならば充分に可能だろうが、セイバーや切嗣のような世界に変革を与えるような奇跡の領域の願いは難しいだろう。仮にそれが成功しても不完全で終わってしまう可能性は充分過ぎるほどに在るのだ。

「貴女の願いは奇跡の領域ですからね。七体サーヴァントが入り込まないと不完全で終わるでしょう。最も完成させた時の代償は・・・  
“貴女の騎士道は嘘だった”と言う悲劇ですけどね」

「ッ!！」

「フン、如何やら貴様は何も本当に知らないようだな。教えてやろう。聖杯とは・・・」

「セイバー！バーサーカーの言葉を聞くな!!」

切嗣はブラックの言葉を遮るように怒りと殺意に満ちた声で怒鳴りつけた。

それだけは知られるわけにはいかない。知らればセイバーの全てが崩れ去ってしまう。

しかし、切嗣の怒りや殺意などそよ風程度にしか感じていないブラックは、つまらなそうな顔をしながら真実を伝える。

「貴様が護ろうとしていた女こそが聖杯その物だ。聖杯が完成した暁には、意思など全く持っていない物に成り果てる宿命を持った存在だ」

「――バキイイイーン!!」

「・・・アッ・・・」

ブラックの言葉を聴き終えた瞬間、セイバーの中の何かが完全に砕け散り、体がよろめいた。

聖杯を手に入れる為にはアイリスフィールを犠牲にしなければならぬ。それはセイバーにとってはどれだけ辛い選択だろう。

護ると誓った者を犠牲にしなければ聖杯を手に入れられない。いや、例え六体のサーヴァントを倒したとしてもセイバーの願いが叶う可能性は限りなくゼロに近い。

何せ不完全な聖杯では切嗣の願いである『世界の救済』など不可能だ。確実に願いを成就させる為にはセイバー自身も聖杯に取り込まれなければならない。切嗣ならば確実に実行するだろう。

そしてセイバーの願いは聖杯を手に入れる直前で消え去り、絶望しかセイバーには待っていない。

アイリスフィールと言う護ると誓った相手を犠牲にしながら、セイバーの願いは目前で消え去る運命なのだとセイバーは理解してしまった。

そしてその場に居たイスカダール、デイルムツドもセイバーの行く道を完全に理解し、思わず目を逸らしてしまう。

特にデイルムツドはセイバーの心情を少なからず理解していた。信じていた者に裏切られる。

嘗てデイルムツドは死の直前にそれを味わった。生前の主君で在ったフィン・マークルの謀殺。

あの時に味わった絶望と慟哭を晴らす為にデイルムツドは戦っていると言っている。それを形は違っても今セイバーは味わった。その心中に宿る絶望をデイルムツドは思い、セイバーの直視する事が出来ずに顔を逸らす。

イスカダールもまたセイバーの行く道の結末を思つて、憂い顔を浮かべるしかなかった。

予想はしていたがやはりセイバーは自らの理想に牙を剥かれてしまった。自らの理想を叶える為には、理想の為に護るべき者を差し出さなければいけない。いや、差し出してもセイバーの願いは叶わない。

完全な道化。それがセイバーが進んだ道の結末でしかないのだ。それを思つてこの場に居るブラックとルインを除いた全ての英霊達がセイバーから視線を逸らす、セイバーを絶望に叩き落したブ

ラックとルインは全く気にせずに切嗣に顔を向ける。

「これで貴様の願いは終わりだ。セイバーはもう戦えまい」

「き、貴様！！」

ブラックの真意を理解した切嗣は鬼の形相でブラックに向かって叫んだ。

そう、既に戦う相手として興味を失っていたセイバーをブラックが地獄に叩き落した理由はただ一つ。

“切嗣の願いを完全に粉碎する為だった”。幾ら切嗣が聖杯を渴望しても、聖杯戦争を勝ち残るには己と共に戦うサーヴァントの存在が不可欠。

だが、今のブラックの行動によってセイバーは切嗣と共に戦っても聖杯が手に入らない事を示されてしまった。その上完全にセイバーの闘争心も壊されている。

これでは幾ら本能と最後の令呪を使って更にブラックと戦えと重ねて命じられても、ブラックに勝てる可能性は万に一つも無い。

このままでは自分達は此处で敗退してしまうと、切嗣の頭の中に浮かんで来る。

それだけは絶対に赦されない。自分は全てを賭けて聖杯戦争に挑んでいるのだ。ましてや目の前に立ち塞がるブラックは、切嗣が望む平和を破壊する、最も赦せない存在。

ブラックだけには絶対に負ける訳にはいかないと切嗣は思いながら、何とかセイバーをブラックと戦わせる方法は無いかと思い巡らせ、一つの考えを持って最後の令呪が宿っている腕を掲げる。

「……バーサーカー……お前だけは絶対にこの場で消滅させる！世界の為に！」

「・・・フン、下らん。この後に及んでまだ世界などの為に動くか」

「何とでも言え・・・僕は必ず世界を救ってみせる！」

「世界を救う?・・・フン、たった一人の貴様が世界なんぞ救えるものか。世界を救えるのは、いや変えられるのは個人では無理だ。ましてや下らん理想にばかり目を向け、不確かなモノなんぞに縋る貴様らではな!!」

「黙れええええええええええー!!最後の令呪に於いて命じる!!セイバーよ!!一時その身を狂戦士と化して!!バーサーカーを木っ端微塵に消滅させる!!」

ーードッケン!!

「ガアッ!!」

「ッ!!セイバー!!!!」

切嗣の腕から最後の令呪の一文が消えると同時に胸を押さえて苦しみ出したセイバーに向かって、ディルムッドは叫んだ。

ディルムッドは今の令呪による命令の意味が分かっている。それは高潔な騎士がバーサーカーのクラスとして召喚されたモノに変わり果ててしまう事実。

セイバーを強敵として認めているディルムッドにはそれが赦せず走り出そうとするが、時既に遅く、顔を上げたセイバーの顔は、怒りと憎悪に醜悪に歪んでいた。

「ッ!!」

「ムッ!!」

「……ガキイイーン!!」

意味の為さい咆哮をセイバーは上げると同時に、充分に握れない筈の左手と右手で剣を持ち、ブラックに向かって全力で斬りかかった。

その全てを込めているかのような一撃をブラックはオメガブレイドで防いだが、威力を相殺し切る事が出来ずに背後に押しやられてしまう。

その苛烈としか言えない斬撃を、セイバーは自身の身など考えずに連続でブラックに向かって連続で振るい、ブラックを後方に徐々に押しやって行く。

「  
ッ!!」

「……ガキイン!!ガアアアーン!!キイイイーン!!」

「……なるほど、二つの令呪の効果作用と俺が本質を解放した事で、ステータスが更に1ランク上がったのか」

「  
ッ!!」

「……ドゴオオオオオン!!」

「グッ!!」

オメガブレイドで不可視の剣の斬撃を防ぐと同時に蹴りを叩き込んで来たセイバーの一撃を、ブラックは避ける事が出来ずに胴体に食らい吹き飛ばされた。

今のセイバーの实力は真の姿で在るブラックさえも超えているのだ。更には狂戦士となりながらもセイバーの剣筋は僅かに下がっている程度でしかない。急場の狂戦士からなのか、それとも別の要因が関わっているのか分からないが、純粋な剣の实力ではブラックはセイバーには及ばない。

それ故にブラックは剣を使った戦いではセイバーには勝てないのだ。最もブラックが真の自身の戦い方をすれば話は変わる。

ブラックからすれば今のセイバーの戦いは嘗て自身も行った事が在る戦い方。故にその弱点も簡単に分かる。切嗣の必勝の策もブラックからすれば経験した戦いでしかなかった。

「――ガキイイイーン!!」

「ッ!!」

「フン! バーサーカーのサーヴァントに急場の狂戦士が勝てると思うな!!」

「――ドゴオン!!」

「ッ!!」

ブラックは叫ぶと同時にオメガブレードを握っていない左腕に生み出していたエネルギー球を、セイバーの体に叩き込んだ。

その一撃にセイバーは意味をなさない言葉を上げながら後退して、警戒するようにブラックを睨みながら不可視の剣を構える。

「ッ!!」

「フン、下らん。下らな過ぎて飽きた」

ブラックはもはやセイバーとの戦いを続ける気にはなれなかった。今の一撃は本来のセイバーならば避ける事が出来ただろう。しかし、狂戦士と化したセイバーには避ける事は出来ない。ただでさえ興味が無かったセイバーが、更に興味が失せる姿になった事に、もはやブラックはこの戦いを続けるのは無意味だと悟り、セイバーではなくイスカンドルに声を掛ける。

「……イスカンドル」

「ん？なんじやい？言っておくが余も、余の配下もそのセイバーとは戦わんど。そのような身に堕ちたセイバーと戦ったら、余の名が地に堕ちるからなあ」

「誰も貴様に戦わせるなどと言っていない……貴様の見事な宝具に対する礼をする気になっただけだ」

「なんじやと？」

ブラックの意味が分からない発言にイスカンドルは眉を顰めた。それはイスカンドルだけではないのか他の者達もブラックに訝しげな視線を向けるが、ブラックは構わずにオメガブレードを地面に突き刺し、セイバーに向かって両手のドラモンキラーを構える。

「貴様とは本気で互角に戦いたい。それなのに貴様の切り札だけを俺が知っているのは侮辱だからな。丁度良い練習台も現れた事だ。俺の本当の“宝具”を見せてやる」

『ッ……!』

ブラックの信じられない発言に、狂戦士と化しているセイバー以外の全員が目を見開いた。

誰もがブラックの真の宝具はオメガブレードだと思っていた。相手の宝具の発動を初期化させる能力を持った規格外の剣なのだから当然だろう。

しかし、ブラックにとってオメガブレードは使い勝手の良い武器ではない。ブラックの真の宝具は全く違うのだ。

それを表すように、何時の間にか上空に避難していたルインが嬉しげな顔をしてブラックの背後に移動する。

「やるのですね、ブラック様？」

「ああ……行くぞ！！ルイン！！！」

「はい！！ユニゾン・イン！！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！ブラックウオーグレイモン！X進化！！」

『ッ！！』

誰もがその光景に息を呑んだ。

ルインが叫んだ瞬間、ルインの体は溶け込むようにブラックの体に入り込み、同時にブラックが咆哮を上げると、ブラックの体は蒼いデジコードに包まれたのだ。

その魔術師で在りながらも誰もが息を吞まざる得ない光景に言葉も出す事が出来ずに、出現したデジコードの繭を見つめていると、セイバーが凄まじい速さでデジコードに向かって飛び掛かった。

狂戦士として化して尚も顕在している直感が危機を知らせたのだ。デジコードの繭を破壊しなければならない。そうしなければ自分

が死んでしまうとセイバーの未来予知に近い直感が叫び、全力を込めた斬撃を繭に向かって振り抜く。

「ッ！！！」

「……ガキイイーン！！」

「ッ！？」

セイバーが振り下ろした渾身の剣は、突如としてデジコードの繭から飛び出して来たより機械的になった左手のドラモンキラーによって防がれた。

その光景に思わずセイバーは動きが止まってしまうが、ドラモンキラーが現れた時に破られたデジコードの隙間の中に居る者は構わずに、赤く光る目をセイバーに向けながら右手のドラモンキラーをセイバーに向かって突き出す。

「邪魔だ。ドラモンキラー！！！！！」

「……ドゴオオン！！」

「ッ！！！」

デジコードの中から更に突き出されて来たドラモンキラーをセイバーは避ける事が出来ずに胸に食らい、体を覆っていた鎧の破片を撒き散らしながら切嗣と舞弥の横の地面に激突する。

「……ドオオオオン！！」

「……馬鹿な……」

切嗣は今の光景が信じられず茫然自失としながら、掠れた声で呟いた。

今のセイバーのステータスは通常時よりも2ランク上がっている筈。その力は真の姿を取り戻したブラックを超えている筈なのだ。

しかし、そのセイバーを以てしても勝てない存在が切嗣達の視界に映っていた。

それは背中に二つのバーニアを背負い、通常時よりも機械的な鎧とドラモンキラーを身につけていた。

それは嘗て此処ではない世界で、多くの人々に最も恐れられ、敵対した全てに恐怖だけを与えた存在。

敵対した全てがその存在を恐れ、この世から消滅して欲しいと願った、究極にして最凶と呼ばれた存在。

漆黒の竜機人・ブラックウォーグレイモンXが全身から漲る力と魔力を迸らせながら、殺意に満ちた視線を切嗣に向けていた。

第二十一話 己の正体を語る恐怖 後編（後書き）

現在のブラックとルインを除いたサーヴァントステータス

セイバー『通常時』

【筋力】	B	【魔力】	A
【耐久】	A	【幸運】	D
【敏捷】	A	【宝具】	A++

セイバー『ブラック因子解放時』

【筋力】	A	【魔力】	A
【耐久】	A+	【幸運】	C
【敏捷】	A+	【宝具】	A++

セイバー『ブラック因子解放+狂戦士化時』

【筋力】	A+	【魔力】	A+
【耐久】	A++	【幸運】	B
【敏捷】	A++	【宝具】	A++

デイルムツド『通常時』

【筋力】	B	【魔力】	D
【耐久】	C	【幸運】	E
【敏捷】	A+	【宝具】	B

デイルムツド『ブラック因子解放時』

【筋力】	A	【魔力】	C
【耐久】	B	【幸運】	D
【敏捷】	A++	【宝具】	B

イスカンダル『通常時』

【筋力】	B	【魔力】	C
【耐久】	A	【幸運】	A +
【敏捷】	D	【宝具】	A + +

イスカンダル『ブラック因子解放時』

【筋力】	A	【魔力】	B
【耐久】	A +	【幸運】	A + +
【敏捷】	C	【宝具】	A + +

アサシン『通常時』

【筋力】	C	【魔力】	C
【耐久】	D	【幸運】	E
【敏捷】	A	【宝具】	B

アサシン『ブラック因子解放時』

【筋力】	B	【魔力】	B
【耐久】	C	【幸運】	D
【敏捷】	A +	【宝具】	B

## 第二十二話 暴虐を揮う恐怖

その姿に誰も言葉も出す事は出来なかった。

今までもブラックは凄まじいまでの力を振るい、竜人の姿で圧倒的な力を見せて来た。その事までは何とか魔術師達も英霊達も許容範囲だった。

英霊とは人間の常識を超える存在。それ故にどれほどの英雄なのかを知らなければ、その力を正確に推し量る事は出来ない。故にブラックが凄まじい力を揮うのもそれだけの事を生前に行ったからこそだと思っていた。

しかし、今日の前に現れたブラック-いや、ルインとユニゾンを行ってX進化したブラックウォーグレイモンXからは、今回の聖杯戦争で召喚された英霊達さえも上回る圧倒的な威圧感と恐怖だけしか感じる事が出来なかった。

ただ其処に居るだけで空間が、いや世界が恐怖に震えているかのように歪み続けている。

その原因の張本人であるブラックウォーグレイモンXは、自身の体の様子を確かめるように両手を軽く振るう。

ーーブーン!!

ーーードオオオオオオオオオオオン!!

「・・・やはり久々の進化で加減が思うように出来んな」

自身が腕を振り下ろした先に発生した、底が見えないほどの亀裂を眺めながら、ブラックウォーグレイモンXは呟いた。

その何でもないようにブラックウォーグレイモンXが発生した現象に、誰もが言葉を出す事が出来なかった。

今は完全に腕を軽く振るった程度でしかない。にも関わらず、地面に底が見えないほどの亀裂が生まれたのだ。それでもブラツクウォーグレイモンXの力が異常だと誰もが理解出来る。

その中でもマスターの能力でサーヴァントのステータスが見えるウェイバーと切嗣は、その在りえないステータスに呆然とするしかなかった。

ブラツクウォーグレイモンXのステータスは、殆どがAどころか、EXまで存在している。

規格外を意味するモノに、ウェイバーと切嗣は言葉も出す事が出来ずに居ると、ブラツクウォーグレイモンXに殴り飛ばされて、胸の部分の鎧が破壊されながらも憎しみと怒りに染まったままの狂化されたセイバーが立ち上がる。

「ッー!!」

「フン、痛みも感じていないか・・・まあ、良い。さっさと掛かって来い」

「ッー!!」

ブラツクウォーグレイモンXが挑発するように声を掛けると、セイバーは凄まじい速さで駆け出し、殆ど一瞬に近い速さでブラツクウォーグレイモンXの前に辿り着いた。

そのまま両手で握っている不可視の剣をブラツクウォーグレイモンXに向かって振り抜こうとするが、その直前にブラツクウォーグレイモンXがセイバーの顔を右手で掴み取る。

「ーガシッ!!」

「ッー!？」

「つまらんなッ!」

ーードゴオオオン!!

叫ぶと同時にブラックウオーグレイモンXはセイバーの顔面を掴みながら、地面にセイバーを叩きつけた。

その凄まじい力から逃れようとセイバーは不可視の剣を振り抜くが、ブラックウオーグレイモンXは斬撃を左腕のドラモンキラーで意図も簡単に防ぐ。

ーーガキイイーン!!

「ッ!」

「地面に体を付けたままでは剣の軌道は限定される。さて、少し飛ぶが、“耐えてみる”」

「ッ!」

不吉なブラックウオーグレイモンXの言葉に、理性が無いのにも関わらず恐怖を感じたセイバーは、連続で剣を振り抜いてブラックウオーグレイモンXから逃れようと暴れる。

しかし、そうはさせないと言うように残忍さに満ちた笑みをブラツクウオーグレイモンXは浮かべ、背中のバーニアを噴かせて、セイバーを地面に押し付けたまま動き出す。

ーードゴオオオオン!!

ーーガガガガガガガガガガガガッ!!!!

「　　ッ！！！」

バーニアを噴かせながらブラックウォーグレイモンXは凄まじい速さで前へと進み、必然的に右腕に掴んでいたセイバーも背中を地面に押し付けられながら引き摺られる。

その痛みは狂化しても凄まじいのか、セイバーはブラックウォーグレイモンXから逃れようと暴れ回る。

しかし、ブラックウォーグレイモンXは暴れるセイバーなど全く気にする事無く、逆にセイバーが振るって来た剣を左手で掴み取りながら空中に上昇し始める。

「――ガシン――！」

「　　ッ！？」

「貴様も中々の直感を持っているようだが、その直感は空中でも発揮されるのか？」

「　　ッ！！！」

狂化しながらもブラックウォーグレイモンXの狙いに気がついたセイバーは、その目を限界にまで見開くが、既にブラックウォーグレイモンXとセイバーの位置は、地上に居るライダー達が米粒に見えるほどの高さに昇っていた。

ブラックウォーグレイモンXと違って飛べないセイバーが、今居る位置から無理やり落下させられたら、地上に赤い花が広がるだろう。

例えば保有スキルである【魔力放出】で落下の衝撃を在る程度軽減出来ても、落下の衝撃のダメージは計り知れない。



「――ガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！」

「

ッ！！！！」

ブラックウオーグレイモンXは咆哮を上げると共に竜の因子を持つ者に対して絶大な力を持っている両腕のドラモンキラーを、それこそ一般人では何が起きているのかも分からない速度でセイバーに向かつて振り抜き続ける。

空中と言う飛ぶ術が無い者にとって何も出来ない場所で、連続で、その上最悪の相性を誇る武器による攻撃を防御する事も避ける事も出来ないセイバーは、断末魔のような悲鳴を固有結界内部に轟かせた。

その声を地上で聞いている者達は、全員が顔を、あの豪胆なイスカンダルと忠義の騎士であるデイルムツドさえも顔を青褪めさせて空中に轟き続けるセイバーの断末魔の叫びに体を震わせる。

そして遂にセイバーの声が枯果てたように掠れた瞬間、再び切嗣と舞弥の横に空中から凄まじい速さでセイバーが落下して来る。

「――ドゴオオオオオオオン！！」

「・・・セイバー・・・なのか？」

一瞬、切嗣を以てしても自身の横に落下した者がセイバーだとは判別出来なかった。

それほどまでにセイバーの状態は余りにも無残だった。白銀と紺碧に輝いていた鎧は、原型さえも止めていないほどに粉々に砕け散り、鎧と共に存在していた纏っていた蒼きドレスは切れ端同然に変わり果て、目に見える素肌は血みどろに染まっていた。

それだけではなく両足は不自然な方向に折れ曲がり、両手の骨も完全に複雑に折れ曲がっていた。

見目麗しかった顔も血で濡れまくり、其処に居るのがあの気高かった騎士王だと知っている筈の者でさえも理解出来ないだろう。それでも右手には黄金に輝く剣・エクスカリバーだけは、確りと握られていた。

だが、もはや切嗣が使用した令呪の命令を実行するのは不可能だろう。如何にサーヴァントとはいえ、セイバーは天敵の武器である竜殺しの力を使われて傷をつけられたのだ。これではそう簡単には治る事も無いだろう。寧ろ生きている事の方が奇跡なのだ。

そして誰もが無残に変わり果てたセイバーに言葉も出す事が出来ずに居ると、空中に居たブラックウオーグレイモンXが落下して来る。

ーードオオン！！

「準備運動にもならなかったが、力の把握は出来た。少しは貴様が作り上げた急造の狂戦士も役に立ったぞ」

「クッ！！」

ーードオオン！ズガアン！ドン！！

嘲りに満ちた笑みを向けて来たブラックウオーグレイモンXに向かって、切嗣は腕に持っていたコンデンサーとキャリコム950の弾丸を撃ち込んだ。

しかし、その弾丸はブラックウオーグレイモンXに当たる事も無く、突如として歪んだ空間に消え去ってしまう。

ーーギュウン！！

「ッ！！」

「デイストーションフィールド。空間を歪ませて防御する技だ。空間の歪みを捻じ伏せる威力を持った攻撃で無ければ、破る事は出来ん」

何でもないようにブラックウオーグレイモンXは自身の防御手段を切嗣に語った。

その事実には魔術を知る誰もが言葉を無くした。空間制御など魔術の間では魔法に近い領域に近い魔術。それを何でもないようにブラックウオーグレイモンXは使用しているのだ。魔術師であるウェイバー、ソラウ、そして魔術を使う切嗣は、もはや言葉も出す事が出来なくなってしまった。

最もそんな事は関係ないブラックウオーグレイモンXは足を前に踏み出そうとするが、その直前にユニゾンしているルインが声を掛けて来る。

（ブラック様。ユニゾンしてられる残り時間は一分を切りました。更に使っていた魔力供給先からの魔力が途絶えました。これ以上のXモードの使用は危険です）

「チィッ！！ユニゾン・アウト」

「ーシューン！」

ブラックウオーグレイモンXが声を出し終わると同時にブラックウオーグレイモンXの体が光に包まれ、ブラックとルインの二人に分かれる。

同時にブラックは凄まじい脱力感に全身が襲われ、地面に膝をついてしまう。

――ガタツ――

「チィッ――！忌々しい！生前ならばこんな事はなかったものを――！」

ブラックは自身の状態に苛立ちに満ちた声を上げた。

絶大な力を得られるX進化だが、生前と違って自由度は殆どなくなっていた。

進化していられる時間も五分と短く、更には進化後は一定時間ステータスが1ランクが下がってしまう欠点が存在している。

それ故にブラックは出来るだけX進化は使いたくなかったのだが、イスカンドルの『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』に答える為には自身も切り札を使わねばならないと思って使用したのだ。

全身を襲う脱力感から逃れようとブラックは力を振り絞るが、魔力供給の途絶えも在って思うように立ち上がれずに居る。

切嗣はその様子を目撃してブラックを倒す最大のチャンスが訪れたと思い、自身の最後の切り札を使用する。

「Time alter（固有時制御） double ac  
cel（二倍速）――！」

――ドーン――！！

切嗣は何かの呪文のような言葉を呟くと同時に、高速の速さで走り出した。

これこそ切嗣が持つ奥の手の一つ、『固有時制御』。時間操作に分類される大魔術である。

時間制御とは特定の空間の内部を外界の”時の流れ”から切り離して操るという物で、固有結界に近い性質の大魔術。

切嗣はその大魔術を応用して、自身の体の中に結界を発動させて肉体の機能を加速させ、肉体の時間を引き延ばして自己ブーストさ

せているのだ。

その力は常人では不可能な高速体術を使用可能にする。その反面体に掛かるリスクは、通常の魔術を遥かに超えて危険だが、一時的にしる絶大な力を得る事が出来る。

その力を使用して切嗣はブラックに迫る。勝てる可能性など万に一つも無いとしても、ブラックだけは倒さなければならぬ。

そうでなければ自身の全てが崩れ去ってしまう。故に切嗣は走り続け、両腕に持つ銃器の銃弾を全て叩き込もうとするが、その直前に一筋の閃光が切嗣とブラックの前に立ちはだかる。

――ドーン――！！

「其処までにして貰おう。外道」

「退けランサー――！！！」

「悪いが退く気は無い！」

叫んで来る切嗣に対してデイルムッドは叫び返すと同時に切嗣の速さを圧倒的に上回る速さで通り過ぎ、切嗣の持っていた銃器を一瞬で破壊する。

――バキイイン――！！

「ッ――！！」

「貴様は酒宴を破壊したばかりか、我が主の命を脅かし、我ら英霊の誇りを踏み躪った。命までは取らんが、存分に己の行いの報いを受けよ！」

――ブシュウウウー！！

「ガアッ！！」

デイルムツドが叫んだ瞬間、切嗣の胸元から血が噴き出した。

交差した瞬間、デイルムツドは必滅の黄薔薇<sup>ゲイ・ボウ</sup>を切嗣の胸元に浅く突き刺したのだ。

例え浅くでは在ろうと、必滅の黄薔薇<sup>ゲイ・ボウ</sup>によって負わされた傷はデイルムツド本人が消滅するか、或いは必滅の黄薔薇<sup>ゲイ・ボウ</sup>が折られない限り癒える事は無い。

セイバー同様に切嗣もまた、デイルムツドを倒さなければ命の危機が脅かされる状態に追いやられたのだ。

そして胸元に傷をつけられた切嗣がその場に膝をついてしまうと、その切嗣を囲むようにイスカンドルの軍勢が展開される。

――ギン！！

「さて、これにて幕を引こうとするかのう」

軍勢の中イスカンドルはゆっくりと切嗣の前に立ち、腰に差していたキュプリオトの剣を構えた。

その瞳に宿るのは憐憫の色合い。このまま行けば確実に目の前に居る切嗣は絶望の淵に追い落とされる。叶わぬ願いを願った先にはそれしか待っていないのだから。

イスカンドルはそれ故にこの場で切嗣を処断しようと剣を振り被る。だが、その直前に自身の固有結界内部に入り込んで来る複数の存在を知り、急いでデイルムツドとブラックに向かつて叫ぶ。

「ランサー！！バーサーカー！！何か来るわい！！」

「何ッ！？」

「ムッ！？」

イスカンドルの叫びにデイルムッドとブラックはイスカンドルが見つめている方に目を向けると、髑髏の仮面を被った多数の集団・凡そ五十のアサシンの大群がイスカンドルの軍勢に奇襲を仕掛けて来ていた。

「アサシンじゃと！？」

「何と言う数だ！？」

完全なアサシン達の奇襲にイスカンドルとデイルムッドはそれぞれ驚愕の声を上げた。

数と実力で言えばアサシンの大群はイスカンドルの軍勢の前には烏合の衆も当然だろう。しかし、問題は横合いからの奇襲に在った。幾ら強力無比なイスカンドルの軍勢でも、奇襲と言う手段を用いられれば僅かなりとも混乱してしまう。更にはブラックが因子を解放している影響で、アサシンの速さも上昇している為に思うようにイスカンドルの軍勢はアサシン達を捕らえる事が出来ない。

アサシンの目的が他のマスター達の抹殺だった場合、この大勢が集まっていた状況ではケイネス、ソラウ、ウェイバーの命が危ないのだ。

それに思い立ったブラックは、全身を襲う脱力感から無理やり脱して、力を体中に集めながらイスカンドルに向かって叫ぶ。

「イスカンドル！！結界を解除して自分のマスターを護れ！！ランサー！！貴様も自分のマスターの下に向かえ！！」

「了解した!!」

「グヌウツ！！仕方が在るまい！！」

ブラックの意図を察したディルムッドは即座にケイネスとソラウの下へと駆け出し、イスカンダルもまた結界を解除しながらウェイバーの下へと駆け出す。

同時に徐々に境界が薄れて行き、アサシン達が消えて行くイスカ  
ンダルの軍勢に戸惑いを覚えた瞬間、ブラックは全身から力を振り  
絞り、炎の竜巻を発生させる。

「ブラックストームトルネード!!!」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

**ガア ア ア ア ア ア ア ア**  
**| | | | | ! ! ! ! !**

巻き上がったブラックスーツームトルネードの勢いに、事前に準備していたイスカンドル達を除いたアサシン達が空へと舞い上がって行った。

それを目撃したブラックは残されている力を全て振り絞り、両腕の間に巨大な赤いエネルギー球を作り上げ、上空に吹き飛んでいるアサシン達に向かって全力で投擲する。

「ガイアフォー！！！」

ーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オン！！

ブラックが投げつけたガイアフォースは上空に居たアサシン達に

直撃して、大爆発を空中に引き起こした。

それをブラックは確認すると、本当に力を使い果たしたのか膝をついてしまう。

ルインはそれを目撃すると、心配そうにブラックに駆け寄って声を掛けようとするが、ブラックは無言で立ち上がり、切嗣、舞弥、そしてセイバーが何時の間に居なくなっていた事に顔を険しくする。

「・・・やられたか」

「そのようですね、ブラック様」

「・・・帰るぞ。ルイン。この場でやる事は終わった」

そうブラックはルインに声を掛けると、ゆっくりとルインと共に自身の体を霊体化させて酒宴場から離れて行く。

イスカンドルはその様子を意味ありげに見つめ、ブラックが完全に出た事を確認して、自身の腕の中で呆然とブラックとルインが居た場所に目を向けているウェイバーに声を掛ける。

「さあて、余達も引き上げるとするかの方主」

「・・・ああ」

（こりや完全にバーサーカーの威圧感に飲み込まれたか・・・まあ、仕方が在るまい・・・アレは本気で規格外だからのう）

心あらずと言った様子のウェイバーに、イスカンドルは納得したように何度も頷いた。

先ほどのブラックウォーグレイモンXの力は、イスカンドルを以てしても驚嘆に値するしかないほどだった。弱点も在るようだが、

それを踏まえてもあの力は異常過ぎる。

何よりもあの力からは恐怖しか感じる事が出来ないのだ。それを振り払わなければ、ブラックとは尋常には戦う事が出来ないだろう。

（・・・策を練らねばならんな。余の持つ全てを使って挑まねばならんだろう・・・それこそ、全てを賭けるだけの策をなあ）

イスカンドルはそう考えながら、山道をウェイバーを抱えながら歩いて行く。

そしてデイルムツドもケイネスを背中に抱えながら、自身の横で恐怖に震えているソラウに声を掛けていた。

「ソラウ様。今宵は私が見つけた隠れ家に戻りましょう。最初の拠点に比べれば、遥かに劣りますが、少なくとも今日は安全を確保する事が出来ます」

「・・・ええ、分かったわ」

「・・・恐怖を感じておられるのは仕方が無いかもしれませんが・・・私もブラックのあの力には恐れが走りましたので」

「・・・ランサー」

何処か悩むようにソラウはデイルムツドに声を掛けた。

実を言えばソラウが恐れているのは別の事だった。確かにブラックの存在には恐れるが、それ以上にソラウが恐怖を感じたのはボロボロにされたセイバーの存在だった。

ブラックがブラックウォーグレイモンXになって戦えば、最優と称されているセイバーでさえも手足が出なかったのだ。デイルムツ

ドがブラックと戦って先ほどのセイバーのような状態に追い込まれてしまう事をソラウは恐怖しているのだ。

だが、当人であるディルムツドは何れ訪れるブラックとの戦いに意欲が燃え上がっていた。

自身を遥かに超える圧倒的な力を持った存在。如何すれば自身の実力で撃ち破れるのかと、ディルムツドはソラウと共に山道を降りながら考える。

（ブラックのあの宝具は恐らく常時発動型に分類される宝具・・・それならば撃ち破れる手は在る！待っているブラック！そしてセイバー！何れ雌雄を決しようぞ！）

ディルムツドはそう何れ訪れる戦いを思いながら、ソラウと共に隠れ家へと向かって行くのだった。

一方その頃、アサシンの襲撃に紛れて酒宴場から逃げ出した切嗣と舞弥は、傷ついて気絶したままのセイバーを抱えながら用意していたジープに急いでいた。

切嗣の胸元から流れる血に舞弥は険しい顔をするが、此处は一先ずは逃げなければならない。

何時追っ手がやって来るか分からない状況で、まともに戦えるのは舞弥一人。

安全な場所で体勢を整えなおさなければ、自分達は聖杯に至る前に敗退してしまう。更には令呪も全て使用してしまったのだから、自分達にはもはや切り札と呼べる札は、セイバーの持つエクスカリバーの真名解放以外に無い。

ブラックだけは絶対に倒さなければならぬと思いつながら、切嗣は自身の胸元から沸きあがって来る痛みを堪えてジープの扉を開け

ようとする。

「・・・舞弥・・・とにかく用意していた二つ目に拠点に行くぞ・・・  
その後にバーサーカーの拠点を見つける」

「了解です、運転は私が・・・」

「する必要は無いぞ、女」

『ッ!!』

突如として割り込んで来た声に切嗣と舞弥が目を見開き、慌てて  
背後へと振り返ろうとした瞬間、舞弥の左右肩に【黒鍵】が二本突  
き刺さる。

「――ドスン!!」

「グウッ!!」

「舞弥!!」

舞弥の肩に【黒鍵】が突き刺さる様子を目撃した切嗣は叫び、急  
いで舞弥を救出しようとするが、その直前に何時の間にか背後に移  
動していたカソックを来た男・朗らかな笑みを浮かべている言峰綺  
礼が切嗣に向かって中国拳法の技を放つ。

「――ろくだいかい ちょうちゅう  
六大開・頂肘」

「――ドオオオン!!」

「ガハッ!!」

綺礼の腰が切嗣に密着した瞬間、綺礼の左肘が切嗣の背中に直撃し、同時に切嗣の軸足は綺麗に刈り払われ、受け身を取る事も出来ずに切嗣はアスファルトの地面に倒れ伏した。

その様子を目撃した綺礼は、何時に無く嬉しそうに笑う。

「衛宮切嗣。私はお前に感謝するぞ。お前がバーサーカーの逆鱗に触れ、セイバーを絶望の淵に追い込んでくれたおかげで・・・私は至ってしまった」

「何を・・・言つて・・・」

「――ギユウッ!!」

「ガアッ!!」

「切嗣ッ!!」

手を強く踏まれて苦痛の声を上げた切嗣の様子に舞弥は叫んだ。  
しかし、行っている綺礼は全く気にする事無く、右手に【黒鍵】を新たに持ち、切っ先を舞弥の俄然に突きつけながら切嗣に声を書ける。

「だが、非常に残念なところも在った。行つたのがバーサーカーではなく、私だったならばより私は高揚感に包まれていただろう・・・  
・故に衛宮切嗣。今この場で生き残りたいければ・・・セイバーとの契約を完全に放棄しろ」

『ッ!!!!』

「令呪を失っただけでは、契約が切れる訳ではない。だが、貴様自身が契約を破棄すればセイバーは、完全にマスターを失う。悪くは無い話だろう？この場で貴様を殺してセイバーを奪う方法も在るのだから」

綺礼は要求を突きつけられて言葉を無くしている切嗣と舞弥に、更に言葉を重ねた。

しかし、切嗣には如何しても受け入れる事が出来ない要求だった。何せセイバーとの契約を完全に破棄すれば、事実上聖杯を得る権利を失う事に他ならないのだ。

それは切嗣には絶対に認められない。漸く今まで支払った対価と犠牲に報えるかもしれないところまで辿り着いたのだ。此処で綺礼の要求に従えば全てがご破算になってしまう。

そんな風に切嗣が綺礼の要求の要求に苦虫を噛み潰した顔をしていると、綺礼は内心で邪な笑みを浮かべながら声を掛ける。

「無論ただではない。私はセイバーと契約したら、今生き残っているアサシンとの契約を解除しよう」

「・・・何だと？」

「貴様も私の事は知っているだろう。流石に魔術師として未熟な私では二体のサーヴァントを維持する事は出来ない。ならば、私はセイバーとの契約を重要視しよう」

「・・・そんな事を信じられると思っているのか？」

「無理だろうな・・・だが、これならば如何だ？」

綺礼は懷から一枚の羊皮紙を取り出し、切嗣と舞弥によく見えるように広げる。

余人には何ら意図の汲めない図版と記号の羅列が羊皮紙には広がっていたが、魔術を使う切嗣と舞弥にはその文章の意味が分かった。その羊皮紙に書かれているのは術式文書。自己強制証文セルフギアス・スクロールと言う権謀術数の入り乱れる魔術師の社会において、決して違約のしようのない取り決めを結ぶときにのみ用いられる、もつとも容赦の無い呪術契約の一つである。

そして内容もまた切嗣と舞弥には信じられない内容だった。

『契約内容、言峰綺礼へのセイバーの譲渡。譲渡成立後に生き残っているアサシン全ての権利を衛宮切嗣に譲渡する。その後、聖杯戦争に於いて最後まで衛宮切嗣がアサシンを保有出来ていた場合、令呪を使用してのセイバーの命を自殺させる事を誓う』

「馬鹿な！？何だこの契約内容は！？」

余りにも信じられない契約内容に切嗣は思わず声を荒げた。

当然だろう。契約内容が事実ならば、綺礼は勝ち残ってもアサシンが生きていれば聖杯を手に入れる事が出来ないと言う事だ。

最も綺礼の聖杯戦争への参加理由が分からなかった切嗣だが、この契約で尚更に参加理由が分からなくなった。しかし、綺礼からすれば聖杯よりもブラックとの対峙が何よりの望む。

聖杯はもしもブラックが自身の捜し求める答えを手に入れられなかった時の保険でしかなかった。

同時に綺礼は自身の背後に生き残った十体のアサシン達を限界させて、左腕にも【黒鍵】を構える。

「さて如何する？その証文に己の名前を書いて、セイバーを譲渡するか？それともこの場で消えるかのどちらかだ？」

「グウツー!!」

綺礼の言葉に切嗣は悔しげな声を出すしかなかった。

確実にこの契約の裏には何かが存在している。だが、応じなければこの場で殺されるしかない。

舞弥は両肩を【黒鍵】に貫かれて動く事が出来ず。切嗣も先ほどのブラック達との争いで重傷。セイバーは意識不明の重体。

完全に手詰まり状態のところに切嗣は最悪の敵がやって来てしまったのだ。

この場から生き残るにはアサシンとセイバーを交換する以外に無い。出なければ代行者である綺礼に殺される。現状を打破する術が無い切嗣は、悔しげに顔を歪めながら羊皮紙に手を伸ばして自身の名前を書き、セイバーとの契約を完全に破棄した。

重傷のところで魔力供給さえも途絶えてしまったセイバーの体は薄れ始めるが、その前に綺礼は魔力が大量に籠った宝石・時臣が遠坂家に残っていた宝石・を口の中に入れてセイバーの現界を維持する。

「さて、これで契約は終わった。では、次はアサシンだな。令呪に於いて命じる。アサシンよ、私との契約を破棄して衛宮切嗣を新たな主とせよ」

「ーブーン!!」

令呪が執行され、綺礼とアサシンの契約は此処に途絶えた。

そしてそのままアサシン達は令呪命令どおりに切嗣の傍に移動し、切嗣はサーヴァントの契約の呪文を唱える。

「告げる。汝の身は我が下に、わが命運は汝の剣に。聖杯の寄るべ

に従い、この意、この理に従うならば応えよ。誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

呪文が唱えおえられると同時に濃密していた魔力が切嗣とアサシンの間で集約していく。

そして新たに結ばれた契約によって、切嗣の魔力がアサシンに流れ込んだ瞬間、アサシン達は一斉にダークを右手に持ち、そのまま自身の喉元に突き立てる。

ーードスッ！！

「・・・ん・・・だ・・・と？」

自身の目の前で自害を行い消滅して行くアサシンの姿に、切嗣は呆然と声を出してしまった。

その様子が愉快だったのか、綺礼は心の底から愉快そうな笑みを浮かべて、セイバーを両腕で抱き抱えて呆然とアサシンが居た場所を見つめている切嗣と舞弥に声を掛ける。

「ああ、言い忘れていたが、私は時臣氏の持っていた令呪を回収して二つ新たに令呪を手に入れていた。その一画は先ほどの貴様へのアサシンの譲渡に・・・もう一つはこう使用したのだよ。『私以外の者から魔力を受けとった瞬間に自害しろ』とな。では、さらばだ、脱落者達よ。せいぜい他の魔術師やサーヴァント達に殺されないでくれ。まだ、絶望は終わっていないのだからな」

そう綺礼は心底愉快そうに笑いながら、セイバーを抱きかかえて切嗣と舞弥の前から去って行く。

その頭の中には切嗣と舞弥に更なる絶望を見せる計略を練りなが

ら、何れ訪れるブラックとの対峙を思い、夜の街を最高の愉悦の対象になりえるかもしれないセイバーを抱えながら走り抜けるのだった。

第二十三話 それぞれの道筋 前編（前書き）

此方の作品が遅れて申し訳ありませんでした。

此方の作品も残りの作品も少しずつ投稿して行きます。

## 第二十三話 それぞれの道筋 前編

深い地の底、底知れない闇の中、ソレはまどろみの淵を彷徨っていた。

ソレは嘗て世界を救った。だが、その救いは大きく違う。数え切れないほどの人々の憎しみと罪を請け負う事でソレは世界を救った。故にそれは業績としての英霊ではなく、“在り方”としての英霊。ソレは六十年前に降臨し、そして敗北した。本来ならばソレは其処で世から完全に消え去る筈だった。

しかし、ソレは消える事無く、深い地の底に存在している生温い母胎のような場所に辿り着いてしまった。その瞬間から無限の可能性を母胎のような場所は、ただソレを育てる子宮のような場所に変わってしまった。

それは送られて来る魔力を栄養として着実に育っていた。誰もその危険性を知らず、だが、着実にそれは世に生れ落ちる準備を行っている。

そしてソレは遂に現世の声を聞く事が出来るほどに成長を終えてしまった。

（・・・“この世の全ての悪”を・・・構わない・・・喜んで引き受ける・・・）

その声にソレは歓喜した。

忌み嫌われていた自身が呼ばれている。望まれている。

祝福され、世に招かれている。その事実にはソレは言い表す事が出来ない喜びを感じる。

今ならば嘗て出来なかった人々の祈りさえも、具現して叶える事がソレは出来ると心から確信していた。

何よりもソレ自身も早く外に出たいと心から思っていた。

感じるのだ。今、外の世界には己と同種の存在が居る。願っても願っても、居ないと思っていた同胞が確かに存在している事をソレは本能で感じていた。

何れ外に出れば出会える同胞の存在を感じながら、ソレは再び眠りにつく。必ず出会えると直感している出会う筈の無い同胞との邂逅を思いながら、ソレは深い闇の奥底で胎動し続ける。

朝焼けが彩る時間帯。

冬木市とは別の市に存在している禅城の邸宅の門の前で、遠坂葵は人を待っていた。

昨日の夜、凜と桜が眠りにつく時間帯を見越していたかのように、とある人物から電話が掛かって来たのだ。

その電話の主の声を聞いた瞬間、葵は夫である時臣が聖杯戦争に敗れた事を知った。

葵はそれにショックを隠す事が出来なかった。例え決まっていた同然の結婚だったとしても、葵は時臣を愛していた。最愛の者がもう帰って来ない事実には葵は電話が終わった後に崩れ落ちた。

だが、電話の相手を憎む事は葵には出来なかった。何故ならばその相手は時臣を奪いながらも、桜と言う最愛の娘を葵に返してくれたのだ。

それ故にその人物にどう言った想いを持てば良いのか葵自身も答えが出ずに、悩みながら電話の主の要求どおり早朝朝日が昇る時間帯に邸宅の前で待っていたのだ。

そして葵が前をずっと見つめていると、フードを深く被り厚手のコートを着た男性・間桐雁夜が歩いて来る。

「・・・雁夜君」

「・・・やあ、葵さん」

葵の声に雁夜は右側だけ顔を見せるようにフードを上げた。  
その様子に葵は凜を連れ戻した時に見た、死相しか映っていないか  
った左側の雁夜の顔を思い出すが、それを押し込めて葵は険しい視  
線を雁夜に向ける。

「・・・雁夜君・・・あの人は・・・」

「・・・俺が聖杯戦争に参加した理由は・・・桜ちゃんを葵さんと凜  
ちゃんの下に帰す事と・・・時臣への復讐だった」

「ッ！！・・・それじゃ・・・やつぱり・・・あの人を殺したの？」

「・・・殺そうと思った。アイツは凜ちゃんと桜ちゃんが殺し合  
うことさえも容認していたんだ・・・赦せなかった・・・仲が良か  
ったあの二人の殺し合いも認めているアイツを・・・殺したか  
った」

「えっ？・・・殺したかった？」

「・・・アイツは生きているよ。別の市に在る大病院に搬送して於  
いた」

「ーードサッ！」

雁夜の言葉を聞いた葵は地面に膝をついた。  
しかし、それは悲しみからではなく、時臣が生きていると言っ喜  
びから膝に地面をついたのだ。

そして葵は顔を両手で覆い、声を押し殺して嬉し涙を目から流す。

雁夜はその葵の様子を目撃して、やはりと内心で思った。

聖杯戦争に参加する前の雁夜では気がつけなかったがブラックとルインと言う出会いを経て、僅かながらも余裕を手に入れた、雁夜は葵と時臣の関係を思い直す事が出来ていた。

どんな形で在れ、時臣は葵を愛し、葵もまた時臣を愛していると知ったのだ。最も時臣の凜と桜への行動を雁夜は認める気は無い。アレを愛などと呼ぶ気は雁夜には全く無いのだ。

だが、それでも時臣を殺せば葵が悲しむ事だけは理解してしまっただ。雁夜にとって葵、凜、桜が悲しむ事だけは絶対に見逃してはならない。

それ故に自身の憎しみを無理やり堪えて、時臣を殺さなかったのだ。最も代わりに時臣からは時臣の人生そのものと言っていい遠坂家に伝わっていた魔術刻印を、雁夜は時臣の腕ごと奪い取った。

そのせいでアサシンに奪われた腕の存在も在り、時臣は両腕を失ってしまっている。

命が助かっただけでも運が良いのだから、雁夜は刻印を奪う事で我慢した。

その刻印の事を伝える為に、葵の下に時臣は今日訪れたのだ。

「・・・葵さん・・・遠坂の魔術刻印は俺が預かっている・・・聖杯戦争が終わった後、凜ちゃんと桜ちゃんにあの公園に来るように伝えてくれ」

「・・・雁夜君?・・・」

「アレを如何するのかどうかを決めるのは・・・俺でも・・・時臣でも・・・そして葵さんでもない・・・次に遠坂家を継ぐ事になる凜ちゃんが決めるべきだ・・・凜ちゃんの答え次第で俺はアレを処分する」

そう雁夜は葵に遠坂の魔術刻印の行く末を語ると、右手に握っていた紙を膝をついている葵に差し出す。

「・・・この紙に時臣が入院している病院の住所が書かれている・・・  
・凜ちゃんと桜ちゃんと一緒に向かってくれ・・・聖杯戦争が終結したら連絡を行うから」

雁夜はそう葵に用件を伝えたと、葵に背を向けて歩き出す。

もはや葵と話す事はないと雁夜は考えている。自身の胸の内にある想いは自身のサーヴァントだけが知っているだけでいいと思いなから、雁夜は朝焼けが始まった冬木市に戻ろうとする。

だが、その雁夜の背に思いつめた葵の声が響く。

「待つて雁夜君!!」

――ピタッ!

「・・・一つだけ教えて・・・貴方は聖杯戦争に参加した理由は、『桜ちゃんを私と凜の下に帰す事とあの人への復讐だ』って言っていたわね・・・どうしてあの人を殺さず、桜を帰してくれたの?」

葵にはどうしても雁夜の聖杯戦争に参加した理由で分からない部分が存在していた。

雁夜の参加した理由の本質が復讐だったのまでは理解できた。だが、何故雁夜は復讐の道を選んだのかまでは葵には分からなかった。逆に雁夜は葵の質問に心がざわめいた。意図せずに雁夜は自身の想いを葵に伝える機会が訪れた。

自身の胸の内に居る獣が叫ぶ。奪え。奪え。憎悪の対象である時臣から葵を奪えと。

自身は充分に苦しんだ偶然にも差し出された幸せをその手に知ると、雁夜の心の奥底で叫ぶ。

しかし、雁夜は胸の内にいる獣の誘惑に乗らなかった。それでは駄目なのだ。自身が本当に望むモノを目にする為には、葵は遠坂の人間でなければいけないのだ。

「……俺にはどうしても見たいモノがあるんだ……その為に俺は聖杯戦争を終わらせる……葵さん、凜ちゃんと桜ちゃんを頼んだよ」

雁夜はそう葵に告げると、もはや立ち止まる事無く冬木市に戻って行く。

自らの家作り上げた聖杯戦争をこの世から完全に消滅させる為に。

ウェイバーとイスカンドルが拠点としているマツケージ家。

その家で自身の部屋とされている場所で、ウェイバーは昨晚目撃した己のサーヴァントの真の宝具と恐怖かしら感じられなかったブラックの真の宝具と本質について考えていた。

正直に言えば、イスカンドルの真の宝具である『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』を見た瞬間、この聖杯戦争の真の勝利者はイスカンドルだと思った。あくまで勝利者はイスカンドル。

自身はその背後で怯えていたマスター。それで終わってしまうのだと『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』を目撃した瞬間、ウェイバーは心の何処かでそうなることを確信していた。だが、その考えはブラックの真の宝具を目撃した瞬間に吹き飛んだ。

最優と称され、伝説の騎士王だったセイバーはブラックの真の宝具の前に、圧倒的と言つ言葉すら生温い敗北に追い込まれた。寧ろ

セイバーが真の宝具を使用したブラックと戦って、消滅しなかったこと事態が奇跡だとウェイバーは思った。

あの状態のブラックは、まさに今まで冬木市で行われて来た聖杯戦争に参加した英霊の中で真に最強の称号が相応しいサーヴァントだと、ウェイバーは思っている。例えばイスカンドルが『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』を展開していても、勝てる可能性は低い。更にはブラックには空間の位相をずらしてしまう特性まで存在していた。

それ故に残っていたブラックとルインを除いた全てのサーヴァント達のステータスは上がったが、イスカンドルのマスターであるウェイバーにとつては最悪な特性だった。

本来ならばイスカンドルの固有結界である『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』を展開すれば、取り込まれた相手は逃げることは不可能な筈。例えば卓越した魔術師でも、固有結界からの脱出は命を賭けなければいけない行動に等しい。だが、ブラックは自身の特性で簡単に『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』から脱出することが出来る。

一度脱出されれば、再び『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』内部に取り込む為には、一度結界を解除して、新たに結界を張り直さなければならない。それでは無駄に魔力を消費するだけではなく、戦いを仕切り直されてしまつと同然だった。

前回の時にイスカンドルの軍勢がアサシンに不覚を取った原因もブラックにあった。固有結界の特性を故に、敵が結界内部に入り込む為には正当なキャスターでなければ、固有結界内部に異変が生じる。だが、ブラックの特性は文字通り世界を歪める。故に固有結界の特性を知っている『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』の英霊達は自分達が奇襲を掛けられるとは夢にも思つてなかった為に、アサシンに不覚を取ってしまったのだ。

「……相性が悪すぎる……固有結界から自由に抜け出せるなんて反則だろうが」

「まあ、確かにアレには余も驚いたわい。まさか、アサシンに不覚を取るとわ……正直慢心があったようだのう」

「……大丈夫なのか？」

背後から聞こえて来た声にウェイバーは驚く事無く振り返り、何時の間にか霊体化を解いて座っていたイスカンドルに質問した。

その答えにイスカンドルは無言で頷き、自身の胸に右手をやりながら自身の状態を語りだす。

「うむ、漸く衝動が落ち着いて来たわ。まだ、御している訳ではないが、バーサーカーと相対して暴走することは先ず無いであろう」

イスカンドルはウェイバーと共にマツケージ家に戻ってから、ウェイバーが幾ら言ってもやらなかった霊体化を進んで行い、少しでも魔力の消費とブラックが自身の特性を解放してから沸き上がって来た衝動を抑えようとしていた。

ブラックの特性は世界を危機に陥れる。故に自意識を持っていても英霊であるイスカンドルは、その存在ゆえにブラックを滅ぼせと言う衝動に襲われていた。しかし、イスカンドルはその衝動に飲み込まれるつもりはなかった。

寧ろ酒宴場の時の出来事です。ますますブラックを部下にしたいと言う想いが募り、必ず撃ち破って従わせてみせると誓っていた。

それをイスカンドルの目を見て確信したウェイバーには、何故ブラックに其処まで拘るのか分からず、思わずイスカンドルに質問する。

「なあ……何でお前自分を襲っている衝動に抗ってるんだ？」

「なぬ？」

「幾ら聖杯戦争に召喚され、自意識があっても・・・お前は世界を守護する英霊だろう?・・・正直何であのバーサーカーが英霊になれたのか、僕には分からないけど、今のアイツは完全に世界を危機に追い込んでいる。こうしている間にも、もしかしたらアイツのせいで世界が危なくなっているかもしれないんだぞ?・・・だったら衝動に任せてアイツを倒した方が・・・」

「ービシッ!!」

「ギャッ!!」

言葉を重ねるウェイバーに対して、イスカンドルは無言でデコピンを額に食らわせた。

その痛みにウェイバーは悲鳴を上げて額を押さえるが、イスカンドルは僅かに怒気を込めた声でウェイバーの質問に答える。

「馬鹿者。確かに前オの言うとおり余は英霊だ。だがのう、それ以前に余は征服王イスカンドルだ。何よりも漸く見つけたのだ。『最オ果ての海』を」

「ツウゝ・・・何だって?」

イスカンドルの言葉の意味が分からなかったウェイバーは、涙目になりながら額を押さえて質問した。

その質問にイスカンドルは何時もの晴れやかな覇気とは違い、何処か苦々しげな雰囲気を放ちながら語りだす。

「余はな、生前『最果ての海』オケアノスを見せてやると、そう言う口上を吹き散らして、世界を荒らしに荒らし廻った。余の口車に乗って、疑

いもせずについて来たお調子者達も『オケアノス最果ての海』を見たいが為に共に進んだ……だがのう、坊主……この時代の人間のお前ならば分かるであろう……『オケアノス最果ての海』なんぞ何処にもありやしなかった……大地は丸く閉じられていたと言う悪い冗談が真実だった。余の……いやあ、余達が見ていた理想は、ユメただの妄想でしかなかった」

「おい、ライダー……」

自身の理想を否定しようとするイスカンドルに、ウェイバーは思わず糾弾の声を掛けようとした。

例え真実がどうであれ、己の懐き続けた理想を否定するイスカンドルの姿は、ウェイバーにとってたまらなく嫌だった。故に糾弾しようと思わず声が出そうになったが、結局何も告げることが出来ずに顔を俯かそうになった瞬間、イスカンドルの瞳に強い、それこそ出会ってから一度も見たことがないような炎が灯る。

「そんな愚かな考えを持っていた自分が腹が立つわい!!」

「ハッ？」

「バーサーカーが真の宝具を発動させた時、確かに余は恐怖した！そう征服王たる余がだぁ！？最果てなんぞ至りようもないと諦めつつた！何と言う失態か！アヤツこそ！真に最果てに至った存在！バーサーカーを倒し、余は、いや、余達は必ず“最果て”に至ってみせるわい！」

「……つまり、お前……全然落ち込んでいないってことか！？」

「うん？・・・落ち込む？なに訳の分からんことを言つとるんだ？坊主・・・まあ、確かにバーサーカーや他の英霊どもを見るまでは多少は氣落ちしとったが、アヤツらを従えて世界征服を目指すのも一挙と思つておつた」

「オマエ！先までの僕の気持ちを返せ！？」

「訳の分からんことを言ってる暇はないぞ、坊主・・・忘れたのか？ 次のバーサーカーの標的は余達だぞ。当然、余と共に居るお前さんも標的になるであらうなあ」

「そうだったアアアアア——！！！！！」

「！！！！」

イスカンドルの言葉にウェイバーは現状を思い出して、絶叫を部屋の中に響かせた。

そう、確かに酒宴場でブラックは次の標的はイスカンドルだと告げていた。当然ながらそのマスターであるウェイバーも狙われる。今更イスカンドルとの契約を解除しても無意味だろう。

それどころかイスカンドルと契約破棄した瞬間に、イスカンドルとの戦いを邪魔したとブラックは判断して、ウェイバーにそれこそセイバーと同じぐらいの地獄を見せるだろう。

ブラックもイスカンドルと同様に戦いを楽しみにしているのは、酒宴場の件で明らかだ。つまり、既にウェイバーはどうあってもブラックとイスカンドルの戦いに巻き込まれる状況に追い込まれていた。

「・・・ライダー！！すぐに作戦を立てるぞ！！バーサーカーを何としても倒さないと、僕には明日がないんだからなあ！？」

「言われんでも考えるわい．．．じゃが、坊主。お前さんも一緒に考えて貰うぞ？」

「えっ？」

イスカンドルの言葉の意味が分からず、ウェイバーは疑問の声を上げた。

正直、魔術師としてはそれなりでも、戦いに関する素人であり、これまで何も出来ていない足手纏いではない自身が意見を出す必要はないとウェイバーは思っていた。だが、今、イスカンドルはウェイバーの意見も聞きたいと告げて来た。

何故自身の意見が聞きたいのかとウェイバーは戸惑っていると、イスカンドルは真剣な瞳をウェイバーに向ける。

「余は霊体化している間もバーサーカーに打倒する方策を考えておった．．．じゃが、正直言つてアヤツには付け入る隙が全く見えん．．．力だけではなく、頭も異常に切れる．．．味方としてならば、百人力どころか、億人力じゃが．．．敵になったら破滅としか言えんわい」

「．．．そいつが今の僕らの敵．．」

「その通りだ．．．アレに勝つには余の軍勢でも足りん．．．だが、今余には軍勢の他に共に戦うものがある．．．ウェイバー・ベルベツト．．．余と共に最凶にして最強のサーヴァントを相手に挑んではくれんか？」

「．．．．．」

イスカンドルの真摯な瞳と言葉に、ウェイバーは何も答えること

が出来なかった。

だが、それはイスカンドルの言葉の意味が分からなかったからではない。その意味を理解し、自身でも分からない身の内から沸き上がって来た興奮に支配されてしまったからだった。

今はその興奮の意味がウェイバーには分からない。だが、その興奮とイスカンドルの真摯な想いによって、ウェイバーの心に存在していたブラックに対する恐怖が僅かに下がった。

興奮に支配されないようにする為にウェイバーはイスカンドルに顔を見られないように下に俯け、自身が気づいたブラックの宝具に関する情報を話し出す。

「・・・僕がみたところ・・・アイツの宝具には時間制限がある・・・ステータスの異常性から考えても、長時間はあの宝具の使用は出来ないはずだ」

「うむ・・・余もそれは気がついておった・・・共に考えようではないか。あの最凶を撃ち破る策をのう・・・ウェイバー」

「ああ・・・絶対に勝つぞ。イスカンドル」

イスカンドルとウェイバーは互いに笑みを浮かべながら言葉を交わしあい、ブラックに対する策を考えるのだった。

冬木市に存在するとある寂れたホテル。

その場所に一時の隠れ家として使用していた廃屋を引き払ったデイルムッドとソラウ、そして気絶したままのケイネスは拠点に移していた。

お嬢様育ちのソラウとしては非情に不満なホテルだが、今はそん

なことは言ってられなかった。

何せ既に聖杯戦争で生き残っているサーヴァントは、ディルムツドを含めて四体。例外のルインの存在も含められれば、全部で五体になる。聖杯戦争が終盤に近づいている現状。

更には現代兵器を使って来る敵の存在もあるだ。生活がどうのこの言っている状況ではないとソラウも理解し、ディルムツドが見つけた地形が見渡せるこのホテルに拠点を移すことにしたのである。そしてソラウは、ルインから教えて貰ったケイネスを目覚めさせる処置を施した後、ディルムツドと隣の部屋で話し合っていた。

「……その方法が、唯一あのバーサーカーに打倒出来る方法なのね、ランサー？」

「はい……あのブラックの真の宝具に対抗する策は、私にはそれ以外に思いつきません……ですが、それにはケイネス様のお力が必要なのです」

「……ランサー……貴方の述べた策ならば、何もケイネスではなくともいい筈です……そう、“令呪”を持つ者なら誰であろうと出来る策。ならば!？」

「ソラウ様……其処までにしていただきたい」

「ランサー!？」

ソラウの言葉を遮るように声を出したディルムツドにソラウは悲鳴のような声を上げるが、ディルムツドは構わずに己の意思を伝える。

「酒宴場でも告げたように……今生の私の主はケイネス様だけで

す・先ほどソラウ様に告げた策が認められず、尚且つケイネス様が戦いを放棄されれば・・・私は世を去ります」

「・・・ランサー・・・それが貴方の偽りのない本心なのですね？」

「はい・・・私にはケイネス様以外の今生の主は考えられません・・・ソラウ様のご意見は確かに正解です・・・ですが・・・」

「・・・どうしても・・・私をマスターには出来ないのね？」

ソラウはデイルムツドに懇願するように声を掛けた。

正直に言えば、ソラウはデイルムツドが教えてくれた策をケイネスが了承してくれる可能性は低いと思っていた。ブラックの恐怖を味わっていないケイネスでは、確実に慢心して行動する。

特にケイネスとデイルムツドの間には、ケイネスからの一方的な確執がある。そのことはデイルムツドも理解しているはずだが、それでもデイルムツドにはケイネス以外に主は考えられなかった。

故にデイルムツドが考え抜いた策を実行する為には、不安はあるがソラウの方が適任なのだが、デイルムツドの忠誠心ゆえにどうすることも出来なかった。

「申し訳ありません。ソラウ様の提案は受け入れられませんぬ」

「・・・解りました・・・では、ランサー・・・私がバーサーカーとイレギュラーに浚われた情報は隠すように」

「それは!？」

「ランサー・・・あの件でのミスはケイネスの方にあります・・・伏

兵を考えずに戦場に帰った彼自身に・・・これはケイネスのプライドを護る為の処置です・・・私達は共に行動してケイネスの意識を治療するために帆走したと言うことになさい」

「・・・・・・了解です」

ソラウの指示にデイルムツドは渋々ながらも了承した。

これがケイネスの暴言からデイルムツドを護る為の処置だと告げられたら、デイルムツドは了承せずに今まで起きた出来事を全て語つただろう。だが、ケイネスのプライドを護る為だと言われたら、デイルムツドはソラウの指示に従うしかない。

自身もケイネスがミスを犯したら、それを庇うための行う故に、ソラウの指示をデイルムツドは否定できなかった。

デイルムツドが自身の指示に従ってくれるのを確認したソラウは、見苦しさなど見せないような立ち振る舞いをして立ち上がり、最後にデイルムツドに声を掛ける。

「では、ケイネスが目覚めたのを確認したら私を呼びなさい・・・少し疲れたから、眠らせて貰うわね」

「ハッ！」

ソラウの命令にデイルムツドは頷き、ソラウはデイルムツドに背を向けて別の部屋に向かう。

これ以上、デイルムツドの顔を見ていたら、自身の心が抑えきれなくなるとソラウは確信していた。心を落ち着かせる為にも一人で泣く為に、ソラウは振り返らずに隣の別の部屋に向かう。

何も言わずにそれっを見送ったデイルムツドは、一先ずは自分達の関係がハッキリと出来たと思いつながら、溜め息について壁に背を預ける。

デイルムツドとしてもソラウには思うところがない訳ではない。だが、自身にはソラウと同じような行動を行った生前の妻であるグラニアの存在がある。ソラウを通してグラニアを見るなど、ソラウに対して失礼極まりない。

故にデイルムツドには何があってもソラウの想いを受け入れる気はなかった。それがソラウ、ケイネス、そして自身の為なのだと思いに沈みながらデイルムツドは警戒を続けるのだった。

後にこの時の判断が、デイルムツドを絶望の淵に追い堕とす悲劇に繋がると知らずに、デイルムツドは自身の主とその婚約者を護るために警戒を続けるのだった。

「・・・・・・・・此処は・・・・・・・・私は一体・・・・・・・・」

窓がカーテンによって締め切られ、僅かにカーテンの透き間から入る光に顔を照らされながら、セイバーは目を覚ました。

前後の記憶は不確かだが、確か己は切嗣の令呪によって狂戦士と化してブラックに挑んだはず。では、ブラックに勝利して令呪の効力が切れた自身をここに切嗣と舞弥が運んだのかと思いつながら立ち上がるうとするが、突如として全身に信じられないほどの激痛が走る。

「ービシッ!!」

「ガッ!・・・・・・・・アア・・・・・・・・い・・・・・・・・いたい・・・・・・・・この激痛は・・・・・・・・」

突然に全身を襲った激痛にセイバーは苦しみながら、自身の体を見てみると、治療用の術式らしきモノが描かれた魔法陣らしきモノ

に体が横にされていることに気がつく。

何故そのような状態に自身がおかれているのかと、疑問を抱きながらセイバーが全身を走る激痛に苦しんでいると、部屋の扉が開き、カソック服を着た男性が部屋の中に足を踏み入れる。

「気がついたかね、セイバー」

「貴方は！？」

「あの怪我では助からないかもしれないと不安だったが、こうして意識を取り戻すとは・・・流石は彼の騎士王」

「言峰綺礼！？何故貴方がここに！？」

目の前に立っているカソック服を着た男性 - セイバーの認識からすれば、既に聖杯戦争に敗退しているはずの人物 - 言峰綺礼の姿にセイバーは疑問に満ちた叫びを上げ、綺礼は嬉しげな笑みを浮かべるのだった。

第二十三話 それぞれの道筋 後編（前書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした。

この話以降は、終焉へと向かって行きます。  
今しばらくお付き合い頂けると嬉しいです。

## 第二十三話 それぞれの道筋 後編

セイバーは現状が理解出来ずに困惑するしかなかった。

気がつけば見知らぬ家の中に手当ては行われているとは言え、傷だらけの状態で寝かされ、更には本来ならばいない筈の人物が現れたのだから、セイバーの困惑は当然だろう。

その困惑の理由が分かっているのか、綺礼はゆっくりと部屋の中に足を踏み入れて、ベットに横になっているセイバーに声をかける。

「動かない方がいい。君はかなりのダメージを負っている。無理をすれば、それだけ治りが遅くなるだろう」

「怪我？・・・私が？」

「フム？記憶が混乱しているのか？・・・（ライダーの固有結界の中で何かがあったようだが・・・詳しい状況は分からん・・・怪我の具合から考えて先ず間違いなく同類が何かを行ったのだろう・・・しかし、記憶が混乱しているのは好都合だ）」

現在のセイバーの状態に綺礼は内心で笑みを浮かべながら、セイバーが横になっているベットの隣に椅子を置いて座り込む。

「セイバー。私自身状況がよく分からないのだが・・・君は柳洞寺の近くで倒れていたのだ。発生していた膨大な魔力から考えて戦闘があったようだが、何故君はそこまで重傷を負って倒れていたのだ？・・・“伝説の騎士王”である君が其処まで重傷を負っていたこと自体が信じられないのだが？」

「ーーーーズキッ！！」

「・・・・・・・・私は・・・・・・・・」

（・・・・・・・・美しい・・・・・・・・セイバーの苦悩に歪む顔が、美しく思える）

綺礼の言葉にセイバーは辛そうに顔を歪め、綺礼は僅かに自身の胸の内から湧き上がって来る感情に内心で笑みを浮かべていた。

柳洞寺での出来事を綺礼は、アサシンとの視覚共有を使わずに自身の目で酒宴の全てを見ていた。

その距離は切嗣や舞弥が隠れていた位置から遙か後方の木の上から双眼鏡を使って見続けていたのだ。更に一応アサシンの大部分を正門辺りに配置して監視も行わせていた。

そして酒宴の様子を全て伺っていた。流石に会話までは全て聞く事が出来なかったが、セイバーを絶望に追い込んだ箇所だけは聞き逃さなかった。

（己の過去を否定する王とは・・・・・・・・しかもバーサーカーが全てを話す前に終わってしまったのは残念だった・・・・・・・・ならば、私が伝えてみるのも一挙かもしれんな）

そうブラックとルインはセイバーの願いの結末を告げる前に、切嗣と舞弥が乱入して全てを伝えられなかった。

そして綺礼もその願いの結末が見えていた。何故王などと言うモノを知らない自身がその結末が見えるのかは綺礼自身にも分からな

い。

しかし、伝えないと言う選択肢は綺礼の中にはなかった。ブラックとルインがセイバーを絶望に追い込んだ時のセイバーの表情。それを目の前で見たいと言う思いが綺礼の内から湧き上がって来ている。

それをセイバーに気づかれまいと思いつながら綺礼は口を開こうとするが、その直前にセイバーが綺礼に質問して来る。

「コトミネ・・・貴方は確かトオサカと繋がっていましたね？」

「フム・・・どう言う意図での質問かは分からんが・・・確かに私は師である遠坂時臣師と繋がっていた。元々私が聖杯戦争に参加したのは父の意向もあつたのでな」

「父の意向？」

「そうだ・・・私も詳しくは知らないのだが、どうやら父である言<sup>こと</sup>峰璃正と時臣氏の祖父が友人だったとらしい。そして父は時臣氏に聖杯を委ねる為に私を聖杯戦争に参加させたのだ。偶然にも息子の私に令呪が現れたから、尚更に父は時臣氏に聖杯を委ねる事が運命だと思ったようだ」

「そうですか・・・ならば、貴方はトオサカからこの聖杯戦争の真実を聞いていますか？・・・“この聖杯戦争が私達召喚されたサーヴァントを生贄に捧げて、聖杯を完成させる儀式”だと言うことを？」

「・・・聞いている。君がそれを知っているとは驚きだ・・・この真実はサーヴァントとマスターの仲を決定的に崩壊させる事実なのだが・・・あの衛宮切嗣が教えるとは思えん・・・何故君はその“真実”に辿り着けた？」

「・・・バーサーカーとイレギュラー・・・いえ、バーサーカーとその配下に教えられたのです」

「ムッ！……詳しく教えて欲しい。私も事情が分からなければ、説明が難しくなるのでな」

そう綺礼はセイバーに質問し、セイバーは酒宴で起きた出来事を自身の意識がハッキリしていた時のことを話し出す。

ブラックとルインが告げた聖杯戦争の真実。自身の願いである『過去の改変』を否定された事実。

そして信頼していたアイリスフィールまでもが自身を偽っていたことを。酒宴場で起きたことを全てセイバーは綺礼に語った。

全てを聞き終えた綺礼は難しげに顔を歪めながら、内心でブラックとルインの謀略に舌を巻いていた。

（恐ろしい……正しく最凶と呼ぶべきサーヴァント……いや、英霊だ……私の衛宮切嗣に対して実行した策など、同類の足元にも及ばん……しかし、だからこそ、挑む価値が増したぞ！！）

綺礼は湧き上がって来る興奮に内心で喜びの声を上げた。

正しくブラックこそが自身の求めている答えに最も近い存在。アサシンを利用して切嗣を絶望に落としたことでも喜びを得たが、それ以上にますますブラックと互角の対峙をしたいと綺礼は思いながら、まずは目の前にいる自身の新たな手駒とすべきセイバーを立ち上がらせるか考え出す。

（困ったものだ……恐らくセイバーは親しい者を犠牲にして聖杯を得ようとは思わんだろう……しかし、手は偶然にも得ている・もし酒宴場で同類がコレを話していたら、セイバーは完全に捨てる以外になかった）

本来ならば酒宴の時の出来事で、全てをブラックとルインがセイバーの願いの結末を語っていれば、セイバーの考えはもしかしたら

変わっていたかもしれない。

しかし、切嗣と舞弥の乱入によってそれは伝えられなかった。そして綺礼には、ブラックとルインが語ろうとしていたモノが見えた。ソレを利用すれば今のセイバーは立ち上がる可能性が高い。

“ 絶望と言う希望 ” を綺礼はセイバーに与える為に、懊悩するように顔に手をやりながら語りだす。

「話してくれたことに礼を言おうセイバー……しかし、バーサーカーが真実を語ったことはもしかしたら君を救ったのかもしれない」

「どう言う意味ですか？……バーサーカーが話した事が私の救いだと言う意味は！？」

「……セイバー……君には辛い事実だろうが……バーサーカーが話したことは全て事実だ……そして聖杯が“ 広義的 ” に願いを叶えるのもまた真実……君の願いは自身の国の崩壊を変える願いだったな？」

「そのとおりです……それが私の願いです」

「……ソレは何故起こった？」

「……えっ？」

セイバーは一瞬、綺礼の質問の意味が分からなかった。

自身の国が内乱で滅んだことは現代に知られているはず。特に聖杯戦争に参加している者ならばアーサー王の終焉は大抵の者は知っているはずなのだが、何故その質問を綺礼はして来たのかとセイバーは疑問に思いながら、質問の意図を考える。

（私の願いは過去を変えて、あの悲劇の結末を変えること・・・それは私の過去の結末を知っている・・・待て・・・何かを私は見落としている・・・一体何を見落として・・・）

『其処の小娘は、“自分の願いの結末”を分かっているんですから』

『少し待ってイレギュラー・・・此処は同じ王である余から話させて欲しい』

『最も今の可能性は或いは領域だ・・・貴様が本当に貴様の見た結末を変えたいと願った場合、貴様には地獄が待っているだろうな』

「ッ！・・・ま、まさか・・・そ、そんな・・・」

酒宴の時に起きた出来事とブラック、ルインが告げていた意味深な言葉を思い出したセイバーの脳裏に、一つの考えが過ぎった。

それはセイバーにとっては最もあつてはならない結末。しかし、全ての情報を統合すれば確かにありえる。何よりも聖杯は広義的に願いを叶えるとブラック達だけではなく、聖杯戦争に参加していた御三家の遠坂の弟子であつた綺礼までもが肯定した。

その考えを否定するようにセイバーは綺礼に否定して欲しいと願いながら顔を向けるが、綺礼は表面上は無念そうに顔を俯かせながら絶望を伝える。

「・・・聖杯は明確な願いでなければ広義的に叶える・・・君が自らの国の救済を聖杯に願えば・・・国の滅びの原因になった元凶・・・君の国は内乱によって滅んだ・・・つまり、“内乱を起こした国に反逆した逆徒達が消えれば、滅びは起きなかった”・・・聖杯

がそう判断して、君に反意を持った全てを消去するだろう・・・それで君の国は救われるのだから」

「バキイイイーン!!」

「・・・アツ・・・」

告げられた自身の願いの最悪な結末に、セイバーの顔は絶望に染まった。

セイバーの自身の願いは王として正しいと思って進む為の願い。しかし、その結末の一つには自身が友に戦った仲間達の消滅までもが組み込まれているとは考えてもいなかった。いや、正確に言えばセイバーはその事実から目を逸らしていた。

自らの進んでいる道の正しさを叛意を犯した騎士達も知れば、再び共に歩めると思っていた。それゆえにセイバーは聖杯を求めた。忠勇のうちに散ったガウェイン。使命に殉じたギャラハット。他の円卓の騎士達。そして敵対してしまった最高の騎士と呼ばれていた『湖の騎士』<sup>サーランズロット</sup>。その他の数多くの騎士達。

素晴らしき王であれと進み続けていた自身の願いの結末によって、その中のどれだけの者達が消える。いや、もしかしたら一人の残らず消えるかもしれない。自身に叛意を抱いていた者は、敵側だけではない。共に戦った騎士達の中にいる可能性も存在している。

その全員が自身の願いで消えてしまう。セイバーが思い出すのは、死の直前に見た血染めの丘 - 『カムランの丘』 - 結局それと変わらない結果を呼ぶかもしれない自身の願いの最悪な結末。

その事実に行き着いたセイバーの瞳と口から、堪えきれぬ嗚咽と涙が零れ落ちる。

「・・・ごめん、なさい・・・ごめんなさい・・・私が・・・私なんかが・・・王になど・・・なるべきでは・・・ごめんなさ

い・・・ごめん、なさい」

誰にとっても無くセイバーは懺悔し続け、綺礼は無言のうちに立ち上がって部屋を出て行く。

セイバーはそれを感じながらも、一人残された部屋の中で全身を襲う激痛に構わずに慟哭を枯れ果てるまで行うのだった。

そして部屋を出て行った綺礼は、別室で椅子に座りながら用意しておいたワインをゆっくりと飲みだす。

――ゴクッ！！

「・・・不思議なものだ・・・このワインは素晴らしい味わいを感じる・・・前にも飲んだことがあるというのに・・・今はあの時に感じなかった味わい深さを堪能出来る・・・フッフッフ！！ハハハハハハハハハハハッ！！」

全ては綺礼の考えどおりに進んだ。

何一つ考えていたことと結末が変わらなかったと言うのに、綺礼の心は満たされた。

もはや今のセイバーは、誰もが誇り高いと思っているアーサー王ではない。全てを打ち砕かれた、ただの小娘でしかない。そして綺礼にとって小娘を操ることは造作も無かった。

（フッフツ・・・後はセイバーが落ち着いたら、希望を与えてやればいい。幸いにも幾つかの希望は思いついている・・・それも最終的には絶望に陥る希望がな・・・しかし、何としても同類とセイバーが互角に戦える方法を考えねば・・・アサシンを失ったことで、残しておいた最後の令呪を消えッ！！）

――ズキッ！！

不意に綺礼は左の上腕、肘に程近い辺りに激痛を感じて悶絶した。しかし、すぐさま慌てて上着の袖を捲り上げる。今襲ってきた痛みに綺礼は心当たりがあつた。

それは自身がこの聖杯戦争に参加するきつかけとなつた痛み。まさかと思ひながら痛みが走つた箇所を見ると、そこには本来ならば失われているはずの最後の令呪が存在していた。

新たな令呪。セイバーとまだ契約もしていないにも関わらず現れた令呪に、綺礼は呆然とするが、すぐさまその顔は堪え切れないというように笑みに歪む。

「……フフツッ！！そうか……そうなのだな！！聖杯もまた、私と同類との邂逅を望んでいるのか！！ならば、それに私は応じよう！！それで私の求めている答えが得られるのだから！！……必ずや同類と互角の対峙を行おう！！……その為ならば……父上……息子の未来の為に犠牲になって貰いましょう……ハハハハハハハハハハハッ！！！」

暗く歪んだ笑い声が部屋の中に響き渡った。

しかし、その声に紛れも無く応じる者がいる。それが何かは分からなくても、言峰綺礼は自身の望むままに動くのだった。

ブラック、ルイン、そして雁夜がアジトとして使っている一軒家。その場所のリビングで人間の姿になっているブラックが、右手に持っている黄金の地金に目の覚めるような青の瑱瑯ほうろうで装飾を施された剣の鞘を、真剣な眼差しで見つめていた。

その鞘の真名は『アヴァロン全て遠き理想郷』。アーサー王であるセイバー

が持つ『約束された勝利の剣』を納める半身と呼ぶべき鞘。  
エクスカリバー

ブラックはその鞘を隠れ家に戻って来てから、雁夜から渡された。そして雁夜に『全て遠き理想郷』を託したのは、今回の聖杯戦争の聖杯である筈のアイリスフィールだった。

三体目のサーヴァントであるアサシンが倒されたことによって、アイリスフィールの聖杯化は進行してしまったのだ。それによって完全に意識が途切れて動けなくなる前に、アイリスフィールは自身の体内にあった『全て遠き理想郷』を取り出し、雁夜にある言葉と共に託していた。

「……聖杯を破壊して、切嗣にだけは聖杯の真実を伝えないで」  
か……やはりこの聖杯は危険物で間違いないようだな」

どこまでアイリスフィールが間桐家から持ち出した資料を読み解き、聖杯にどのような真実が隠されているのかを結局ブラック達は聞けなかった。

だが、あの切嗣の願いに従っていたアイリスフィールが行動を変えるほどの何かが、聖杯にあるのは間違いない。でなければ、『全て遠き理想郷』と言う強力な宝具を雁夜には渡さないだろう。

『全て遠き理想郷』の力はそれほどまでに強力なのだ。

持ち主の傷を癒し老化さえも停滞させるだけではなく、『全て遠き理想郷』を握っているブラックにはそれだけではない力を感じていた。癒しの力だけではない。

それ以上に危険な力が『全て遠き理想郷』には秘められているとブラックは直感していた。何せブラックの宝具である『全てを従える意志力』が『全て遠き理想郷』には全く通じないのだ。

（……絶対防御か？……クレニアムモンの奴が持っていたアヴアロンのように、この『全て遠き理想郷』にも同じ力が宿っているとすれば、俺の力が通じない理由に納得が出来る）

ブラックは自身の経験から『アヴァロン全て遠き理想郷』に宿っているも一つの力の正体を悟った。

宿っている力が絶対防御に関する力ならば、自身の宝具である『全てを従える意志力』が通じない理由にブラックは納得出来る。

幾ら握っていても『アヴァロン全て遠き理想郷』が自身に従う気配が感じられない。自身の主はセイバーだと言うように『アヴァロン全て遠き理想郷』は沈黙を保っている。

『アヴァロン全て遠き理想郷』の所有権が自身に移れば、雁夜の体を治せるとブラックは考えていたが、当てが外れたと思って『アヴァロン全て遠き理想郷』をテーブルの上に置く。

――コトツ！

「……残るサーヴァントは俺とルインを除けば三体。セイバーを除けば強力な連中だが……問題は魔力か」

そうブラックは呟きながら、今後の戦いで使用される魔力量の問題に目を向けた。

サーヴァントとしては破格と言言葉さえ生ぬるいほどの力を持っているブラックだが、使用される魔力量はそれだけ多かった。雁夜の体ではブラックの全力戦闘での魔力使用量に、体が持たない。

持っている三つの令呪のことを考えても、今後の戦いで魔力が持つ可能性は低かった。これが並みのサーヴァントならば充分なのだが、残っているサーヴァントの内、征服王イスカンダルが一番に厄介だった。

イスカンダルの宝具である『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』は、戦闘狂であるブラックからすれば最高の宝具としか言えなかったのだが、それを撃ち破るには魔力が圧倒的に足りなかった。

令呪を二つ使用して力をブーストとしても、それで漸く互角に持

ち込めるかどうかと言うのがブラックの考えだった。

（・・・使っていた魔力の供給源がなくなってしまった今・・・イスカンドルと互角に持ち込む為には新たな魔力の供給源が必要だが・・・手持ちにあるのは聖杯に成りかけの女だけ・・・あの女を供給源にすれば確かに魔力の問題はなくなるが・・・嫌な気配しか感じられん）

聖杯戦争が終盤に近づくにつれ、ブラックの本能は危機感が募り続けていた。

最初、それはこの聖杯戦争に参加していた自身の同類である言峰綺礼の存在が理由なのかと思っていたが、それは違うと感じ始めている。もっと強力で、もっと危険な自身と近い存在がこの地にはいる。

ブラックの本能はそう、アサシンが消滅したと同時に感じ始めていた。

（一体何者だ？・・・俺とルインにより近い存在・・・あの言峰と言う奴以外に危険な奴がいる。しかもそいつの気配が強まって来ている・・・やはり聖杯に何かがあるのは間違いないが・・・あの女以外に聖杯に関する情報を持っていそうな人間は・・・居たぞ。一人だけいた）

ある人物の顔がブラックの脳裏に過ぎった。

その人物ならば少なくとも今の自分達以上に過去の聖杯戦争に詳しいはずだとブラックは思い、次の動きを決めると、部屋の中に葵の所から戻って来た雁夜が入って来る。

――ガチャッ！

「・・・用事は済んだのか？」

「ああ、これで俺がやることは聖杯を破壊した後のことだけだ」

「フン・・・お前が持っている」

「・・・ポンッ！」

「・・・パシッ！」

ブラックが放り投げた『アヴァロン全て遠き理想郷』を雁夜は右手で掴み取り、疑問に満ちた視線をブラックに向けると、ブラックは事情を説明する。

「そいつは俺でも従えることは出来ん。だが、それでもそいつには強力な回復力が備わっている。本来の持ち主であるセイバーと契約でもしなければ絶大な回復力は得られんが、セイバーが近くにいても影響があつたことを考えれば・・・魔力を送れば少しは起動するだろう。それで体を持たせろ」

「・・・分かった」

雁夜はブラックの言葉に頷き、右手に『アヴァロン全て遠き理想郷』を持ちながらブラックと対面するようにソファアに座る。

「・・・ードサッ！」

「・・・残るサーヴァントはお前を除けば三体・・・勝てるのか？」

「誰に言っている。俺は残っている奴ら全員と戦って聖杯戦争を終

わらせる・・・最も三体だけで済む保障はないがな」

「何だって？どう言うことだ？」

「・・・嫌な予感が益々増した・・・恐らく聖杯が現れた瞬間、何かが起きる。それも途轍もない災厄が・・・だが、それが何かは分からん。覚悟だけはしておけ・・・そうになったら、お前を護っている暇など消えるだろうからなあ」

「・・・そんなのは分かってる・・・俺は何としても聖杯戦争後も生き残って、最後の役割を終える。それまでは絶対に死ぬ気はない」

「そうか・・・なら、次の動きを話すぞ・・・イスカンドルと戦う前に先ずは監督役に話を聞きに行く」

「ん？・・・今更監督役に用があるのか？俺達の行動で、もう名ばかりの役職でしかないんだぞ？」

雁夜がそう疑問に思つのも当然だろう。

ブラックとルインの謀略によって、少なくとも今回の聖杯戦争では聖堂教会の介入は出来ない状態になっている。完全に後始末を行うことしか出来ない状態の監督役に、一体何の用があるのかと雁夜は首を傾げざるえなかった。

最もブラック自身も聖堂教会の監督役の役職などに興味は無い。監督役である言峰璃正に用があるのだ。

「思い出せ。確か俺達が調べた情報で今回の監督役と遠坂は繋がっていた・・・つまり、連中には利害以外の何かの関係がある」

「・・・そういう事か・・・確かに普通なら手を結べない場所が手を結んでいた・・・それに映像で見ていた時にも、確かに監督役の男と時臣は親しそうな関係だった・・・年齢から考えて、時臣の祖父辺りと親しかったとしたら・・・前回の聖杯戦争に関する情報を持つていても可笑しくないな・・・それに今までの聖杯戦争を監督していたんだったら、確かに以前の聖杯戦争の情報を持つていても可笑しくない」

「加えて言えば、聖杯に何か異常が起きるには、その兆候が現れない方が可笑的い・・・以前の聖杯戦争の情報を得れば、何かが分かる可能性は高い」

「同感だ・・・よし、ブラックは魔力を回復してしてくれ・・・情報は俺とルインフォースで得て来る」

「頼む・・・俺は今しばらくは動けん・・・暫らくは霊体化で過ごす・・・気をつけろよ」

ーーーーフウツ

ブラックは言葉を告げ終わると共に霊体化を行い、雁夜の前から姿を消した。

それを確認した雁夜は『アヴァロン全て遠き理想郷』を右手に持ちながら、一先ずは自身も体力を回復させようと思い、寝室へと歩き出す。

(・・・必ず俺は会いに行くよ・・・凜ちゃん・・・桜ちゃん・・・君達は聖杯なんて下らない物で争ったらいけないんだ)

そう雁夜は思いながら、寝室へと足を踏み入れ、ベットに横になって目を閉じるのだった。

冬木市に存在するとある武家屋敷。

純和風なその屋敷は、衛宮切嗣がアインツベルンの城以外に用意していた拠点だった。

先日の綺礼の襲撃と酒宴で負った怪我を治療する為に、舞弥は一番近かったこの場所に切嗣を連れて自身と切嗣の治療を行っていた。しかし、切嗣が胸に負っている傷はいかなる方法を以ってしても、デイルムツドが消滅するか、その傷を負わせた『ゲイ・ボウ必滅の黄薔薇』を破壊しなければ治癒されることがない傷。

故に一般的な治療方法でも、魔術的な治療方法でも癒えない。治す為にはデイルムツドを倒す以外に方法がないのだが、その方法を実行することが出来たセイバーは綺礼に奪われてしまった。

他に方法があるとすれば、デイルムツドのマスターであるケイネス・アーチボルトを殺す以外に方法は無い。しかし、今どこにケイネス達が隠れているのかを切嗣も舞弥も知らなかった。

「グウウツ！！」

「切嗣ツ！！」

屋敷の中の一室で胸の傷の痛みに苦しんでいる切嗣に舞弥は声を掛けるが、切嗣は答えることが出来ずに苦しみ続ける。

その様子に舞弥は一刻も早くケイネスを暗殺するしかないと考えるが、自身もまた綺礼に負わされた傷のせいで思うように両手が動かない状態だった。しかし、このままでは切嗣は長くは持たないだろう。

サーヴァントであつたセイバーならばデイルムツドに負わされた傷でも、その存在故に何とか無かつたが、人間である切嗣は命の危

険も充分に考えられる。

「……待っていて下さい、切嗣……何としてもランサーのマスターを殺して来ます」

「ッ!!ま、待つんだ!……まい……ガァッ!!」

(急がなければ!必ず切嗣は助けます!)

そう舞弥は苦痛に苦しむ切嗣の姿に心を決め、部屋を出て行く。切嗣はその背に手を伸ばすが、舞弥は歩みを止めずに切嗣の視界から消えて行った。

程なく車のエンジンが切嗣の耳に届くが、傷のせいで自身にはどうする事も出来ずに悔しげに顔を歪めるのだった。これが衛宮切嗣と久宇舞弥の今生での別れになると感じながら。

## 第二十三話 それぞれの道筋 後編（後書き）

次回はこの話でのブラックとルインの生前での終末が語られます。

## 第二十四話 深き闇と恐怖の過去

荒れ果てた大地。

幾多の激戦が繰り広げられたことで、その世界に存在していた全てが滅んでいった。

草木は一本たりとも存在せず、砕け散った瓦礫の山と岩しか、もはやその世界には存在していなかった。

しかし、そんな命の気配を全く感じさせない世界の中で動く影が二つ。荒れ果てた世界にも関わらず、傷一つなく存在していた墓と思われる石の前に立っていた。

「……………この場所に来るのは久しぶりですね、ブラック様」

「……………そうだな、ルイン」

自身のパートナーの質問に漆黒の竜人と呼ばれて恐怖されているブラックは頷きながら答え、右手に持っていた花束を墓の前にゆつくりと置く。

ルインはそれを確認すると、埃などで汚れてしまっている墓を持つて来たタオルで拭いていく。

そして吹き終わった墓の墓碑には、『リンディ』と名が刻まれていた。

「リンディさん……暫らく来れなくてすいませんでした……でも、私もブラック様も元気ですよ」

「フン」

墓に語りかけるルインの様子にブラックは不機嫌そうに眉を顰め

ながら、墓の前に座り込む。

もはや今の時代の殆どの者が名を忘れてしまった世界。かつて、ブラックとルインが経験した次元世界での最大規模のデジモンと人間が憎しみあい、最後に共に戦った次元世界の中心世界と呼ばれていた『ミッドチルダ』。それが今、ブラックとルインがいる世界の名だった。

もはや命の気配も感じさせないミッドチルダにブラックとルインが訪れたのは、数百年間ともに歩み、先に逝ってしまった二人にとって大切だった人物 - 『リンディ』の墓参りが理由だった。

リンディは死の直前に自身の墓は、故郷であるミッドチルダに作ってくれとブラックとルインに頼んだのだ。それをブラックとルイン、そしてこの場にはいない、もう一人の人物は了承し、人間が誰一人としていなくなっていたミッドチルダにリンディの墓を作り上げたのだ。

時たまブラックとルインはこの地に訪れ、リンディの墓参りを行っている。死後も魂は世界に残り続けるなどの世迷言を、ブラックとルインは全く信じていないが、それでも二人はリンディとの歩みを僅かでも忘れないようにするために、どんな状況でも墓参りだけは一度たりとも絶やさなかった。

そしてブラックとルインが静かにリンディの墓の前に座っていると、誰一人としていないはずの世界にも関わらず、ブラックとルインの背後から足音が響いて来る。

ーコツコツ

「・・・フリートか・・・一体何の用だ？」

「そうですね。リンディさんが死んでからは、ずっとアルハザードに籠もるようになった貴女が一体どんな用件ですか？」

「いや、私もリンディさんの墓参りに来たんですよ、ブラックに  
ルインさん」

背後を振り返ることも無く自身を言い当てたことにも驚かず、フリートは笑みを浮かべながらブラックとルインの横に立った。彼らからすれば今の出来事は驚くに値しない一般的な出来事でしかないのだ。

それを表すようにフリートは持って来た水筒の中身を生前リンディが愛用していた湯飲みに注いで、墓の前に置きながらブラックとルインに話しかける。

「私もここに来るのはかなり久しぶりですね。お二人に会うのも」

「そうでしたね。私もブラック様も最近ではアルハザードには立ち寄りませんから・・・かれこれ五十年は会っていませんね」

「まあ、お二人の噂は知っていましたから、生きているのだけは確認していましたからね・・・それよりも、ルインさん。飲みます？」

そうフリートは持って来た水筒の中身を別のティーカップに注いで、ルインに差し出した。

渡されたルインは無言で受け取り、ティーカップを口に運びながら気になっていたことをフリートに質問する。

「それにしても、リンディさんの墓参りになんてフリートが来るとは思っていませんでした。貴女の性格だと、墓参りになんて興味はないと思っていたんですけどね」

「いやいや、私も墓参りぐらいは来ますよ・・・それに、これを作れるのは今では私ぐらいでしょうからね。『リンディ茶』を」

「――ブウウウウッ!!」

「ゴホッ!!ゲホッ!グフッ!!……フリート!!なん  
てモノを飲ませるんですか!?!」

「いや、だってリンディさんが喜ぶ飲み物って言ったら……  
コレしか思い浮かばなかったんですよ」

「だからって!!私はソレを飲めません!!」

ルインは怒りを顔にしながらリンディ茶を自身に飲ませたフリー  
トに向かって叫んだ。

『リンディ茶』。それは生前リンディが愛用していた飲み物だっ  
た。しかし、当の作り上げた本人以外で飲める者は大の甘党以外に  
は存在せず、デジモンの究極体でさえも飲む事が出来ない飲み物。  
当然ながらルインは飲めず、それを自身に渡したフリートに報復  
しようと、フリートが持っている水筒に手を伸ばして、一瞬の内に  
掴み取る。

「――バシッ!!」

「アッ!!」

「そんな飲ませたければ、自分で飲みなさい!!ほら!!」

「止めて下さい!!いや、本当にすいませんでした!!」

無理やり自身にリンディ茶を飲ませようとしている、ルインに、  
フリートは謝るが、ルインは止まることなく水筒の中に入っている

リンディ茶をフリートの口の中に注ぎ込もうとする。

このままでは飲まされてしまうとフリートは慌てるが、今まで静かにリンディの墓を見ていたブラックが助け舟を出す。

「そこまでしておけ、ルイン」

「ですけど！！ブラック様！！」

「……………もう長くない奴に何をしても無駄だ」

「……………えっ？」

ブラックの告げた言葉の意味を理解したルインは、呆然と組み伏していたフリートに目を向けると、フリートは寂しげに笑みを浮かべながらブラックに話しかける。

「……………流石ですね、ブラック……………何時気がついたんですか？

“私が長くないって”？」

「ルインが水筒をお前から奪った時だ……………俺の知るお前ならば、簡単には奪われん……………何時だ？」

「……………後数日ですね……………それでアルハザードは全機能を停止して滅びますよ……………虚数空間に飲み込まれてね」

「……………防御フィールドの処置を新たに行えば……………どうなんですか？貴女ならばそれぐらいは？」

「出来ますよ……………でも、張り合いがなくなっただけですよ。リンディさんが逝ってから数百年以上……………研究していても満たされ

ないんですよね」

「……………そうですか」

ルインはフリートを掴んでいた手を離し、フリートは埃を掃いながらブラックとルインに話す。

「アルハザードは今度こそ完全にこの世から消えます。私の研究の全てと共に」

「そうか」

「……………ブラック、ルインさん……重大な用件です。後一時間と経たずに、この場所に現在の世界での精鋭達が凡そ千以上。デジモン、人間問わずに最新精鋭艦など加えた大規模な軍勢が訪れます。この世界は滅んでいきますからね」

「この場所ならば究極体が暴れても問題はない……ブラック様と私が現れるのを待ち構えていたわけですか」

「その通りです」

「……………久々に楽しめる戦いが出来そうだ」

フリートから情報にブラックは笑みを浮かべながら立ち上がった。その瞳に宿るのはこれから起きる戦い。ここ最近はずまらない敵ばかりと戦っていたこともあって、ブラックの不満は堪っていた。しかし、フリートの情報では精鋭達が千以上現れるという。

その相手達ならば満たされるかもしれないと思いながら、ブラックは墓に背を向けて歩き出す。

ルインはその後を無言でついて行き、フリートは相変わらずのブラックに笑みを浮かべながらその背に最後の言葉を伝える。

「武運を祈りますよ、ブラック、ルインさん」

「・・・貴様も最後まで消えるな」

「フリート。今回の礼は戦いが終わったら、アルハザードに行つて返しますからね」

「待っていますよ」

そうフリートはブラックとルインの背に告げると、ブラックとルインはもはや背後を振り返ることなく歩き続ける。

それを確認したフリートは背後に存在しているリンディの墓に向き直り、右手を伸ばして強力な防御魔法を張り巡らしながら、リンディの墓の前に座る。

「ードサッ!!」

「さて・・・最後の私の仕事は、この墓を護ることです・・・ゆつくりと昔を懐かしみながら、ブラックとルインさんが戻つて来るのを待ちますか」

フリートはそう呟くが、恐らくブラックとルインが戻つて来る時には自身がこの場にはいないことを確信していた。

数日と言ったが、実を言えばアルハザードが虚数空間に飲み込まれるのは今日か明日だった。既にフリートは自身の今までの研究成果を破棄し終えている。自身の研究が世に出れば大勢が救われるが、同時にそれ以上の悲劇が生まれる。故に一つ残らずフリートは研究

データを破棄し、最後はリンディの墓の前で昔語りを行いながら消えようと考えてこの地に訪れた。

そこでブラックとルインと再会出来たのは、本当に嬉しいことだったと思いながら、フリートは『リンディ茶』を飲みながら静かに自身の終焉を、結界が張られている墓の前で待つのだった。

小高い丘の上でブラックとルインは、この世界にやって来る自分達を倒そうと敵が来るのを待ち構えていた。

何れはこの日が来るとブラックとルインは確信していた。ブラックもルインも世界に悪影響を与える存在。どれだけ功績を残しても、その事実が消えない。更にブラックとルインは人々を恐怖に陥れる行動も数え切れないほど行って来た。

そのブラックとルインを滅ぼして功績を上げようとする連中も、今まで沢山居たが、今回は規模が圧倒的に違う。恐らく全ての世界の政府がブラックとルインを滅ぼすことを決めたのだろう。

利益、名誉、自身の信念、或いは欲望など色々と理由は考えられるが、ブラックもルインも逃げる気など全くなかった。

“挑まれれば戦い、倒すか返り討ちにする”。ブラックとルインは今までずっとそうして来た。そして何があってもこの行動を止めるつもりはない。

そう思いながらブラックとルインが空を見上げていると、地鳴りのような音と幾つもの巨大な転移魔法と思われる陣がブラックとルインの視界に入ってくる。

――ゴゴゴゴッ！！

――ブーン！！

「・・・・・・・・やはり、久々に楽しめる戦いだ」

「ですね。究極体、完全体・・・更にはデジソウルを纏っている人間とSランクオーバーの魔導師が五百近く・・・・・・・・その上に最新鋭艦が五百以上ですか・・・・・・・・とんでもない大軍ですね」

見渡す限りに存在している、一人と一体しかない敵に対する過剰としか言えない戦力の数々。

デジモンに於いて究極体と呼ばれるデジモンは最低でも二百以上中にはロイヤルナイツ級のデジモンまでも存在している。

その上、次々と隊列を組んで動いている人間達の中には、色取り取りのデジソウルを纏った人間が複数存在し、一目見て極めていと分かる人間も存在していた。

更に極めつけは、最新鋭艦の艦艇の中では大きさは一回りほど小さいが、鳥を思わせるような形をした赤い鎧船・ブラックとルインからすれば懐かしく感じる、愛娘とそのパートナーデジモンの愛馬・『グラニ』までもが存在していた。

「・・・・・・・・あの中にあの子の子孫がいるんですね」

「・・・・・・・・行くぞ。これだけの大規模な戦いを起こしてくれたんだ！存分に楽しむぞ！！」

「了解です・・・行きますよ！！ブラック様！！ユニゾン・イン！！」

「ーーーーギュルルルルルルッ！！」

「オオオオオオオオオオオオーーーー！！！！！！ブラックウオーグレイモン！！X進化！！ブラックウオーグレイモンXッ

ルインの体が光の粒子に変わり、ブラックと一つになった瞬間に咆哮が上がると共に、ブラックの体は次々と蒼いデジコードに包まれていく。

そしてデジコードが消えた後には、背中 に二つのバーニアを背負い、通常時よりも機械的な鎧とドラモンキラーを身につけている漆黒の竜機人・ブラックウォーグレイモンXが立っていた。

「さて……始めるか！！楽しい戦いを！！」

[illegible]

ブラックウオーグレイモンXが叫ぶと同時に背中の中の二つのバーニアが勢いよく噴きあがり、ブラックウオーグレイモンXは超高速で目の前に存在している軍団に向かって突進した。

それに気がついた軍団は遠距離攻撃が行えるデジモン達や魔導師  
更には艦艇も砲撃などでブラックウオーグレイモンXを攻撃するが、  
ブラックウオーグレイモンXは最小限の動きで回避し、先端の軍勢  
に急降下してその身に宿る猛威を振り抜く。

「さあ！！楽しませろ！！」

その咆哮と共にこの後の歴史では一度たりとも起こらなかった戦いが始まった。

軍団の中に居る究極体のデジモン達は仲間と連携し、ブラックウオーグレイモンXと戦い。

高ランクの魔導師達やデジソウルを得ている者は、自らのパートナーデジモンと共に戦いを繰り広げる。

天は戦いで起きる衝撃波で絶望の叫びを上げるかのように、凄まじい破碎音や衝撃音を鳴り響かせ、大地は一瞬たりとも同じ形を保たず、隆起や断裂、或いは爆破を繰り返し、次々と戦いが始まった頃とは全く違う姿へと変貌を何度も遂げ、マグマさえも至るところで天に向かって吹き上がっていた。

さながらその変わり果てた世界は、終焉が迫った地獄の世界。地は死に絶えた人の遺体と血で染まり、幾つモノ死んだデジモン達のデジタマが転がっていた。

更には空に浮かんでいた艦艇も僅か一隻を残す数になり、その一隻にしても、もはや攻撃など出来ず、ただ浮かんでいるだけが精一杯の状態だった。

そのような地獄に変わり果てた世界の中の絶叫を鳴り響かせ続ける天で、虹色の魔力光を全身から発した光の剣 - 神剣『ブルトガング』 - を握った背中に五対の白き翼を生やし、真紅の鎧を身に纏った騎士 - 『デュークモン・クリムゾンモード』と、全身の鎧がボロボロに変わり果て、両手に装備していたドラモンキラーは原型を留めないほどに砕け散り、背中 của バーニアも失い、しかし、戦意だけは全く衰えず赤い目を燃え上がらせているブラックオーグレイモンXが、右手にオメガブレードを握りながら激突しあっていた。

「ウオオオオオオオオオオ——！！！」

「！！！」

――ガキイイイイ――ン!!!



一瞬の隙を衝かれてブラックウオーグレイモンXに蹴りを叩き込まれたデュークモン・クリムゾンモードは、苦痛に声を滲ませながら僅かに吹き飛ばされた。

その隙にブラックウオーグレイモンXは握っていたオメガブレイドを自身の頭上に放り投げ、素早く両手の間に巨大な黒いエネルギー球を作り上げ、全力で体勢が崩れているデュークモン・クリムゾンモードに向かって投げつける。

「ハデスフォー！！！！！」

「ヌウツ!!」

ーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオン!!!!

ブラックウオーグレイモンXが投げつけて来たハデスフォースをデュークモン・クリムゾンモードは避けることが出来ず、直撃し、大爆発が起こった。

その間にブラックウォーグレイモンXは自身の頭上から落ちて来たオメガブレードを掴み取り、煙の中から出て来るであろうデュークモン・クリムゾンモードを待ち構える。

あの程度で終わるはずがないとブラックウオーグレイモンXは確信していた。必ず何か仕掛けて来るだろうと直感し、迎え撃つつもりでオメガブレードの柄を握り締めていると、煙の一点が揺れ動くように動くのを目撃する。

フワッ！！

「そこか!!!」

ーードスン!!

ブラックウオーグレイモンXが突き出したオメガブレードは、煙の中に潜む者を深々と突き刺した。

その事実にはブラックウオーグレイモンXが素早くオメガブレードを引き抜こうとするが、引き抜く直前に煙の中に隠れている者は急加速を行って、ブラックウオーグレイモンXの手の中からオメガブレードを奪い取る。

ーードオオオオオオン!!

ーーピイイイイー!!

「グラニ!？」

自身の手の中からオメガブレードを奪い取った存在に気がついたブラックウオーグレイモンXが慌てて振り抜いてみると、外装がロボロな状態でデータ粒子を撒き散らしながら、片翼にオメガブレードを突き刺したグラニが空を飛んでいた。

その事実にはブラックウオーグレイモンXは奇襲が来ると直感し、背中のバーニアを噴かそうとするが、度重なるダメージに遂に限界が訪れたのか、バーニアは自壊して爆発を起こす。

ーードゴオオオオン!!

「しまっ!」

「ロイヤル!」



ーードオオオオオオン！！

ゼロ距離からガイアフォースを撃ち込まれたデュークモンは苦痛に満ちた叫びを上げながら、地上へと落下し激突した。

その衝撃で進化が解け、後には赤い恐竜のような姿をしたデジモン・『ギルモン』と、碧銀色の髪をサイドポニーにした赤と緑の虹彩異色の二十代前半と思われる女性が倒れていた。

ブラックウオーグレイモンXはその一匹と一人の前に胴体部分の大穴から黒いデータ粒子を舞い散らせながら降り立ち、苦痛に苦しんでいる女性に声を掛ける。

「……惜しかったな……もう少しで俺を倒せて……いたぞ」

「グウツ！……その怪我では……貴方はもう助からない……私達の目的は……果たせました……」

「そうかもしれんな……お前は……いや……ここに俺を滅ぼしに来たお前達は……“俺がいなくなつた後を……分かつているのか”？」

「……分かつています……貴方がいたから……救われた世界もあり……貴方がいたから争いを起こせなかった……世界もある……その貴方が消えれば……新しい戦いが始まるだけです」

「そうか」

女性の言葉にブラックウオーグレイモンXは頷くと、ゆっくりと背後を振り返って歩きながら女性の声を掛ける。

「・・・早く・・・生き残っている連中に伝える・・・この世界はもうすぐ消える・・・人間の遺体はともかく、デジタマは全て回収しろ・・・“ここからはお前達の戦いだ”」

そうブラックウォーグレイモンXは言葉を女性に言い残すと、黒い粒子を撒き散らしながら女性の前から去って行った。

それを確認した女性は、無事だった通信機で連絡を行い、デジタマの回収を命じると、自身のパートナーデジモンであるギルモンと共に気絶するのだった。

一方致命傷を負い、消滅を待っただけのブラックウォーグレイモンXは気力で消滅を遅らせながら、真っ直ぐにある場所を目指して歩いていた。

ユニゾンしている、ルインは話しかけることも出来ずにブラックの消滅を少しでも遅らせようと頑張っている。

それでも黒い粒子はブラックウォーグレイモンXの体から溢れ続け、このままでは辿り着けないとブラックウォーグレイモンXが考え始めると、ブラックウォーグレイモンXの横にオメガブレードを片翼に突き刺したまま、ブラックウォーグレイモンX同様にデータ粒子を撒き散らしているグラニが降り立つ。

「・・・ピイイイイイー！！」

「・・・手を借りるぞ」

グラニの嘶きの意味を理解したブラックウォーグレイモンXは、ゆっくりとグラニの背に乗り、グラニは浮かび上がって真っ直ぐに

ブラックウォーグレイモンXが目指していた場所 - 『リンディの墓』  
- の下に飛び立つ。

そしてブラックウォーグレイモンXはグラニの背に乗りながら、  
『リンディの墓』へと辿り着くと、その場所はあれだけ戦いの影響  
など全く受けていなかったかのように、傷一つ墓にはなく、フリー  
トが顔を俯かせながら墓の前に座っていた。

「…………フリート」

一目見てブラックはフリートが逝ってしまったのだと理解した。  
そしてブラックウォーグレイモンXはグラニから降りると、グラ  
ニの片翼に突き刺さったままだったオメガブレードを引き抜き、次  
の瞬間、グラニは自身の役目が終わったのだと言うように赤い鎧は  
錆び付いていき、ここに千年近くヴィヴィオの子孫を護り続けてい  
たグラニもまた逝った。

自身と共にあの戦争を生き抜いた者が自分達を除いて逝ってしま  
った事実、ブラックウォーグレイモンXとルインは寂しさを感じ  
ながらフリートの横に座る。

「…………礼を言うぞ…………この墓を護ってくれたことを…………  
…………ありがとう」

『ブラックから礼を言われるなんて、千年に一度あるかどうかです  
ね』

「ハハハハハッ！…………昔言われた言葉は事実だったな、  
フリート…………千年近くで漸く、お前に礼を言った…………本当に楽し  
い日々だった…………最後の戦いも満たされた…………悪くなかっ  
た」

そうブラックウオーグレイモンXは満足げに呟くと、ゆっくりと顔を下に俯け、目から光も消え始める。

同時にミッドチルダの至るところで巨大な地割れが広がり、マグマなどが勢いを増して噴きあがり始めた。究極体デジモン達の断続的な戦いに、元々滅びかけていたミッドチルダの滅びが加速したのだ。

そう時間と経たずに世界は大爆発を起こして消滅するだろうと、消えかけている意識の中でブラックウオーグレイモンXは感じる。もはや指一本たりとも動かすことは出来ない。

ユニゾンしている、ルインも限界が訪れたのか、自身に対して何かをしている様子がなかった。

このままミッドチルダと共に自身は滅びるのだとブラックウオーグレイモンXは確信するが、胸の内から別の感情が湧き上がっていた。

（……戦いたい……俺はまだ戦いたい……！まだ、世界には強い奴らが居る……！そいつらと！戦いたい……！）

―――汝、世界にその死後を捧げよ。さすれば、汝の願いを一つ叶えよう

（……幻聴？……いや……俺は……これを知っている……英霊……そうか……これが世界との契約……）

薄れていく意識の中、ブラックウオーグレイモンXの脳裏に一つの知識が浮かび上がって来た。

死後を世界に捧げることで英霊に至ることが出来る方法。即座にブラックウオーグレイモンXは理解した。よりにもよって世界は、自身の敵であるブラックウオーグレイモンXを利用する気なのだ。

しかも最も都合の良い道具である『抑止の守護者』よへしのしゅごしやとして。確か

にブラックウオーグレイモンXは世界にとつて最も害悪な存在だが、その力は絶大と言う言葉では足りず、更には功績も有名な英霊よりも遙かに上の存在。故に世界は特例として『英霊の座』にブラックウオーグレイモンXを入れるつもりなのだ。自身にとつての都合の良い道具とするために。

世界ごとに己の存在を利用させるなど絶対にさせる気は、ブラツクウォーグレイモンXにはない。何か英霊となつても己の意思を持ち、更には分霊などではなく本体で暴れる方法はないかと模索し、一つの方法を思いつく。

ーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオン!!!!!!!!!!

こうして『恐怖の根源』とまで呼ばれたブラックウオーグレイモンは死に、全てが規格外の英霊ブラックウオーグレイモンが誕生してしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5247q/>

---

始まりの運命に舞い降りし恐怖の根源

2011年10月9日22時20分発行